長崎県文化財調査報告書第83集

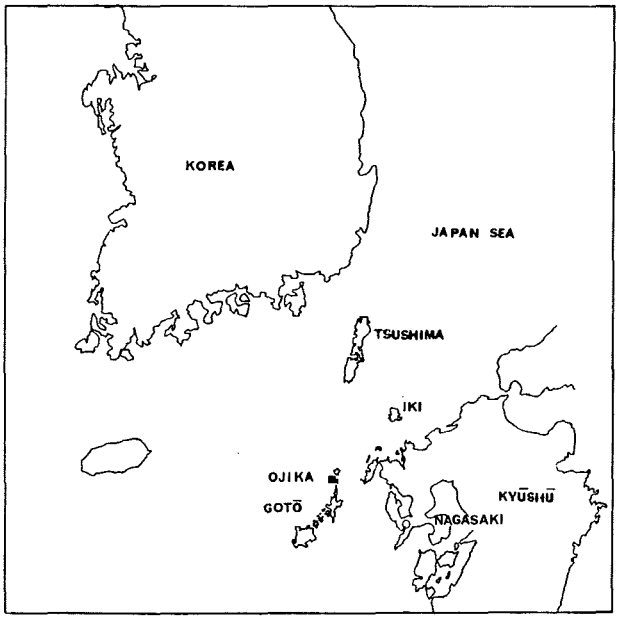
殿崎遺跡

TON ZAKI

1986

長崎県教育委員会

殿崎遺跡



小値賀町位置図

序　文

ここに報告いたします「殿崎遺跡」は，長崎県北松浦郡小値賀町にあり，「小値賀 空港」 建設に伴って昭和58・59年に緊急発掘調査を実施したものであります。

遺跡は縄文時代中期〜後期にかけて営まれた生活址であり，僅か約1000㎡の調査区内より土器・石器・装飾品など約２万点にも及ぶ資料が出土しました。

それらの遺物を詳細に観察しますと，東支邦海に面するという 遺跡の 立地条件の ためか， 漁網錘，銛先，あるいは貝類採集道具など，海人の伝統と生活を彷彿とさせる内容である事がよく判ります。自然環境が即，往時の生活ぶりを現わしていると申しても過言ではないでしょう。

本書が五島列島の歴史を語る一資料として，広く一般の 用に 供せられれば 望外の 幸せであります。

昭和61年３月31日

長崎県教育長　伊藤昭六

例　言

一，本書は，昭和57・58年度にかけて実施した小値賀空港建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。

二，調査は，長崎県空港課が事業主体となり，長崎県文化課がこれを担当した。

三，調査は，試堀調査（以下本文中，一次調査とする）を長崎県文化課文化財保護主事高野晋司（現，主任文化財保護主事)・副島和明が従事し，本調査（以下二次調査とする）を高野，文化財調査員福田一志・草野誠司が従事した。

四，本書は分担執筆し，各項の執筆者は本文目次の項に記した。

五，本書の編集責任は，福田にある。

本 文 目 次

頁　執筆者

Ⅰ　序説

㈠　調査に至るまで……1　高野晋司

㈡　調査経過……5　〃

㈢　遺跡の地理的歴史的環境……7　〃

㈣　周辺遺跡概観……11　〃

Ⅱ　遺跡の調査

㈠　第一次調査

1.　土層……18　高野晋司

2.　遺物の出土状況……18　〃

3.　一次調査出土土器……21　〃

4.　一次調査出土石器……35

副島和明・草野誠司・福田一志

㈡　第二次調査

1.　土層……61　高野晋司

2.　遺物出土状況……61　福田一志

3.　第二次調査出土土器……65　高野晋司

4.　第二次調査出土石器……92

副島和明・草野誠司・福田一志

5.　遺構……114　福田一志

Ⅲ　総括

㈠　殿崎遺跡出土の土器について……115　高野晋司

㈡　殿崎遺跡出土の石器について……122　福田一志

挿 図 目 次

Fig. 1　空港予定位置図…… 2
Fig. 2　第１次調査区配置図…… 3
Fig. 3　ＴＰ２遺物出土状況…… 5
Fig. 4　ＴＰ４遺物出土状況…… 6
Fig. 5　ＴＰ19遺物出土状況…… 7
Fig. 6　第２次調査位置図…… 8
Fig. 7　調査区配置図…… 9
Fig. 8　小値賀町地形分類図……10
Fig. 9　町内遺跡分布図……13
Fig. 10　宇久松原出土壺……15
Fig. 11　水の下古墳出土土器……15
Fig. 12　環頭太刀実測図……16
Fig. 13　ＴＰ２・３・４壁面図（1/40）……19
Fig. 14　ＴＰ９・10・11・13・14壁面図（1/40）……19
Fig. 15　ＴＰ12遺物出土状況……20
Fig. 16　一次調査出土土器実測図（1/3）……22
Fig. 17　〃　（〃）……23
Fig. 18　橋状把手土器（1/2）……24
Fig. 19　一次調査出土土器実測図（1/3）……25
Fig. 20　〃　（〃）……26
Fig. 21　W字文貼付口縁（1/2）……27
Fig. 22　一次調査出土土器実測図（1/3）……27
Fig. 23　〃　（〃）……28
Fig. 24　〃　（〃）……29
Fig. 25　〃　（〃）……30
Fig. 26　〃　（〃）……31
Fig. 27　一次調査出土石器実測図（2/3）……35
Fig. 28　〃　（〃）……36
Fig. 29　〃　（〃）……37
Fig. 30　〃　（〃）……38
Fig. 31　〃　（〃）……39

Fig. 32　〃　(1/3) ……40
Fig. 33　〃　(〃) ……41
Fig. 34　〃　(〃) ……42
Fig. 35 A－2・B－2・D－2区東壁，A－2・3区北壁図……62
Fig. 36　P－2・3区，K－2・3区北壁図 (1/40)……62
Fig. 37　第二次遺物出土状況図……63
Fig. 38　二次調査出土土器実測図 (1/3)……66
Fig. 39　〃　(〃) ……67
Fig. 40　〃　(〃) ……68
Fig. 41　〃　(〃) ……69
Fig. 42　〃　(〃) ……70
Fig. 43　〃　(〃) ……71
Fig. 44　〃　(〃) ……72
Fig. 45　各種把手 (1/2)……73
Fig. 46　〃　(〃) ……74
Fig. 47　〃　(〃) ……75
Fig. 48　〃　(〃) ……76
Fig. 49　〃　(〃) ……78
Fig. 50　縄文晩期土器出土分布図……78
Fig. 51　〃　(〃) ……79
Fig. 52　〃　(〃) ……80
Fig. 53　〃　(〃) ……81
Fig. 54　〃　(〃) ……83
Fig. 55　〃　(〃) ……83
Fig. 56　〃　(〃) ……84
Fig. 57　称生土器出土分布図……84
Fig. 58　円形土版実測図 (2/3)……85
Fig. 59　二次調査出土石器実測図 (2/3)……92
Fig. 60　〃　(〃) ……93
Fig. 61　〃　(〃) ……94
Fig. 62　〃　(〃) ……95
Fig. 63　〃　(〃) ……96
Fig. 64　〃　(〃) ……97
Fig. 65　〃　(〃) ……98

Fig. 66　二次調査出土石器実測図(〃)…… 99
Fig. 67　〃　(〃)……100
Fig. 68　〃　(〃)……100
Fig. 69　〃　(1/3)……102
Fig. 70　〃　(〃)……103
Fig. 71　〃　(〃)……104
Fig. 72　〃　(〃)……106
Fig. 73　〃　(〃)……107
Fig. 74　〃　(〃)……108
Fig. 75　〃　(〃)……109
Fig. 76　〃　(〃)……110
Fig. 77　〃　(〃)……111
Fig. 78　遺構実測図 (1/20)……114
Fig. 79　並木・阿高式土器分布図…… 116
Fig. 80　南福寺・出水式土器分布図…… 116
Fig. 81　鐘ケ崎・北久根山式土器分布図…… 117
Fig. 82　市来式土器分布図…… 117

表　目　次

Tab. 1　遺跡地名表 …… 12
Tab. 2　土器観察表 …… 32
Tab. 3　〃 …… 33
Tab. 4　〃 …… 34
Tab. 5　石斧計測表…… 40
Tab. 6　石器計測表…… 42
Tab. 7　土器観察表…… 86
Tab. 8　〃 …… 87
Tab. 9　〃 …… 88
Tab. 10　〃 …… 89
Tab. 11　〃 …… 90
Tab. 12　〃 …… 91
Tab. 13　石斧計測表……107
Tab. 14　石器計測表……114

Tab. 15　　〃　……115
Tab. 16　縄文中・後期土器出土地名表……118
Tab. 17　一次・二次調査出土石器数量表……122

図　版　目　次

PL. 1　遺跡遠景・遺跡近景
PL. 2　一次調査調査風景
PL. 3　遺物出土状況（ＴＰＩ）
PL. 4　　〃　（　〃　）
PL. 5　　〃
PL. 6　一次調査出土土器①　(1/2)
PL. 7　　〃　②　（〃）
PL. 8　　〃　③　（〃）
PL. 9　　〃　④　（〃）
PL. 10　　〃　⑤　（〃）
PL. 11　　〃　⑥　（〃）
PL. 12　　〃　⑦　（〃）
PL. 13　一次調査出土石器　(1/1)
PL. 14　　〃　（〃）
PL. 15　　〃　（〃）
PL. 16　　〃　（〃）
PL. 17　　〃　(1/3)
PL. 18　　〃　（〃）
PL. 19　二次調査風景
PL. 20　土層写真
PL. 21　　〃
PL. 22　遺物出土状況
PL. 23　　〃
PL. 24　　〃
PL. 25　　〃
PL. 26　二次調査出土土器①　(1/2)
PL. 27　　〃　②　（〃）
PL. 28　　〃　③　（〃）

PL. 29　二次調査出土土器 ④　(1/2)
PL. 30　　〃　　⑤　(〃)
PL. 31　　〃　　⑥　(〃)
PL. 32　　〃　　⑦　(〃)
PL. 33　　〃　　⑧　(〃)
PL. 34　　〃　　⑨　(〃)
PL. 35　　〃　　⑩　(〃)
PL. 36　　〃　　⑪　(〃)
PL. 37　　〃　　⑫　(〃)
PL. 38　二次調査出土石器 (1/1)
PL. 39　　〃　　(〃)
PL. 40　　〃　　(〃)
PL. 41　　〃　　(〃)
PL. 42　　〃　　(〃)
PL. 43　　〃　　(〃)
PL. 44　　〃　　(〃)
PL. 45　　〃　　(〃)
PL. 46　　〃　　(〃)
PL. 47　　〃　　(1/3)
PL. 48　　〃　　(〃)
PL. 49　　〃　　(〃)
PL. 50　　〃　　(〃)
PL. 51　　〃　　(〃)
PL. 52　円礫出土状況(上)・角礫出土状況(下)
PL. 53　調査完了全景（上・東側より，下・西側より）
PL. 53　調査に参加した人達

I 序　説

一　調査に至るまで

短時間で目的地間を直結し得る飛行機は，今や日常生活の中で必要不可欠な存在となっているが，交通手段を専らフェリーのみに頼っている離島在住の人達にとっては単に時間の短縮のみならず，経済効果の波及，あるいは緊急時の場合などに，より多くの期待を持つのは当然である。

九州本島西方海上にうかび，古くから中国大陸や朝鮮半島との交流の接点に位置する五島列島は，南側から福江島，久賀島，奈留島，若松島，中通島，小値賀島，宇久島と実際には七島から成るが，これらの内最も南側の福江島と中程にある中通島にはすでに空港が完成し，住民の便に供して成果をあげているが，北側に在る小値賀島と宇久島は未だフェリーのみによる往来を余儀なくされており，空港の建設はいわば住民の悲願ともなっていた。

このような状況の中で，空港建設の必要性が強く叫ばれるところとなり，その結果小値賀島か宇久島のどちらかに建設が認められることとなった。

空港適地には小値賀島，宇久島内にそれぞれ１ケ所づつの候補地が示されたが自然条件や環境問題等様々な条件を検討した結果，昭和56年８月最終的に小値賀町殿崎地区が適地として決定されることとなった。工事は昭和57年度着工し昭和60年度に供用開始という工程であった。(Fig.1)

一方当該地区には以前より殿崎遺跡（長崎県８—64）が周知されており，加えて空港予定区域が広範囲にわたる事から新たな埋蔵文化財包蔵地の可能性も考えられた。この為同地域内の文化財の有無の確認が急務となり，昭和56年10月，文化課は空港課からの依頼を受けてまず当該地の分布調査を実施することとした。

現地踏査は空港予定地及びその周辺約30haを対象として行い，地表面観察の結果10ケ所，面積にして約2.8haにわたって遺物が散布しているのが確認され，その旨公文による回答を行った。

これを受けて空港課は急ぎ計画図の手直しの検討を行ったが，空港にとっての最重要条件である，年間を通しての風向きが滑走路の方向を決定するとの理由で基本的な設計変更は不可能であるが，但しその他の附属施設等の位置については，なお若干の再考の余地があるとの回答を得た。同時にその為には空港予定地内の遺跡について，急ぎその内容を詳細に知る必要があるとの要望がなされることとなった。

如上のような経過があり，文化課も遺跡保護協議の為の基礎資料を得る必要が生じ，各遺物散布地について，その範囲，内容を知るべく翌57年３月範囲確認調査を実施することとした。以下これを第１次調査と呼ぶ。

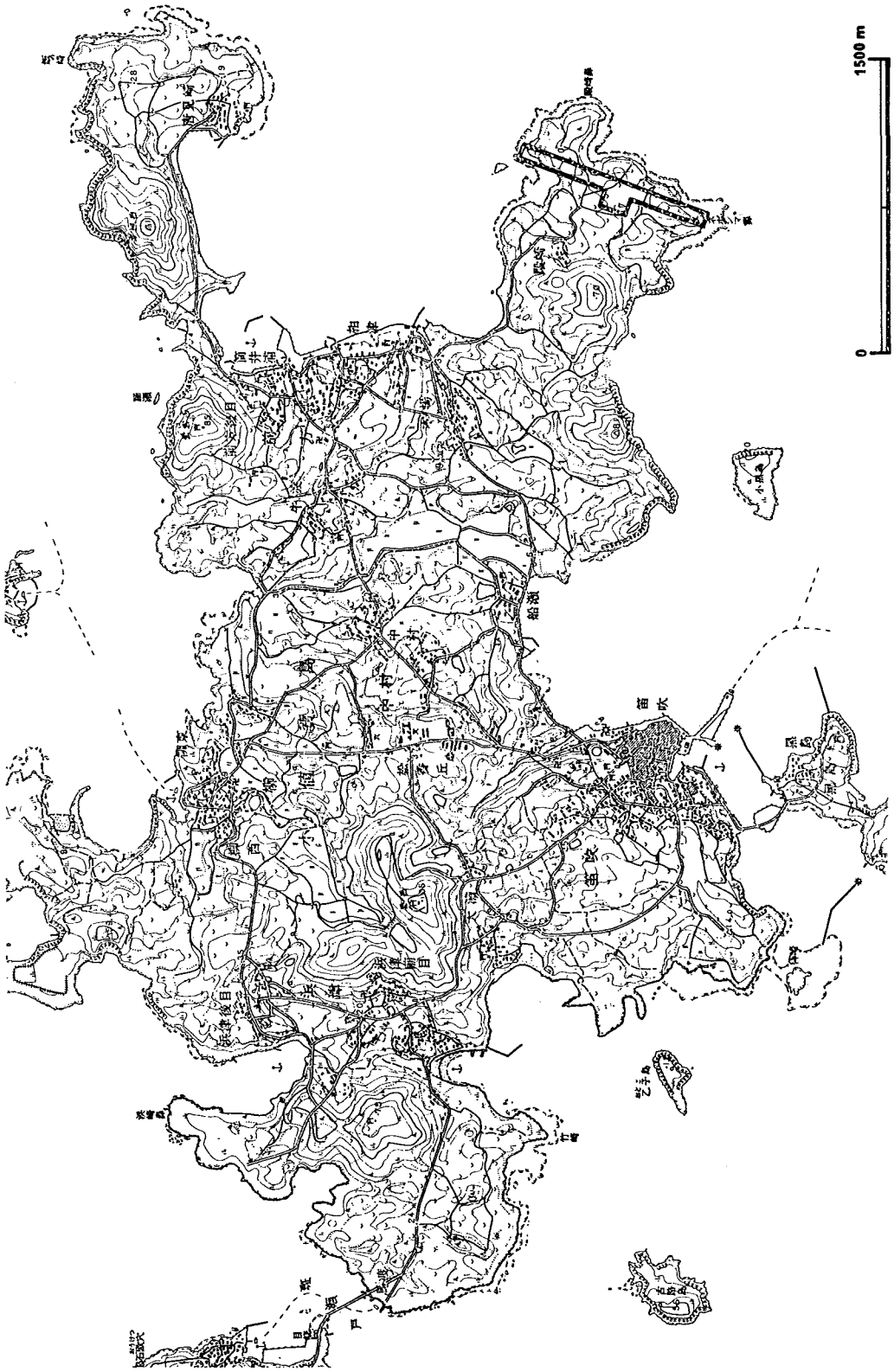


Fig. 1　空港予定位置図

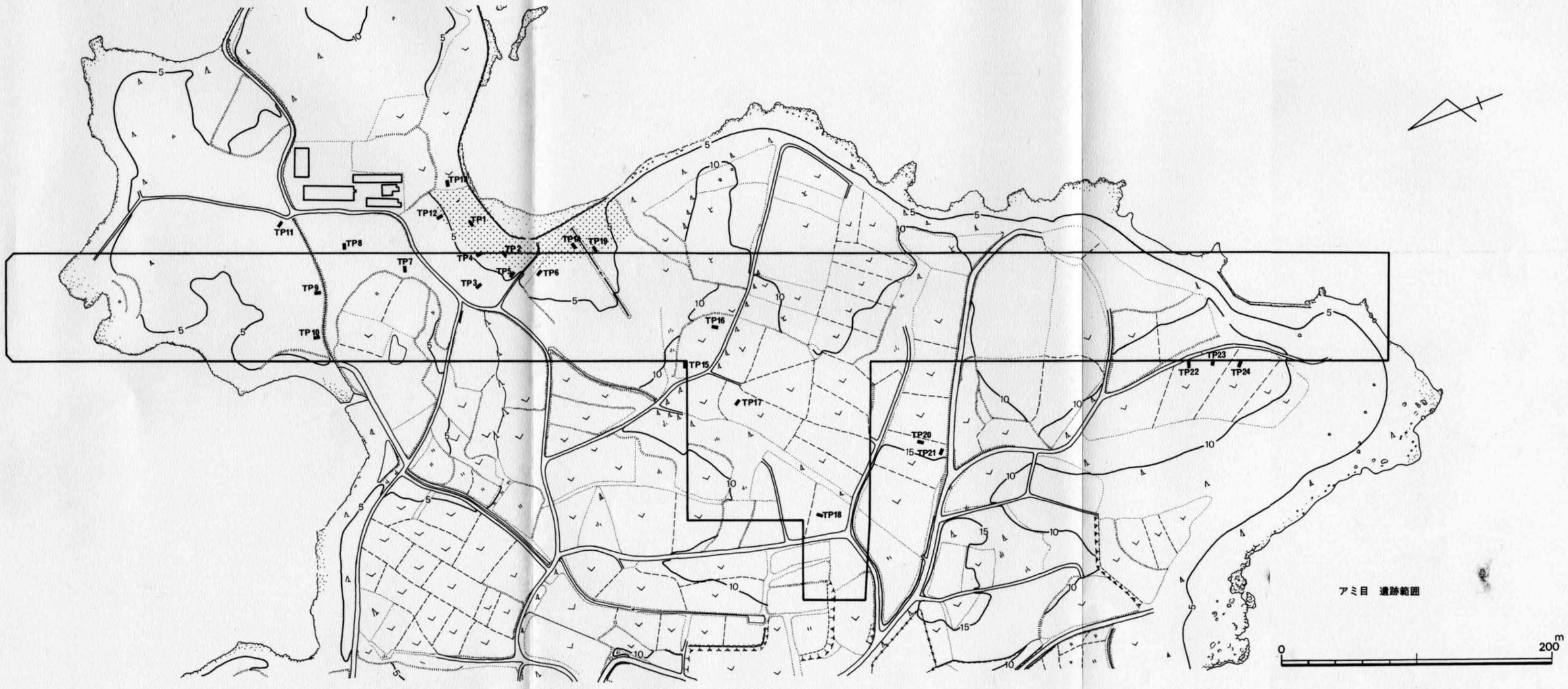


Fig. 2　第一次調査区配置図

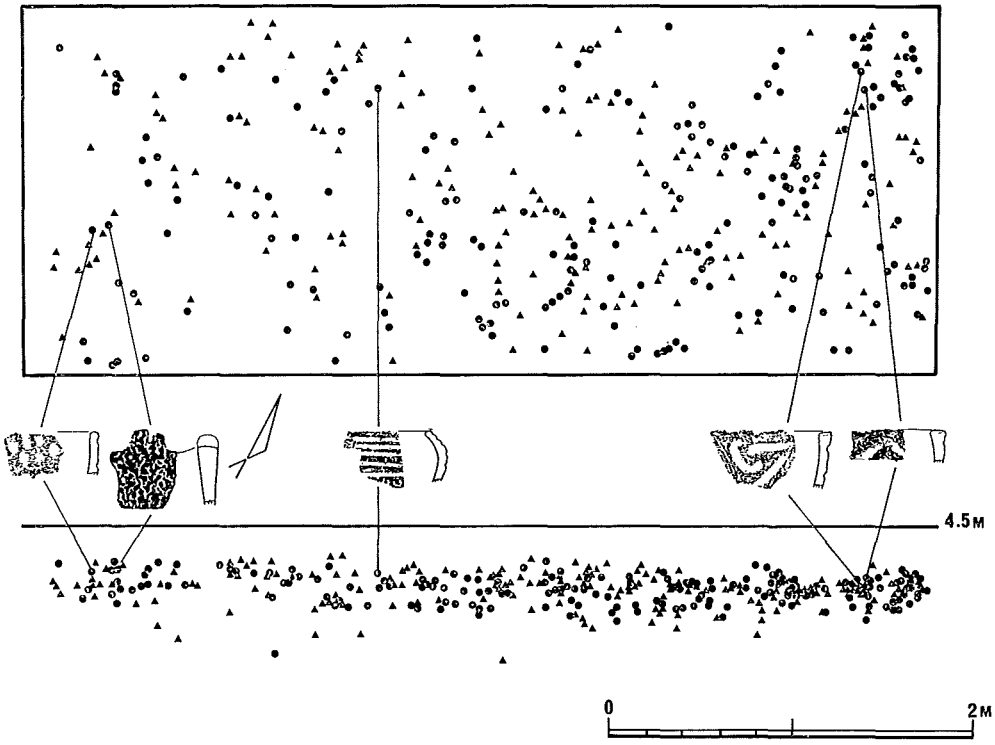


Fig. 3　ＴＰ２遺物出土状況

先きに空港課に提出した10ケ所，2.8haの遺物散布地の 位置は， その後の空港設計図との詳細な照合の結果， 4ケ所，約1.9haに減ずる事が 判った為， 第１次調査はこの４ケ所について24ケ所のトレンチを入れて精査する事とした。

その結果， 6ケ所に於いて良好な遺物包含層が認められた。

遺物を多く含む地域は，標高４～５ｍのほぼ平担地に限られ，その面積は約4200㎡程にも上るものと思われたが，この内空港敷地内にかかる部分は約1000㎡であった。なおこの区域は従来から呼称されていた「殿崎遺跡」の場所と一致しており，結果的に空港工事区域に含まれる遺跡は殿崎遺跡のみになった訳である。

二　調査経過

第一次調査（昭和57年４月７日～５月13日）

前述した如く，第一次調査は昭和57年４月から実質30日間にわたって行った。調査面積は24トレンチ244㎡である。

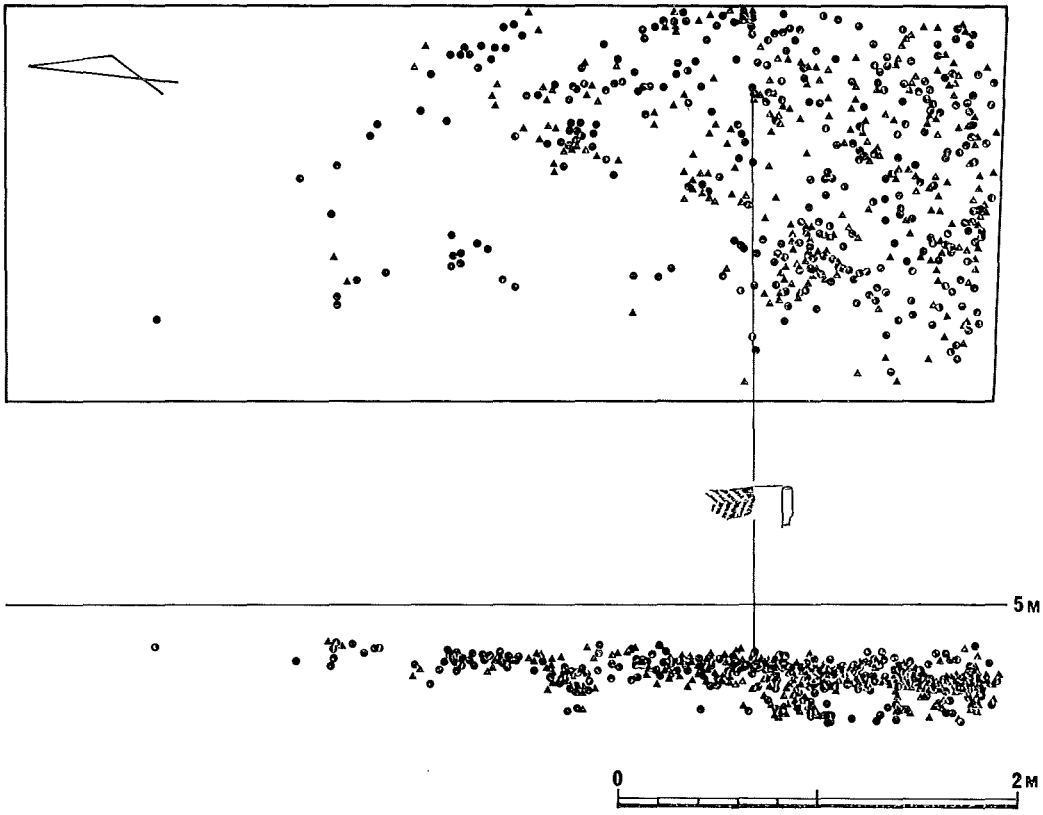


Fig. 4　ＴＰ４遺物出土状況

調査した地点は空港予定区域内に在ってそれぞれ若干の遺物を表面採取し得る区域であったが，精査の結果，ＴＰ１，２，４，12，14，19の６トレンチで良好な遺物包含層を確認した他は，何れも土層の堆積状況が悪く遺物，遺構共に見い出す事ができなかった。(Fig. 2)

遺物の出土状況はＴＰ１で5,000点以上，ＴＰ２（Fig. 3），ＴＰ４（Fig. 4）でもそれぞれ数百点の土器・石器が出土しこの附近が遺跡の中心である事が判る一方，ＴＰ19（Fig. 5）でもなお若干の遺物が出土するなど，遺跡の規模は思ったより広く，最終的に約4,200㎡程になる事が予想された。

出土遺物は縄文中期末～後期中頃に及ぶ土器類を中心として，多数の石錘，礫器等海洋的な遺跡の性格をよくあらわしている。その内容等については後述する。

第二次調査

前年度の調査によって確認した殿崎遺跡の内空港建設予定地にかかる部分についてのみ全面に調査を行った。調査面積は結果的に975㎡であった。(Fig. 6)

調査方法は調査対象区域を５×５ｍの方眼にくみ，遺跡の中心部と思われた北側より漸次掘

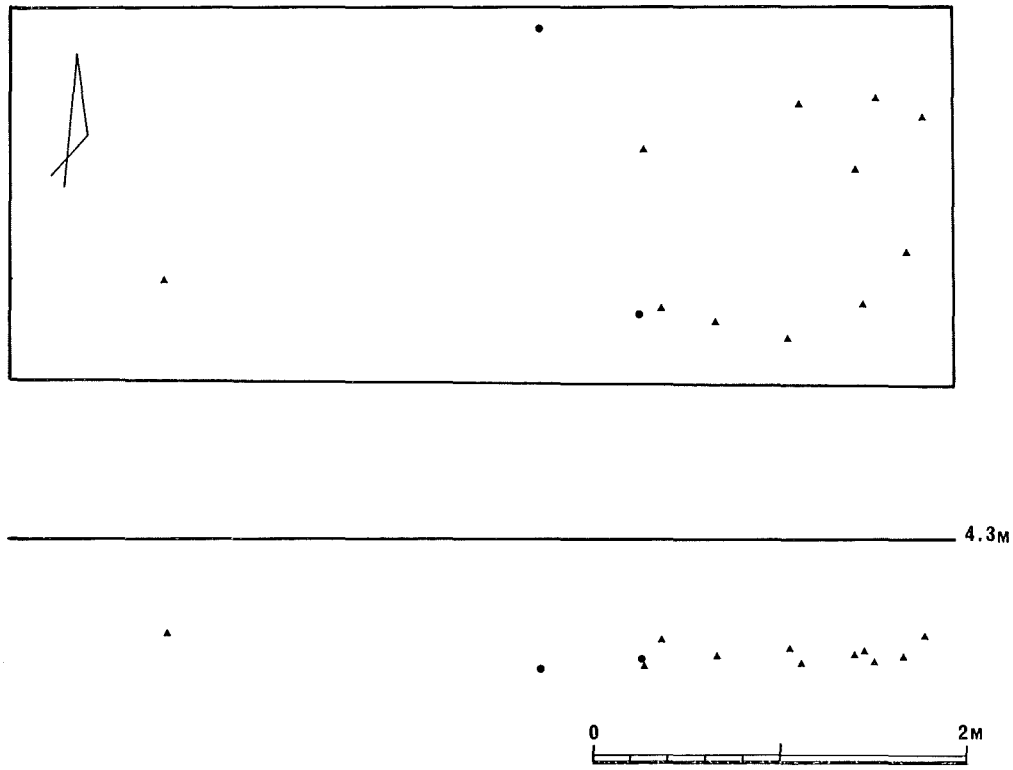


Fig. 5　TP 19 遺 物 出 土 状 況

り進めた。(Fig.7) 又出土遺物はドットマップによって記録を行った。この成果については後述するが遺物の傾向としては，第一次調査ＴＰ１が縄文後期を中心とするのに比して，今回調査区では中期中頃〜後期初の遺物が主であり，それに晩期と弥生土器も若干出土するなど遺跡の時期巾がかなり認められる結果となった。

三　遺跡の地理的歴史的環境

長崎港から約100km，九州西方海上に北東から南西にかけてほぼ一列に帯状に連なる列島がある。７つの島興と多くの属島から成るこの一連の島々が，五島列島である。その数は127島とされ，帯の長さは90kmに及ぶ。当然ながら海岸線は長く，リアス式の沈降海岸は至るところに景勝地を持つ。

五島の名の起りは，従来宇久・中通・若松・奈留・福江の五島を指すものであるらしいが，現在では中通・若松・奈留・久賀そして福江島の南側五島を指すことが多い。行政的にもこの五島は南松浦郡に属し，宇久・小値賀は北松浦郡に属する。

小値賀島は東径129°3分北緯33°12分の交点を中心とし，四周を海に臨む。

Fig. 6 第 2 次 調 査 位 置 図

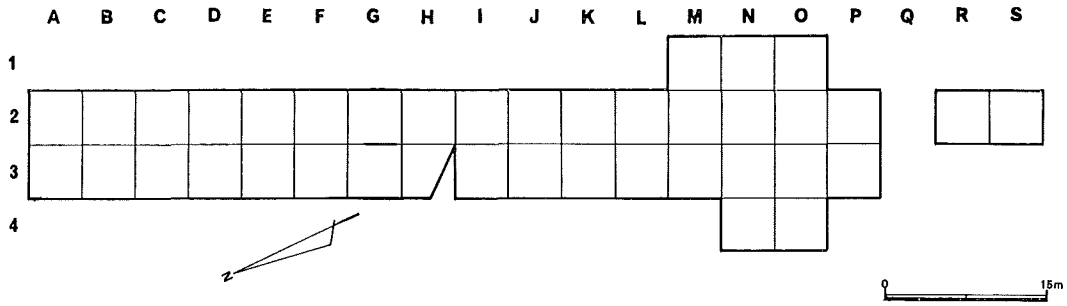


Fig. 7 調 査 区 配 置 図

小値賀本島と16の属島から成る小値賀町は，26平方キロメートルの面積を有し，人口は約5,200人，業は漁業と農業が相半ばする。

本島全体の地形は極めて低平で地質的には「小値賀火山群」と呼ばれる流動性の溶岩台地上にあり，山頂高度は低く，最高所は島中央部本城岳で111mを計るにすぎない。一方本島東側に位置する野崎島は本島とは対照的に急峻な山嶺が連なり居住空間が限定される。現在では野生鹿が繁殖し300～500頭も棲息するらしい。(Fig.8)

五島列島は，古くは古事記国生み神話の中に「知訶島」としてあらわれるのを初例とする。次いで，肥前風土記に「値嘉の嶋」としての記載があり，名の由来と産物が詳しく述べられている。肥前風土記は，志式島（今の平戸島南部）より西方海上を望見した際の各島のあり様を叙述しているらしいが，その中には大近，小近という二つの島の名が登場する。位置的な関係からみると宇久・小値賀島が小近であり，大近とは中通り以南の各島を指しているものと考えられる。

註1　有川町「有川町郷土誌」1972
註2　小値賀教育委員会「小値賀町郷土誌」1978

遺跡より野崎島を望む

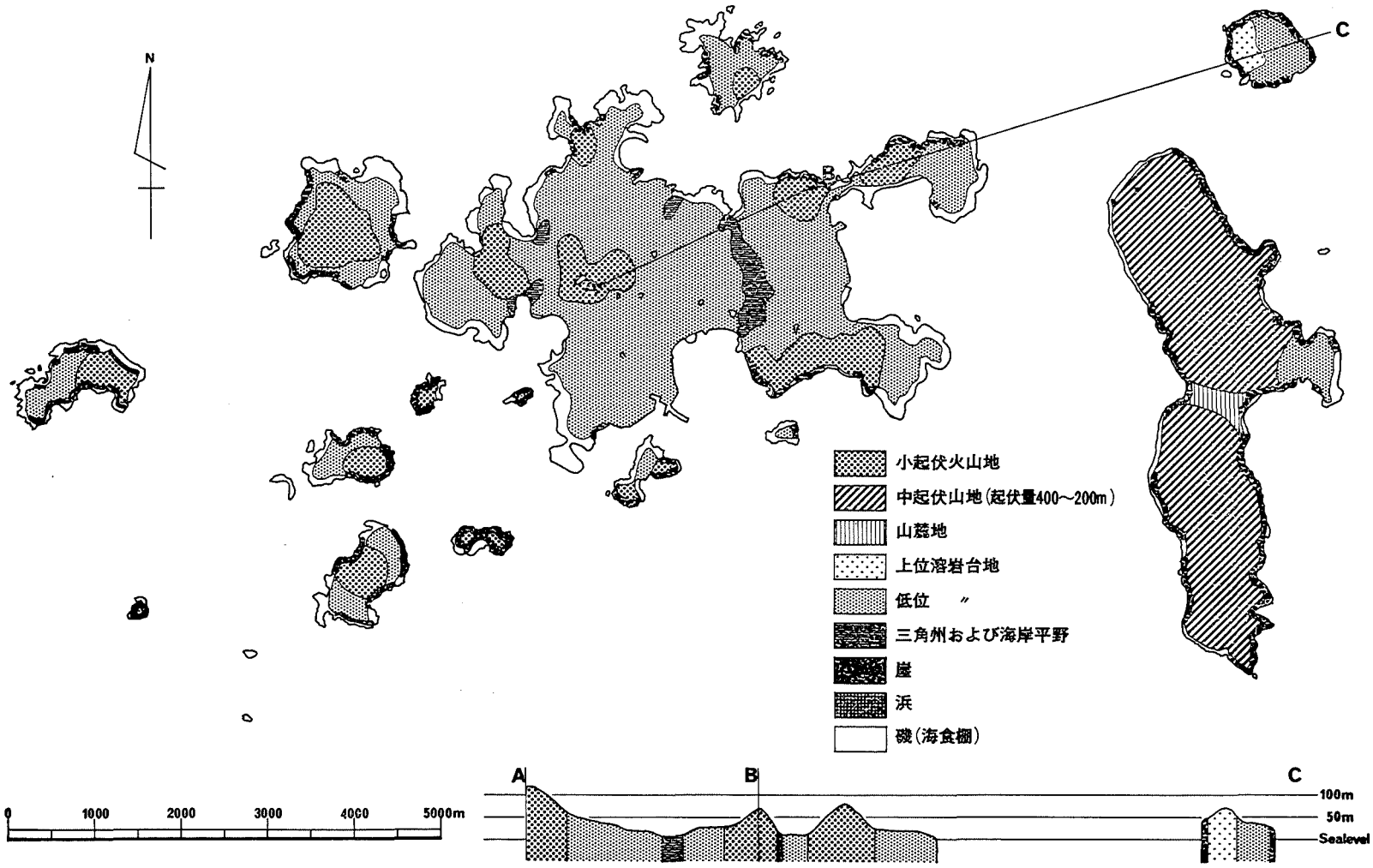


Fig. 8　小値賀町地形分類図（土地分類基本調査1982より転載）

四　周辺遺跡概観

現在小値賀町には45ケ所程の遺跡が周知されている。[註1] (Fig.9)

その時期的な内訳は，旧石器時代３，縄文時代16，弥生時代18，古墳時代11，古代１，中世14，近世２ケ所である。(Tab. 1) 総数が表と合わないのは複合遺跡が多い為である。

これらの内主な遺跡を概観してみたい。[註2]

旧石器時代の遺物としては11の殿崎周辺，40の玉石鼻等でナイフ型石器を表採しているが，点数は極めて少ない。只，小値賀島周辺の水深をみると，半径15km以内でも 100 mを越す部分は少なく，40 m程の海退で宇久・小値賀を始め五島列島は全て陸続きとなる。往時の気候を考えると，旧石器時代の遺物の多くは現海面下に多数残存しているものと推定される。

島の面積の割には縄文時代の遺跡の数は多く，しかも早期から晩期まで一応連続する。早期の資料としては30の宮の下，37目崎，38ハモキ 遺跡が知られる。30の宮の下遺跡は北面する低平台地上に位置するが，多量の石器と共に轟系土器が採集されている。又，郷土史家近藤政英氏の収集資料の中に当該出土の尖底土器も含まれるなどその内容は豊富である。包含層も残存している模様であり注意すべき遺跡である。38のハモキ遺跡は小値賀で唯一の岩陰遺跡であり，小型の押型文土器が採集されている。標高４m程の南面する海蝕洞を利用しており，小規模ながら包蔵状態は良好らしい。

縄文土器が多く採集できる遺跡としては35の矢櫃遺跡も又重要である。標高３m，南面する遠浅の湾奥部に位置する。大量の石器類に加え前期曽畑式土器を始め，阿高，出水，南福寺，北久根，鐘ケ崎と後期に至るまでの資料を豊富に含む。立地，環境，そして時期的にも本書で報告する殿崎遺跡に極めて類似する。

晩期の資料は11殿崎遺跡において若干数出土している程度で今の所他では出土していない。それ以前の資料の多さと比較するとき時期的な衰退が感じられる。

弥生遺跡も又多い。只，時期的には弥生初頭の資料はなく前期後半になって現われる感が強い。[註3] 隣島の宇久島では板付Ｉの存在が知られており[註4] (Fig. 10)，小値賀町でもその可能性はあるが今の所証拠は無い。

前期後半以降の遺跡としては９の相津遺跡24の笛吹遺跡，25の神ノ崎遺跡が代表的である。

９，及び24の両遺跡は広範囲にわたり，共にカメ棺も出土している。時期的にも弥生前期後半～古墳時代に化ぶが９の相津遺跡では更に石鍋や，輸入陶磁片なども多く，長期間にわたって営まれた複合遺跡である事が知られる。

25の神ノ崎遺跡は属島である黒島東岸より突き出た小さな岬上に在る。昭和57年当該地を含む港改修工事に伴う事前協議で初めて注目された。その時点では支石墓数基と箱式石棺から成る弥生及びそれ以降の墓址群の疑いが持たれたが，その後の範囲確認の結果，長さ60m，比高2.8mの小さな岬全体が墓址であった事が確認された他多くの新しい知見をもたらしている。

Tab. 1　遺跡地名表

番号	名称	種別	時代	所在地	文献
1	タジリ遺跡	散布地	縄文～弥生	小値賀町六島郷	10
2	野崎遺跡	〃	縄文	野崎郷	5
3	ダントウ山古石碑群	石塔	中世	〃	10
4	野首遺跡	包蔵地	縄文・弥生	〃	6
5	唐見崎遺跡	散布地	弥生	前方郷字里前	10
6	本城岳遺跡	城跡	中世	〃　唐見崎	6
7	西林寺跡(シャラジ遺跡)	散布地	古・中世	〃　字相津	10
8	神方古墳	円墳	古墳	〃　〃	6
9	相津遺跡	包蔵地	弥・古・中世	〃　字相津迎	7
10	多郎戸遺跡	散布地	旧石器・縄	〃　字多郎戸	10
11	殿崎遺跡	包蔵地	縄文・弥生	〃　字船越	本書
12	小崎田遺跡	散布地	〃	〃　字小崎田	10
13	ヌケ遺跡	〃	〃	納島字大畑及び縄切	6
14	広浦遺跡	〃	〃	〃　字広浦	10
15	友尻遺跡				10
16	臍所城跡	城跡	中世	中村郷字城ノ越	6
17	薩摩堂古碑群	石塔群	〃	前方郷字木場	1
18	経崎山墳墓群	墳墓群	〃	〃　字牧尾原	10
19	尾の上遺跡	散布地	弥生	中村郷尾の上	10
20	天神崎遺跡	〃	〃	〃　字天神崎	10
21	池の下遺跡	〃	弥・古	前方郷字池の下	10
22	船瀬遺跡	〃	古・中世	中村郷字船瀬	10
23	笛吹水の下古墳	古墳	古墳	笛吹郷字水の下	3,6
24	笛吹遺跡	散布地	弥・古	〃　川久保	1
25	神の崎遺跡	墓址	〃	黒島郷字庭畑	8
26	黒島遺跡	散布地	弥生	〃　字岳ノ辻及び井手の畑	10
27	榎津遺跡	〃	縄・古	笛吹郷字榎津	10
28	小値賀遠見番所	番所跡	近世	〃　番所及び岳の内	6
29	東永田遺跡	散布地	弥生	柳郷字東永田	10
30	宮の下遺跡	〃	縄・中世	〃　字浜ガシ	6
31	牛の塔	石碑	中世	中村郷字船瀬	1
32	宮脇遺跡	散布地	弥生	柳郷字宮脇	1
33	浜津前目遺跡 (旧綾津美神社遺跡)	〃	弥古・中世	浜津郷字八龍山	1.24
34	御経塚(友尻積石塚)				10
35	矢櫃遺跡	包蔵地	縄文	浜津郷字矢櫃及び吉田	5
36	浜津折尾遺路	散布地	縄・弥	〃　字斑島	5
37	目崎遺跡	包蔵地	〃	斑島郷字宮崎	6,9
38	ハモキ遺跡	散布地	縄文	〃　〃	6
39	ウドマリ遺跡	〃	弥生	〃　字大泊り	6
40	玉石鼻遺跡	〃	旧・縄・弥	〃　字斑島	1
41	オオサコ遺跡	〃	旧石器	〃　字中田	10
42	トネリ遺跡	〃	縄文	〃　〃	10
43	藪路木遺跡	〃	〃	藪路木島郷	1
44	尾泊り遺跡	〃		大島郷字尾泊	10
45	大島ダイラ遺跡(水畑遺跡)	〃	〃	〃　字平及び水畑	1

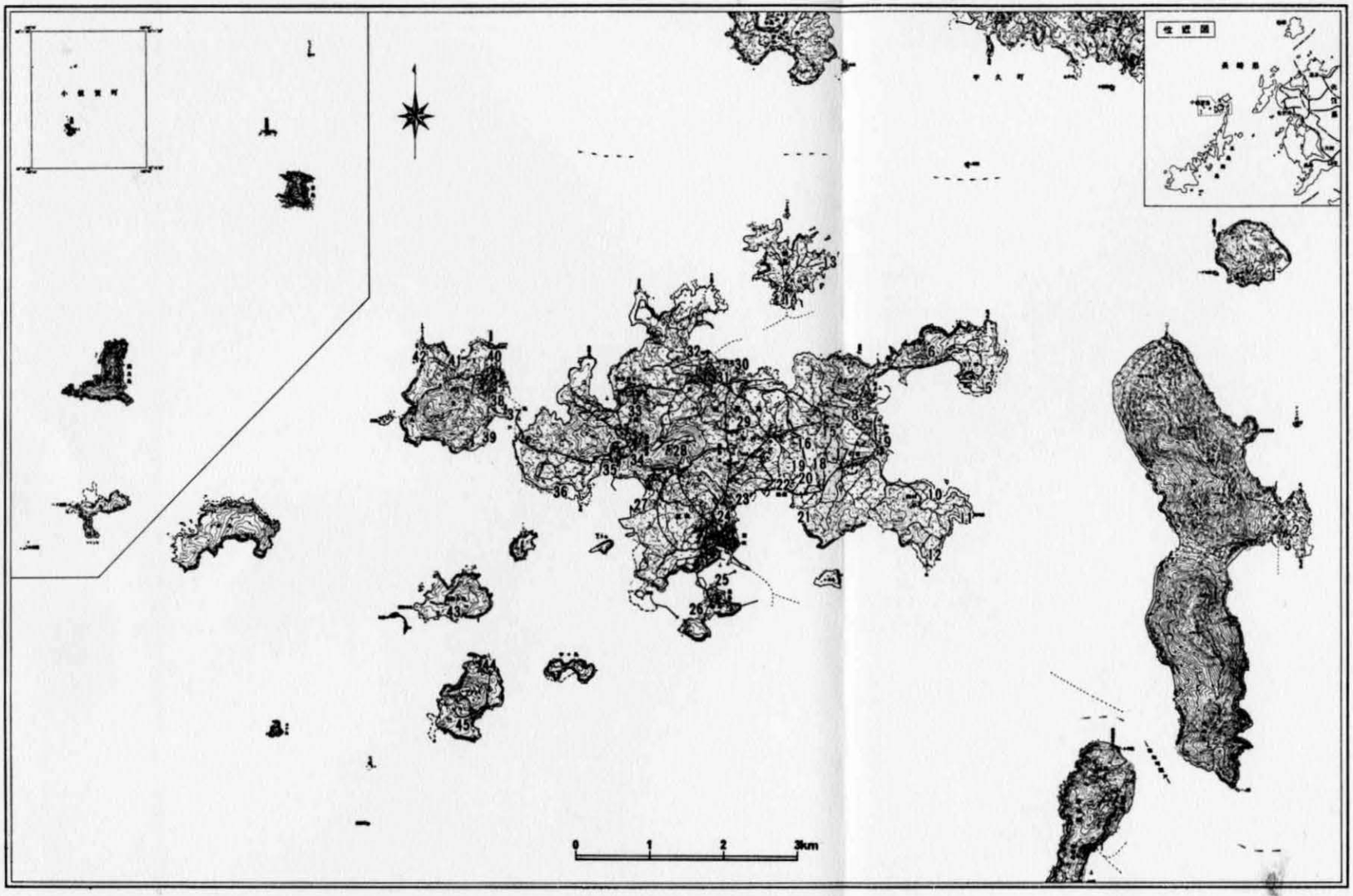


Fig. 9 町内遺跡分布図

その１つは発見された36基の遺構が時期的に弥生前期末～5.6世紀の巾を持つこと。にもかかわらず遺構の構造が同一で変化していないことである。更に，石棺上の蓋石及び一番上に乗る大形の天井石という支石墓様の遺構が一種の地下式構造の石棺であった事が判った。このような構造をもつ遺構は従来地下式板石積石室墓と呼ばれる鹿児島，熊本県下にみられる特殊な石棺に類似し，「これによって弥生時代から古墳時代に及ぶ西北九州―天草―北薩地方の交渉が指摘できるようになった」とされる。[註5]

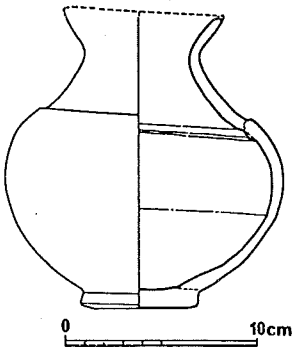


Fig. 10　宇久松原出土壺
（註４文献より転載）

五島列島においては高塚形式と異なりこの箱式石棺を基本とし，板石を積み上げてゆく特殊な石室が弥生時代以後古墳時代に至るまで構造を替える事なく連綿と続く訳である。地縁ではなく海の媒介を糧とする海洋族の独自の墓制であろうか。

古墳時代の五島列島は，極めて貧弱な状況にある。特に厳とした高塚古墳が存するのはこの小値賀に２基あるのみで今のところ他地域には見当らない。遺物の面からみても土師器，須恵器が集中するのは小値賀・宇久の両島に限定される感があり，中通島以南からは殆ど出土しない。この現象については末だ不明の点が多い。

島内の古墳時代の遺構としてはまず先にあげた神ノ崎墳墓群がある。５―６世紀代に比定されており，従来空白であったこの時期を埋める好資料となった。只，構造的に高塚古墳ではなく地下式板石積石室墓である事は興味深い。

次に高塚古墳は２基が知られている８の神方古墳と23の水の下古墳である。

何れもすでに墳丘も無く旧状を留めていない。神方古墳は横穴式石室のみが残存するが副葬品も知られておらず内容時期共に不明である。水の下古墳は調査の結果その出土遺物の特徴より（Fig. 11）７世紀後半代に比定されている。これより前５世紀以前の状況については弥生時代後期以降殆ど判っていない。

しかし，このような不透明な五島列島の古墳時代にあって，

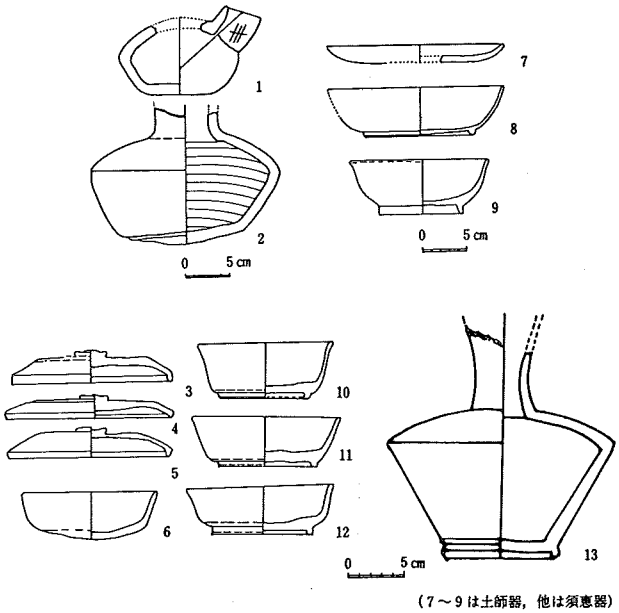


Fig. 11　水の下古墳出土土器（文献６より転載）

明瞭な高塚古墳の存在とこの後，野崎島「沖の神島神社」に奉納されていた狛剣の存在[註6]は（Fig. 12）諸外国との接点にあたるこの地域が大和朝廷下にあって重要な位置を占めていたであろう事は想像に難くない。

14世紀初頭までの小値賀島は，島のほぼ中央部を境として東西2島に分かれていたが1334年（建武元年）平戸松浦家15代定による干拓工事によって一島になったとある。このような背景のもとに町内には中世の遺跡が多い。6の本城岳や16の膳所城などの城跡や9の相津遺跡に於ける多くの輸入陶磁の存在がそれを示している。この遺跡の内容については町教育委員会によって後日詳細な報告が予定されている。

近世に入ってからの五島を特徴づけるものとしては屈指の捕鯨の基地としてである。特に小値賀の小田氏[註7]・魚目の深沢氏，有川の有川組などは著名である。

元々九州北西海域は鯨の洄遊水域にあたるところから，古くより鯨に対する認識は深いものであったらしく，福江白浜貝塚[註8]，田平町つぐめの鼻遺跡[註9]，有川町浜郷遺跡[註10]，大瀬戸町串島貝塚[註11]を初め縄文時代から奈良平安時代に至るまで海辺部の遺跡にはよく鯨骨が残され，ヤスやアワビオコシなど骨角器として再利用されている事実がある。又壱岐国風土記にも「鯨伏の条」があるなど古来鯨は西海人にとって極めて馴みの深い獲物であった。

その後，捕鯨方法が従来の突取法から17世紀網漁法に改変するに及び捕鯨は急速に発達し，元禄から宝歴年間に至る60～70年間は全盛時代を迎えたらしい。ちなみに，ある鯨組の記録をみると，弘化四年（1847）には230頭が来遊し32頭捕獲，翌嘉永元年（1848）には190頭の通鯨に対し44頭を捕獲との記述がある。一鯨組でその成果であるから，壱岐，生月，有川，平戸そして小値賀等各鯨組の年間総水揚数は相当なものであったろう。

しかし，このような隆盛も欧来列国の銃砲捕鯨[註12]という近代式捕鯨には立ち打ちできず又鯨の来遊も減りつづけたことから幕末から明治初年頃には殆どの鯨組が転廃業の止むなきに至っている。

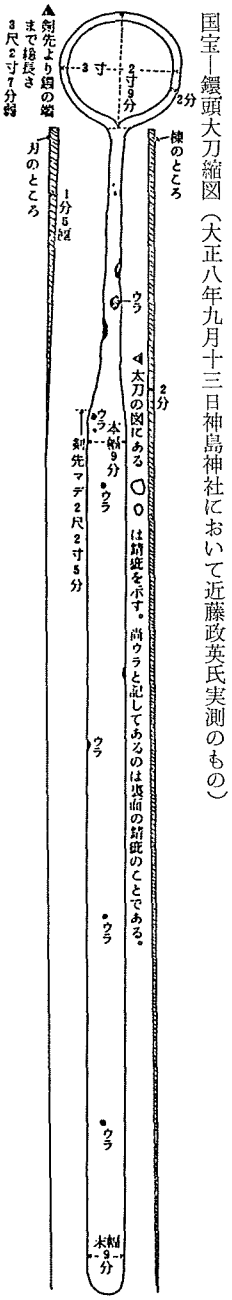


Fig. 12　環頭大刀実測図

註1　昭和59年県文化課が実施した同町内の分布調査の結果による。ところが同町は昭和59年度より独自に同町の詳細分布調査を実施しており，その成果によると，遺跡数は更に増えて中世以前で58ケ所になるという。但しここでは混乱を避ける為，遺跡カードが作成してある45カ所について述べておく。

註 2　遺跡の内容については文献6，7，8，9を参照した。

註 3　小田富士雄氏は，弥生初頭の板付Ⅰ式文化は宇久島に渡来し，その後前期中頃までの文化が中通島北部にまで及ぶとされ，そのルートは北松浦半島―宇久島―小値賀島―中通島北部という伝播経路を想定しておられる。小田富士雄「五島列島の弥生文化総説篇」長崎大学医学部解剖学第二教室人類学考古学研究報告　第2号　1970

その後新資料の発見があり時期的には若干再考の余地があるが基本的には変らないものと思われる。

註 4　長崎県教育委員会「宇久松原遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅵ　長崎県文化財調査報告書　第60集　1983

註 5　文献8　120頁

註 6　戦後米軍に接収され現存しない。これと同類と思われる環頭大刀が平戸志々伎神社，同亀岡神社に伝えられているが，残っているのは亀岡神社のもののみで現在国の重要文化財として指定されている。

註 7　吉元寛一「小値賀町捕鯨考」文献6所収

註 8　福江市教育委員会「白浜貝塚」福江市文化財調査報告書　第2集　1980

註 9　長崎県文化課「つぐめのはな遺跡緊急調査概報」1971

註10　註3文献に同じ

註11　長崎県教育委員会「串島遺跡」長崎県文化財調査報告書　第51集　1980

註12　古田敬市「有川町捕鯨史」有川町郷土誌所収　1972

文　献

1 長崎県教育委員会「長崎県遺跡地名表」長崎県文化財調査報告書　第1集　1962

2 長崎県教育委員会「五島遺跡調査報告」長崎県文化財調査報告書　第2集　1964

3 吉井一信「水の下古墳の発掘考および古墳期の小値賀について」龍燈第3号所収　小値賀町史談会　1965

4 吉井一信「発掘第一綿津美神社境内」龍燈第4号所収　小値賀町史談会　1966

5 文化庁「全国遺跡地図―長崎県―」1976

6 小値賀町教育委員会「小値賀町郷土史」1978

7 長崎県教育委員会「殿寺遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅲ所収　長崎県文化財調査報告書　第50集　1980

8 小値賀町教育委員会「神ノ崎遺跡」小値賀町文化財調査報告書　第4集　1984

9 小値賀町教育委員会「町内遺跡分布調査，Ⅰ」小値賀町文化財調査報告書　第5集　1985

10 小値賀町教育委員会塚原博氏教示及び，1984年長崎県文化課分布調査の折確認

Ⅱ　遺跡の調査

一　第一次調査

1．土　層

第一次調査では，24ケ所のトレンチを入れて遺跡の範囲を確認し，その内ＴＰ１，２，４，12，14，19の６ケ所のトレンチに於いて遺物包含層を確認した。ここでは包含層を含むＴＰ２，４，14区及び無遺物層区であったＴＰ３，９，10，11，13区について堆積状況を図示し若干の説明をしておきたい。

包含層を含む区はＴＰ１，２，４を含む遺跡北東部とＴＰ14を含む南東部で若干の違いをみせる。まず前者については基本的に３つの層に分けられる。１層は表土耕作土で厚さ15～20cm程度である。２層は暗褐色土で厚さ20～40cm，粘性は無く時折小礫を若干含む。いわゆる包含層であるが，ＴＰ１では５×２のトレンチの中に5,000点を越す遺物が集中する。遺物の堆積のみで層が形成された如きであった。

６層は赤褐色粘質土で以下遺物を含まない。部分的試掘では厚さ40cm程度で以下には風化した砂岩を含む暗紫色の土層に漸次変化する。(Fig. 13—ＴＰ２，４）南東部の基本土層は２層までは北半と同じであるが，３層に湿気を含む暗褐色土が堆積している。厚さは10～20cm程であるがやはり若干の遺物を含む。(Fig. 14—ＴＰ14）なお，この区ではこの層の下に小角礫を一面に並べたような淡黄褐色の層が堆積する。遺物は含まない。

遺物包含層を含まない区では，殆どの場合，表土直下に赤褐色の粘質土か風化礫を含む赤褐色土に推移する。表土中にも遺物は含まれない。

2．遺物の出土状況　　（一次調査）

この項で説明する資料は第一次調査で包含層を確認した６トレンチの内，空港建設部分にかからないＴＰ１，ＴＰ12，ＴＰ19の３ケ所内のものに限定する。その他のＴＰ２，ＴＰ４，ＴＰ14区は第二次調査区域内に含まれる為であり，混乱を避ける為それらの出土遺物は第２次調査の項で一括して説明することにしたい。

ＴＰ１は遺跡北東部に設定したトレンチで，標高４ｍ40前後，現汀線まで直線にして僅か12ｍの位置に在る。

出土遺物は土器2,307点，石器2,015点の計4,322点まで確認したが当該地が空港計画範囲外になる事が判った時点で調査を中断した。包含層は表土下の暗褐色土のみである。遺物は標高4.23ｍより出土し始め，3.92ｍの時点で埋め戻しを行った訳であるので約30cmの厚みの中にこれだけの量を含んでいる事になる。この下の部分は未掘であるので当然この総量は厖大になろ

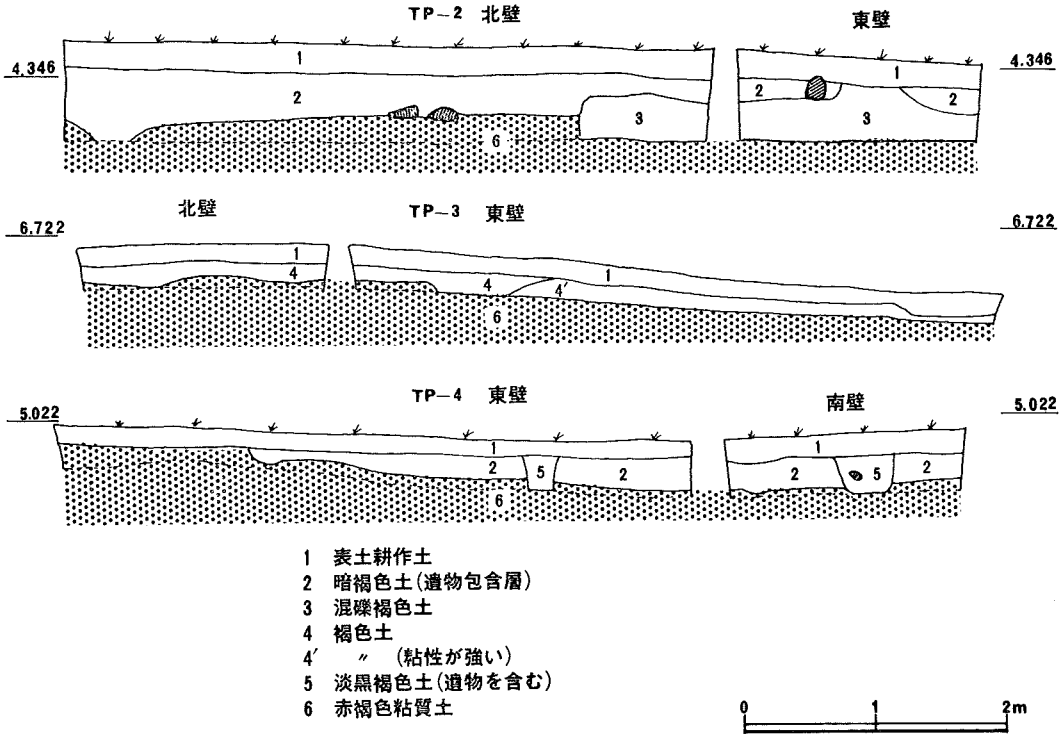


Fig. 13 TP 2・3・4 壁 面 図 (1/40)

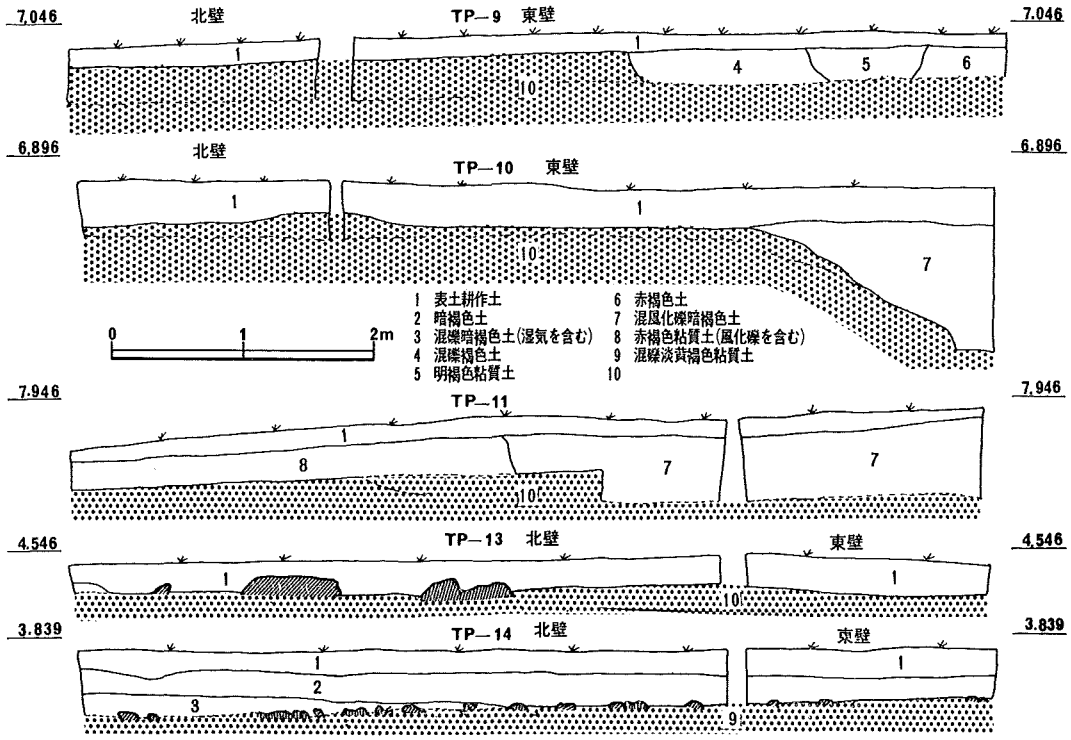


Fig. 14 TP 9・10・11・13・14壁面図 (1/40)

う。なお，このトレンチの出土状況図は点の固まりになるだけであるのであえて図示しない。

ＴＰ12はＴＰ１の北方20ｍの位置に当たる。10cm程の厚みの表土下にすぐ包含層があらわれ30cm程の厚みの中に60点の遺物の出土をみた。(Fig. 15) しかし，トレンチ北側にはすぐに包含層も遺物もみられないことから，このトレンチが遺跡の北限であることが判った。

ＴＰ19は，遺跡の南東部にあたる。遺物は少なく僅か13点であり，標高3.6～3.75ｍの間に含まれる。(Fig. 5)

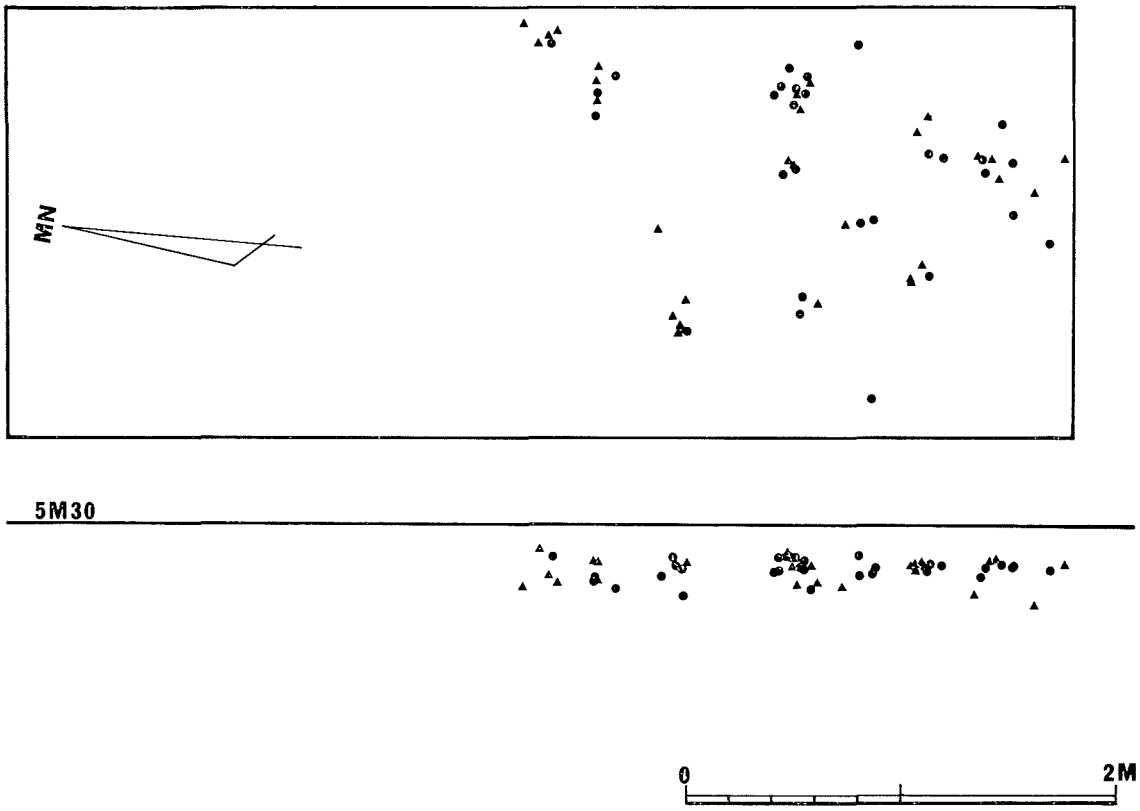


Fig. 15 ＴＰ 12 遺 物 出 土 状 況

3. 第一次調査出土土器 (Fig. 16～26)

先述した如く，ここで図示する資料はＴＰ１出土土器に限定する。

遺物包含層は２層に比定した暗褐色土のみで，しかも厚さ30cm程の中に土器・石器が充塡といったような状況であった為，層位による分類が難しい。そこで，ここでは土器をまず下記の６類に分け，しかる後一般的に呼称されている型式[註1]によって分類しておくことにする。

Ⅰ類　阿高式系土器
　a　並木式土器
　b　阿高式土器
　c　南福寺式土器
　d　出水式土器
　e　御手洗Ａ式土器
Ⅱ類　磨消縄文系土器
　f　中津式土器
　g　鐘ケ崎式土器
　h　北久根山式土器
Ⅲ類　貝殻文系土器
　i　市来式土器
Ⅳ類　無文土器
Ⅴ類　その他の土器
Ⅵ類　底部

Ⅰ類　阿高式系土器

a　並木式土器 (Fig. 16—1)

１点のみ出土している。口縁下に浅い凹線を配した後半載竹管による爪形文を施こす。淡黄茶色を呈し，胎土には多量の滑石を含む。田中氏の設定[註2]に従えば並木Ⅲ式ということになろう。

b　阿高式土器 (Fig. 16—2～4)

何れも胎土に多量の滑石を含み，明赤褐色を呈する。器面は柾目調整後ヘラによってなで消し，その上に棒状原体による凹文を施こす。

c　南福寺式土器 (Fig. 16—5～8)

5は一条の沈線によって口縁部を作出する。口唇部には凹点を施こし，口縁帯には巾広のヘラ先状原体による「く」の字状文様を配する。7は口縁にコブ状突帯を貼付する。胎土には多量の滑石を含む。

d　出水式土器（Fig. 16—9～15）

9～11については胎土に滑石を含むが，13～15は含まない。9は口縁下に突帯を貼付し，その上に浅い凹点を施こす。外面は柾目状調整の上をヘラでなで消す。10，11は口縁部のみに文様を集中させるが，特に11の文様はヘラ先状原体による鋭利な沈線となる。12は粘土紐を組み合わせて文様とするが，それ自体非常にくずれている。13は口唇部に粘土紐を貼付してその上に刻目を施こす。14は波状口縁を成す。口唇下に帯状の隆帯を山形に貼付し刻目を施こす。又口縁両面にも細い沈線をV字状に配する。よく判らない資料であるが，鹿児島県出水貝塚[註3]に類似資料が出土しているところから一応出水式系統のものと理解しておく。

e　御手洗A式土器（Fig. 16—16～21）

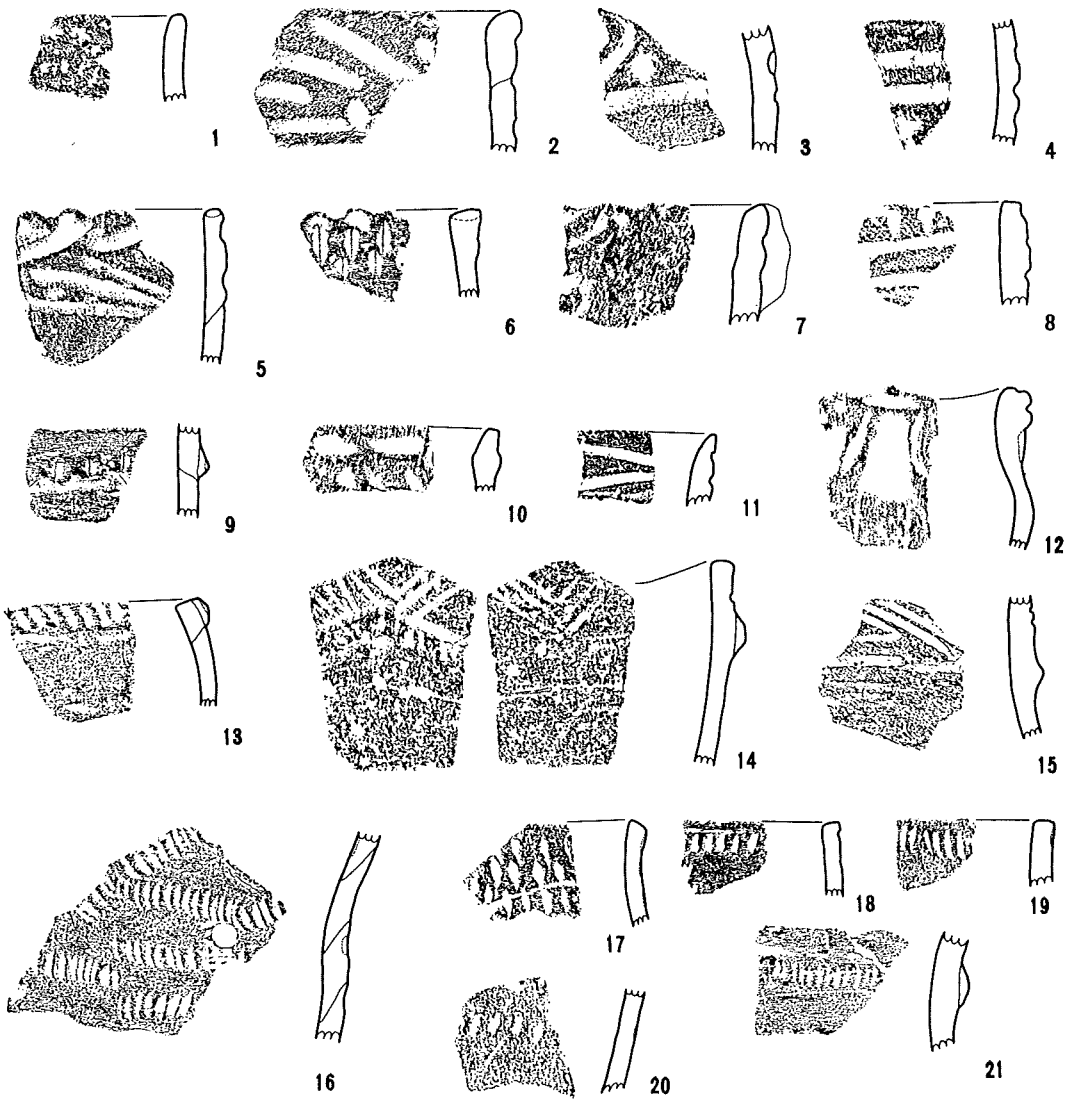


Fig. 16　一次調査出土土器実測図（1/3）

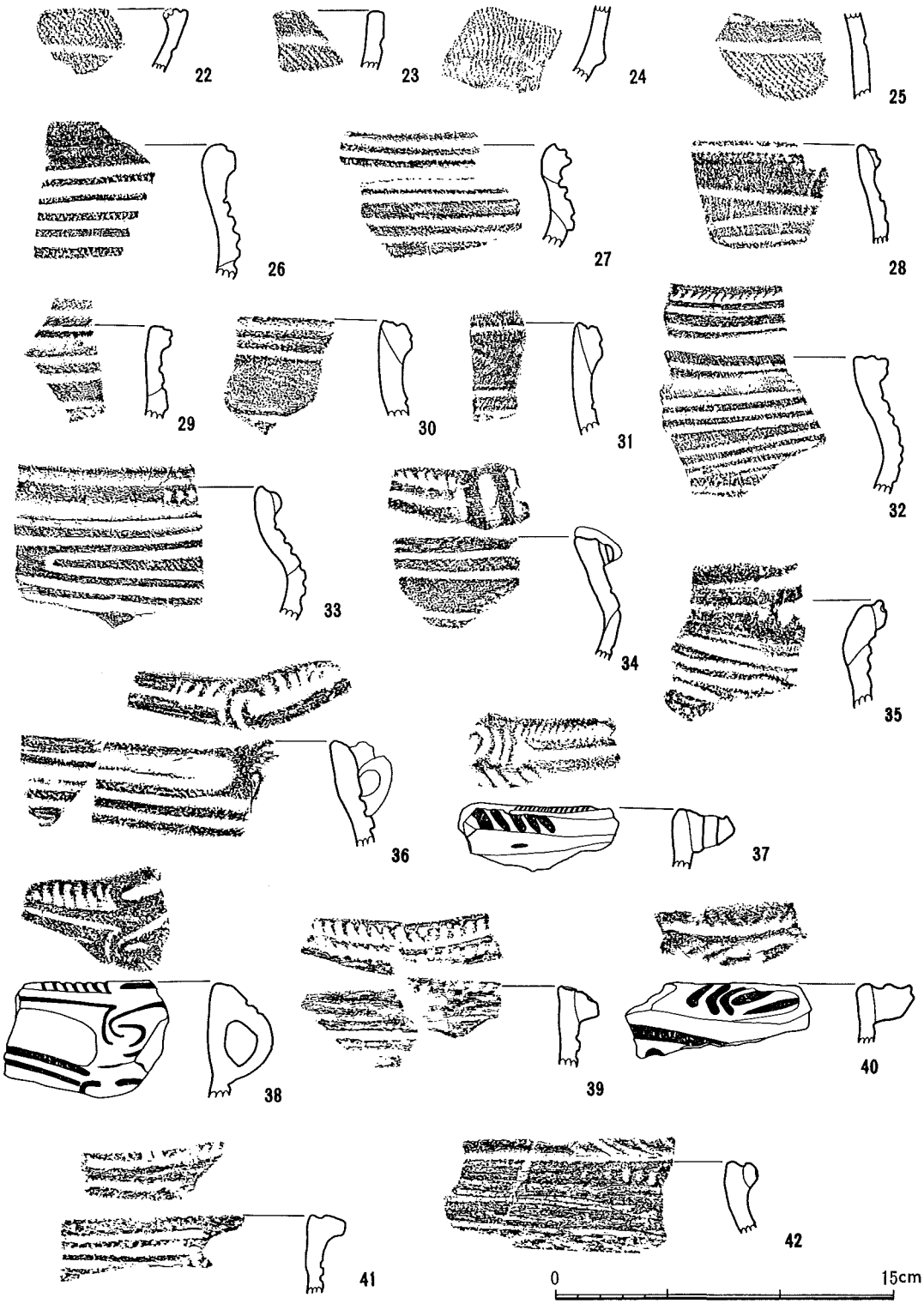


Fig. 17　一次調査出土土器実測図 (1/3)

ここ図示する資料は爪形文を主文様とするが，20・21については殆ど痕跡的な突帯上に浅い爪形文を施こす。何れも胎土に滑石を含まない。

Ⅱ類　磨消縄文系土器（Fig. 17～21）

f　中津式土器（Fig. 17—22～25）

沈線と縄文を主文様とする中津式土器と思われる。22は口縁下に一条の沈線をひき，その上部に斜縄文を施こす。23も口縁下に沈線を持つが，22とは逆に沈線下に縄文を施こす。24は鉢胴部と思われるが全縄文である。25には，２本の平行沈線と縄文がみえる。これらの資料は何れも小破片であり器形その他不明である。

g　鐘ケ崎式土器（Fig. 17, 18, 19, 20 — 60～75）

ＴＰ１の中で最も量が多く主体を成す土器である。鉢形土器が主であるが，復元し得る程の資料は無い。26～35は，口がやや開き頸部はしまり，胴部が若干張るタイプである。口縁は肥厚し，口唇に沈線がみられる。主文様は平行沈線であるが，32には口唇に短い刻目が，又33には曲線が配され，その中に小巻貝による擬似縄文が施こされる。36，38，43～46には橋状把手がつく資料である。38は把手上に浅い沈線による入組文を配するが文様はくずれている。45，46は共に把手上にＳ字状や渦文を巡らすが，46の把手はもはや穿孔の意志が無く橋状の呈をなさない。37，39，40～42は口唇を巾広に作り，その上に沈線による渦文や刻目を施こす。47～58は磨消縄文の資料である。47～49は頸部が短く屈曲し，胴の張りが強い。小型の鉢に属するものと思われる。50はローリングが認められ文様自体も浅く鋭さが無い。59は比較的大型の深鉢で口径37.3cmを計る。ゆるやかな波状口縁を持つ。沈線と渦文から成る文様は口縁部に集約され，胴部は無文のまま放置される。胴部下半にはススが若干附着する。60～74は胴部破片である。渦文，沈線，磨消縄文を特徴とする。61，62は文様下を研磨した精製土器である。薄手で焼成も良好である。

43

44

45

46

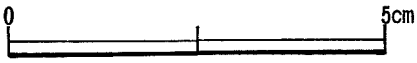


Fig. 18　橋状把手土器（1/2）

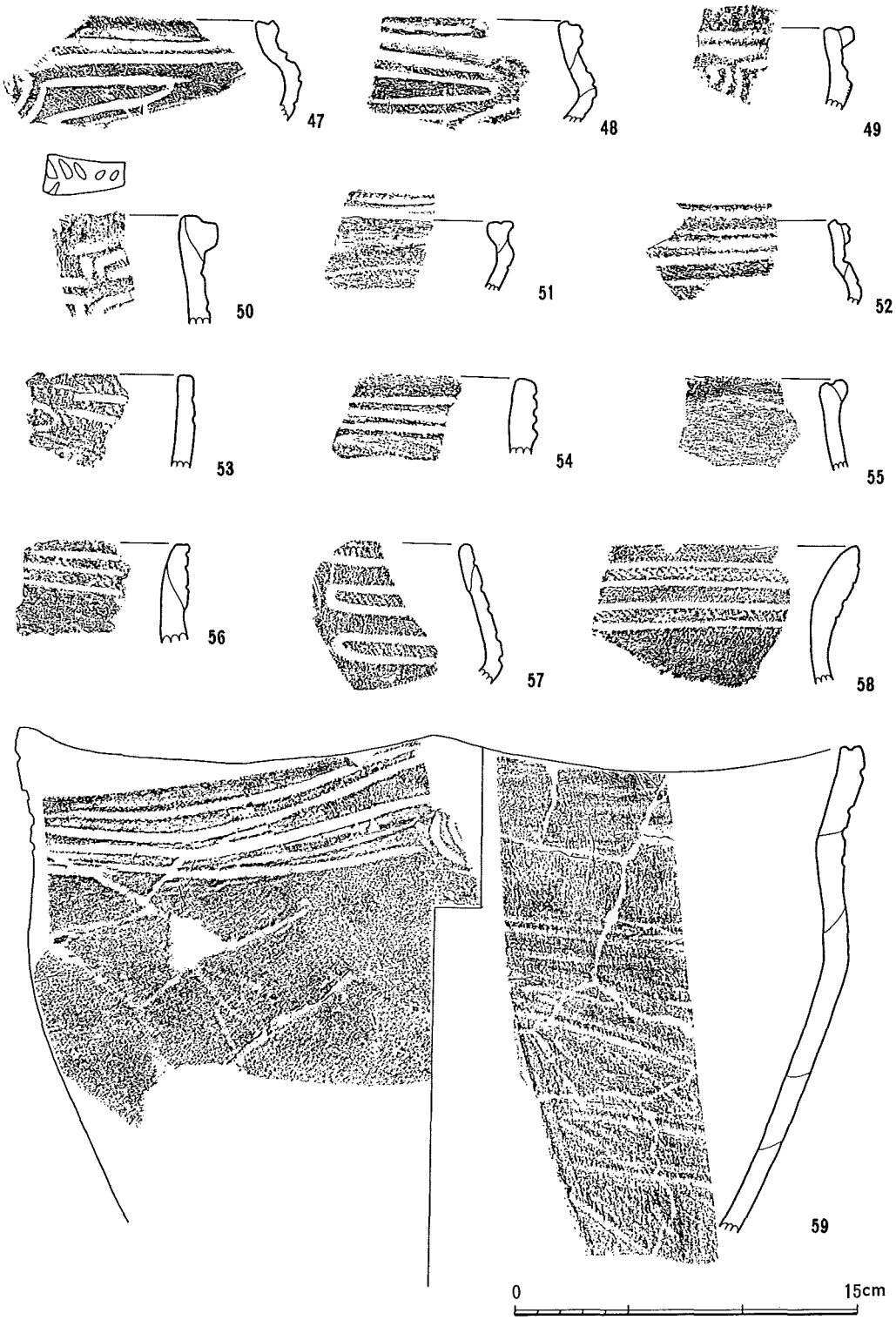


Fig. 19　一次調査出土土器実測図（1/3）

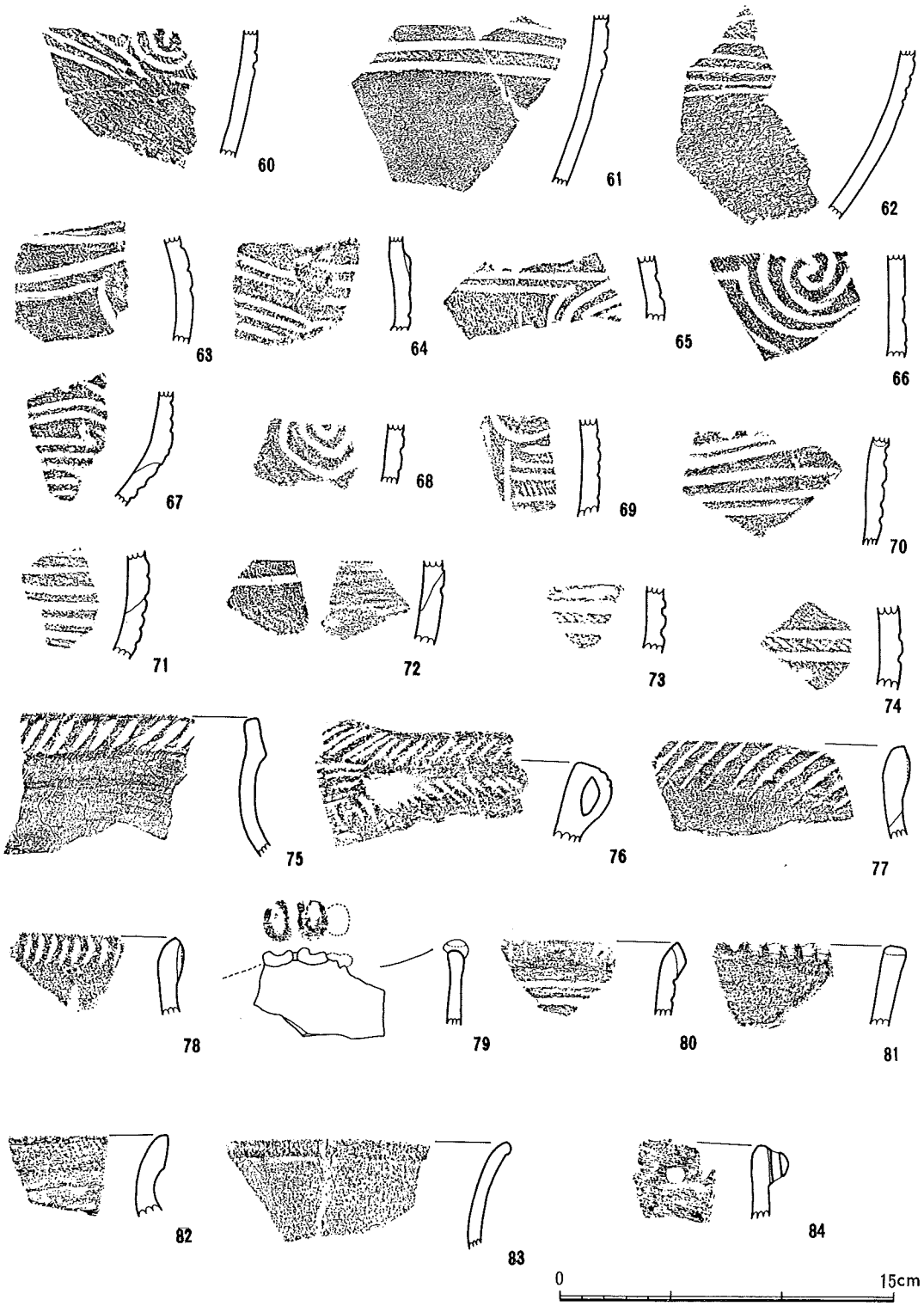


Fig. 20　一次調査出土土器実測図（1/3）

h　北久根山式土器　(Fig.20—76～84,Fig.21)

76—78, 80, 82は口縁部を把厚させ頸部がややしまる。口縁には短斜線文を施こす。79は波状口縁となりその頂部に3個の小さな粘土塊を貼付し，上部に押捺を施こす。85は口縁部に粘土帯を逆W字形に貼付する。

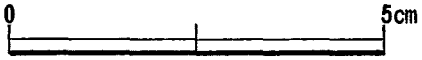


Fig. 21　W字文粘付口縁（1/2）

Ⅲ類　貝殻文系土器 (Fig. 22)

口縁に突帯を巡らして厚く把厚させて口縁帯を作出し，その部分のみに文様を集中させる一群である。文様は貝殻腹縁による押圧 (86, 90, 91, 93) やヘラ先による短斜線文 (88, 89) そして波状文 (92) などがみられる。93は口径38cmの深鉢で頸部が「く」の字状に折れて口縁帯を作り出し，その部分に貝殻腹縁による押圧を施こす。西北九州ではあまり見られない資料である。以上の一群は南九州を中心とする市来式に相当するものであろう。

Ⅳ類　無文土器 (Fig. 23,～24)

無文の土器は数量的には多いが小破片が大部分である為，本当にそうであるかの断ができな

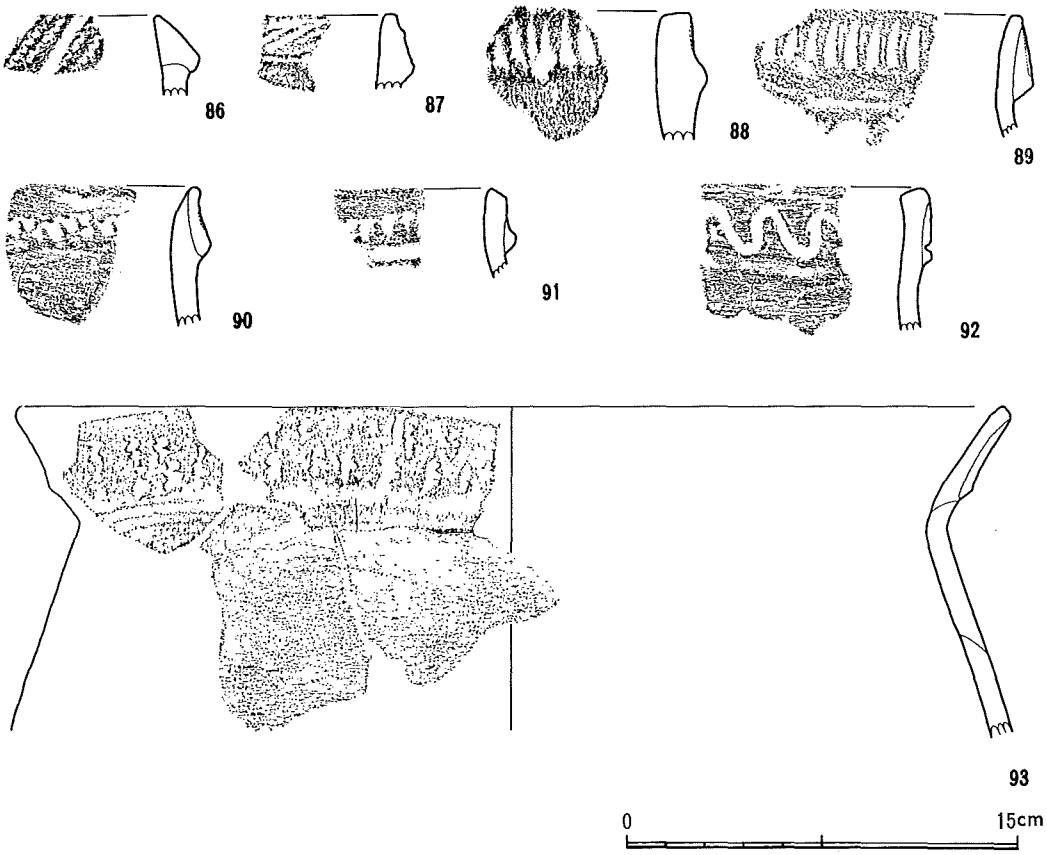


Fig. 22　一次調査出土土器実測図（1/3）

い。そこでここでは無文で且つ胎土に滑石を含まない資料に限定して図示したい。94は口径37cmを計る深鉢で頸部がゆるい「く」の字形を成す。口唇には沈線が見られる。鐘ケ崎式に共伴するものか。96は椀形を成す。やはり口唇に一条の沈線をもつ。明赤褐色で内外面共荒い柾目調整を行う。やはり口唇に浅い沈線がみられる。102，103は口縁下に補修孔をもつ。104～114は無文土器の胴部資料である。調整痕は一般的に外面が柾目の縦方向，内面は横方向に行ってその上をナデ消す例と，そのまま放置する例がある。114は貝殻条痕の例である。肋脈のある貝殻腹線を利用する。なお，110には丹塗りの痕跡が認められる。

V類　その他の土器（Fig. 25）

不明土器を一括してV類とする。115は深鉢の口辺部と思われる。口縁が若干外反し，胴部

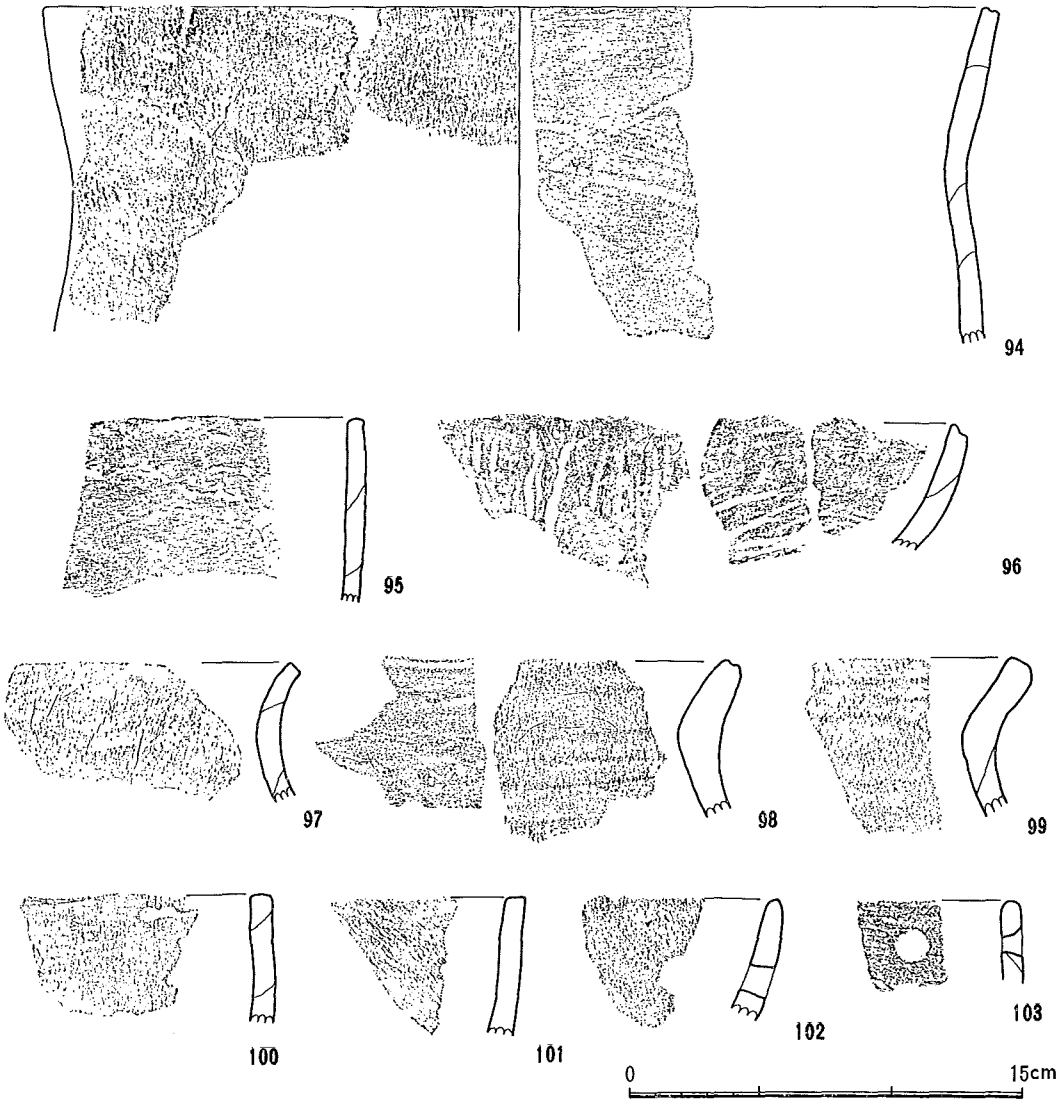


Fig. 23　一次調査出土土器実測図（1/3）

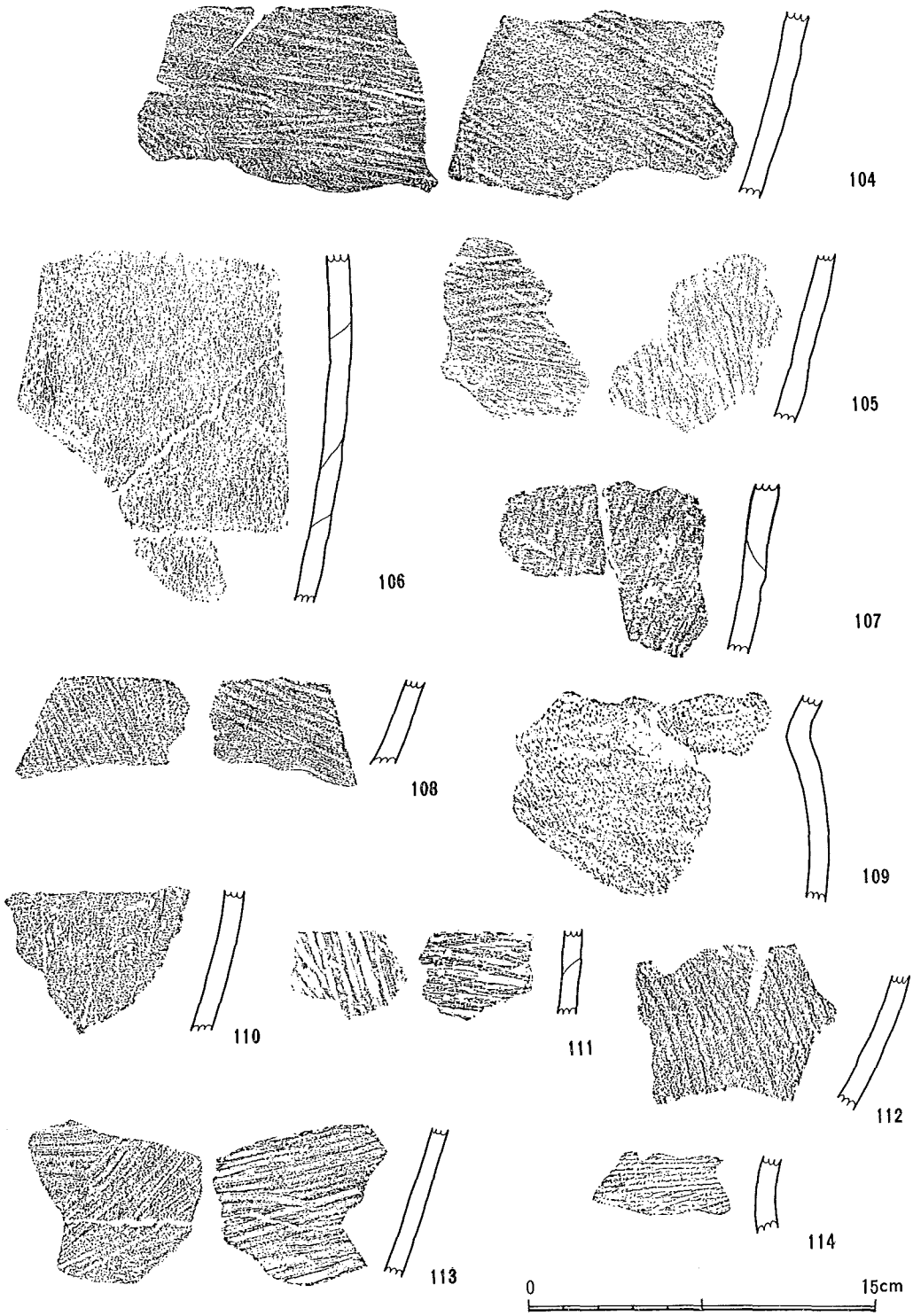


Fig. 24　一次調査出土土器実測図（1/3）

はすぼまりながら底辺へ移行する。胎土には砂粒・石英粒等を含むが滑石は含まない。文様は右下りに山形文を施こす。昭和54年同遺跡を試掘された坂田邦洋氏の新聞発表[註4]によれば，韓国櫛目文土器が多く出土したらしい。あるいはこの種の土器片を含むのかも知れないが実見していないので確証は無い。116，117は同一個体と思われる。共に鉢の口縁部で，口唇下に沈線を配し，その下部に斜め方向に平行沈線を施こす。胎土色調共に115に似る。118は鉢胴部である。頸部に3本の沈線をひき，その下に斜め方向に平行沈線を配する。暗褐色を呈する。

VI類　底部（Fig. 26）

119～123は胎土に滑石を含む資料である。何れも深鉢の底部と思われる。124～135は胎土に滑石を含まない。底径は11.5～16.5cmの間に含まれ，12cm前後のものが最も多い。129は精製浅鉢の底部であろう。底から大きく外側へ張り出す。内外面共研磨を施こす。131，134～136は台状底部である。131，134は無文のままであるが，135は裾が大きく広がり，コブ状の粘土塊と帯状の突帯を貼付し，沈線と小巻貝による擬縄文によって文様を構成する。136は長方形の透しを持つ台状底で曲線と渦文を配し，曲線間には擬縄文を施こす。以上の資料の内119～123は阿高系のもの，124以降が磨消縄文系に伴う資料であると思われる。

註1　下記文献を参考とした
　a 前川威洋「九州縄文文化の研究」所収各論文　1979
　b 田中良之「中期・阿高式系土器の研究」古文化談叢第6集所収　1979
　c 田中良之「磨消縄文土器伝播のプロセス」古文化論集上巻所収　1982
　e 坂田邦洋「北久根山式土器の設定」考古学論叢3　所収　1975
　f 佐賀県立博物館「坂の下遺跡の研究」佐賀県立博物館調査研究書第2集　1975
註2　前掲b論文
註3　「薩摩国出水貝塚発掘報告」京都帝国大学文学部考古学研究報告　第六冊　大正10年
註4　昭和54年5月4日付け長崎新聞掲載要旨

参考文献
1　前川威洋　「縄文後期文化―九州―」　新版考古学講座所収　1969
2　熊本県教育委員会　「黒橋」　熊本県文化財調査報告　第20集　1976

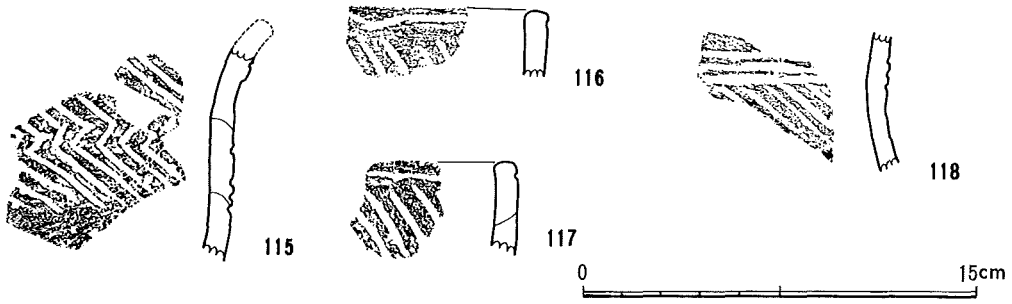


Fig. 25　一次調査出土土器実測図（1/3）

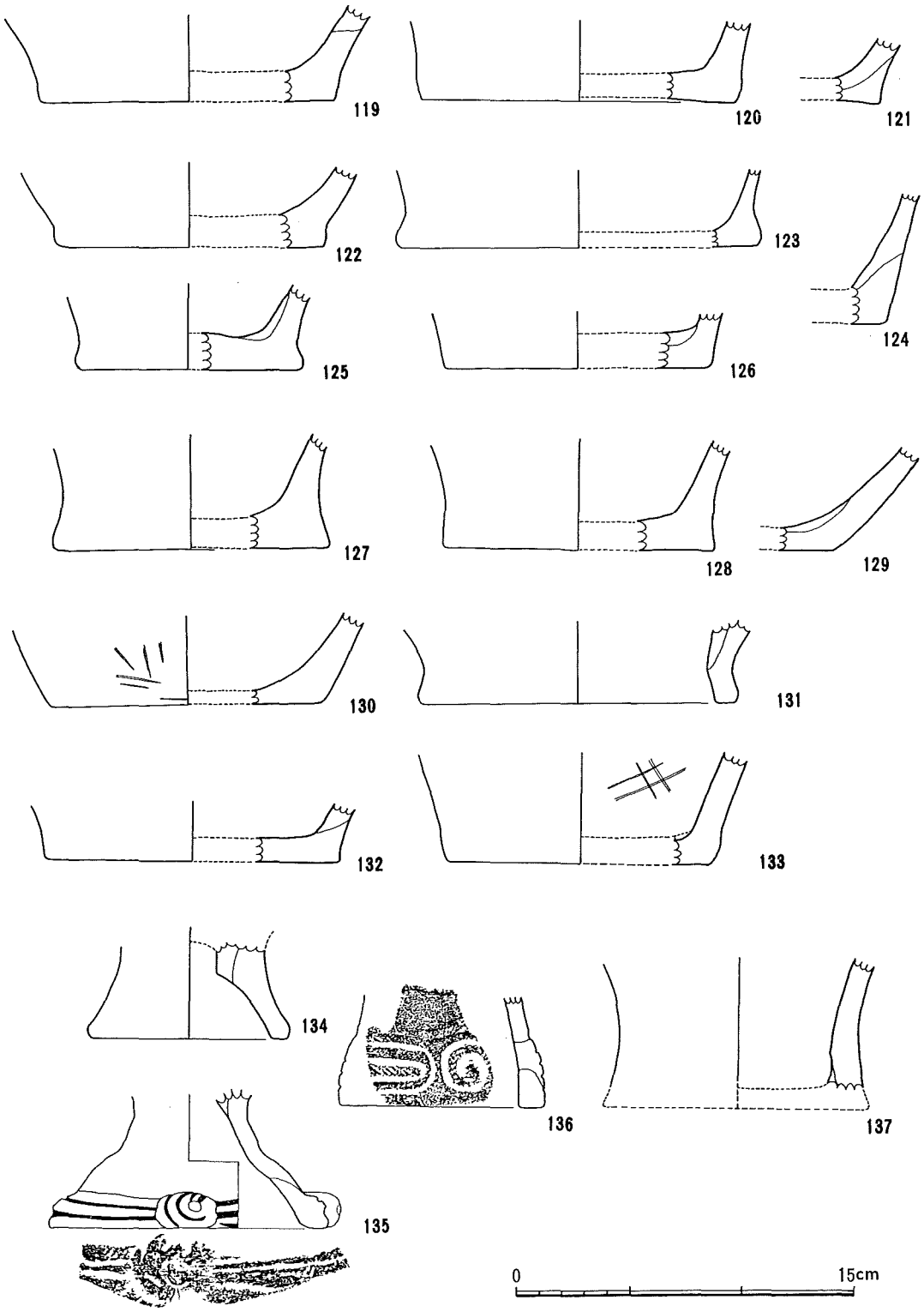


Fig. 26　一次調査出土土器実測図（1/3）

Tab. 2　土器観察表

図番号	遺物番号	出土区	部位	厚(%)	色調	胎土	調整		備考
							外	内	
1－1	TON-1-1358	TPI	鉢口縁	7	淡黄茶色	滑石			半載竹管・ローリング
2	TON-1-916	〃	〃	12	茶褐色	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	棒状原体凹線
3	TON-1-2154	〃	鉢口辺部	11	明赤褐色	〃	〃	〃	沈線・凹点
4	TON-1-1600	〃	〃	9	〃	〃	〃	〃	凹線
5	TON-1-2345	〃	鉢口縁	9	〃	〃	〃	柾目・ヘラナデ	沈線
6	TON-1-2130	〃	〃	8	茶褐色	〃	〃	〃	凹点
7	TON-1-551	〃	〃	10	〃	〃		ヘラケズリ・ヘラナデ	隆帯・沈線
8	TON-1-952	〃	〃	12	黒褐色	砂粒・雲母	ヘラナデ	ヘラナデ	凹点・沈線
9	TON-1-470	〃	鉢胴部	9	茶褐色	滑石	ヘラナデ	〃	突帯・凹点
10	TON-1-413	〃	鉢口縁	9	暗茶褐色	〃	〃	ヘラケズリ・ヘラナデ	〃・沈線
11	TON-1-1107	〃	〃	10	暗褐色	砂粒・滑石(少)	〃	ヘラナデ	ヘラ先沈線
12	TON-1-1976	〃	鉢口縁	10	赤茶色	〃		指頭圧・ヘラナデ	粘土紐粘付
13	TON-1-1378	〃	〃	8	灰黒色	砂粒・石英粒・雲母		ヘラナデ	突帯・刻目
14	TON-1-1379	〃	〃	9	暗茶色	砂粒・雲母(少)	ヘラナデ		突帯・刻目・ヘラ先沈線
15	TON-1-913	〃	鉢胴部	8	黒褐色	砂粒・雲母	ケンマ		突帯・フラ先沈線
16	TON-1-366	〃	鉢口辺部	9	暗灰黒色	砂粒・雲母・石英粒	ヘラナデ	ヘラナデ	裏側にも刻目
17	TON-1-604/611	〃	鉢口縁	8	〃	〃		〃	瓜形文
18	TON-1-2299	〃	〃	8	黒褐色	〃	ケンマ		〃
19	TON-1-2328	〃	〃	8	〃	〃	ヘラナデ		〃
20	TON-1-11	〃	鉢胴部	8	黄灰色	砂粒・雲母・長石			ローリング
21	TON-1-207	〃	〃	10	灰茶色	砂粒・雲母・長石・石英粒	ヘラナデ		突帯・刻目
22	TON-1-390	〃	鉢口縁	7	黄灰色	砂粒・雲母・石英粒		ヘラ・ケンマ	縄文・沈線
23	TON-1-1629	〃	〃	8	暗褐色	砂粒・雲母・長石	ヘラナデ	〃	〃
24	TON-1-85	〃	鉢胴部	7	黄灰色	〃			全縄文
25	TON-1-496	〃	〃	7	〃	〃	ヘラナデ		縄文・沈線
26	TON-1-1460	〃	鉢口縁	9	暗灰黒色	〃	ヘラナデ	ヘラ・ケンマ	平行沈線
27	TON-1-1338	〃	〃	8	暗茶褐色	〃	〃	ヘラ・ケンマ	〃
28	TON-1-4	〃	〃	8	淡褐色	〃	〃	ヘラ・ケンマ	〃
29	TON-1-935	〃	〃	8	明褐色	〃	〃	ヘラ・ケンマ	〃
30	TON-1-408	〃	〃	10	暗灰黒色	〃	〃	ヘラナデ	〃
31	TON-1-1582	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	9と同一個体
32	TON-1-18	〃	〃	9	暗茶褐色	〃	ヘラナデ	柾目・ケンマ	平行沈線口唇に刻目
33	TON-1-1314	〃	〃	9	〃	〃	ヘラナデ	ヘラナデ・ケンマ	擬縄文
34	TON-1-1153	〃	〃	8	〃	〃	〃	指頭圧・ヘラケンマ	口唇に刻目
35	TON-1-847	〃	〃	8	明茶褐色	砂粒・長石・石英粒	〃	ヘラナデ	退化沈線
36	TON-1-871	〃	〃	11	〃	〃	〃	ヘラナデ・ケンマ	橋状把手
37	TON-1-145	〃	〃	9	暗灰黒色	〃			口唇に渦文・刻目
38	TON-1-301	〃	〃	8	〃	〃	ヘラナデ	ヘラナデ・ケンマ	橋状把手・ローリング
39	TON-1-778	〃	〃	8	黒褐色	〃	ヘラナデ・ケンマ	〃	口唇に2段の刻目
40	TON-1-333	〃	〃	9	暗茶褐色	〃			ローリング
41	TON-1-620	〃	〃	7	暗黄灰色	〃	ヘラナデ	ヘラナデ・ケンマ	橋状把手・ローリング
42	TON-1-385/985	〃	〃	9	黒褐色	砂粒・長石・雲母・石英粒	ヘラナデ・ケンマ	〃	
43	TON-1-2089	〃	〃	9	淡黄灰色	〃	ヘラナデ	ヘラナデ・ケンマ	橋状把手
44	TON-1-137	〃	〃	9	赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	〃・渦文
45	TON-1-575	〃	〃	9	暗黄灰色	〃	〃	〃	橋状未通・くずれた渦文
46	TON-1-52	〃	〃	9	〃	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	S字状文
47	TON-1-2059	〃	〃	7	暗茶褐色	〃	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ・ケンマ	精製土器
48	TON-1-475	〃	〃	7	黒褐色	〃	ヘラナデ	〃	〃
49	TON-1-424	〃	〃	8	〃	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	渦文
50	TON-1-435	〃	〃	8	黄灰色	〃	〃	〃	ローリング

Tab. 3　土器観察表

図番号	遺物番号	出土区	器　種	厚(㎜)	色　調	胎　　土	調　整		備　　考
							外	内	
51	TON-1- 520	TPI	鉢 口 縁	7	明赤褐色	砂粒・石英粒・雲母	ヘラナデ		ローリング・口唇部刻目
52	TON-1- 472	〃	〃	7	黒 褐 色	〃	〃	ヘラナデ・ケンマ	平行沈線
53	TON-1-1805	〃	〃	8	暗灰黒色	砂粒・雲母・長石	ヘラナデ・ケンマ	柾目・ケンマ	ヘラ状沈線
54	TON-1- 162	〃	〃	11	暗黄褐色	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	平行沈線
55	TON-1- 440	〃	〃	7	黒 褐 色	〃	〃	指頭痕・ヘラナデ	口唇部に沈線
56	TON-1-1111	〃	〃	11	暗茶褐色	砂粒・石英粒・雲母・長石	〃	ヘラナデ	平行沈線
57	TON-1- 119	〃	〃	8	暗黄灰色	砂粒・雲母・長石	〃	〃	沈線間に擬縄文
58	TON-1-1154	〃	〃	12	〃	〃	〃	ヘラナデ・ケンマ	〃　(巻貝)
59	TON-1-$\frac{1342}{266}$	〃	深鉢口縁	9	暗 褐 色	〃	〃	ヘラナデ	沈線・渦文
60	TON-1-$\frac{1371}{1681}$	〃	鉢 胴 部	7	黒 褐 色	〃	ヘラナデ・ケンマ	〃	スリ消縄文・渦文
61	TON-1-1473	〃	〃	6	〃	〃	ヘラナデ・ケンマ		〃
62	TON-1-2067	〃	〃	7	〃	砂粒・石英粒・雲母	〃	ヘラナデ・ケンマ	〃
63	TON-1-2346	〃	〃	7	〃	砂粒・長石・雲母	〃	〃	沈線・渦文
64	TON-1-1156	〃	〃	8	〃	砂粒・雲母・長石・石英粒	〃	ヘラナデ	沈線
65	TON-1-2173	〃	〃	8	〃	砂粒・雲母・長石	〃	〃	沈線・渦文
66	TON-1-1128	〃	〃	8	暗黄灰色	〃	〃	〃	沈線・渦文
67	TON-1- 835	〃	〃	8	暗黄褐色	〃	〃	〃	入組文
68	TON-1-1515	〃	〃	8	暗赤褐色	〃	〃	ヘラナデ・ケンマ	同心円文
69	TON-1-1556	〃	〃	8	黒 褐 色	〃	〃	ヘラナデ	沈線・渦文・縄文
70	TON-1- 840	〃	〃	8	黄 褐 色	〃	〃	〃	沈線
71	TON-1-2302	〃	〃	8	〃	砂粒・石英粒・雲母・長石	ヘラナデ	柾目・ケンマ	〃
72	TON-1- 46	〃	〃	9	〃	〃	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ	〃
73	TON-1- 723	〃	〃	8	〃	砂粒・石英粒・雲母	ヘラナデ	〃	沈線間擬縄文
74	TON-1-1632	〃	〃	8	灰 褐 色	砂粒・石英粒・雲母・長石	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ・ケンマ	〃
75	TON-1-1029	〃	深鉢口縁	8	暗 褐 色	〃	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ・ケンマ	短斜線文・精製
76	TON-1- 210	〃	〃	9	〃	〃		ヘラナデ	橋状把手
77	TON-1- 108	〃	〃	9	〃	〃	ヘラナデ	ヘマナデ・ケンマ	短斜線文
78	TON-1- 744	〃	〃	8	〃	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	〃
79	TON-1- 708	〃	鉢 口 縁	7	暗灰黒色	〃	〃	〃	波状口縁
80	TON-1- 821	〃	〃	8	暗黄褐色	〃	〃	〃	口縁肥厚
81	TON-1- 512	〃	〃	9	〃	〃	〃	〃	口唇に刻目
82	TON-1- 593	〃	〃	9	暗 褐 色	〃	〃	〃	口縁に浅い擬縄文
83	TON-1-2050	〃	〃	6	明赤褐色	〃	〃	〃	
84	TON-1- 591	〃	〃		暗 褐 色	〃			ローリング
85	TON-1-1404	〃	深鉢口縁	10	暗黄灰色	砂粒・長石・雲母		ヘラナデ	W字貼付文・一部欠損
86	TON-1-1768	〃	鉢 口 縁	8	明黄褐色	砂粒・石英粒・雲母	ヘラナデ	ヘラナデ	口縁三角形形・貝殻文
87	TON-1- 652	〃	〃	8	暗 褐 色	砂粒・石英粒・雲母・長石	〃	〃	〃　・斜線文
88	TON-1- 646	〃	〃	11	暗茶褐色	〃	〃	〃	口縁肥厚
89	TON-1- 845	〃	〃	6	〃	〃	〃	〃	〃　・短斜線文
90	TON-1- 268	〃	〃	10	〃	〃	〃	〃	〃　貝殻文
91	TON-1-1161	〃	〃	8	〃	〃	〃	〃	〃　〃　〃
92	TON-1-1290	〃	〃	8	〃	〃	〃	〃	波状沈線文
93	TON-1-2075	〃	深鉢口縁	9	〃	〃	ヘラナデ・ケンマ	〃	貝殻文
94	TON-1- 226	〃	〃	8	〃	〃	ヘラナデ	板目・ヘラナデ	口唇に沈線
95	TON-1-2235	〃	鉢 口 縁	7	暗赤褐色	砂 粒 ・ 雲 母	柾目・ヘラナデ	ヘラナデ	他片に比して軽量
96	TON-1-$\frac{101}{503}$	〃	〃	9	明赤褐色	〃	柾　　目	柾目	口唇に沈線
97	TON-1- 969	〃	〃	9	黒 褐 色	砂粒・石英粒・雲母・長石	柾目・ヘラナデ	ヘラナデ	スス付着
98	TON-1- 457	〃	〃	14	〃	〃	ヘラナデ	ヘラナデ(巾広)	
99	TON-1- 117	〃	〃	12	〃	〃	〃	〃	

Tab. 4　土器観察表

図番号	遺物番号	出土区	部位	厚(㎜)	色調	胎土	調整		備考
							外	内	
100	TON-1-1650	TPI	鉢口縁	9	暗赤褐色	砂粒・雲母・長石	ヘラナデ・ケンマ	柾目・ヘラナデ	
101	TON-1-562	〃	〃	9	〃	〃	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ	
102	TON-1-373	〃	〃	9	赤褐色	砂粒・石英粒・雲母	〃	〃	補修孔
103	TON-1-1583	〃	〃	9	暗黄灰色	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	
104	TON-1-213	〃	深鉢胴部	9	灰褐色	〃	柾目	板目(?)	
105	TON-1-1557	〃	〃	9	〃	〃	柾目・ヘラナデ	ヘラナデ	
106	TON-1-2007	〃	鉢胴部	10	暗赤褐色	〃	柾目	柾目・ヘラナデ	
107	TON-1-2268	〃	〃	8	〃	砂粒・雲母	〃	ヘラナデ	
108	TON-1-1986	〃	〃	9	灰褐色	砂粒・雲母・石英粒	柾目	柾目	
109	TON-1-48	〃	〃	8	黒褐色	砂粒・石英粒(少)雲母	柾目・ケンマ	ヘラナデ	
110	TON-1-372	〃	〃	9	赤褐色	〃	柾目・ケンマ	柾目・ケンマ	表面に丹
111	TON-1-2244	〃	〃	8	暗赤褐色	砂粒・雲母	条痕(タテ)	ヘラナデ(ヨコ)	
112	TON-1-44	〃	〃	8	〃	〃	ヘラナデ	ヘラナデ・ケンマ	
113	TON-1-1405	〃	〃	7	黒褐色	〃	柾目	柾目	
114	TON-1-1716	〃	〃	8	〃	砂粒・石英粒・雲母	貝殻条痕	ヘラナデ	
115	TON-1-2204	〃	鉢口辺部	8	暗赤褐色	砂粒・石英粒	ヘラナデ	ヘラナデ	幾何文
116	TON-1-1904	〃	鉢口縁	10	〃	〃	〃	〃	
117	TON-1-1268	〃	〃	10	〃	〃	〃	〃	上と同一個体か
118	TON-1-2012	〃	鉢胴部	8	暗褐色	砂粒・石英粒・雲母	〃	〃	沈線文
119	TON-1-2236	〃	鉢底部	12(底)	赤褐色	滑石	指頭圧・ヘラナデ		
120	TON-1-2156	〃	〃	13(〃)	褐灰色	〃	〃		スス附着
121	TON-1-2282	〃	〃	10(〃)	〃	〃	指頭圧・ケンマ	柾目・ヘラナデ	
122	TON-1-695	〃	〃	16(〃)	〃	〃	〃，〃	ヘラナデ	
123	TON-1-1754	〃	〃	9(〃)	褐灰色	〃	ヘラナデ	〃	スス附着
124	TON-1-221	〃	〃	17(〃)	明赤褐色	砂粒・長石・雲母			
125	TON-1-672	〃	〃	15(〃)	暗赤褐色	砂粒・雲母			多孔質でもらい
126	TON-1-673	〃	〃	15(〃)	赤褐色	〃			
127	TON-1-2108	〃	〃	13(〃)	淡橙色	砂粒・雲母・石英粒	ヘラナデ	ケンマ	
128	TON-1-219	〃	〃	14(〃)	黄褐色	〃			ざらざらしている
129	TON-1-425	〃	〃	12(〃)	赤褐色	〃	ヘラナデ・ケンマ	ケンマ	底にスス
130	TON-1-1275	〃	〃	9(〃)	淡橙色	雲母	柾目・ヘラナデ		
131	TON-1-368	〃	台状	10	〃	砂粒・雲母	ヘラナデ	ヘラナデ	底部欠損
132	TON-1-242	〃	鉢底部	11(底)	赤褐色	砂粒・雲母・長石	ヘラナデ・ケンマ	〃	
133	TON-1-2019	〃	〃	10(〃)	暗赤褐色	砂粒・石英粒・雲母・長石	ヘラナデ	〃	
134	TON-1-98	〃	台状	12	赤褐色	〃	〃	〃	底部欠損
135	TON-1-808	〃	〃	8	淡黄灰色	砂粒・雲母・長石	ヘラナデ・ケンマ	指頭痕・ヘラナデ	渦文・擬縄文
136	TON-1-1146	〃	〃	11	赤褐色	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	渦文・磨消縄文
137	TON-1-584/302	〃	鉢底辺	10	淡橙色	〃	ヘラナデ・ケンマ	柾目・ヘラナデ	スス附着

3　福岡県教育委員会 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ」 1977
4　田中良之 「中期・阿高式系土器の研究」 古文化談叢　第6集所収　1979
5　前川威洋 「九州縄文土器の諸問題」 九州縄文文化の研究　1979
6　福江市教育委員会 「白浜貝塚」 福江市文化財調査報告書　第2集　1980
7　本田道輝 「市来式土器」 縄文文化の研究4　縄文土器Ⅱ所収　雄山閣　1981
8　田中良之 「磨消縄文土器伝播のプロセス」 古文化論集所収　1982
9　松永幸男 「垂水遺跡出土の鐘ケ崎式系土器について」 古文化談叢　第11集所収　1983

10　五和町教育委員会「沖ノ原遺跡」1984
11　諫早市教育委員会「有喜貝塚」諫早市文化財調査報告書　第5集　1984
12　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室「下吉田遺跡」北九州市埋蔵文化財調査報告　第39集　1985

4.　第一次調査出土石器

(Fig. 27～34,　ＰＬ13～18)

一次調査出土の石器は，土器と同様ＴＰ１出土のものを主体に取り上げて報告するものとする。従って旧石器時代の遺物（Fig. 27）を除くものは，ＴＰ１出土の土器の有り方から，鐘ケ崎式土器に伴うものとして考えてよいであろう。

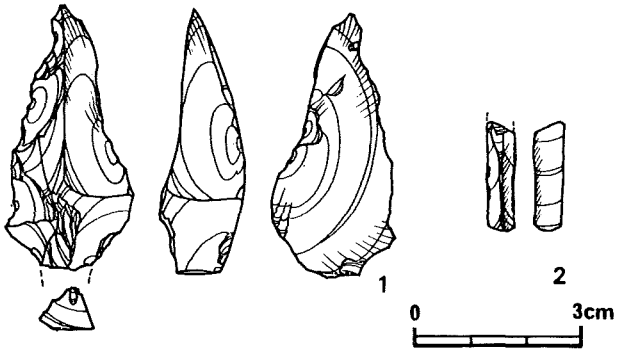


Fig. 27　一次調査出土土器実測図（2/3）

(Fig. 28～31）は，剥片石器・石核等を扱った。

石鏃は総数32点出土したが，実測図として27点を掲載した。9～30に示した剥片鏃は，出土総数22点と3～8のような通常の加工を施した石鏃総数10点を上回り，縄文後期の他の遺跡の有り方と同様な傾向にあると見てよいであろう。剥片鏃9～30の中には，9～11のような周辺加工を施こすものや，24のように局部的に磨くなどの作業を行うものなどがある。剥片鏃という極めて完成された素材獲得段階を持ち得た時期においても，その範中から逸脱する，いわば亜剥片鏃とでも言えるようなものが存在することは，当遺跡二次調査出土の石鏃の中でも看取できる。剥片鏃と共に注視されているのが34～40に見られる，つまみ形石器である。資料はすべて打面部付近で折り取ったもので，折断面は長楕円形を呈する。その他に，33・34の石鋸，41～44の彫器，及びスポールなど，西北九州における縄文後期の石器組成の主なものは具備している。45～67は，主な縦長剥片，使用痕ある剥片などを取り上げたが，遺物のほとんどは不定形剥片で，縦長剥片の絶対数は少数である。一つには縦長剥片という素材自体は，石器として加工され，残存する剥片は，石核の調整の際に生じた不定形の剥片が多くなるという見方もできよう。石核については，この時期の遺跡においては同様なことであるが，良好な縦長剥片石核は認められない。69については両端に打面を設け，上下から剥片剥離を行っており，両設打面石核とし捉えられる資料である。

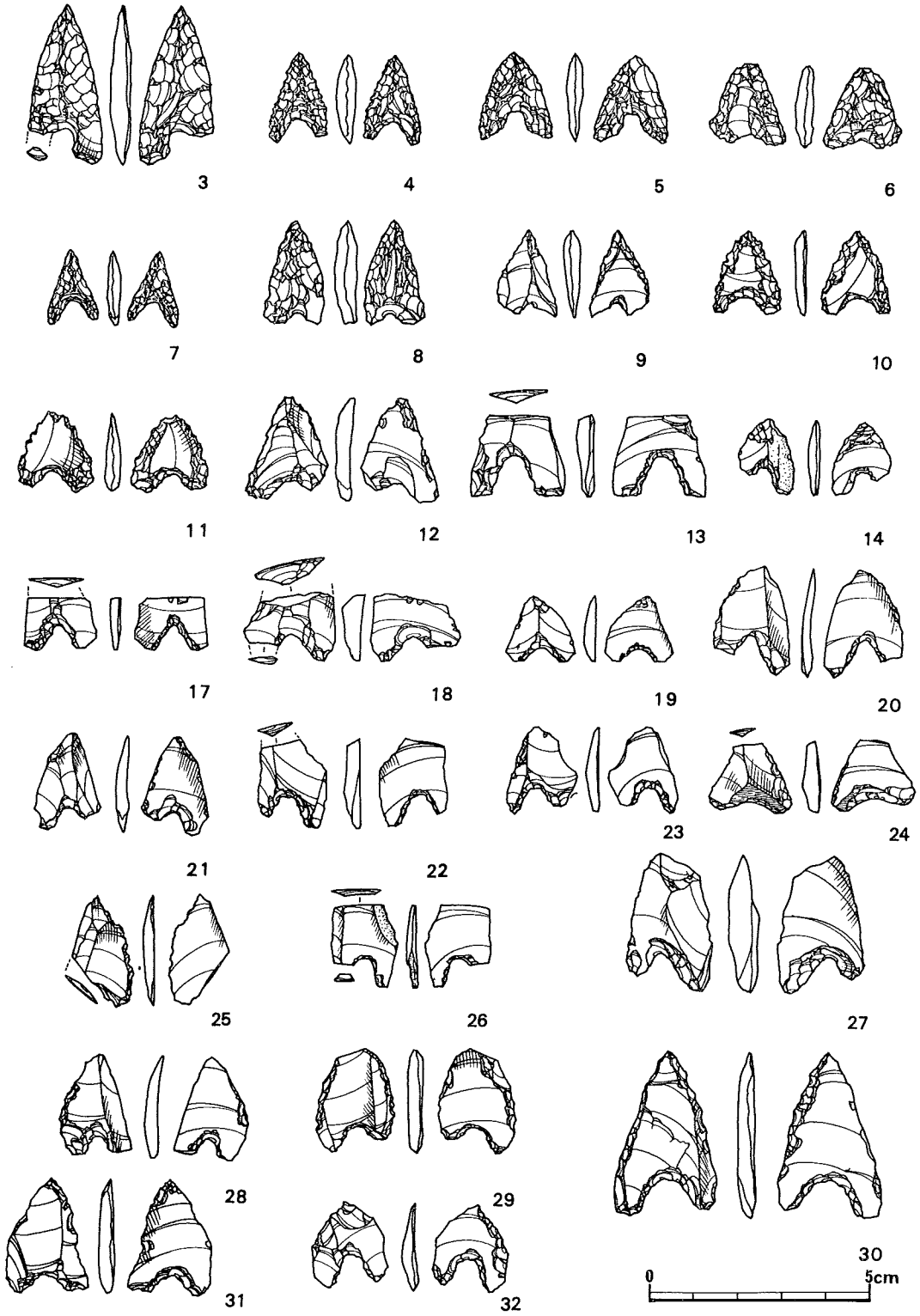


Fig. 28　一次調査出土土器実測図（2/3）

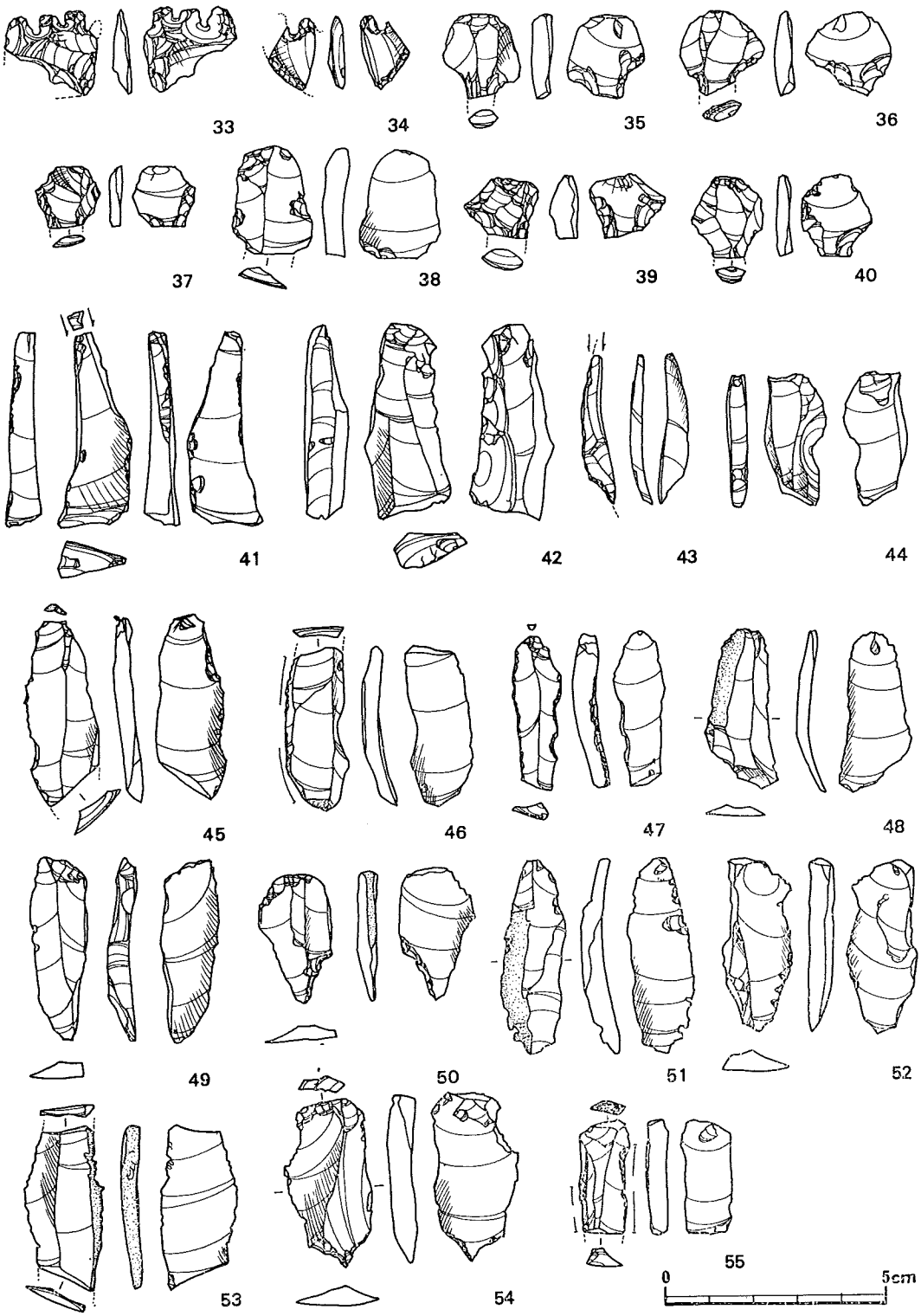


Fig. 29　一次調査出土土器実測図（2/3）

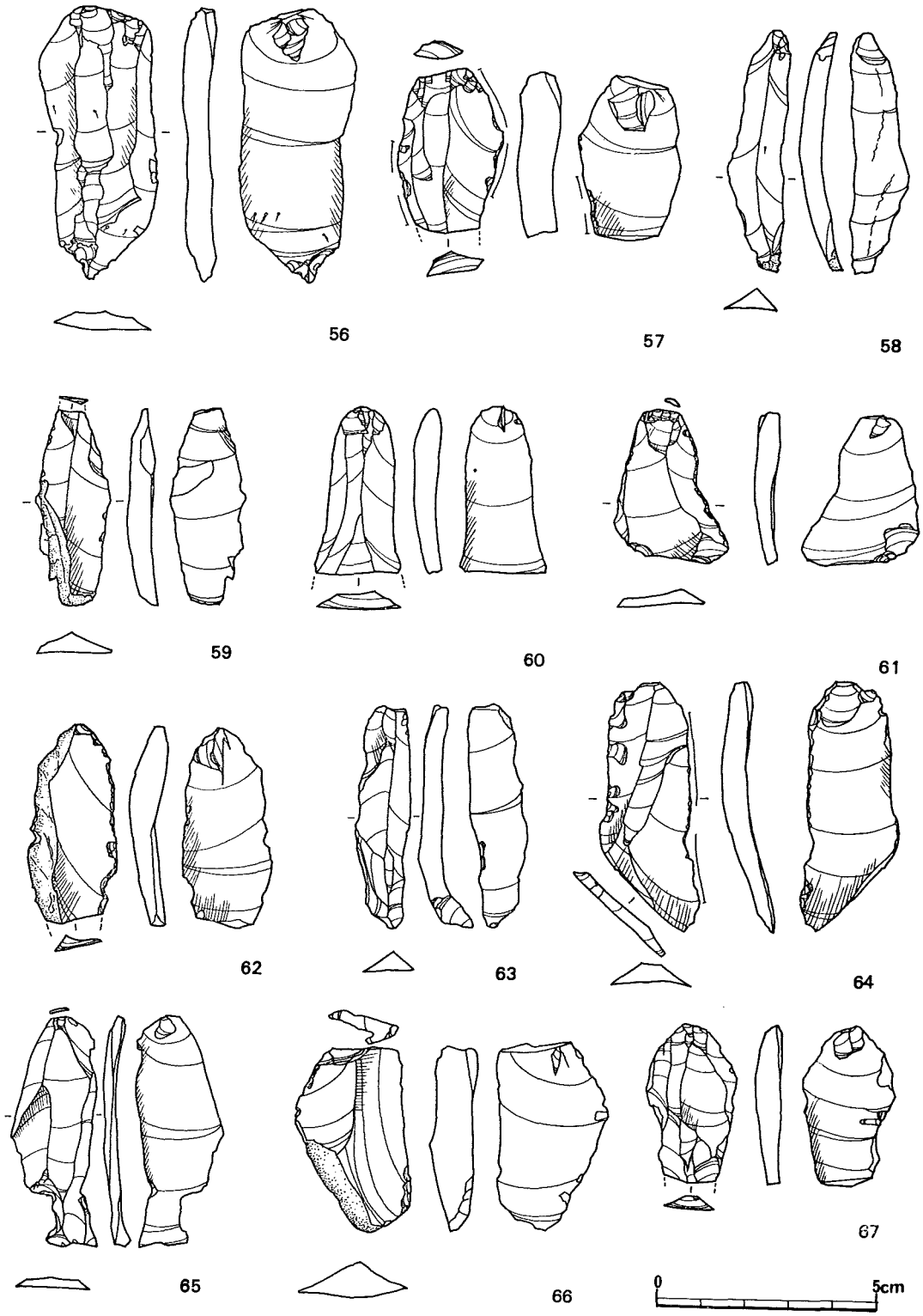


Fig. 30　一次調査出土土器実測図（2/3）

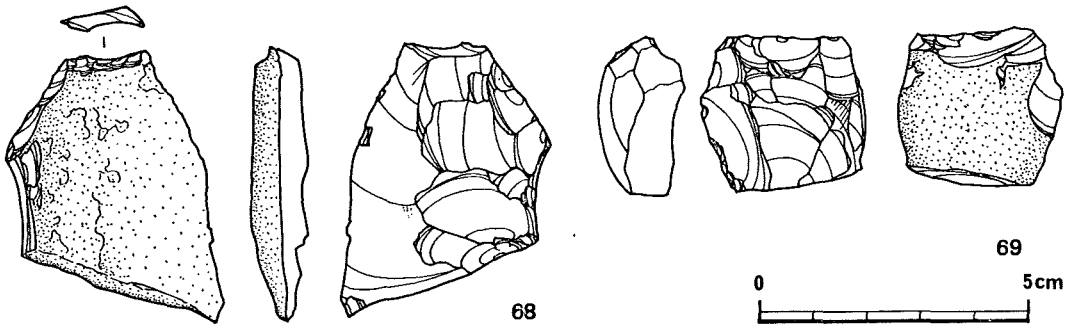


Fig. 31　一次調査出土石器実測図（2/3）

石斧（Fig. 32, P L17）

殿崎一次調査での石斧の出土は，10点の出土をみる。図示したのは5点であるが，磨製石斧1点，打製石斧4点である。蛇紋岩，玄武岩，凝灰岩があり，石質は豊富である。10cm内外の比較的小形のものがほとんどで，刃部も片刃状のものである。以下計測表を参照。

削器・掻器（Fig. 33—75, 76）

1は削器で表裏面共に側縁部より粗い2次加工が施こされている。2は掻器で部厚く，素材剥片の打面部はそのままで，他は表裏面共に2次加工を施している。共に安山岩製。

礫器（Fig. 33—77～80）

形態的にⅠ～Ⅳ型に分類される。礫に2次加工を施し，尖頭状の突出部分を作り出すものⅠ型。礫の一端に2次加工を施し，凹み部分を作り出すものⅡ型。円礫に2次加工を施したもので，Ⅰ・Ⅱ型程に形態が斉一性をもたないものⅢ型。以上でⅠ型は尖頭状礫器とⅡ型は双角状礫器と呼称されている。

Ⅰ型3点，Ⅲ型2点の計5点出土。

箆状石器（Fig. 33—81）

遺跡の中で特徴的な石器の一つである。形状的に刃部の両端が張り出し，逆台形状を呈す。2次加工は刃部および側縁部に表裏面より施し，鋭利な刃部を作り出している。

尖頭状石器（Fig. 33—82, 83）

7cm内外の小形で，石器の表裏面に縁辺より2次加工を施して先端部が尖るように作り出したもの。断面が菱形状を呈す。8は玄武岩，9は安山岩製で総数2点出土。

敲石（Fig. 34—84, 85）

拳大位の安山岩製で，器種の長径部分の両端に数次の打撃痕が残る。6点出土。

石錘（Fig. 34—86～89）

拳大位の安山岩，玄武岩の扁平な礫を利用し，石器の2次加工が器種の長径部分にあるものA，短径部分にあるものB，その他をCと加工部位から分類した。Aは5点，Bは3点，Cは2点と計10点が出土。特に12は器表裏面に紐を巻いた部分が磨滅して凹地状を呈す。

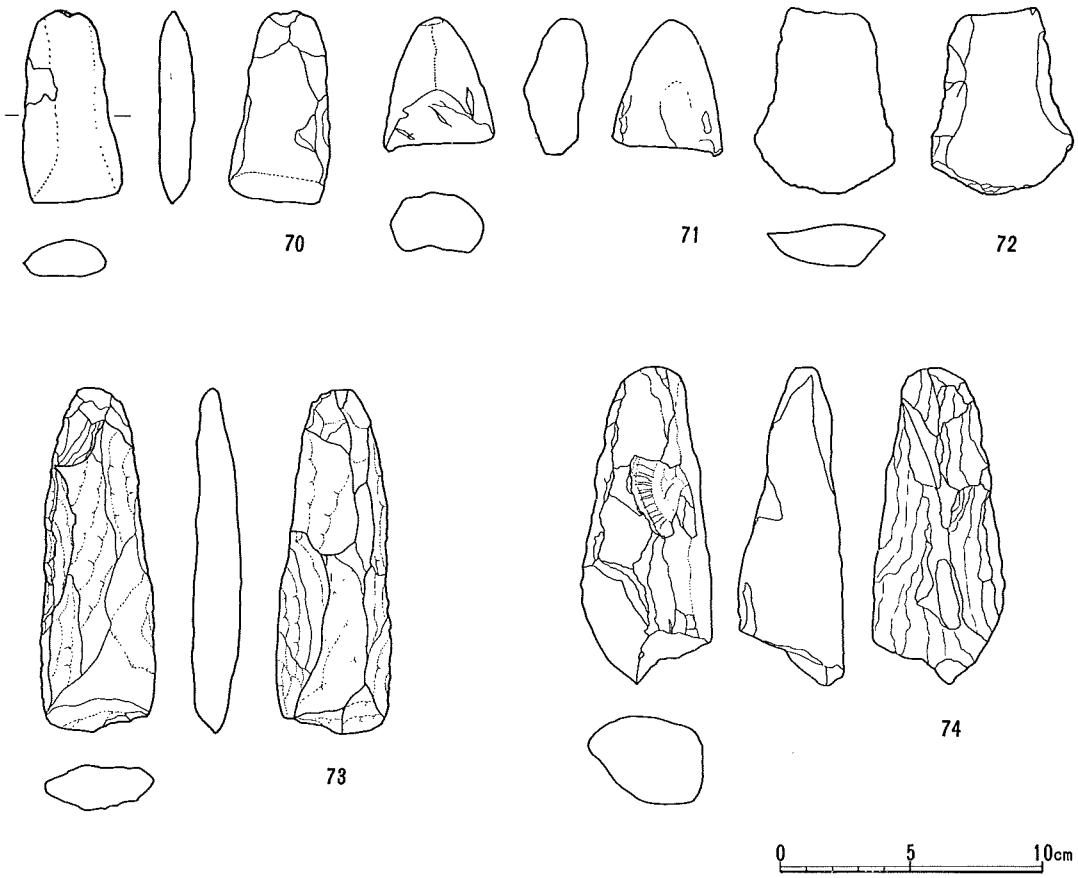


Fig. 32 一 次 調 査 出 土 石 器

Tab.5

番号	出土区 層位	法量 cm g 長さ 巾 厚 重量	石質	特徴	備考
70	1-250	7.4 3.2 1.4 255	蛇紋岩	短冊形、小形で扁平な礫を使用。全体的に研摩痕。直刃で比較的丁寧に仕上げられている。刃部に鍋が認められる。	摩製石斧
71	1-819	5.2 3.5 2.3 55	玄武岩	先端部のみ残存。	打製石斧
72	1-959	7.2 4.6 1.7 72	玄武岩	全周にわたって剝離を行い整形。使用により片面剝離蛤刃、刃部の一部を欠損。	打製石斧
73	1-243	13.3 4.1 1.8 138	凝灰岩	短冊形。全体的な形状は整えられており、刃部は両刃である。刃部の一部欠損。	打製石斧
74	1-128	11.9 4.3 3.4 290	玄武岩	断面は円形を呈する。自然面を残し、粗いつくりである。	打製石斧

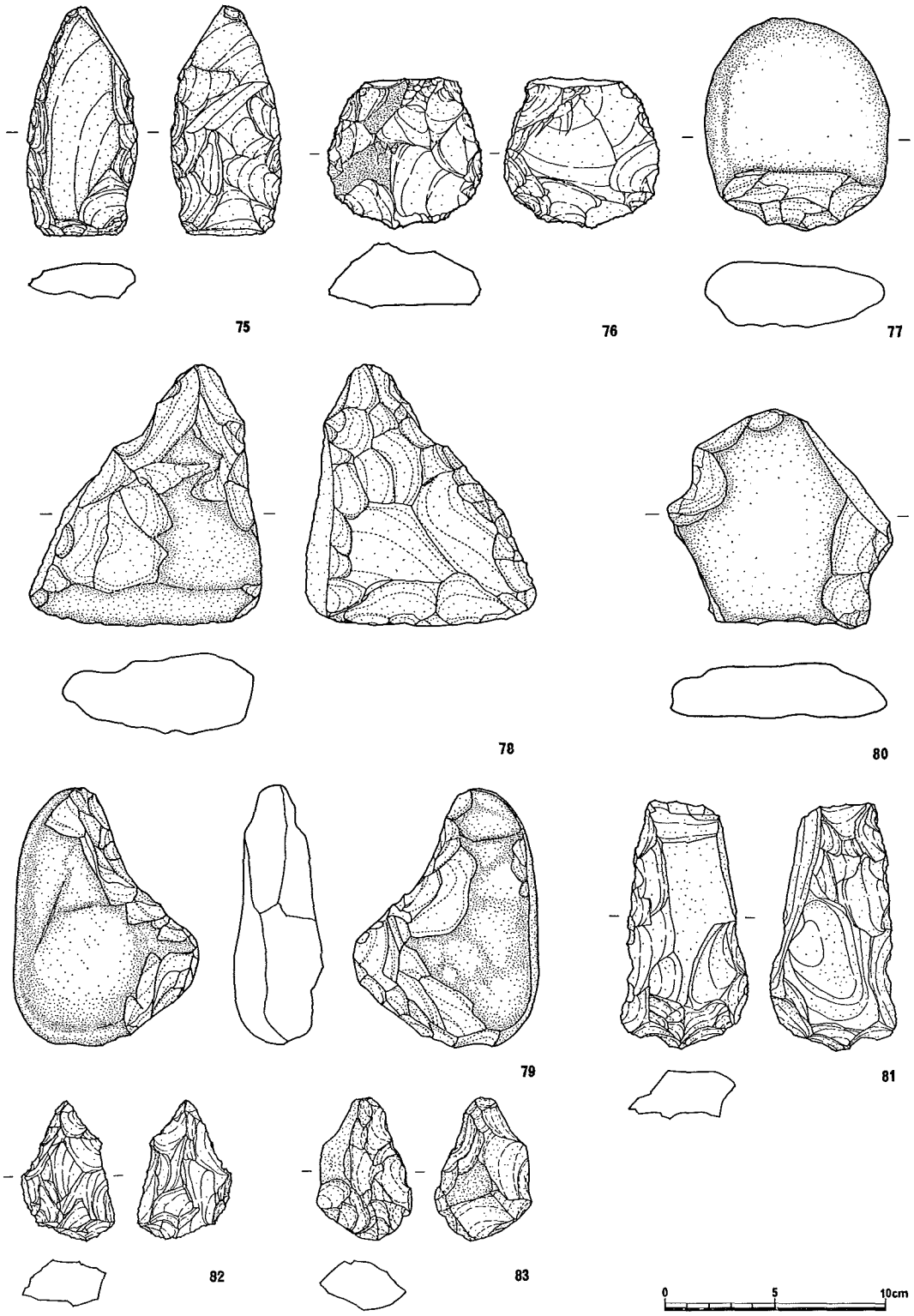


Fig. 33 一 次 調 査 出 土 石 器

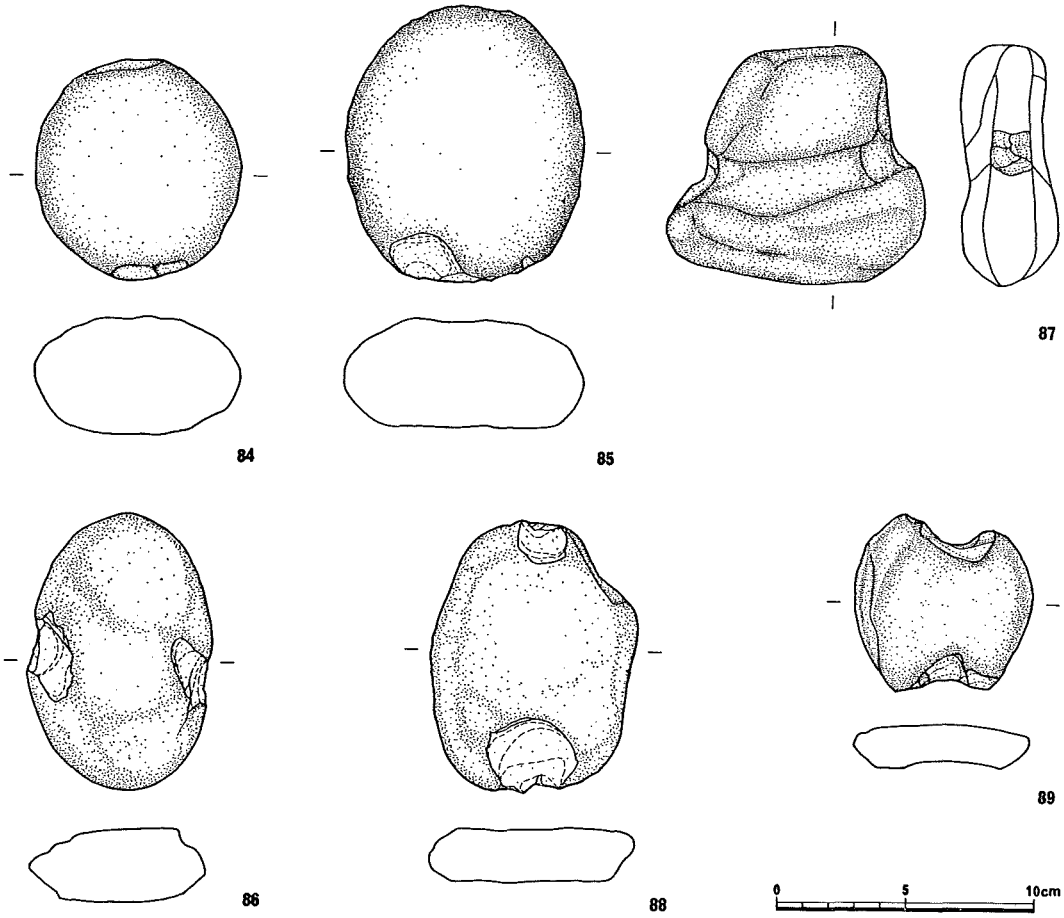
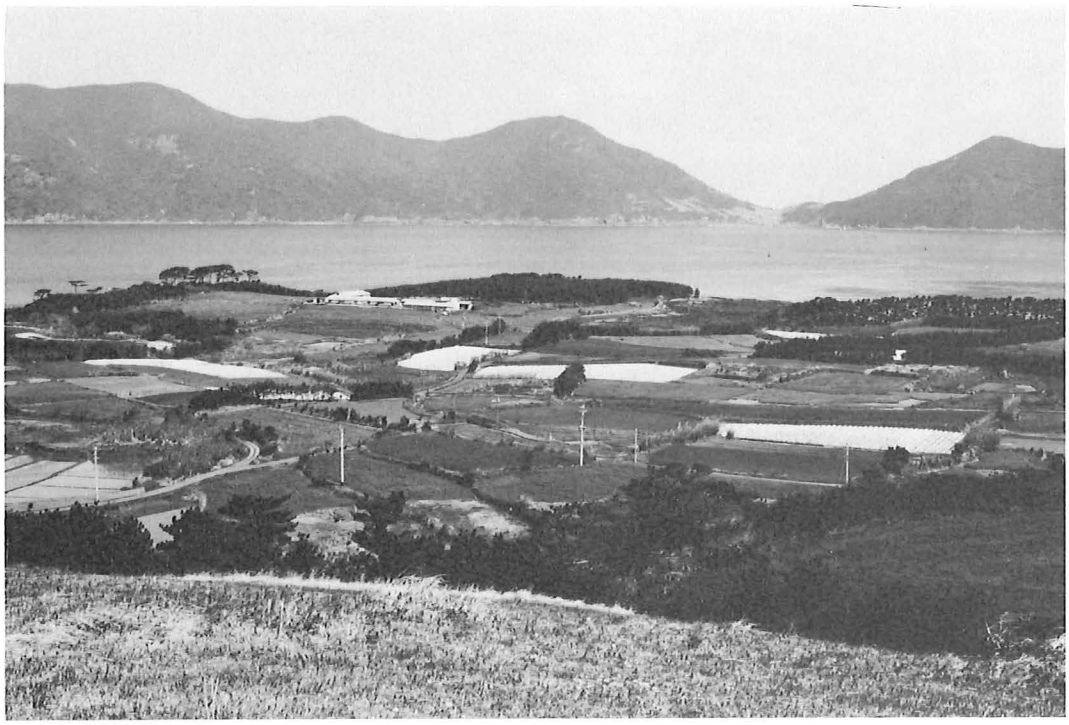
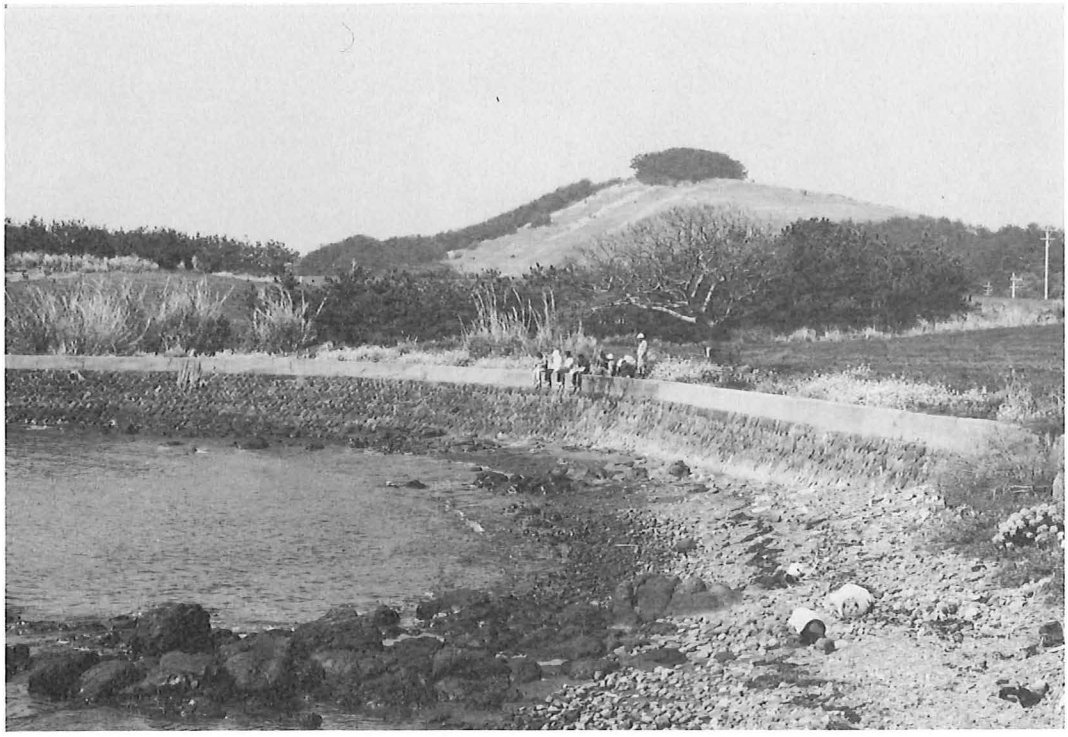


Fig. 34 一 次 調 査 出 土 石 器

Tab. 6

挿図番号	出土地図	出土層位	器種	石材	形態分類	計測値 (cm・g) 全長	最大巾	厚さ	重量	備考
33-75	TP-1	II	削器	安山岩		10.35	4.95	1.60	0.08	
76	TP-1	〃	掻器	〃		6.95	6.95	2.95	0.15	
77	TP-1	〃	礫器	玄武岩	III型	9.58	8.24	2.94	0.33	
78	TP-1	〃	〃	花崗岩	I型	11.55	10.40	3.55	0.49	
79	TP-1	〃	〃	玄武岩		11.71	8.20	3.83	0.34	
80	TP-1	〃	〃	〃	III型	10.20	9.34	2.60	0.43	
81	TP-1	〃	箆状石器	〃		11.25	5.65	2.20	0.18	
82	TP-1	〃	尖頭状石器	〃		6.35	4.25	2.10	0.05	
83	TP-1	〃	〃	安山岩		6.50	4.35	2.25	0.05	
34-84	TP-1	〃	敲石	〃		8.28	7.75	4.58	0.46	
85	TP-1	〃	〃	〃		10.67	9.19	4.22	0.65	
86	TP-1	〃	石錘	〃	C	9.22	9.66	3.80	0.42	
87	TP-1	〃	〃	〃	B	10.77	6.79	3.20	0.36	
88	TP-1	〃	〃	〃	A	10.54	7.80	2.59	0.30	
89	TP-1	〃	〃	玄武岩	〃	6.81	6.82	1.75	0.11	



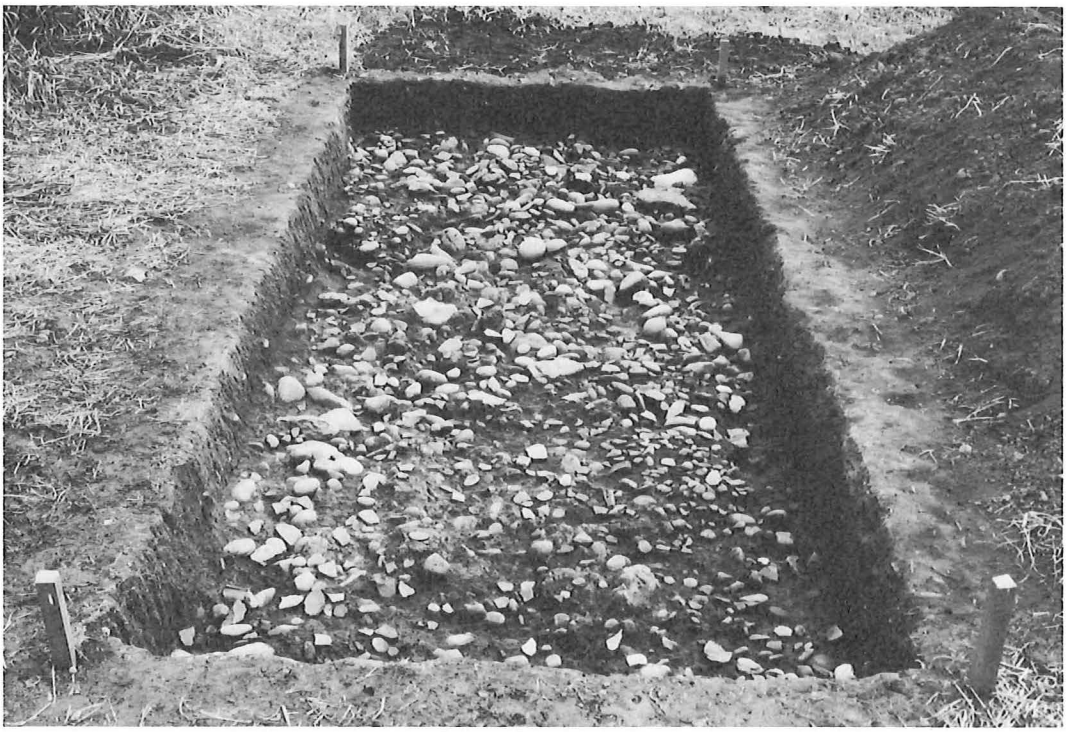


遺跡遠景(上)　遺跡近景(下)

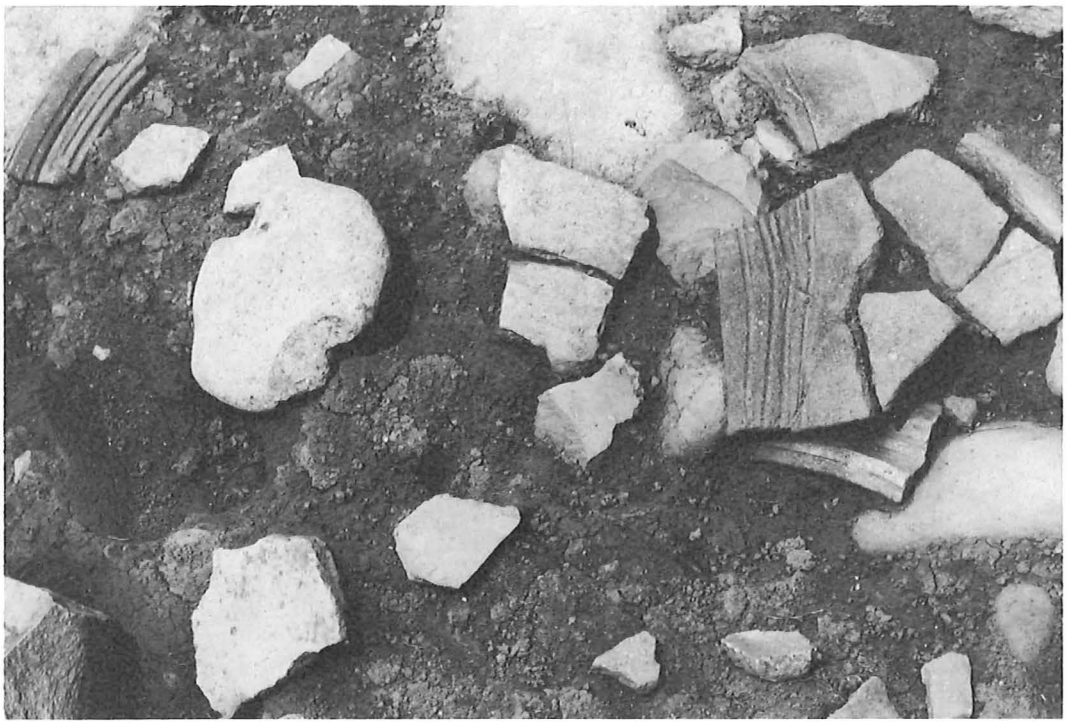
PL. 2

一次調査調査風景

一次調査遺物出土状況（TP－1）

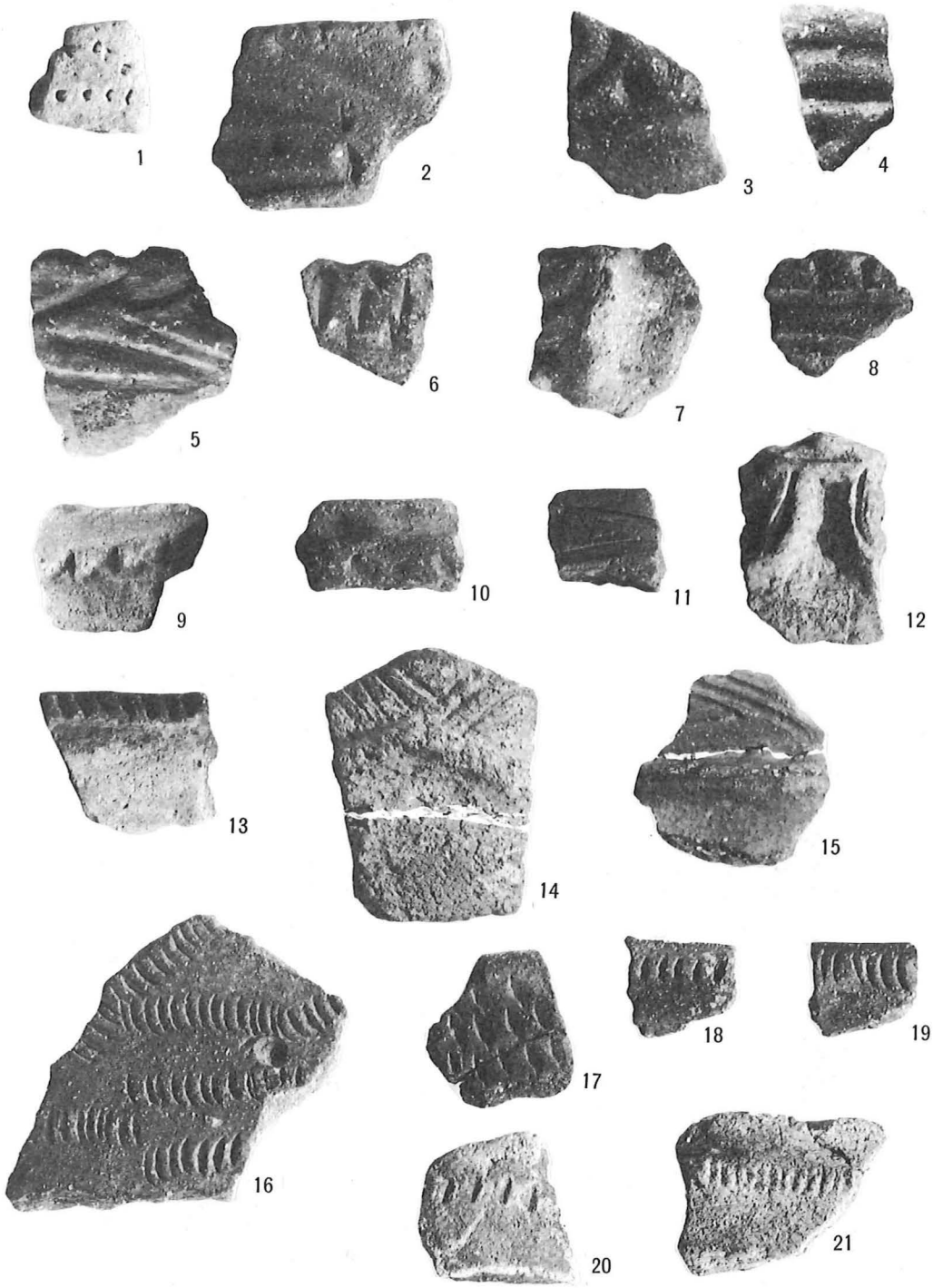


一次調査遺物出土状況（TP－1）

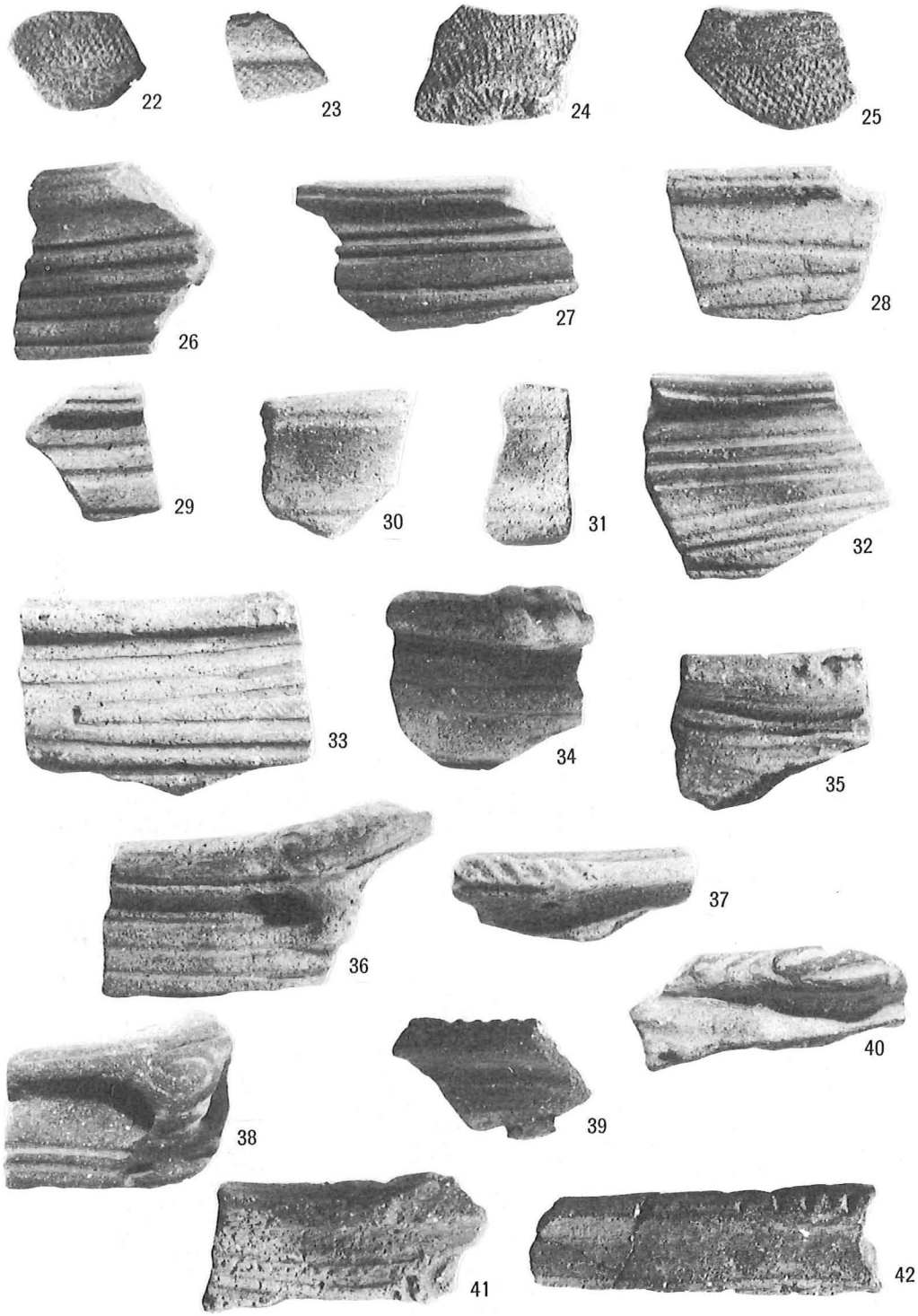


一次調査遺物出土状況

PL. 6

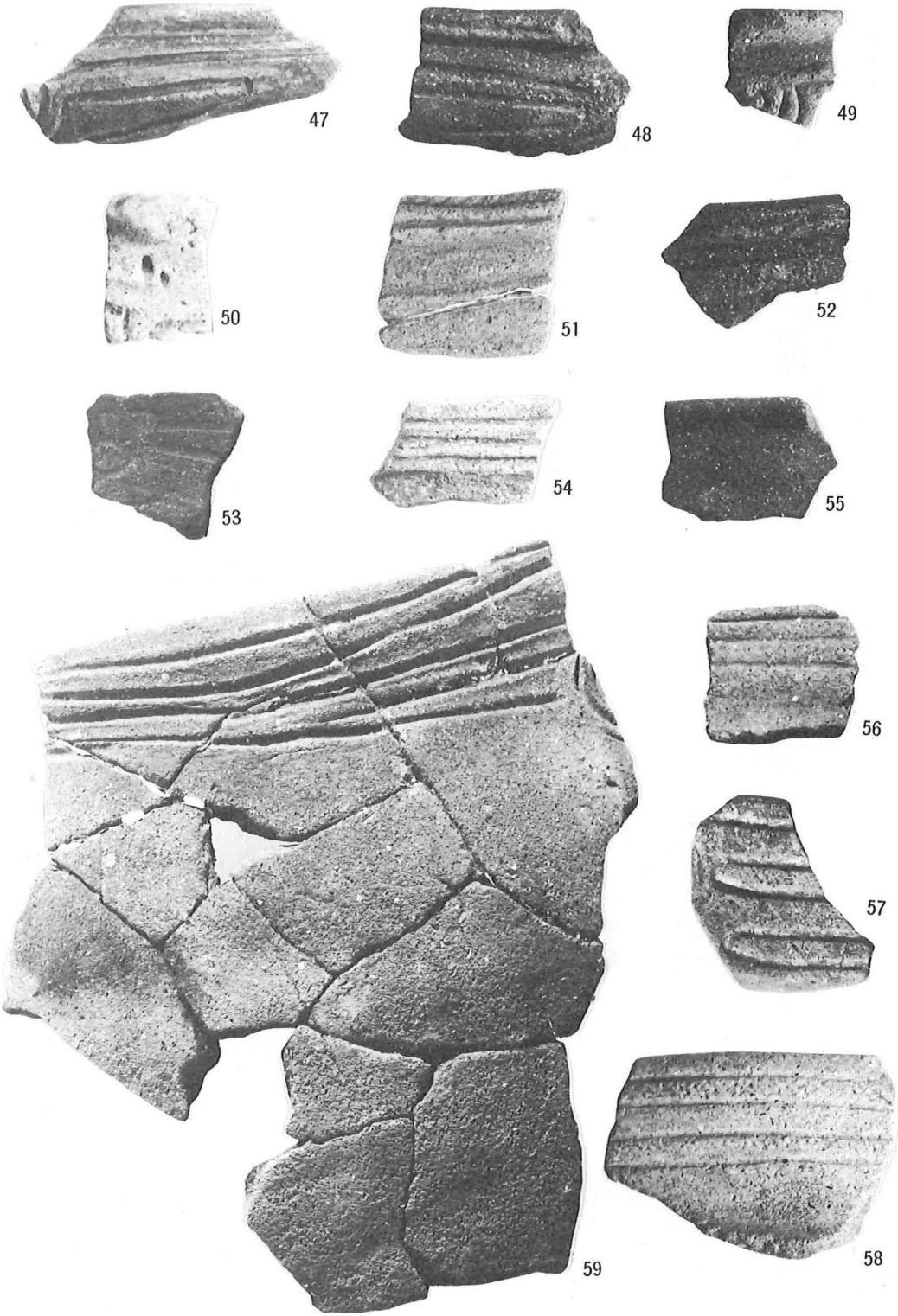


一次調査出土土器 ① (½)

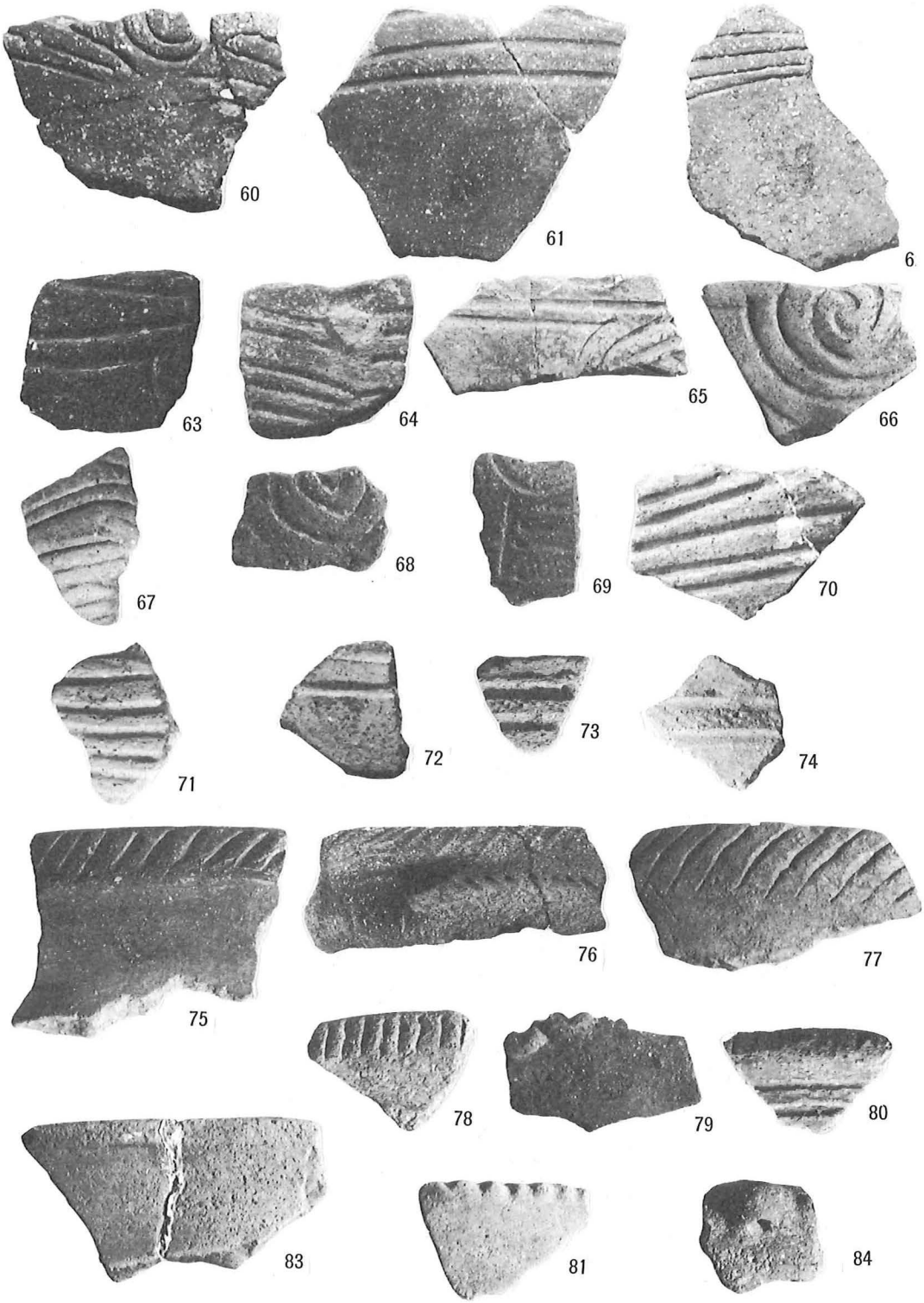


一次調査出土土器 ② (½)

PL. 8

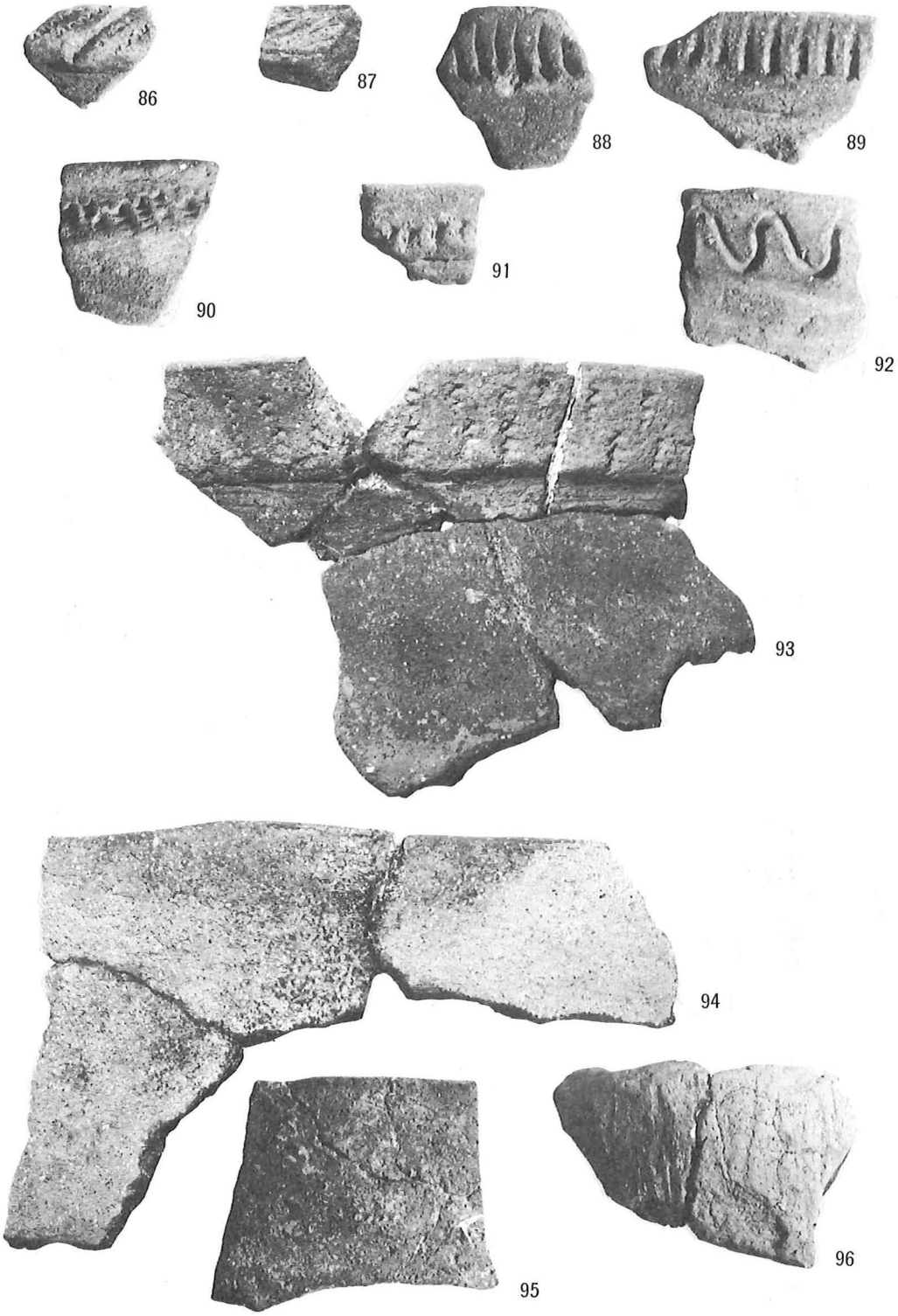


一次調査出土土器 ③ (½)

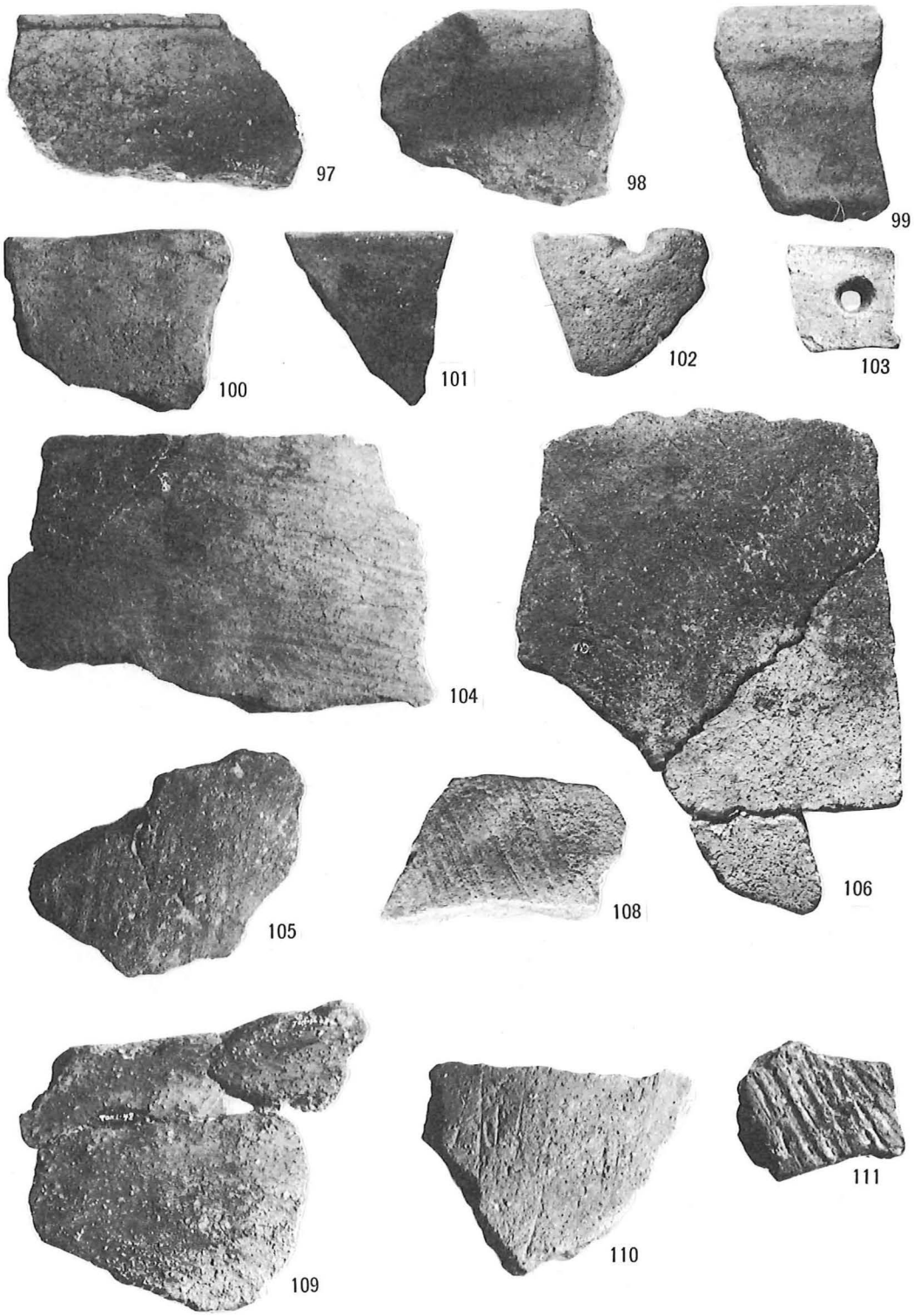


一次調査出土土器 ④ (½)

PL. 10

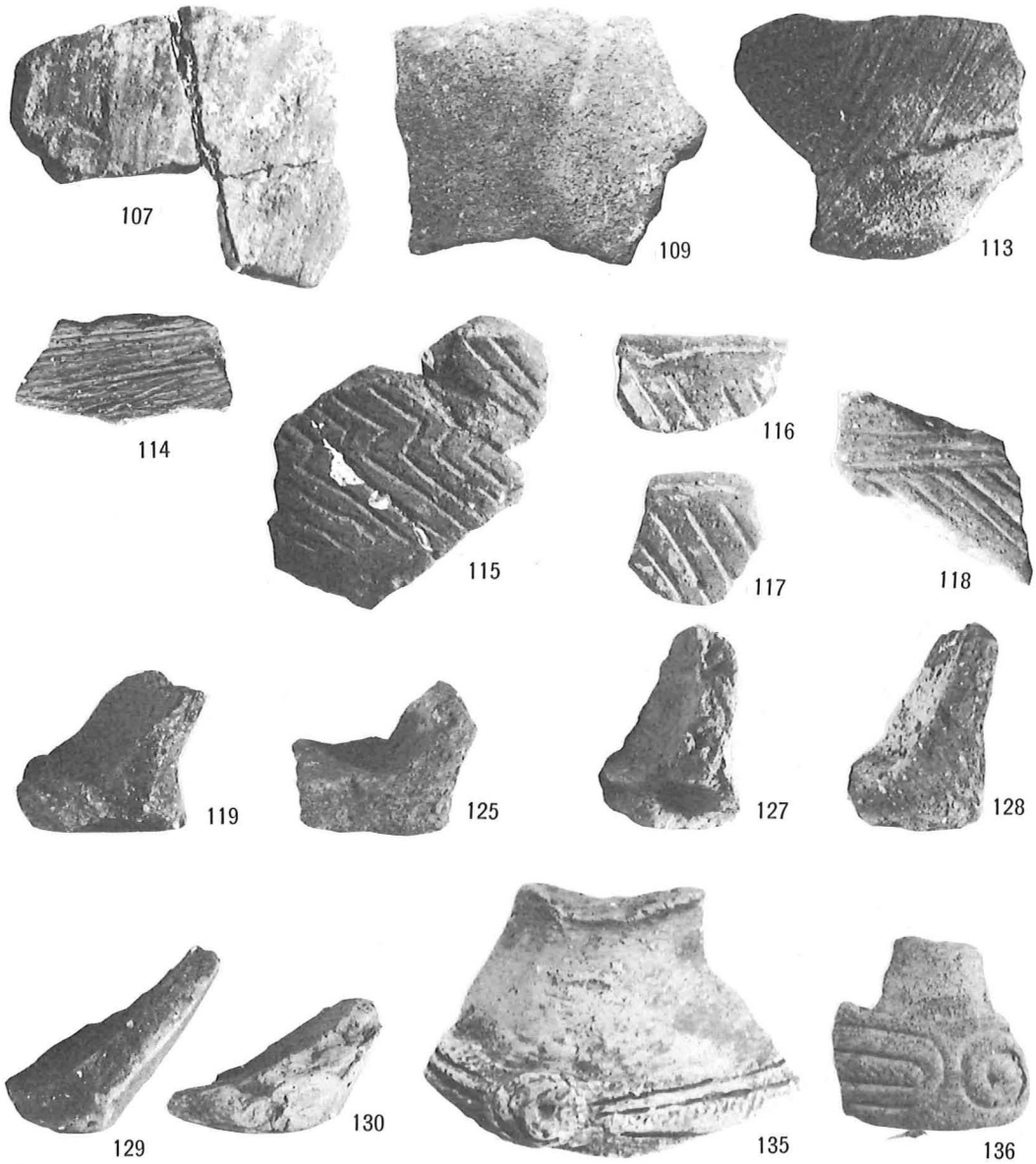


一次調査出土土器 ⑤ (½)

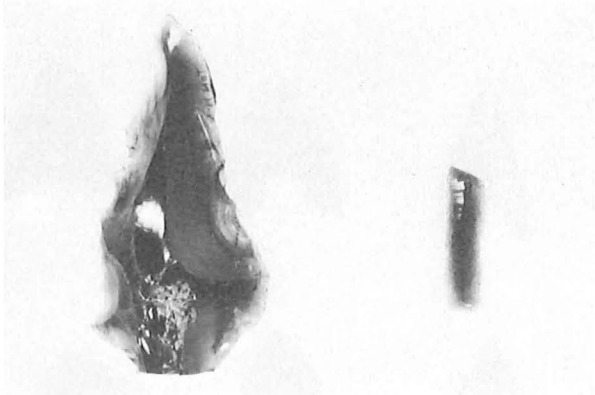


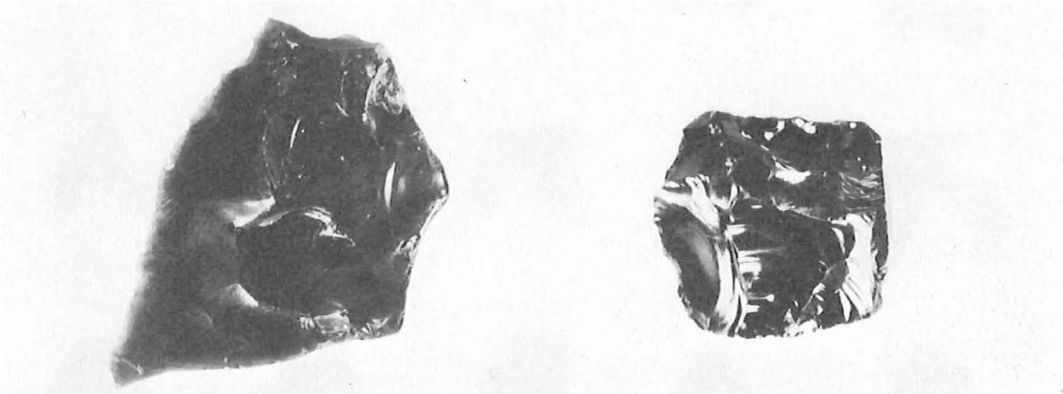
一次調査出土土器 ⑥ (½)

PL. 12



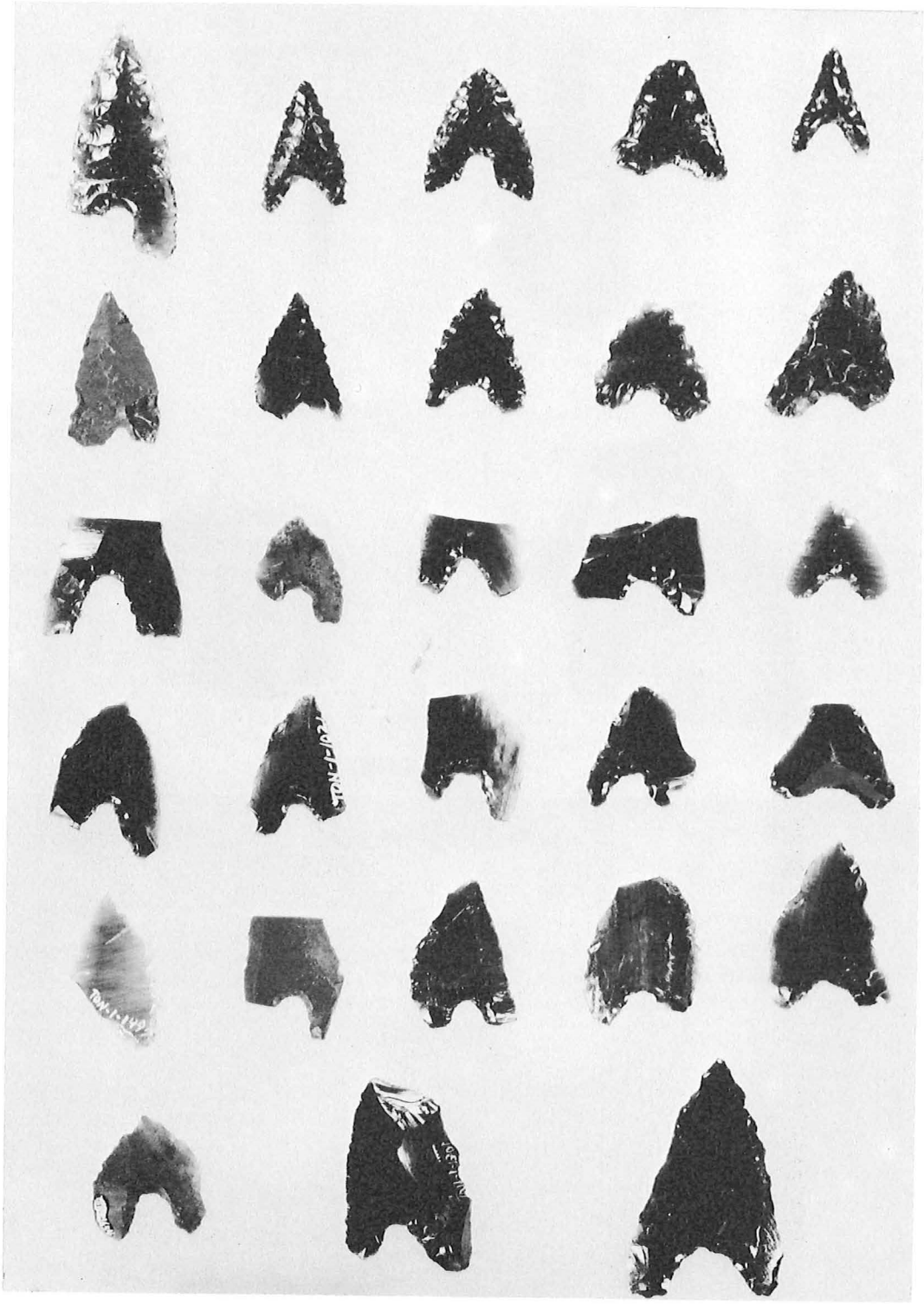
一次調査出土土器 ⑦ (½)





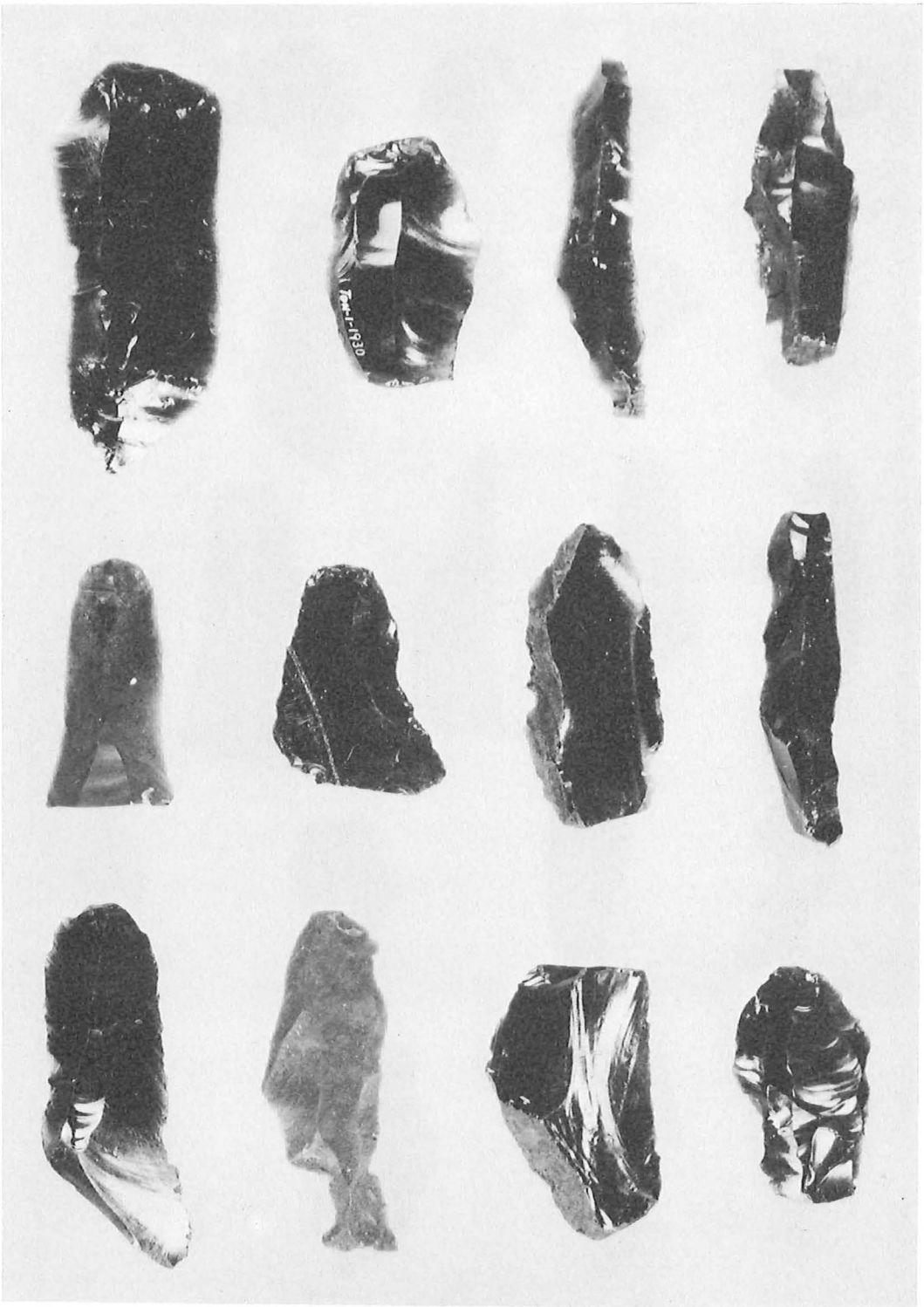
一次調査出土石器(1/1)

石器出土状況

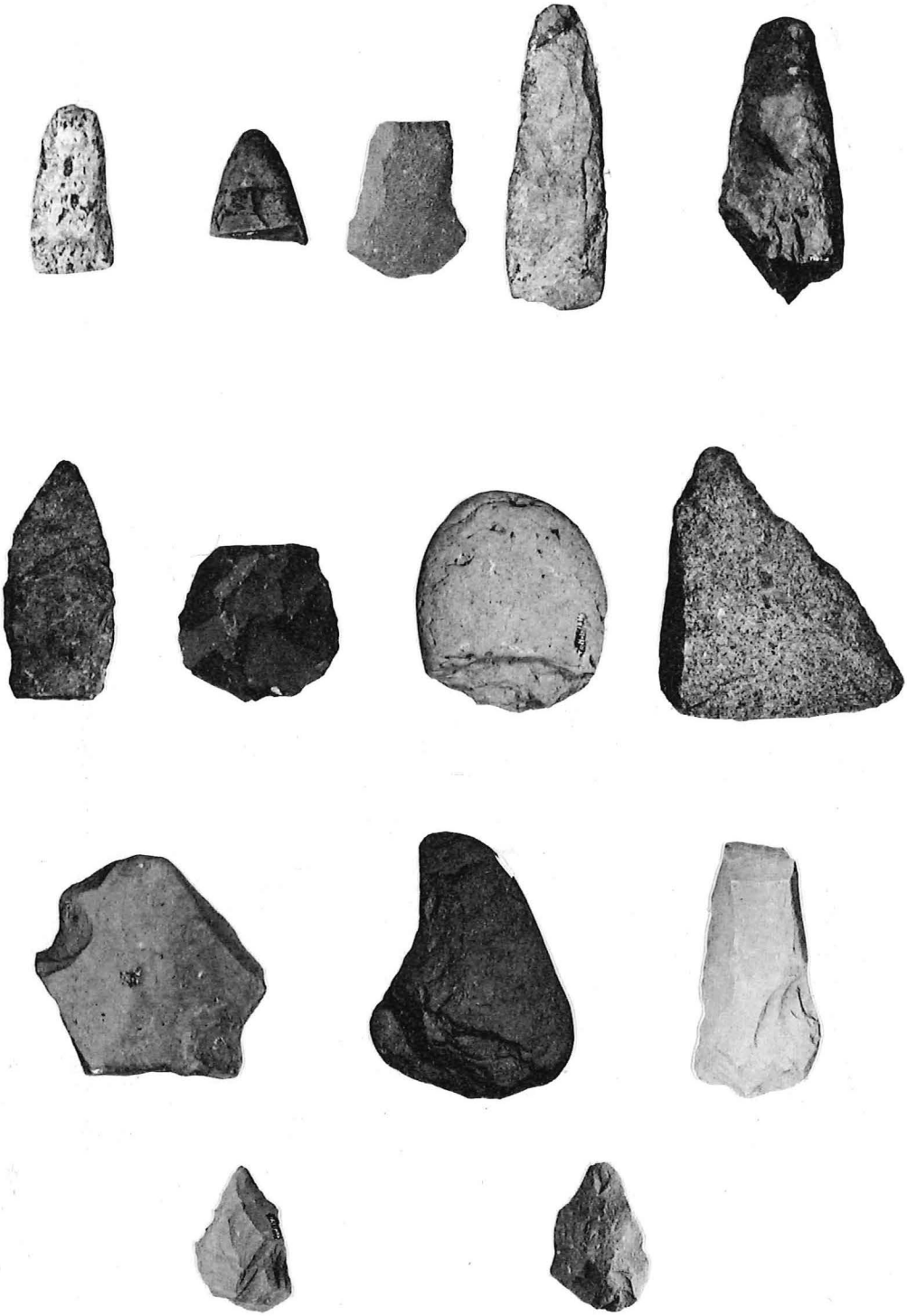


一次調査出土石器(1/1)

一次調査出土石器(1/1)



一次調査出土石器(1/1)



一次調査出土石器(1/3)

一次調査出土石器(1/3)

発掘調査状況

二　第二次調査

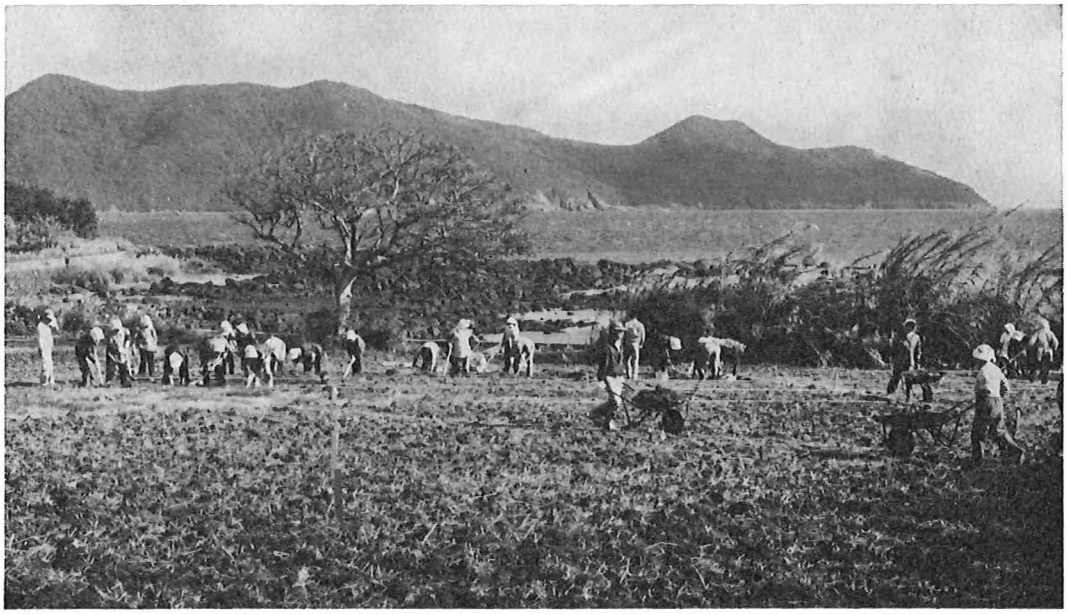
1. 土　層　(Fig. 35, Fig. 36)

第一次調査土層の項でも述べた如く，遺跡北東部と南東部では若干堆積状況が異なる。繰り返すと北東部では基本土層は3層であるのに対して南東部は4つの層に分類し得る。

地形的にはA区が一番高く順に南東に向って低くなりK，L，M区が一番低く，O，P区と又若干高くなる。(Fig. 6) 標高ではA—3区表土面で4m60に対してK—2区表土で3m60とその差は1mである。K—2，K—3区にみられる3・4層はこの低い部分に堆積したもので，特に一面に認められる礫層はこの区域が旧汀線ラインである事と考え合わせると，当時の礫帯と推定する事ができる。K—3区4層を掘り下げると10cm程で湧水ラインに当るのもその証左であろう。

2. 遺物出土状況　(Fig. 37)

二次調査における遺物出土状況は，東側に遺物が集中し，西側に希薄という状況にあり，特に東側A～Dの2区に遺物の核を見い出すことができる。土器・石器ともに固まった状況で2層上面から下面まで連綿と続き，土器間の上下関係も不明瞭なほどの集中を見せる。西側では散慢とした状況の中で，弥生土器・縄文後期土器などが出土した。特筆すべきことは，遺跡東側には4～5cmの円礫が，H区あたりから西側には角礫が海側に向かって出土したことである。



調査風景

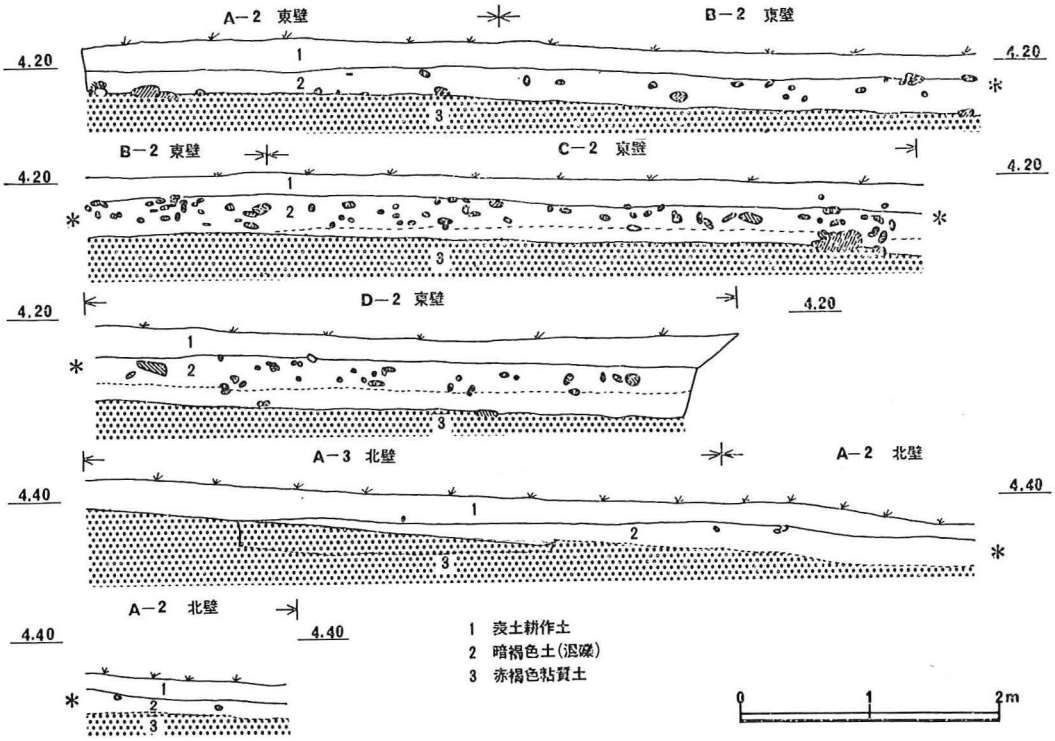


Fig. 35 A－2・B－2・C－2・D－2区東壁，A－2・3区北壁図（1/40）

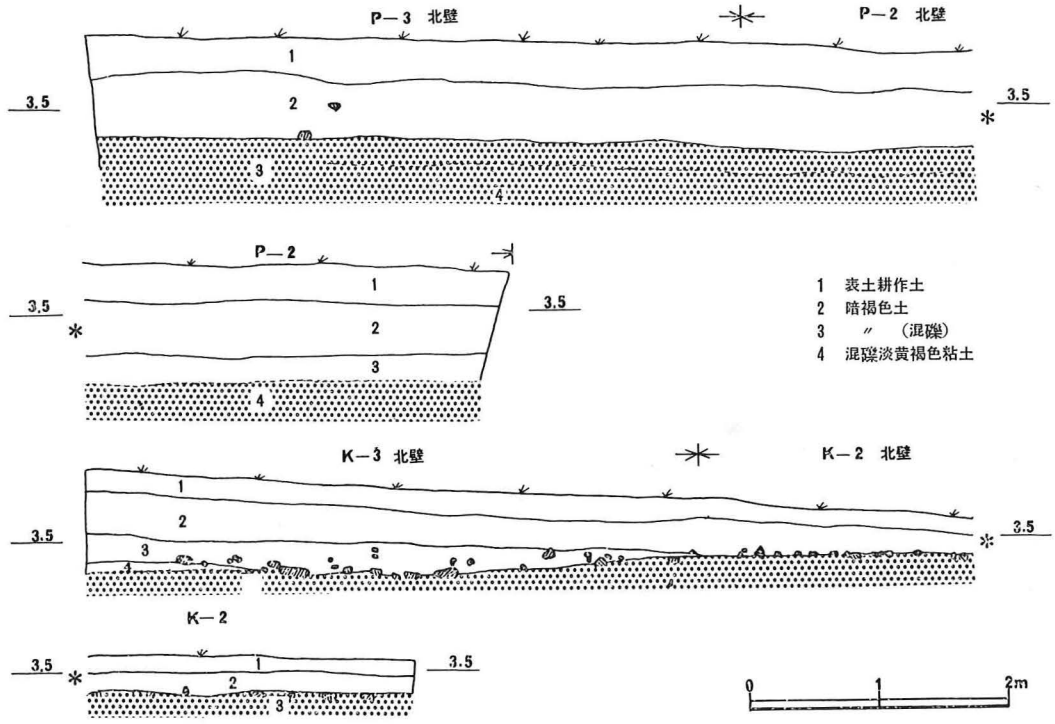


Fig. 36 P－2・3区，K－2・3区北壁図（1/40）

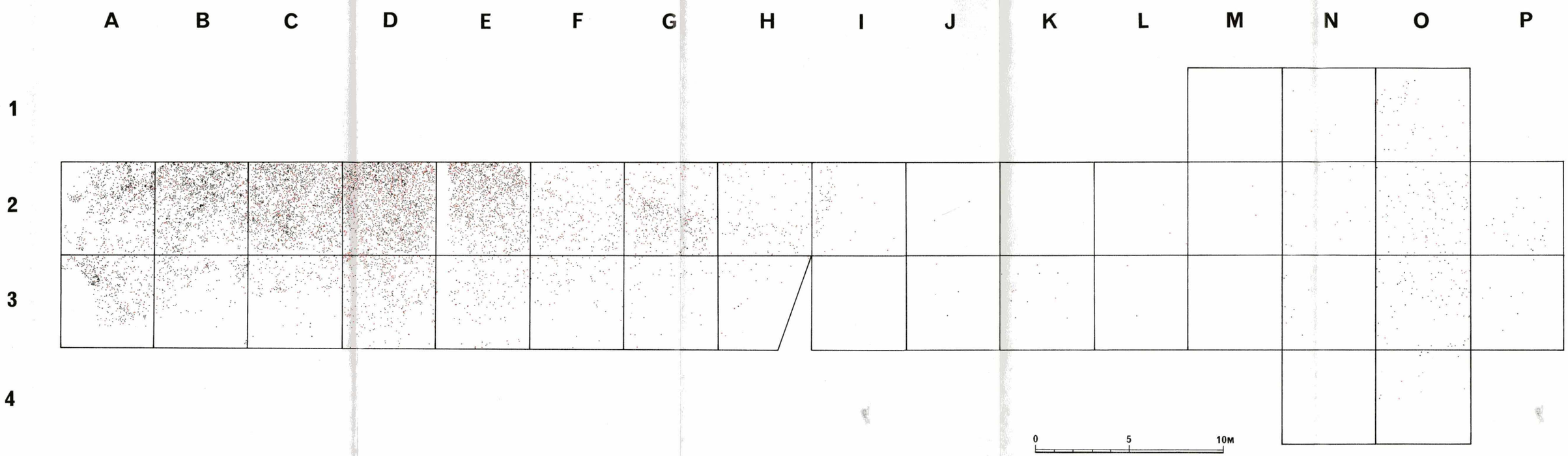


Fig. 37 第二次遺物出土状況図

3. 第二次調査出土土器 (Fig.38～58,PL.26～37)

所謂殿崎遺跡の中で空港建設にかかる部分の975㎡について緊急調査を実施した訳であるが，ドットマップによる遺物取上げ点数は土器片8,974点，石器及び石器片3,869点の計12,843点であった。その出土状況は前項で述べたとおりであるが，遺物を含む層は基本的に1層のみで，その厚さも30～40㎝程であり，層位別による識別が困難であった。従って，ここでも第1次調査出土土器の項と同様まず数種に大別し，しかる後一般的な土器型式の呼称による説明に入りたい。

只，今次の調査では一次調査でみられた貝殻文系土器や無文土器が殆ど見当らないか，又は少なく，この点先で分類したⅢ類貝殻文系土器とⅣ類無文土器を割愛することになる。

第二次調査出土土器は下記の7種に大別される。

Ⅰ類　阿高式系土器（a～h）

Ⅱ類　磨消縄文系土器

Ⅴ類　縄文晩期土器

Ⅵ類　底部

Ⅶ類　弥生土器

Ⅷ類　その他（土製円盤）

Ⅰ類　阿高式系土器

a　並木式土器（Fig. 38—1～2）

2点出土している。何れも胎土に多量の滑石を含む。1は鉢胴部である。4段にわたって押引きによる連続刺突を行う。2は鉢口辺であろう。凹線と円形刺突による文様構成であるが，かなりローリングを受けている。

b　阿高式土器（Fig. 38～40）

Fig. 38 は文様構成は基本的に凹点と凹線文の組み合わせであるが，文様が口縁部のみでなく胴部にまで及ぶ資料である。何れも胎土に多量の滑石を含む。3，4は口唇に深い凹点を施こし，口唇下に曲線による整然とした文様を配する。熊本県阿高貝塚[註1]出土資料に近い。5も文様的には上記2例に近いが線が比較的細い。7は口縁を把厚させて3段に凹点をつけ，その下に沈線を配して口縁帯を作出するが，文様は口縁帯にとどまらず胴部にまで至る。凹点，凹線共に深くて明瞭である。9も深鉢口縁である。口唇及び口唇下に2段に凹点を施こし，胴部には凹線文による規律ある文様を配する。内面調整はヘラナデによるが，若干ローリングを受けている為明瞭ではない。10も同様な文様構成をとるが，やはりローリングを受けている為不明瞭な部分がある。

Fig. 38～Fig. 40 の資料は主に凹点文が中心となる。田中氏[註2]（1979）の分類によると凹点文

の形態などから坂の下Ⅰ式（阿高Ⅲ式）から坂の下Ⅱ式（南福寺式）の資料を含むことになろうが，明瞭な区別をつけ難いのでここでは後述する南福寺式とは別に一応阿高式土器として包括しておきたい。胎土には27を除き何れも多量の滑石を含む。

Fig. 38 は凹点と沈線とによって口縁帯を作出する資料である。凹点の特徴についてみると，円形か楕円形で断面がU字形を為すもの（16～23，29，30）と楕円形で断面がV字形を為す資料（24～35）とに分けられる。この相違は時間的な先後関係として捉えられており，前者は阿高式に，後者はそれ以降に属する例が多いといわれる。[註3]

21，22は口縁がゆるく外反する，共に薄手。34は厚手の深鉢で口縁に細長い凹点を施こした

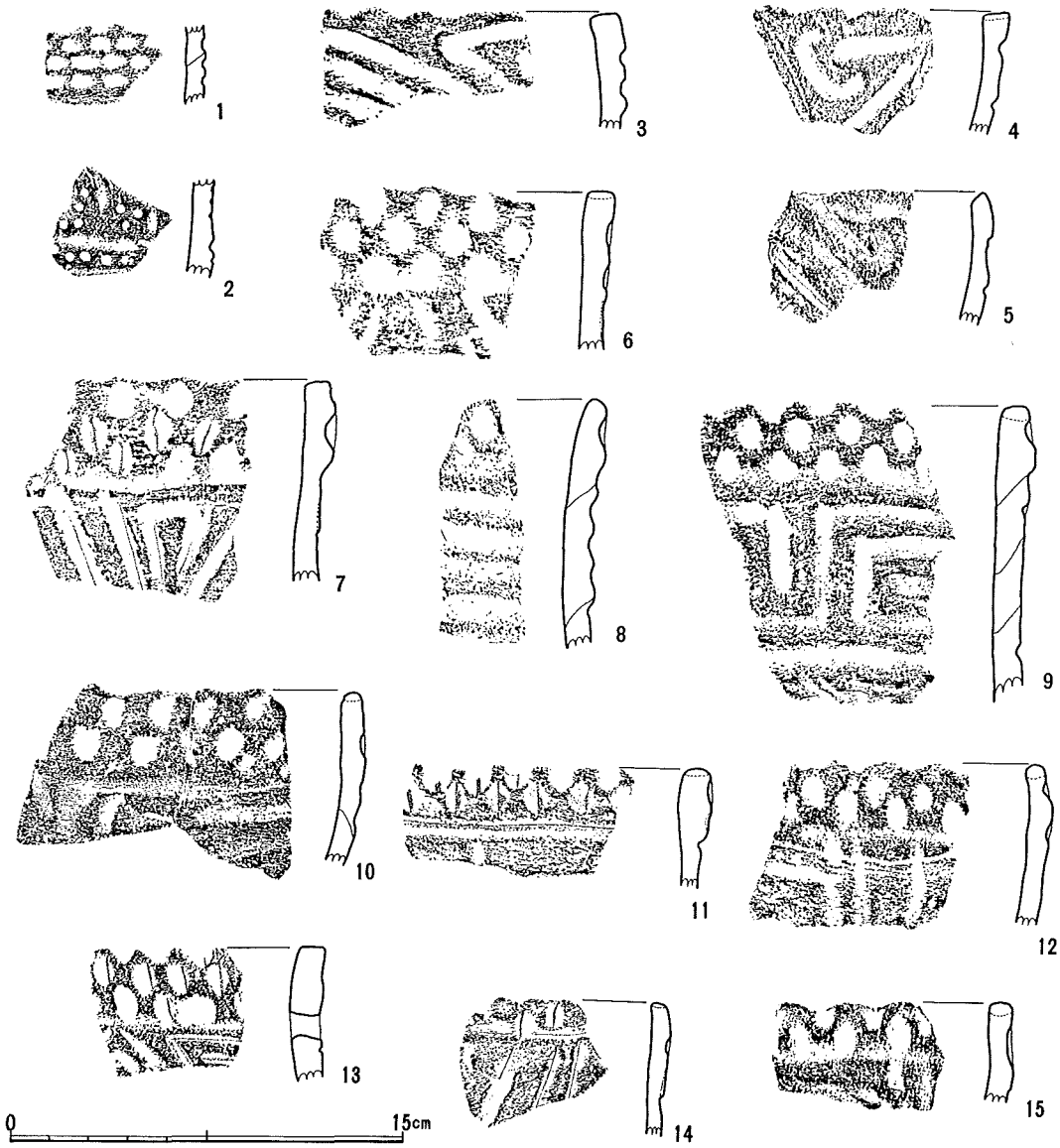


Fig. 38　二次調査出土土器実測図（1/3）

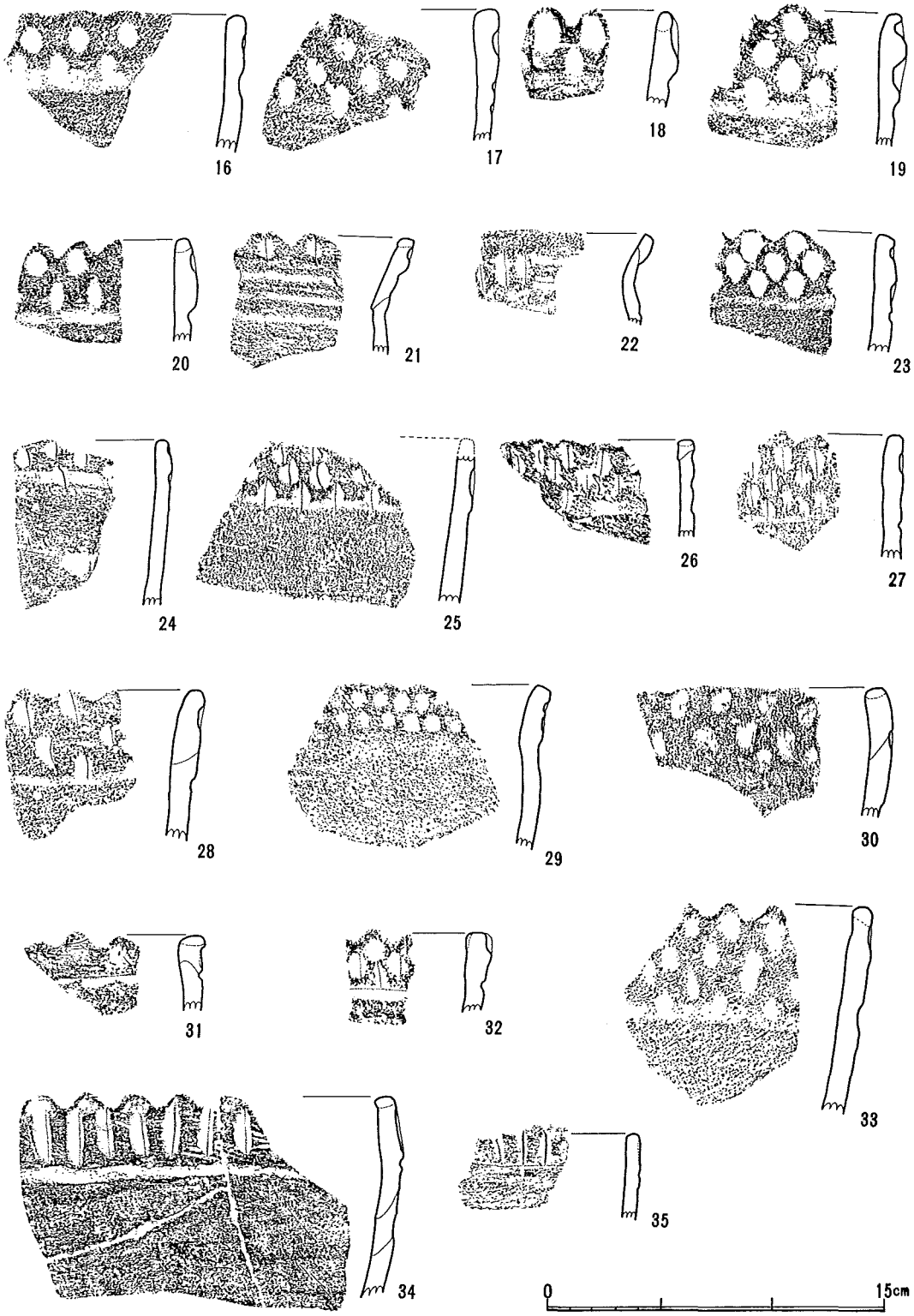


Fig. 39　二次調査出土土器実測図（1/3）

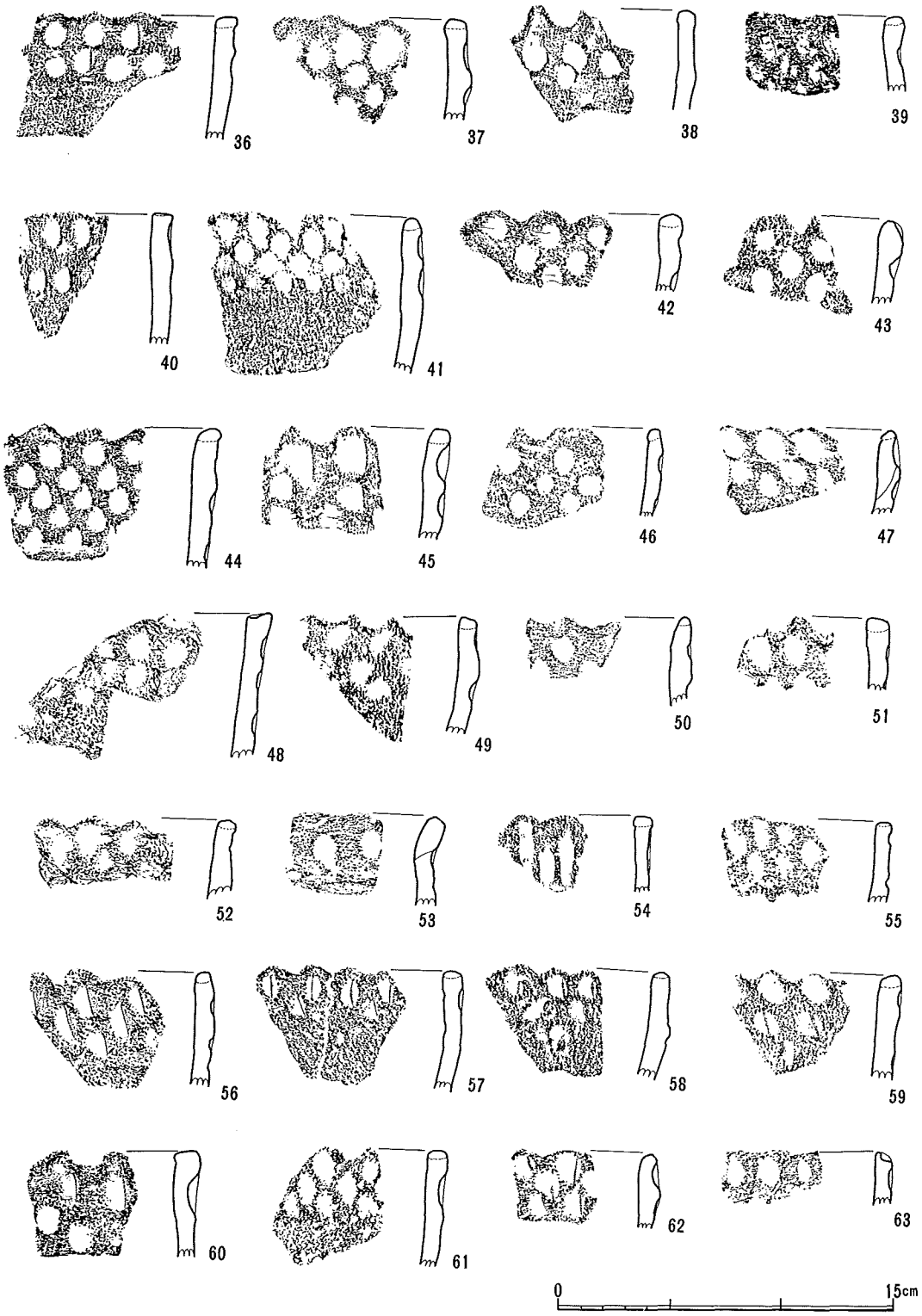


Fig. 40　二次調査出土土器実測図（1/3）

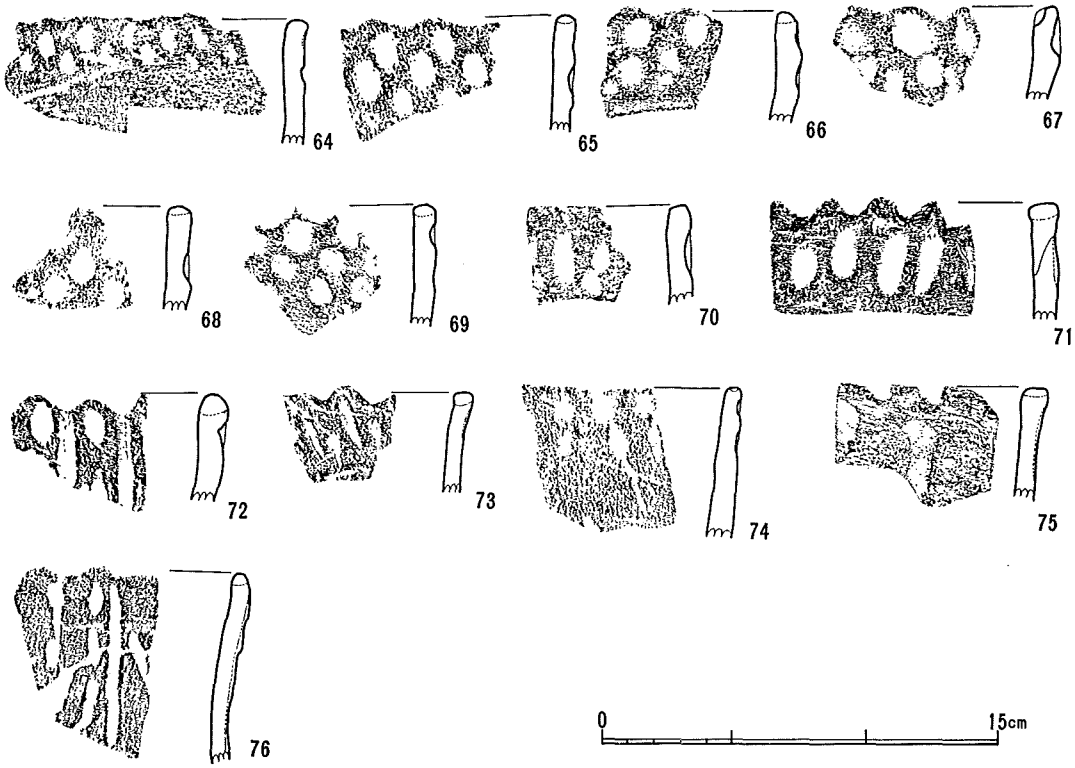


Fig. 41　二次調査出土土器実測図（1/3）

後，口唇部に丸い棒状原体による押圧を行う。器壁は内外面共ヘラナデ調整である。

Fig. 40 は口縁帯の作出が無く口唇部と口縁の凹点のみによって文様が構成される資料である。Fig. 38 と同じく，凹点が円形か楕円形を呈し断面がU字形を成すものと（36～55），V字形を為すもの（56～63）とに分かれる。胎土には55を除いて全て多量の滑石を含む。

41は口縁に3段の凹点を配する。凹点は浅く力強さに欠ける。器壁は内外面共ヘラナデ調整を行う。

Fig. 41 は Fig. 39 と同じく口縁帯の作出が無く口唇と口縁の凹点のみで器面を飾る資料であるが，凹点の断面がV字形を成すもの（64～69）と凹点が縦に長く凹線が沈線に近いもの（70～76）が見られる。72～76はその顕著な例である。これらの資料の内67，71，74はローリングを受けている。

c　南福寺式土器（Fig. 42）

口縁部に集約された凹線文の文様構成から為る資料をこの型式とする。

先述した如くこれ以外にも，口縁部の凹点の特徴からこの型式に属する資料があると思われるが筆者には識別が困難であるのでここでは省略しておく。

上述した如く，Fig. 42 は何れも短斜線とその組み合わせによって口縁部に文様が集約された資料であるが，凹線によって口縁帯を作出したもの（77～80）と口縁帯の無いものに分けら

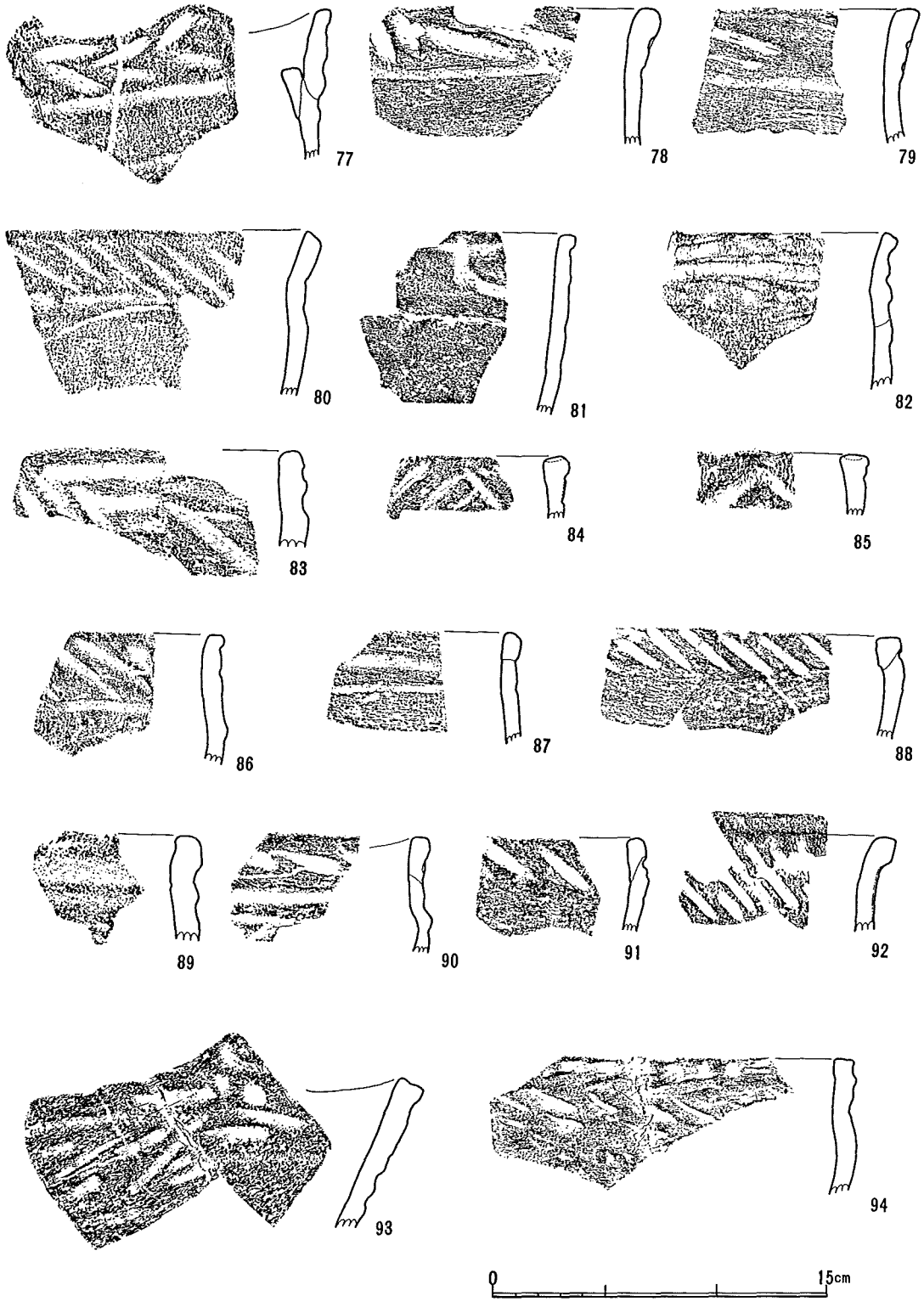


Fig. 42　二次調査出土土器実測図（1/3）

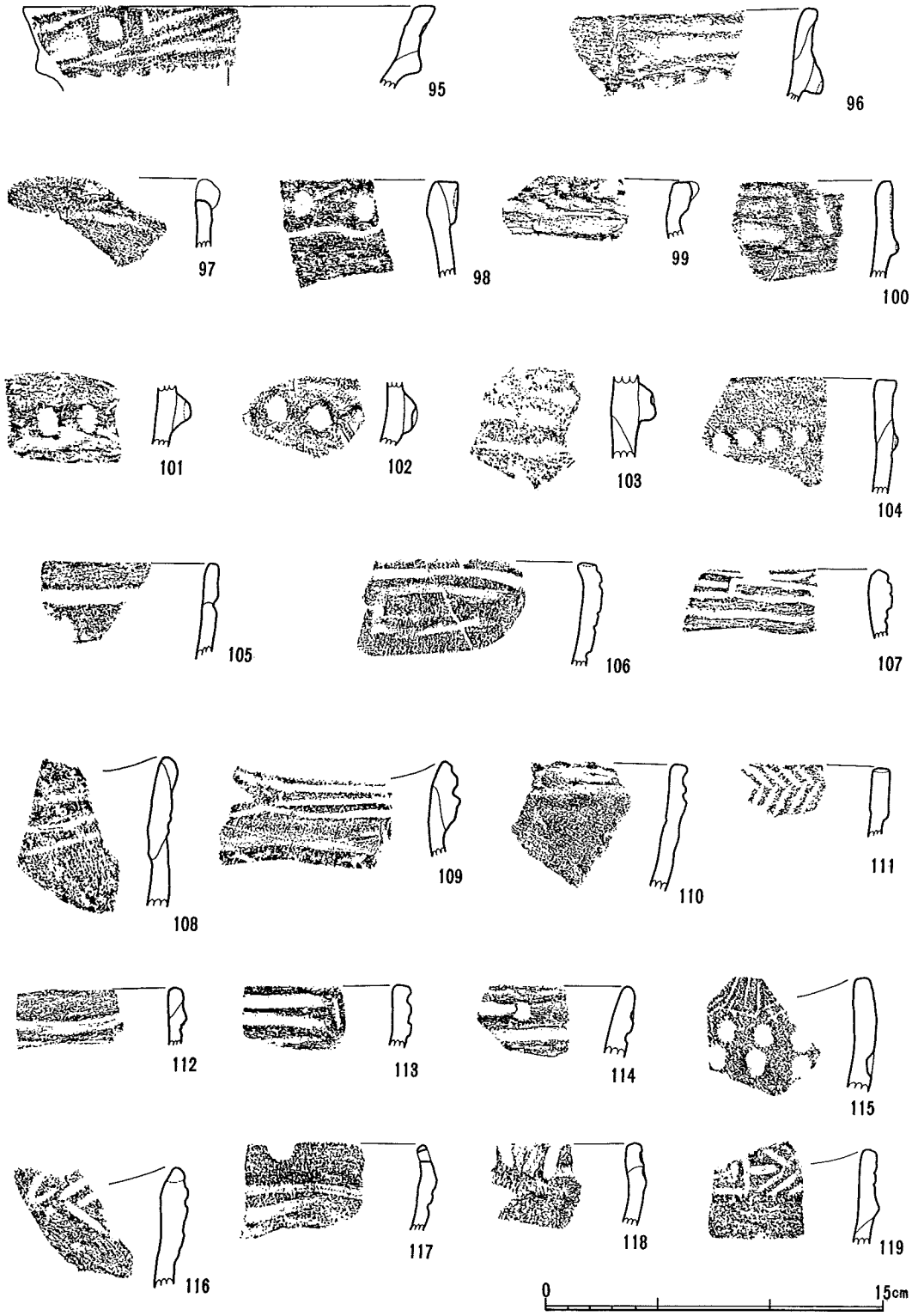


Fig. 43　二次調査出土土器実測図（1/3）

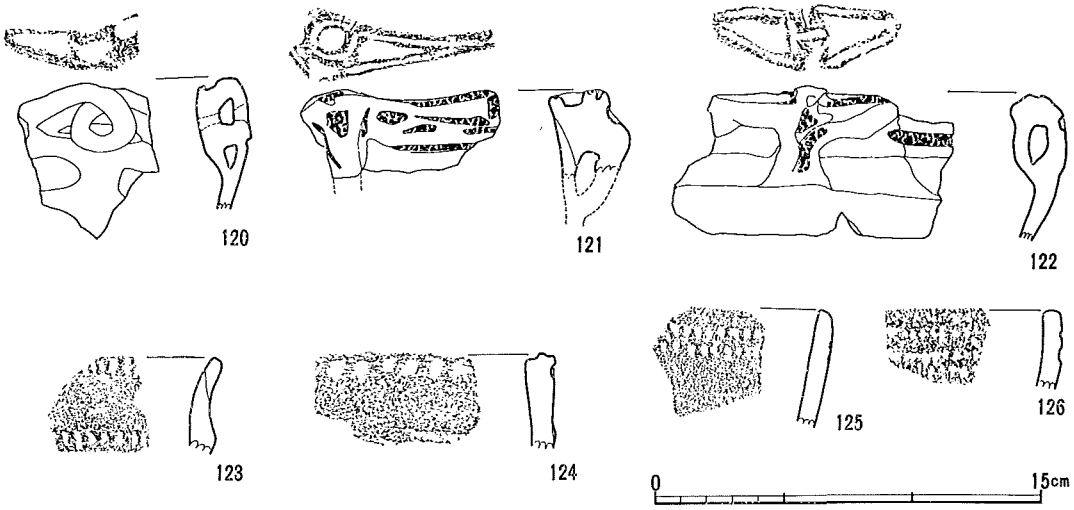


Fig. 44　二次調査出土土器実測図（1/3）

れる。77は深鉢口縁であるが，単なる波状口縁ではなく装飾的な意味合いが強い。文様は短斜線によって「く」の字を連続して描き，その下方に凹線によって胴部との境を示す。80も深鉢口縁である。凹線によって狭い口縁帯を作り，その部分に平行短斜線文を施こす。器壁は内外面共ヘラナデ調整を行う。82は粗製深鉢と思われる。口縁が若干外反する。口唇下に2本の丸い棒状原体による凹線らしきものを施こすが，装飾的なものではなく，調整痕をそのまま放置したものと思われる。内外面共ヘラケズリ痕を残す。88は口縁が内弯し，その部分のみに深い平行短斜線を施こす。90，93は波状口縁を成す。93は四ケ所で山形を成すものであろう。文様は直線文の組み合わせであるが，もはや痕跡的である。94は文様が連続した「く」の字文様であるが，ヘラ先状原体によるものか，線自体がやや細くなる。

以上の資料は全て胎土に滑を多量に含む。

d　出水式土器（Fig. 43, 44, 120～122）

突帯で口縁帯を作出する資料（95～100，119）と文様が凹線と異なり沈線によって施こされるもの（105～119），及び装飾的な意向に持つ異形把手をもつもの（120～122）をこの型式に含める。

94は復元口径18.5cmの鉢口縁である。突帯で口縁帯を作出し，突帯上には浅い刻目を施こす。狭い口縁帯には円形の刺突文と直線文を配するがローリングを受けている為か線自体明瞭でない。96も95と同一の手法を持つ。突帯上にやはり刻目を施こす。98は口縁に幅広の粘土帯を貼付し，その上に断面がV字形に近い凹点をつける。口縁帯以下は無文である。100は鉢口縁であるが突帯上の刻目と口縁帯に鋭利な短斜線を持つ。111や119と合わせて胎土に滑石を入れない資料である。101，102は鉢口辺であろうが，何れも大きな突帯と突帯上の断面U字状の凹点を特徴とする。103も鉢口辺であるが，突帯の形は台形を為し，その上に横長の凹点を施こす。104は突帯が低く刻目も浅い。あるいは後出する御手洗A式に含めるべきかも知れない。

105は口縁に一条の沈線を配するのみで他に文様は無い。106，107は沈線による文様を口縁部のみに集中させる。106には口唇部に刻目を施こす。108，109は波状口縁をもつ。109の沈線は細く且つ鋭利であるが，幅が狭い板状原体による施文である。111は口縁外面に段をつけて口縁帯を作出し，その部分に羽状文を連続的に描く。口唇には小さい凹点が認められる。黒褐色を呈し胎土には滑石を含まない。115は山形状の波状口縁を為す。頂上部直下に線刻を描き，その下に2段の凹点文を配する。116も波状口縁であるが，口縁帯には「く」の字の深い沈線を施こす。119も波状を為す鉢口縁である。小突帯によって口縁帯を作出し，その部分には沈線による文様を施こす。120は鉢口縁であるが，粘土紐を交叉させて口唇と口縁を飾る。口部の上面観は一見小動物の顔を連想させる。121も粘土紐を組み合わせて橋状把手を作り出すが一部欠損する。上面文様は円形刺突文を中心として左右に均一文様を描く。装飾の線は細く鋭い。122も基本的には上記2例と同様である。特に上面観は120と同じモチーフを持つ。以上の3例は何れも胎土に多量の滑石を含む。

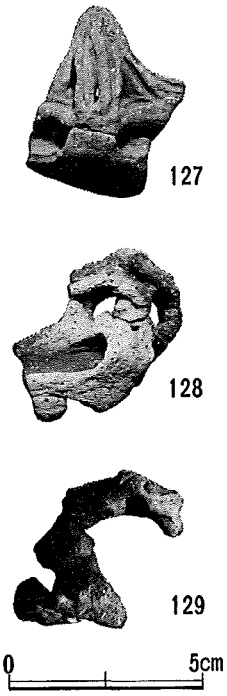


Fig. 45 各種把手 (1/2)

e　御手洗A式土器 (Fig. 44, —123〜126)

小突帯文と刻目，及び刺突文から為るタイプをこの型式に含める。

123は口縁に小突帯を貼りつけ，その部分に浅い刻目を施こす。124も鉢口縁であるが，口唇下に連続小刺突文を配するのみでその下は無文である。胴部に僅かな突帯が認められるが痕跡的で不明瞭である。口唇部分は元々丸味を持つが，中央部分を残して内側と外側に細い沈線を配する為，結果的にその部分の断面は山形を為す。125も鉢口縁である。口唇下に2段に小さな連続刺突を施こす。126も同一文様であるが，この場合は，3段に浅い凹線をひき，その上に刺突を施こす。以上の4例は何れも胎土に滑石を含まない。

f　各種把手 (Fig. 45)

127は粘土紐を組み合わせて山形の橋状把手を作り，ヘラ先による深い沈線を加えて文様を構成する。胎土には多量の滑石を含む。

128，129はほぼ同一の手法で橋状把手を作り出す。組み合わせる粘土紐は上面観で横8の字を描く。佐賀県坂の下遺跡[註4]，長崎県有喜貝塚[註5]など中期末から後期前葉にかけた遺跡に類似資料が見られる。本遺跡では南福寺式から出水式に伴うものである。只128，129は何れも胎土に滑石を含まない。

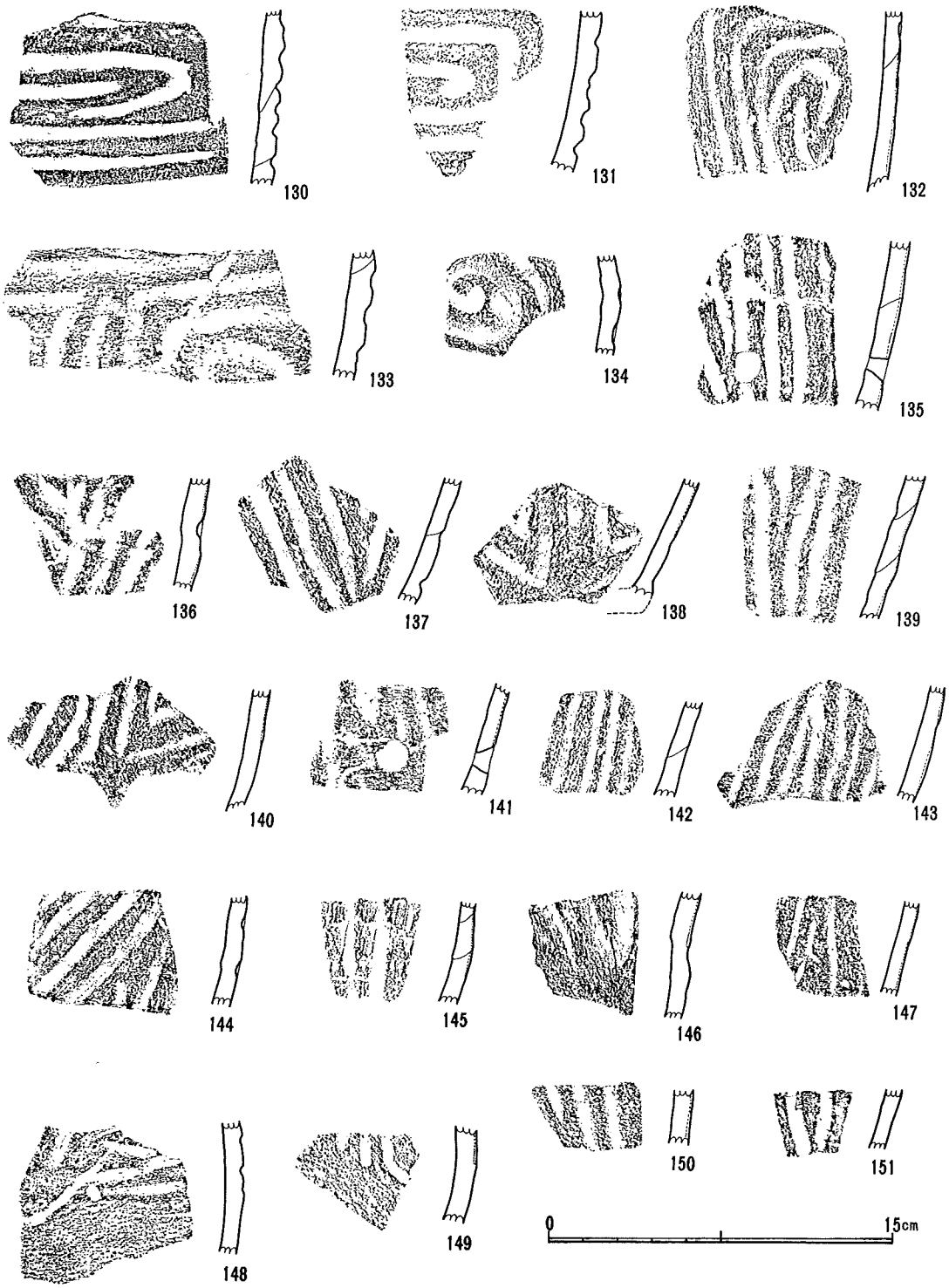


Fig. 46　二次調査出土土器実測図（1/3）

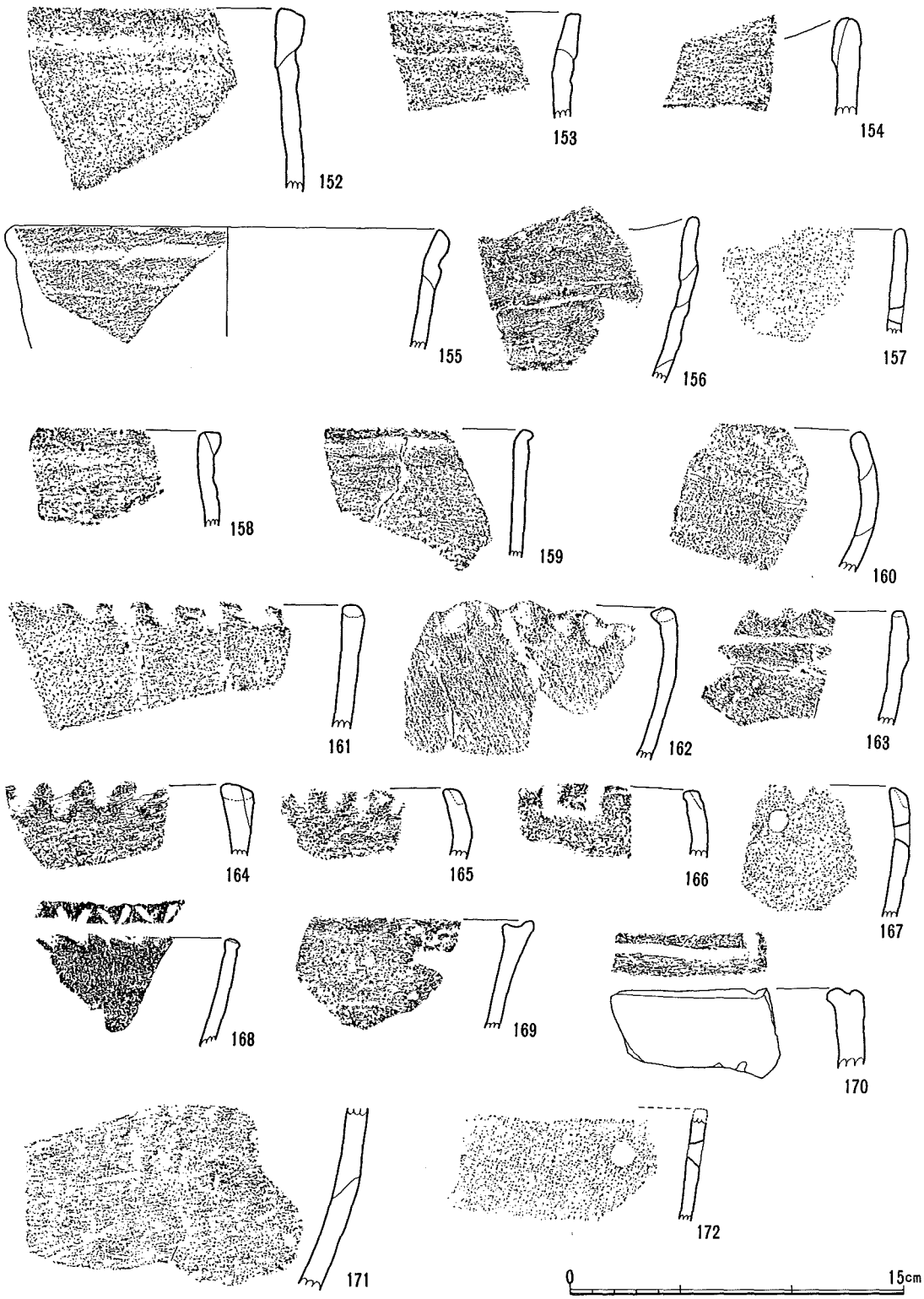


Fig. 47　二次調査出土土器実測図（1/3）

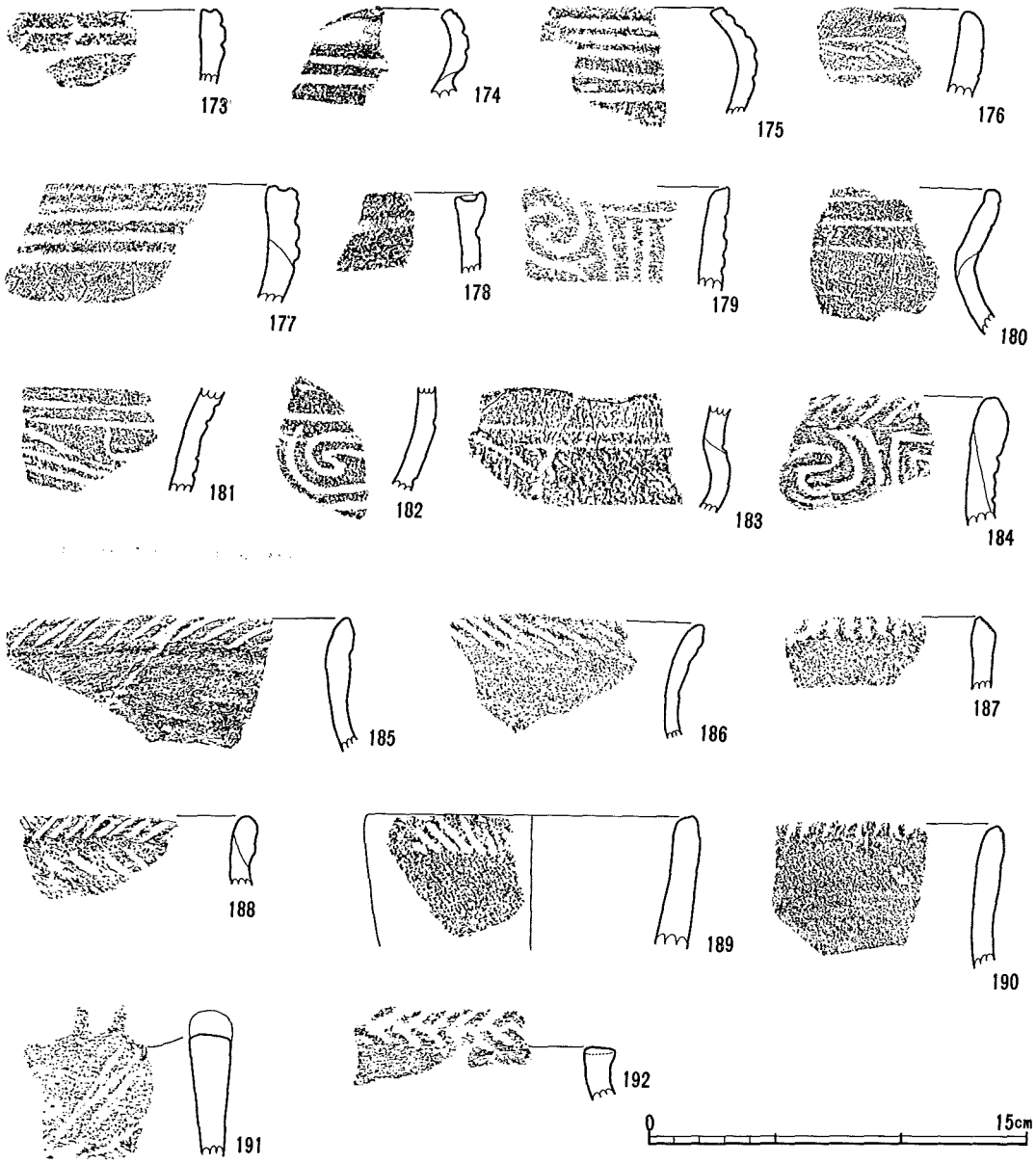


Fig. 48　二次調査出土土器実測図（1/3）

g　胴部（Fig. 46）

胴部資料で，胎土に滑石を多量に含み，凹線と沈線によって文様を構成する。破片の数量としては胴部が当然一番多いが，ここでは文様が口縁のみならず胴部にまで及ぶ特徴的な例を中心に図示する。130，131は凹線を横方向に転回する共に規格性の強い文様である。Fig. 37—9に対比するものであろう。132は縦方向に蕨手文を有する。133は直線と曲線によって文様を構成する。134は渦文をもつ資料である。135，138は鉢口辺部であろう。共に太く明瞭な凹線が底辺まで及ぶ。151は鉢口辺部である。板状原体により断面がV字形に近い凹線を縦に描く。148，149も鉢口辺部である。この2点は沈線に近い文様が口辺部にのみ限定されている。

以上の資料は130～145，150，151が阿高式土器に，その他の資料が南福寺・出水式に属するものであろう。

h　無文土器（Fig. 47）

ここでいう無文土器とは，胎土に多量の滑石を含むが胴部文様が無い資料で言わば粗製土器の範疇に入る一群であり，口唇に凹点又は刻目があるもの（161～168），口唇に沈線があるもの（169～170），そして無文の胴部資料（171～172）に分けられる。

152，153は口縁を若干把厚させる。器壁調整は雑で，共に粘土の継ぎ目が残る。154は波状口縁で口縁内側に段がつく。155は復元口径19cmの鉢口縁で灰黒色を呈し，ヘラナデ調整を行う。156も鉢口縁で波状を為す。器壁調整は雑で指頭痕や粘土の継ぎ目を残す。157は口縁と胴部に2ケ所の補修孔をもつ。158，159は直行気味の器形をもつ鉢口縁であるが，口唇部のみ若干外反する。160は内弯する埦口縁である。明赤褐色を呈し，内外面共ヘラナデ調整を行う。161は大型の深鉢口縁である。口唇外側に凹点を施こす。ややローリングを受ける。162は若干内弯する鉢口縁である。口唇部にのみ凹点を施こす。163は同様に口唇に凹点をもつが，器壁には指頭痕と調整の為の横線を残す。165～167は全く同色調を呈する。口唇外側への押捺文様は凹点というよりむしろ刻目に近い。167は口唇下に補修孔をもつ。168は薄手の鉢口縁である。口唇への文様は刻目による「ハ」の字形である。169，170は共に口唇に一条の沈線を持つ。171は厚手の胴部資料である。黄褐色を呈し柾目調整後ヘラナデを行う。172は薄手の口辺部資料で補修孔を持つ。なお，補修孔をもつ3例は何れも外側からの穿孔である。

以上の土器には，例えば口唇部文様の変化[註6]などから時間的な先後関係を指摘されようが，ここでは阿高式系土器として包括しておきたい。

II類　磨消縄文系土器（Fig. 48）

1次調査資料と同じく，鐘ケ崎式土器，北久根山式土器をII類に含める。只，1次調査と異なり数量的にはかなり少ない。

i　鐘ケ崎式土器（Fig. 48—173～184）

TP1では主体となる土器であるが，2次調査では客体となる。174は口縁が内弯し，頸部がしまり胴部が張り出すタイプである。口縁に平行沈線を施こす。176は口縁の細い沈線間に小

巻貝による擬縄文を施こす。179は渦文と直線文の組み合わせで口縁部を飾る。183は頸部から張り出し胴部に到る資料であり，くずれた入組文を配する。184は口唇に短斜線文を，頸部に渦文を施こす。北久根山式との折衷様式をとる。

以上の資料は何れも胎土に滑石を含まない。

j　北久根山式（Fig. 185～192）

185～187は口唇を若干把厚させ，その部分に短斜線文を施こす。188も同一手法であるが，口唇部の間隔の狭い刻目とは別に口縁部にも口唇刻目とは逆方向に短斜線を配する。194は復元口径13.2cmの小型の鉢口縁である。口縁にのみ短斜線文を施こす。明黄灰色を呈し焼成良好である。191も鉢口縁であるが，山形の波状を為し，その頂上部には巾広の刻目を施こす。文様は全くない。192は口唇だけの資料である。連続した「ハ」の字文様を施こす。

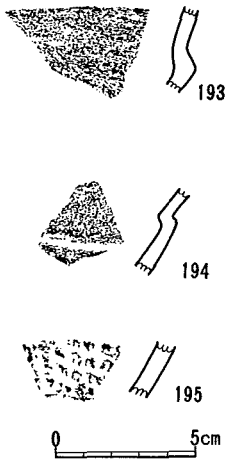


Fig. 49　二次調査出土土器実測図（1/3）

V類　縄文晩期（Fig. 49, 50）

C区からG区にかけて7点のみ出土しているが，3点図示する。何れも比較的上部からの出土である。

193，194は浅鉢肩部である。共に口縁を欠く。195は深鉢胴下半部である。この組識痕土器は1点のみである。

VI類　底部（Fig. 51～55）

底部の資料も細片を入れると多いが，ここでは次の基準で細分しておく。

まず胎土に滑石を含むもの（Fig. 51～54）と含まないもの（Fig. 55）とに大別されるが，圧倒的に多いのは前者である。次に胎土に滑石を含む資料では，底部の張り出しが強いもの（Fig. 51），底部の張り出しが弱いもの（Fig. 52），張り出しが無く胴部からの移行がストレートなもの（Fig. 53），底が若干上げ底のものと台状のもの（Fig. 54）とに分けられる。

以下簡単に説明を加えておく。

196，197は底部まで文様が及ぶ例であるが，文様自体は196は明瞭な凹線，197は細く沈線様

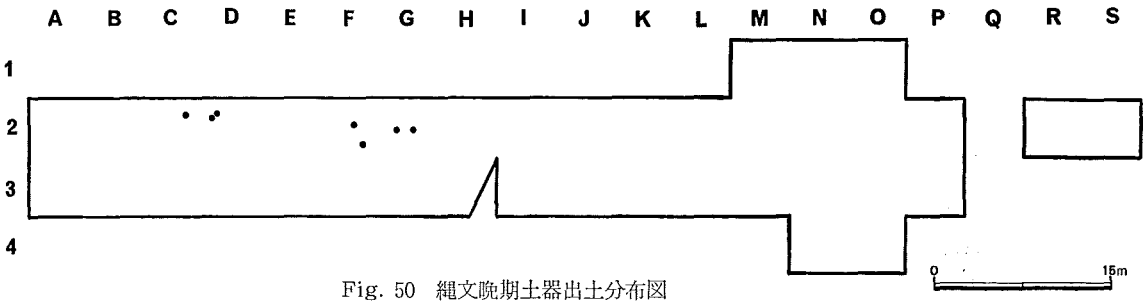


Fig. 50　縄文晩期土器出土分布図

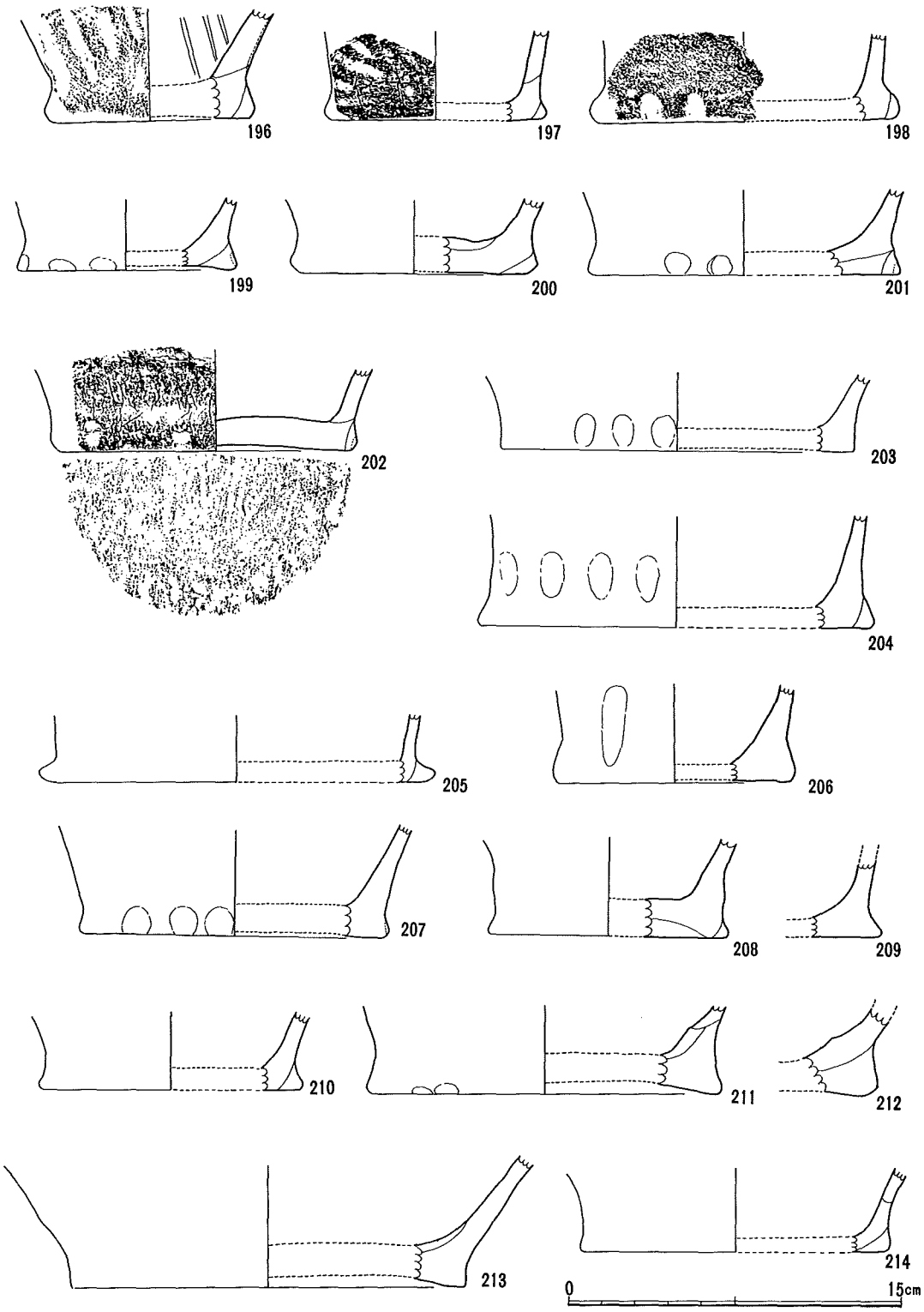


Fig. 51　二次調査出土土器実測図（1/3）

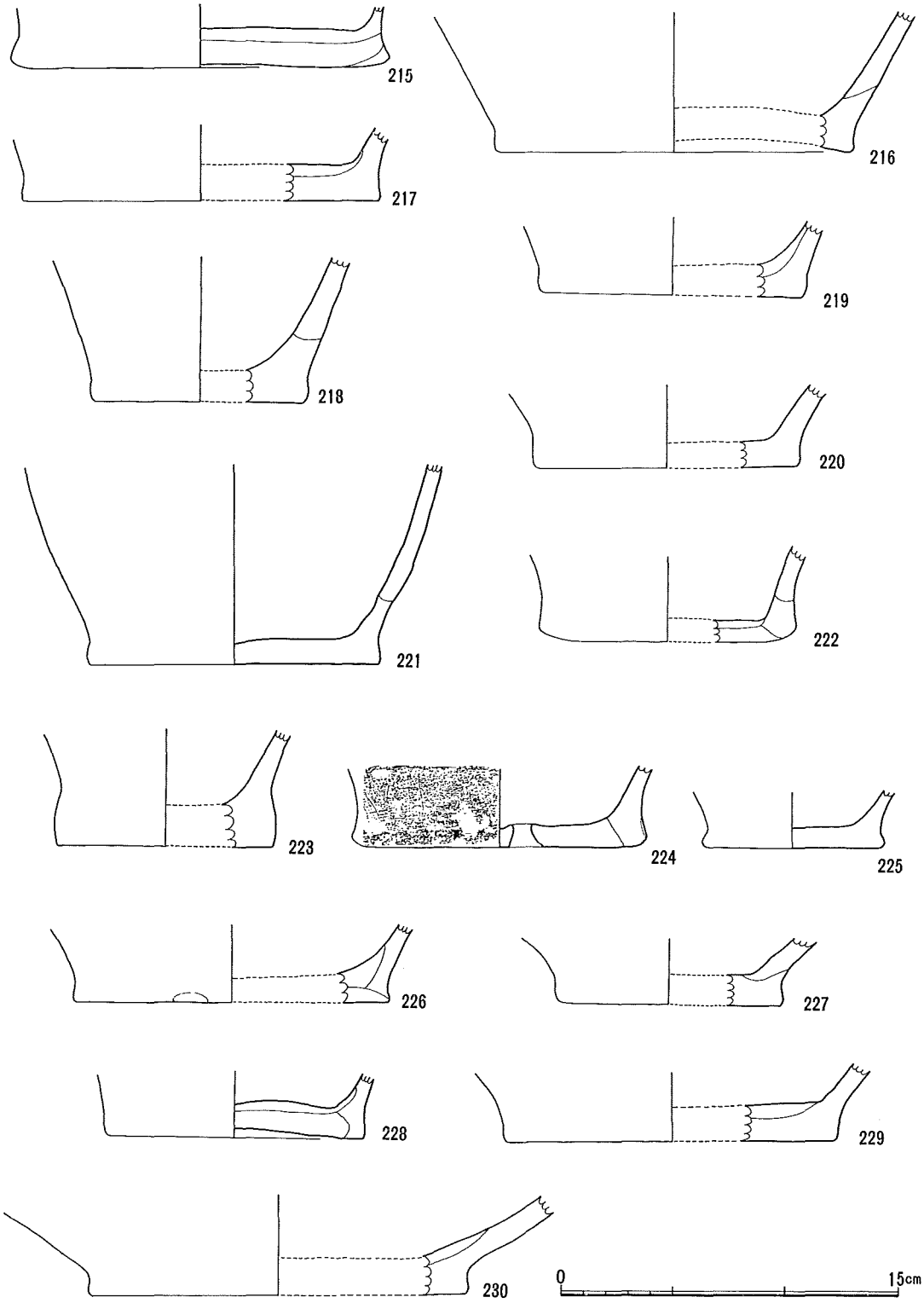


Fig. 52　二次調査出土土器実測図（1/3）

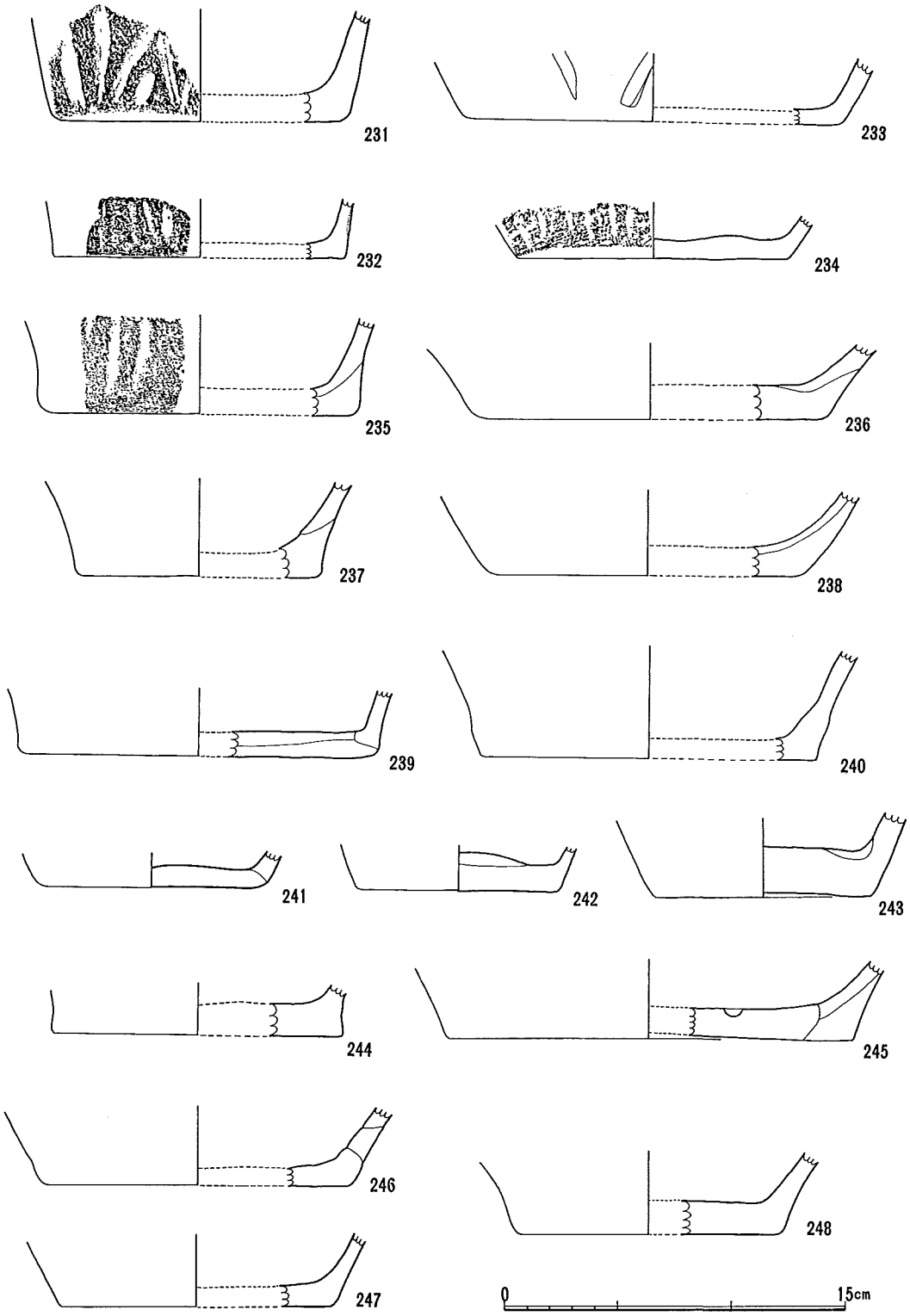


Fig. 53　二次調査出土土器実測図（1/3）

である。198～202は底部外側に凹点をつけるが，203，204，206，207に見えるスタンプは指頭による押圧痕で文様ではない。205，209，210は底部張り出しが特に強い。202は底部のみ完形資料で径14cmを計る。胴部と底の境は内外面に指頭による押圧を行う。底面に鯨骨の脊椎らしき痕跡がみえるが明瞭でない。224はほぼ底部の形が判る資料である。底径13.1cm，胴部と底の接合部は内外面とも指頭押圧を行い，内面はその上を横方向にナデ消し，外面は押圧痕をそのまま残す。底面中央部には外側からの径7㎜の孔を穿がつ。225は径8cmの小型の鉢底部である。黒褐色を呈し焼成は良好である。230は浅鉢の底部と思われる。推定径15cmで胴部は底から急激に外へ広がる。

先述した如く，Fig. 53 は底部の張りが無い資料である。231～235は底部まで文様が及ぶ。231と235は凹線が太く，他は細い。242は底面内側が漫頭芯状にふくらむ。243は底部が完形資料である。径は9.5cmと小型の方であるが底面はぶ厚く2.1cmを計る。全体的にローリングを受ける。245は復元径18cmのかなり大型の部類に入る。焼成が悪く内外壁共剝落が激しい。

249—254は上げ底気味の例である。249は径15.3cmの大型深鉢の底部である。底と胴部の接合面には，内面では粘土を継ぎ足して強化し，その土をナデ消して調整しているが，ナデが不十分な為継ぎ目が残っている。250の底面には鯨脊椎骨の圧痕らしきものが認められるが判然としない。一体にこの遺跡では土器製作台に鯨骨を利用することが少ないらしく，顕著ではない。255は高杯の台状資料と思われる。丸味をおびて外側へ開いて安定する。四ケ所に方形のすかしが入る。長崎県富江町宮下貝塚に類似資料がある。[註7]

以上の資料は何れも阿高式系土器のものであるが，時間的には底部まで文様が及ぶ196～198 231～235が一段古く位置づけられよう。

Fig. 55 は胎土に滑石を含まない資料で，且つ時期的には縄文後期（256～261），縄文晩期（262），弥生中期（263）を含む。後期のものは鐘ケ崎式から北久根山式に属する資料と思われるが，量的に乏しい。これは当然ながら胴部が少いのに対比する。262は晩期末葉の深鉢の円盤貼りつけ資料である。暗赤褐色を呈し，胎土に砂粒・長石を多く含む。焼成は良好である。263は弥生中期の甕底部資料である。底部はこの1点のみで，出土地点は0—2区である。表層直下からの出土である。

Fig. 56 は弥生式土器である。何れも表土直下より6点程出土している。3点図示する。

何れも甕口縁である。264～265は口縁が逆L字状をなす。黄褐色で胎土に砂粒・石英粒を含む。焼成は良好である。265は口唇下に突帯をもつ。266は口縁がくの字状を呈する。胎土に荒い石英粒を含む。焼成は良好である。

以上の資料は何れも弥生中期後半に比定されよう。

土製円盤の資料を Fig. 58 に図示しておく。他にも若干それらしき資料もあるが，ローリングを強く受けている為確実性に欠ける。267は底面を利用する。直径6cm，厚みは8㎜である。271は有孔円盤である。中央部に径8㎜の孔を穿がつ。272は貝殻条痕をもつ鉢胴部片を利用す

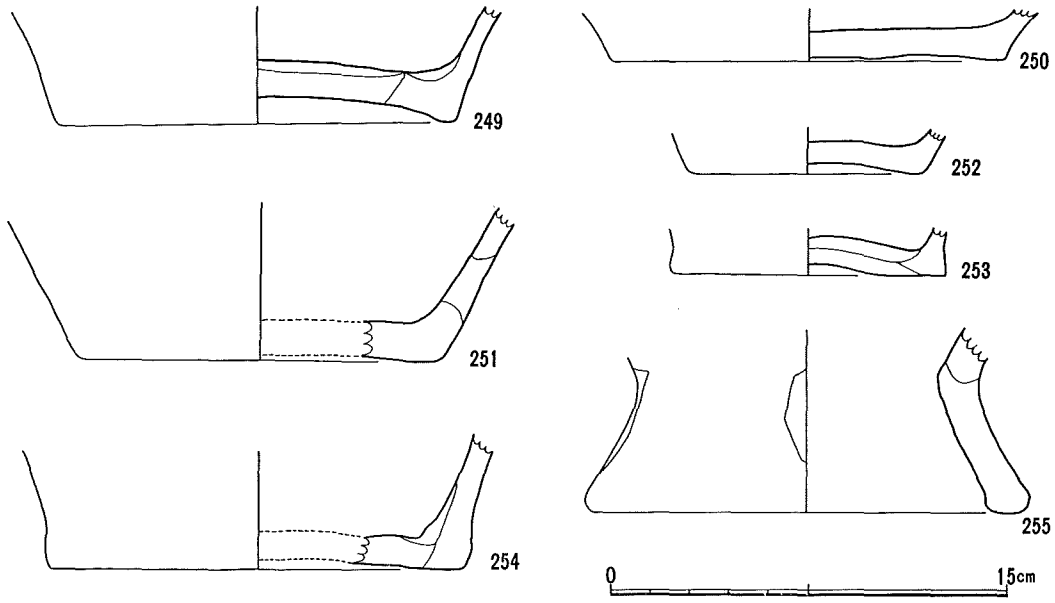


Fig. 54　二次調査出土土器実測図（1/3）

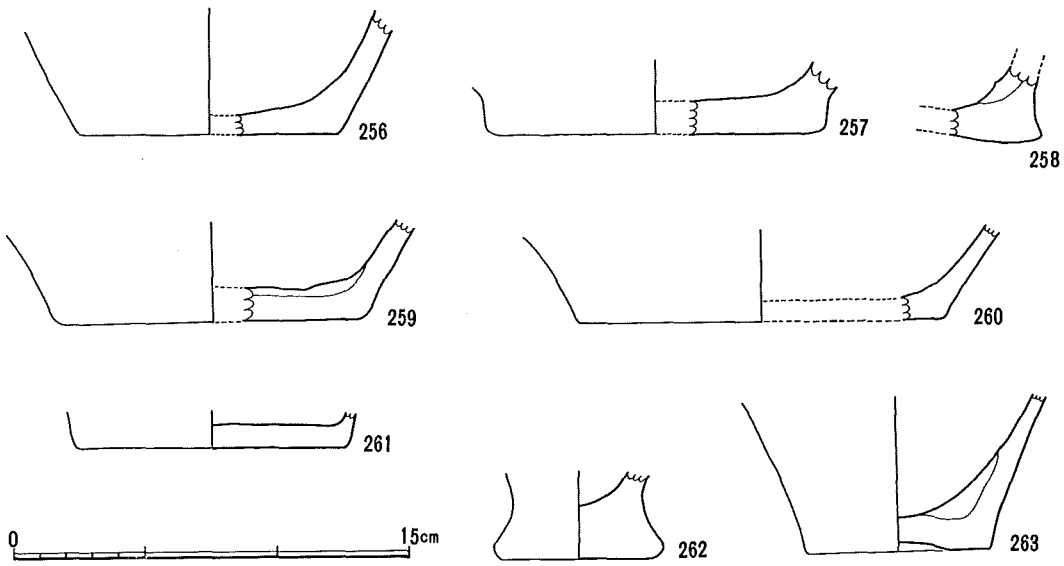


Fig. 55　二次調査出土土器実測図（1/3）

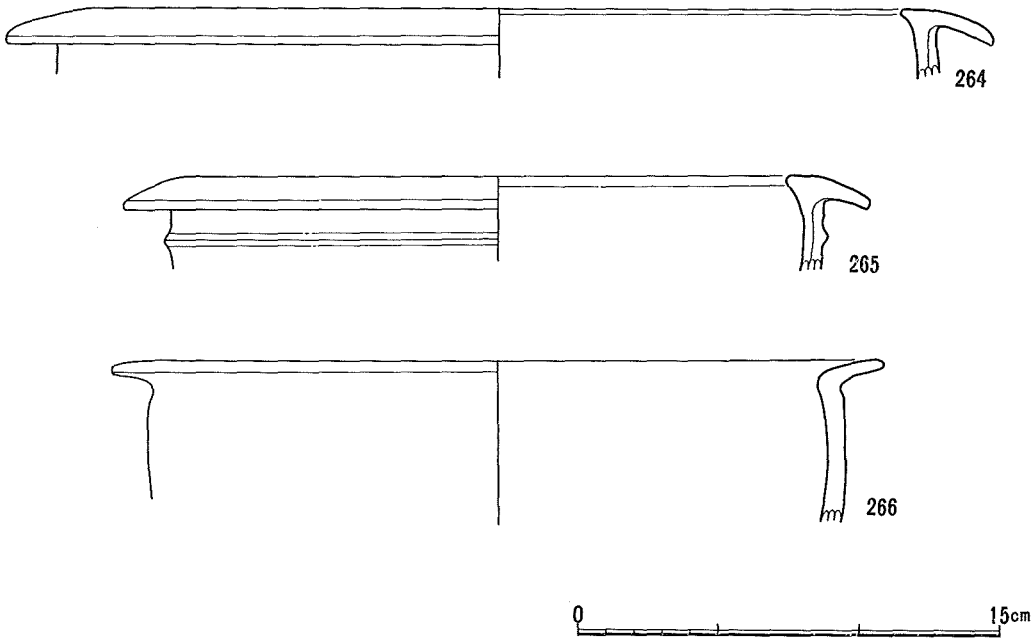


Fig. 56　二次調査出土土器実測図（1/3）

る。長径5㎝を計る。

以上の資料中，272を除いて胎土に多量の滑石を混入する。

註1　城南町教育委員会「阿高貝塚」城南町文化財調査報告書　1978
2　田中良之「中期・阿高式系土器の研究」古文化談叢　第6集所収　1979
3　註2論文
4　佐賀県立博物館「坂の下遺跡の研究」佐賀県立博物館調査研究書　第2集　1979
5　諫早市教育委員会「有喜貝塚」諫早市文化財調査報告書　第5集　1984
6　田中良之「磨消縄文土器伝播のプロセス」古文化論集　上巻所収　1984
7　前川威洋「九州後期縄文土器の諸問題―磨消縄文土器の展開―」九州縄文文化の研究所収　1979

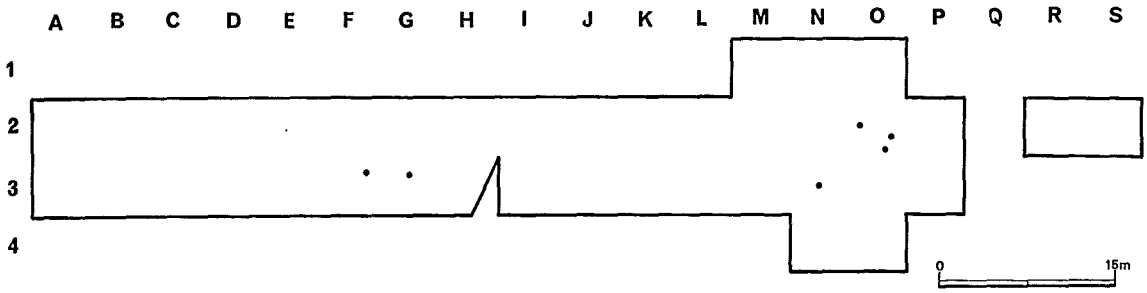


Fig. 57　弥生土器出土分布図

土器出土状況

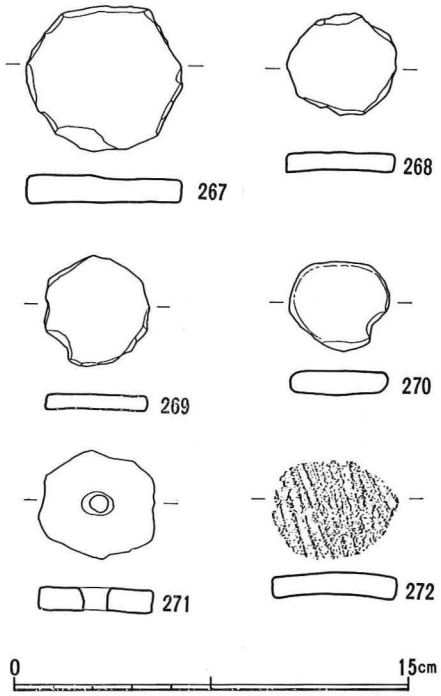


Fig. 58　円形土版実測図（1/3）

土器出土状況

土器出土状況

Tab. 7　土器観察表

図番号	遺物番号	出土区	器種	厚(%)	色調	胎土	調整		備考
							外	内	
1	2TON-B2- 805	B－2	鉢胴部	7	灰褐色	滑石		ヘラナデ	押引き刺突
2	2TON-I2-2121	I－2	〃	10	赤褐色	〃		〃	凹線・刺突・ローリング
3	2TON-B2- 374	B－2	鉢口縁	10	暗黄灰色	〃	ヘラナデ		凹線・口唇に凹点
4	TON-T2- 108	T 2	〃	9	暗褐色	〃	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ	凹唇に刻目
5	2TON-E2- 191	E－2	〃	9	暗赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	
6	2TON-C3- 5	C－3	〃	9	灰褐色	〃		〃	凹点と浅い凹線
7	2TON-A3- 282	A－3	〃	9	明赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	深い凹点と凹線
8	2TON-E3- 6	E－3	〃	10	〃	〃			凹点・巾広凹線
9	2TON-E3- 28	E－3	〃	12	〃	〃		ヘラナデ	凹点・凹線
10	2TON-D3- 122 / D2- 55	D－2・3	〃	9	暗灰褐色	〃	ヘラナデ	接合部指頭痕	浅い凹点と凹線・接合
11	2TON-C2- 700	C－2	〃	8	〃	〃	〃	ヘラナデ	深い凹点と沈線
12	2TON-D2- 320	D－2	〃	8	〃	〃			凹点・凹線
13	2TON-A2- 514	A－2	〃	13	暗赤褐色	〃		ヘラナデ	補修孔
14	2TON-E2- 554	E－2	〃	7	明赤褐色	〃	ヘラナデ・ケンマ	〃	浅い凹点・沈線
15	2TON-O3- 37	O－3	〃	8	灰褐色	〃	〃	〃	
16	2TON-E2- 396	E－2	〃	9	暗灰褐色	〃		ヘラナデ	凹点・凹線
17	2TON-B2- 340	B－2	〃	7	淡褐色	〃		〃	
18	2TON-C2- 907	C－2	〃	10	暗褐色	〃		〃	
19	2TON-F2- 596	F－2	〃	9	暗灰褐色	〃		指頭痕・ヘラナデ	浅い凹線
20	2TON-B3- 136	B－3	〃	9	灰褐色	〃		ヘラナデ	
21	2TON-E2- 338	E－2	〃	8	〃	〃		〃	浅い凹点・凹線
22	2TON-C2-1309	C－2	〃	6	暗灰褐色	〃	ヘラナデ	〃	口縁ゆるい「くの字」
23	2TON-E2- 306	E－2	〃	9	〃	〃	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ・ケンマ	浅い凹線
24	2TON-C2- 259	C－2	〃	7	明赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	凹点を凹線で消す
25	2TON-B3- 102	B－3	〃	9	灰褐色	〃	柾目・ヘラナデ	〃	
26	2TON-B3- 102	D－2	〃	6	暗赤褐色	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	
27	2TON-D2-80 4	F－2	〃	9	〃	砂粒・石英粒	〃	ヘラナデ・ケンマ	
28	2TON-F2- 636	G－2	〃	11	暗灰褐色	滑石	〃	〃	
29	2TON-G2- 148	E－2	〃	8	明赤褐色	〃	〃	〃	浅く小さい凹点
30	2TON-E2- 480	B－2	〃	8	暗灰褐色	〃	〃	指頭痕・ヘラナデ	
31	2TON-B2-1090	C－3	〃	8	〃	〃	〃	〃	口唇部のみ凹点
32	2TON-C3- 127	C－2	〃	10	明赤褐色	〃		〃	
33	2TON-C2- 971	D－2	〃	10	淡赤褐色	〃			浅い凹点と凹線
34	2TON-D2- 230	F－2	〃	8	灰褐色	〃	ヘラナデ	柾目・ヘラナデ	
35	2TON-F2- 690	C－2	〃	8	暗灰褐色	〃		ヘラナデ	
36	2TON-C2- 954	D－3	〃	9	灰褐色	〃	ヘラナデ	〃	
37	2TON-D3- 581	C－2	〃	9	〃	〃	〃		
38	2TON-C2- 743	A－2	〃	9	〃	〃	〃	柾目・ヘラナデ	
39	2TON-A2- 359	B－3	〃	9	〃	〃		ヘラナデ・ケンマ	
40	2TON-B3- 198	B－2	〃	9	〃	〃		ヘラナデ	
41	2TON-B2-1175	B－2	〃	8	淡赤褐色	〃	ヘラナデ	指頭痕・ヘラナデ	
42	2TON-B2- 22	B－2	〃	9	灰褐色	〃			
43	2TON-B2- 513	D－2	〃	11	灰黒色	〃		ヘラナデ	
44	2TON-D2- 881	D－2	〃	10	灰褐色	〃	ヘラナデ	柾目・ヘラナデ	
45	2TON-D2- 750	B－2	〃	8	淡赤褐色	〃	〃		
46	2TON-B2- 515	C－2	〃	8	灰褐色	〃		柾目・ヘラナデ	浅い凹点
47	2TON-C2- 422	C－2	〃	8	明赤褐色	〃		〃	ローリング
48	2TON-C2- 389	D－2	〃	9	〃	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	
49	2TON-D2- 871	C－3	〃	9	灰黒色	〃	〃	〃	
50	2TON-C3- 124	C－2	〃	9	灰褐色	〃	〃	〃	

Tab.8　土器観察表

図番号	遺物番号	出土区	器種	厚(mm)	色調	胎土	調整 外	調整 内	備考
51	2TON-C2- 767	C－2	鉢口縁	9	明赤褐色	滑石		ヘラナデ	
52	2TON-C2- 890	C－2	〃	9	〃	〃		ヘラナデ	
53	2TON-E2- 588	E－2	〃	9	〃	〃	ヘラナデ	指頭痕・ヘラナデ	
54	2TON-C2-1010	C－2	〃	8	〃	〃			縦長凹点
55	TON-T2- 1	T－2	〃	8	黒褐色	砂粒・雲母		ヘラナデ	浅い凹点
56	2TON-F2- 536	F－2	〃	9	淡赤褐色	滑石		〃	
57	2TON-C2- 320	C－2	〃	9	明赤褐色	〃		指頭痕	
58	2TON-B2- 232	B－2	〃	8	〃	〃		〃	
59	2TON-D2- 745	D－2	〃	9	灰褐色	〃		ヘラナデ	
60	2TON-B2- 109	B－2	〃	8	淡褐色	〃		指頭痕	
61	2TON-B3- 89	B－3	〃	8	〃	〃		指頭痕・ヘラナデ	ローリング
62	2TON-C2-1246	C－2	〃	9	明赤褐色	〃		ヘラナデ	
63	2TON-A2- 103	A－2	〃	9	灰褐色	〃		〃	
64	2TON-E2- 380	E－2	〃	9	明赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	浅い凹点
65	2TON-F2- 601	F－2	〃	9	〃	〃		〃	
66	2TON-C2-1269	C－2	〃	〃	〃	〃		指頭痕・ヘラナデ	
67	2TON-C2-1249	C－2	〃	〃	灰褐色	〃		ヘラナデ	
68	2TON-B3- 59	B－3	〃	〃	〃	〃		〃	
69	2TON-E3- 29	E－3	〃	〃	暗灰褐色	〃		〃	
70	2TON-F2- 479	F－2	〃	8	灰褐色	〃		〃	口唇に凹点無
71	2TON-E2- 225	E－2	〃	9	灰黒色	〃	ヘラナデ	指頭痕	
72	2TON-B2- 535	B－2	〃	9	〃	〃	〃	ヘラナデ	凹点＋縦長凹線
73	2TON-B2-1237	B－2	〃	8	灰褐色	〃	〃	柾目・ヘラナデ	
74	2TON-C3- 10	C－3	〃	9	灰黒色	〃	〃	ヘラナデ	浅い凹点
75	2TON-C2- 567	C－2	〃	8	灰褐色	〃	〃	〃	口唇に刻目＋浅い凹線
76	2TON-B2- 469	B－2	〃	9	〃	〃	〃	〃	細長い凹線
77	2TON-A2- 8	A－2	〃	10	〃	〃	〃	〃	山形口縁
78	2TON-B2- 3	B－2	〃	10	灰黒色	〃	〃	〃	
79	2TON-C2-1308	C－2	〃	9	〃	〃	柾目・ヘラナデ	柾目・ヘラナデ	浅い凹線
80	2TON-C2-1054	C－2	〃	8	明赤褐色	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	斜線文
81	2TON-B2-1009	B－2	〃	8	灰褐色	〃	ヘラナデ	柾目・ヘラナデ	柾目凹線
82	2TON-E2- 143	E－2	〃	12	灰黒色	〃	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
83	2TON-C2- 490	C－2	〃	9	〃	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	板目斜線文
84	2TON-B2- 574	B－2	〃	〃	淡灰黒色	〃	〃	〃	口唇に刻目＋凹点
85	2TON-T2- 110	T－2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
86	2TON-D2- 488	D－2	〃	8	明赤褐色	〃	〃	〃	浅い短斜線
87	2TON-A2- 297	A－2	〃	8	灰黒色	〃	〃	板目・ヘラナデ	
88	2TON-B2-1286	B－2	〃	9	明赤褐色	〃	〃	ヘラナデ	短斜線文
89	2TON-F2- 157	F－2	〃	8	〃	〃	〃	〃	太く浅い凹線
90	2TON-C2-3196	C－2	〃	9	〃	〃	〃	〃	波状口縁
91	2TON-B2-1077	B－2	〃	9	〃	〃	〃	〃	短斜線文
92	2TON-E2- 467	E－2	〃	10	暗赤褐色	〃	〃	〃	深い短斜線文
93	2TON-B2- 198	B－2	〃	9	淡灰褐色	〃	〃	〃	波状口縁・文様が雑
94	2TON-B2- 549	B－2	〃	8	灰黒色	〃	〃	〃	ヘラ先沈線

Tab. 9　土器観察表

図番号	遺物番号	出土区	器種	厚(mm)	色調	胎土	調整 外	調整 内	備考
95	2TON-E2- 898	E－2	鉢口縁	8	明赤褐色	滑石	ヘラナデ	指頭痕	刻目突帯、径18.5cm
96	2TON-F2- 351	F－2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
97	2TON-E2- 460	E－2	〃	7	灰褐色	〃	〃	ヘラナデ	口唇に粘土塊
98	2TON-G2- 41	G－2	〃	8	明赤褐色	〃	〃	〃	口縁に粘土帯貼付
99	2TON-F2- 501	F－2	〃	7	〃	〃	柾目・ヘラナデ	ヘラケズリ	
100	2TON-T2- 318	T－2	〃	8	〃	砂粒・雲母・石英粒	ヘラナデ	ヘラナデ	刻目突帯
101	2TON-N2- 255	A－3	鉢口辺	8	灰褐色	滑石	〃	〃	〃
102	2TON-B2- 302	B－2	〃	8	明赤褐色	〃	〃	〃	〃
103	2TON-D2-1045	D－2	〃	11	〃	〃	〃	〃	粘土帯
104	2TON-B2- 766	B－2	鉢口縁	8	淡赤褐色	〃	〃	〃	低い刻目突帯
105	2TON-C3- 46	C－3	〃	〃	灰黒色	〃	〃	〃	
106	2TON-A3- 492	A－2	〃	〃	明赤褐色	〃	〃	〃	口唇に浅い刻目
107	2TON-F3- 159	F－2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平行沈線
108	2TON-F3- 164	F－2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	波状口縁
109	2TON-F3- 513	F－2	〃	9	〃	〃	〃	柾目・ヘラナデ	
110	2TON-E3- 387	E－2	〃	8	黒褐色	〃	〃	〃	
111	2TON-T4- 50	T－4	〃	〃	〃	砂粒・石英粒			口縁帯に羽状文
112	2TON-C2- 369	C－2	〃	7	灰褐色	滑石	ヘラナデ	ヘラナデ	
113	2TON-B3- 705	B－3	〃	8	〃	〃	〃	〃	
114	2TON-E2- 22	E－2	〃	10	暗灰褐色	〃	〃	〃	
115	2TON-E2- 354	E－2	〃	10	明赤褐色	〃	〃	〃	波状口縁
116	2TON-D2- 863	D－2	〃	11	暗褐色	砂粒・長石			〃
117	2TON-B2- 824	B－2	〃	7	灰褐色	滑石	柾目・ヘラナデ	ヘラナデ	
118	2TON-B2- 324	B－2	〃	6	〃	〃		柾目・ヘラナデ	
119	2TON-C2- 585	C－2	〃	8	暗灰褐色	砂粒・雲母		ヘラナデ	ローリング
120	2TON-N3- 4	N－3	〃	6	〃	〃		〃	〃
121	2TON-E[illegible]- 714	E－2	〃	〃	〃	〃		〃	〃
122	2TON-A2- H	A－2	〃	8		砂粒・雲母・石英粒	ヘラナデ	〃	〃
123	2TON-C2-1057	C－2	〃	〃	暗褐色	砂粒・雲母・長石		ヘラナデ・ケンマ	ローリング
124	2TON-A2- 591	A－2	〃	10	〃	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	口縁に刺突文
125	2TON-C2- 189	C－2	〃	8	〃	砂粒・雲母	ヘラナデ・ケンマ	〃	浅い刺突文・ローリング
126	2TON-B2- 428	B－2	〃	〃	赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	
127	2TON-C2- 33	C－2	把手	5	明茶褐色	滑石		〃	沈線で文様
128	2TON-A -18/1302	A－3 C－2	〃	8	明赤褐色	砂粒・石英粒	ヘラナデ	柾目・ヘラナデ	粘土紐組み合わせ
129	2TON-C2- 460	C－2	〃	〃	〃	〃	〃		〃
130	2TON-F2- 563	F－2	鉢胴部	〃	灰黒色	滑石	〃	柾目・ヘラナデ	太く深い凹線
131	2TON-E3- 10	E－3	〃	11	灰褐色	〃	〃	ヘラナデ	
132	2TON-C2- 692	C－2	〃	8	赤褐色	〃	〃	〃	ワラビ手文
133	2TON-E3- 6	E－3	〃	11	明赤褐色	〃	〃	〃	太型凹文
134	2TON-B3- 136	B－2	〃	7	〃	〃	〃	指頭痕	ワラビ手文
135	2TON-A3- H	A－3	鉢底辺部	8	〃	〃	〃	ヘラナデ	太型凹文
136	2TON-B2- 245	B－2	鉢胴部	〃	淡赤褐色	〃		〃	
137	2TON-A2- H	A－2	鉢底辺部	〃	灰黒色	〃	柾目・ヘラナデ	〃	太型凹文
138	2TON-A3- 890	A－3	〃	〃	明赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	
139	2TON-C2- 287	C－2	〃	〃	淡赤褐色	〃	〃	〃	
140	2TON-B2- 174	B－3	鉢胴部	〃	〃	〃	〃	〃	
141	2TON-B2- 272	B－2	〃	9	〃	〃	〃	〃	補修孔
142	2TON-C2-1218	C－2	〃	8	灰褐色	〃	〃	〃	
143	2TON-C2-1479	C－2	〃	8	〃	〃	〃	ヘラナデ・ケンマ	
144	2TON-C2- 518	C－2	〃	7	淡赤褐色	〃	〃	柾目・ヘラナデ	
145	2TON-C2- 6	C－2	〃	8	灰褐色	〃	〃	ヘラナデ	
146	2TON-B2- 792	B－2	〃	8	暗灰褐色	〃	〃	〃	

Tab. 10 土器観察表

図番地	遺物番号	出土区	器種	厚(㎜)	色調	胎土	調整 外	調整 内	備考
147	2TON-C2-1563	C－2	鉢胴部	7	淡灰褐色	滑石	柾目(タテ)・ヘラナデ	柾目(ヨコ)・ヘラナデ	
148	2TON-E2- 598	E－2	鉢口辺	8	暗褐色	〃	柾目(ヨコ)・ヘラナデ	ヘラナデ	
149	2TON-D2- 148	D－2	〃	10	赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	文様帯以下無文
150	2TON-A2- 418	A－2	鉢胴部	8	淡赤褐色	〃	〃	〃	
151	2TON-C2-1532	C－2	〃	8	明赤褐色	〃	〃	〃	
152	2TON-E3- 43	E－3	鉢口縁	11	〃	〃	〃	指頭痕・ヘラナデ	口縁肥厚
153	2TON-F3- 21	F－3	〃	8	灰褐色	〃	〃	ヘラナデ	〃
154	2TON-D3- 105	D－3	〃	9	暗赤褐色	〃	柾目・ヘラナデ	〃	波状口線・内側肥厚
155	2TON-C2- 65	C－2	〃	6	灰褐色	〃	ヘラナデ	柾目・ヘラナデ	径19cm
156	2TON-B2- 473	B－2	〃	6	〃	〃		指頭痕	波状口線
157	2TON-F2- 360	F－2	〃	7	灰褐色	〃	柾目・ヘラナデ	ヘラナデ	補修孔
158	2TON-F2- 210	F－2	〃	7	明赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	口縁肥厚
159	2TON-A2- 65	A－2	〃	8	灰黒色	〃	柾目・ヘラナデ	〃	〃
160	2TON-C2-1119	C－2	碗口縁	9	明赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	
161	2TON-C2- 987	C－2	鉢口縁	8	淡赤褐色	〃		指頭痕	口唇に凹点
162	2TON-C2-1518	C－2	〃	7	暗赤褐色	〃	ヘラナデ	柾目・ヘラナデ	〃
163	2TON-B2- 723	B－2	〃	7	黒褐色	〃	指頭痕・ヘラナデ	ヘラナデ	〃
164	2TON-C2- 50	C－2	〃	10	灰黒色	〃	ヘラナデ	〃	〃
165	2TON-D3- 42	D－3	〃	8	淡赤褐色	〃	〃	ヘラケズリ	刻目に近い凹点
166	2TON-D2- 662	D－2	〃	8	〃	〃	〃	指頭痕	〃
167	2TON-D2- 728	D－2	〃	8	〃	〃	〃	ヘラナデ	補修孔
168	2TON-E2- 258	E－2	〃	6	灰黒色	〃	ヘラナデ・ケンマ	柾目・ヘラナデ	口唇に刻目
169	2TON-G2- 165	G－2	〃	8	暗灰黄色	〃	ヘラナデ	指頭痕・ヘラナデ	口唇に沈線
170	2TON-C2- 751	C－2	〃	10	〃	〃	柾目	柾目	〃
171	2TON-F2- 564	F－2	鉢胴部	9	赤褐色	〃	柾目・ヘラナデ	柾目・ヘラナデ	
172	2TON-C2- 662	C－2	鉢口辺	7	灰黒色	〃	ヘラナデ	ヘラケズリ	補修孔
173	2TON-A2- 755	A－2	鉢口縁	10	〃	砂粒・石英粒・雲母		ヘラナデ	平行沈線
174	2TON-F3- 136	F－3	〃	8	〃	〃	ヘラナデ・ケンマ	柾目・ヘラナデ・ケンマ	〃
175	2TON-T2- 24	T－2	〃	8	暗黄褐色	砂粒・雲母・長石	ヘラナデ	ヘラナデ	〃
176	2TON-G2- 85	G－2	〃	10	暗褐色	〃	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ・ケンマ	擬縄文
177	2TON-C2- 844	C－2	〃	9	明赤褐色	砂粒・雲母・長石・石英粒		ヘラナデ	平行凹線
178	2TON-A3- 377	A－3	〃	8	暗灰褐色	砂粒・石英粒・雲母			ローリング
179	2TON-B2-1185	B－2	〃	8	黒褐色	砂粒・石英粒・雲母・長石		ヘラナデ	渦文
180	2TON-A2- 553	A－2	〃	8	暗灰褐色	砂粒・雲母	ヘラナデ	ヘラナデ	ローリング
181	2TON-A2- 325	A－2	鉢胴部	9	〃	砂粒・雲母・長石		柾目・ヘレナデ	沈線による文様
182	2TON-C2-1516	C－2	〃	8	赤褐色	〃	ヘラナデ	ヘラナゲ・ケ	ローリング・渦文
183	2TON-A2- 156	A－2	〃	8	暗赤褐色	砂粒・石英粒・雲母	柾目・ヘラナデ	ヘラナデ	入組文・擬縄文
184	2TON-O2- 30	O－2	鉢口縁	12	〃	砂粒・雲母		ヘラナデ・ケンマ	短斜線文・渦文
185	2TON-A2- 175	A－2	〃	9	暗褐色	砂粒・石英粒・雲母	柾目・ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ	短斜線文
186	2TON-C3- 34	C－3	〃	7	暗灰褐色	砂粒・雲母・長石			〃
187	2TON-B2- 536	B－2	〃	8	〃	砂粒・石英粒			〃
188	2TON-A2- 337	A－2	〃	10	灰黒色	砂粒・石英粒・雲母	ヘラナデ	ヘラナデ	短斜線による羽状文
189	2TON-A2- 594	A－2	〃	12	明黄灰色	〃	〃		径13.2cm
190	2TON-B2- 519	B－2	〃	8	暗褐色	砂粒・雲母・長石	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ・ケンマ	短斜線文
191	2TON- 2- 2	T－2	〃	12	明褐色	砂粒(多)・石英粒			
192	2TON-C2-1088	C－2	〃	8	灰黒色	砂粒・石英粒・雲母	ヘラナデ		口唇に刻目

Tab. 11　土器観察表

図番号	遺物番号	出土区	器　種	厚(%)	色　調	胎　土	調　整		備　考
							外	内	
193	2TON-D2- 90	D－2	浅鉢口辺	6	灰黒色	砂粒・雲母	ヘラナデ	ヘラナデ	晩期
194	2TON-G2- 168	G－2	〃	6	黄灰色	〃	〃	〃	〃
195	2TON-D2- 790	D－2	鉢胴部	8	〃	〃		ヘラナデ	晩期組織痕
196	2TON-B2- 891	B－2	鉢底部	16(底)	明黄灰色	滑石	指頭痕	柾目・ヘラナデ	底部まで凹線，径9.5cm
197	2TON-E2- 57	E－2	〃	10(〃)	灰黒色	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	〃　，径10cm
198	2TON-B2- 102	B－2	〃	13(〃)	明赤褐色	〃	指頭痕	〃	縁に凹点，径14cm
199	2TON-C2- 979	C－2	〃	9(〃)	〃	〃	ヘラナデ	〃	〃　，径10cm
200	2TON-D2-1503	D－2	〃	16(〃)	暗灰黒色	〃	指頭痕	指頭痕	径11cm
201	2TON-B2- 684	B－2	〃	10(〃)	〃	〃	〃		径14cm
202	2TON-D2-1639 E2- 970	D－2 E－2	〃	14(〃)	明赤褐色	〃	柾目・ヘラナデ	指頭痕・ヘラナデ	縁に凹点，径14cm
203	2TON-B2- 456	B－2	〃	10(〃)	灰白色	〃	指頭痕・柾目・ヘラナデ		ローリング，径16cm
204	2TON-C2- 664	C－2	〃	14(〃)	明赤褐色	〃	〃	ヘラナデ	〃　，径18cm
205	2TON-B2- 293	B－2	〃	9(〃)	暗灰黄色	〃	ヘラナデ	〃	〃　，〃
206	2TON-E2- 73	E－2	〃	15(〃)	明赤褐色	〃	〃		〃　，径11cm
207	2TON-F2- 480	F－2	〃	15(〃)	〃	〃	ヘラナデ	指頭痕・ヘラナデ	径14cm
208	2TON-P2- 699	D－2	〃	16(〃)	〃	〃	指頭痕	ヘラナデ	径11cm
209	2TON-D2- 783	D－2	〃	13(〃)	〃	〃	指頭痕・ヘラナデ		
210	2TON-B2- 99	B－2	〃	13(〃)	〃	〃	〃		径12cm
211	2TON-D2- 696	D－2	〃	13(〃)	〃	〃	指頭痕	指頭痕・ヘラナデ	径16cm
212	2TON-D2- 18	D－2	〃	19(〃)	暗赤褐色	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	厚手
213	2TON-A3- 111	A－3	〃	13(〃)	明赤褐色	〃	〃	〃	径18cm
214	2TON-F2- 562	F－2	〃	8(〃)	暗黄灰色	〃	柾目・ヘラナデ	〃	径14cm
215	2TON-D2- 914	D－2	〃	16(〃)	明赤褐色	〃	指頭痕・柾目・ヘラナデ	指頭痕・ヘラナデ	径17cm
216	2TON-D2-1389	D－2	〃	15(〃)	〃	〃		柾目・ヘラナデ	径16cm
217	TON-2 - 59	T－2	〃	15(〃)	〃	〃	ヘラナデ		径16cm
218	2TON-D2-1107	D－2	〃	14(〃)	〃	〃	指頭痕	ヘラナデ	ローリング，径9.8cm
219	2TON-C2- 972	C－2	〃	12(〃)	灰赤色	〃	指頭痕	指頭痕	径12cm
220	2TON-B3- 41	B－3	〃	13(〃)	〃	〃	ヘラナデ		ローリング，径13.3cm
221	2TON-F3- 14	F－3	〃	8(〃)	明赤褐色	〃	〃	指頭痕	
222	2TON-D2-1819	D－2	〃	12(〃)	暗赤褐色	〃	ヘラナデ	指頭痕・柾目・ヘラナデ	径11.5cm
223	2TON-B2- 127	B－2	〃	19(〃)	明赤褐色	〃	〃		径10cm
224	2TON-E2- 410	E－2	〃	11(〃)	明赤褐色	〃	指頭痕・ヘラナデ	指頭痕・柾目・ヘラナデ	底部に孔，径13.1cm
225	2TON-E3- 26	E－3	〃	7(〃)	黒褐色	〃	柾目・ヘラナデ	ヘラナデ	径８cm
226	2TON-D2- 516	D－2	〃	14(〃)	灰赤色	〃	〃	〃	径14.2cm
227	2TON-E2- 149	E－2	〃	13(〃)	褐灰色	〃	指頭痕・ヘラナデ	〃	径10.4cm
228	2TON-D2- 273	D－2	〃	9(〃)	明赤褐色	〃	柾目・ヘラナデ	指頭痕・柾目・ヘラナデ	ローリング，径11.5cm
229	2TON-F2-391	F－2	〃	15(〃)	〃	〃		ヘラナデ	
230	2TON-F2-3955	F－2	〃	18(〃)	〃	〃	柾目・ヘラナデ	〃	径15cm
231	2TON-B2- 390	B－2	〃	13(〃)	明赤褐色	〃	〃	〃	ローリング，径13.2cm
232	2TON-F2- 237	F－2	〃	7(〃)	暗褐色	〃	ヘラナデ	〃	径13cm
233	2TON-F2- 534	F－2	〃	7(〃)	灰褐色	〃	〃	〃	径16.8cm
234	2TON-C2- 940	C－2	〃	7(〃)	明赤褐色	〃	〃	〃	径12cm
235	2TON-D2- 123	D－2	〃	10(〃)	〃	〃	〃	〃	径14.2cm
236	2TON-D2- 87	D－2	〃	11(〃)	暗赤褐色	〃	柾目・ヘラナデ	柾目・ヘラナデ	径13.6cm
237	2TON-F2- 131	F－2	〃	11(〃)	〃	〃			
238	2TON-D2-1219	D－2	〃	11(〃)	暗赤褐色	〃	柾目・ヘラナデ	柾目・ヘラナデ	6と同一個体，径13.6cm
239	2TON-F2- 605	F－2	〃	11(〃)	赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	径16cm
240	2TON-C2- 468	C－2	〃	10(〃)	〃	〃	柾目・ヘラナデ	指頭痕・ヘラナデ	径14.8cm
241	2TON-E2- 904	E－2	〃	8(〃)	黒褐色	〃	指頭痕		径10cm
242	2TON-C2- 21	C－2	〃	14(〃)	明赤褐色	〃	〃		径９cm

Tab. 12　土器観察表

図番号	遺物番号	出土区	器　種	厚(%)	色　調	胎　土	調　整		備　考
							外	内	
243	2TON-B3- 44	B－3	鉢底部	21(底)	灰褐色	滑石	指頭痕	ヘラナデ	ローリング，径9.5cm
244	2TON-B2- 765	B－2	〃	11(〃)	明赤褐色	〃	ヘラナデ	柾目・ヘラナデ	径14cm
245	2TON-C2-1075	C－2	〃	13(〃)	暗赤褐色	〃	〃		内部剝落，径18cm
246	2TON-O2- 37	O－2	〃	8(〃)	〃	〃	柾目・ヘラナデ	ヘラナデ	径14cm
247	2TON-F2- 11	F－2	〃			〃			
248	2TON-F2- 590	F－2	〃	12(〃)	極暗赤褐色	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	径12cm
249	2TON-G3- 12	G－3	〃	12(〃)	明赤褐色	〃	柾目・ヘラナデ	〃	あげ底，径15.3cm
250	2TON-B2- 728	B－2	〃	11(〃)	暗赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	径15cm
251	2TON-E2- 999	E－2	〃	14(〃)	黒褐色	〃		柾目・ヘラナデ	径14cm
252	2TON-C2- 177	C－2	〃	10(〃)	赤褐色	〃		ヘラナデ	径９cm
253	2TON-G2- 3	G－2	〃	11(〃)	明赤褐色	〃	指頭痕	〃	径10.5cm
254	2TON-B3- 22	B－3	〃	11(〃)	赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	径16cm
255	2TON-E2- 60	E－2	鉢高台	15	〃	〃	柾目・ヘラナデ	柾目・ヘラナデ	透かしあり，径17cm
256	2TON-E2- 65	E－2	鉢底部	11(底)	〃	砂粒・雲母・石英粒・長石		ヘラナデ	ローリング，径10cm
257	2TON-G2- 70	G－2	〃	14(〃)	明赤褐色	〃	柾目・ヘラナデ	柾目・ヘラナデ	径12cm
258	2TON-E2- 9	E－2	〃	11(〃)	暗赤褐色	砂粒・雲母・長石	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
259	2TON-E2- 29	E－2	〃	11(〃)	橙	砂粒・雲母・石英粒・長石	柾目・ヘラナデ	ヘラナデ	径12cm
260	2TON-B2- 20	B－2	〃	9(〃)	明赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	径14cm
261	2TON-D2- 324	D－2	〃	11(〃)	橙	砂粒・石英粒・雲母	〃		径10.5cm
262	2TON-C2- 83	C－2	深鉢底部	20(〃)	暗赤褐色	砂粒・雲母・長石	柾目・ヘラナデ		晩期，径6.5cm
263	2TON-O2- 8	O－2	甕底部	10(〃)	明赤褐色	〃	ハケ目	ハケ目	弥生，径７cm
264	2TON-O2- 28	O－2	甕口縁	7	橙	砂粒・石英粒・雲母	〃	〃	弥生甕，径35cm
265	2TON-O2- 3	O－2	〃	7	〃	〃	〃		〃，径26.5cm
266	2TON-F3- 17	F－3	〃	7	〃	〃	〃		〃
267	2TON-D2- 303	D－2	円盤	9	暗灰褐色	滑石			底部利用
268	2TON-F2- 562	F－2	〃	9	赤褐色	〃	ヘラナデ	柾目・ヘラナデ	胴部 〃
269	2TON-B2- 555	B－2	〃	7	灰褐色	〃	〃	〃	〃
270	2TON-F2- 287	F－2	〃	8	明赤褐色	〃			〃，ローリング
271	2TON-B2- 432	B－2	〃	8	淡灰黒色	〃			有孔
272	TON-1 - 967	T１	〃	8	暗褐色	砂粒・石英粒・雲母・長石	柾目	ヘラナデ	

4. 第二次調査出土石器 (Fig. 57～77, PL. 38～51)

二次調査出土の剝片石器として154点を図化した。1～10は旧石器時代の遺物で，1・2は台形石器。特に1は，素材剝片の打面部にブランティングを加え，もう一端は表面から主要剝離面側へ加工することが特徴的である。3・4は，Fig. 27 の三陵尖頭器よりも調整は粗く，4については後に彫器として再生されている。5は白ヒスイを使用した，スクレイパーと思われるもので，先端部は欠損し，両側辺の加工部分を除いて表裏面共に白い自然面を残す。11～158の石器は，第二次調査出土土器の主体である阿高～南福寺式土器の中に包括されようが，出水・北久根・鐘ケ崎式土器も出土しているため，石器組成自体も幾分注意を払わなければならない点をも考慮しなければならない。

11～13は安山岩製の石銛，箆状石器である。石銛は，縄文前期～後期にかけて検出されており，その石器自体の特殊性，又海浜部の遺跡に多いなど海洋性の石器として注目されるところである。11は最大長10.5cm，幅4.1cmを測り，12は最大長8.4cm，幅5.1cmを測る。14～103は石鏃であるが，14・15については石銛としての機能を持ちうる。15は，先端部が丸く作られ，側辺が鋸歯を呈するため，大型の石銛としても考えられる。遺跡における石鏃の特徴は，16～34の比較的大型のもの，35～55の小型のもの，55～103までの中型のものに大きく分類される。又，脚自体の開きは，大型から小型までほぼ同じで，側辺を鋸歯縁にする資料が同様に見られるなど，同一時期内における変化と見なせる資料である。第一次調査出土の石鏃との大きな相違は，剝片鏃よりも通常の両面加工の石鏃が多量であるということである。104～118は石鋸を取り上げたが，この石鋸においても，104～109のような三角形を呈するもの，110～116のよう

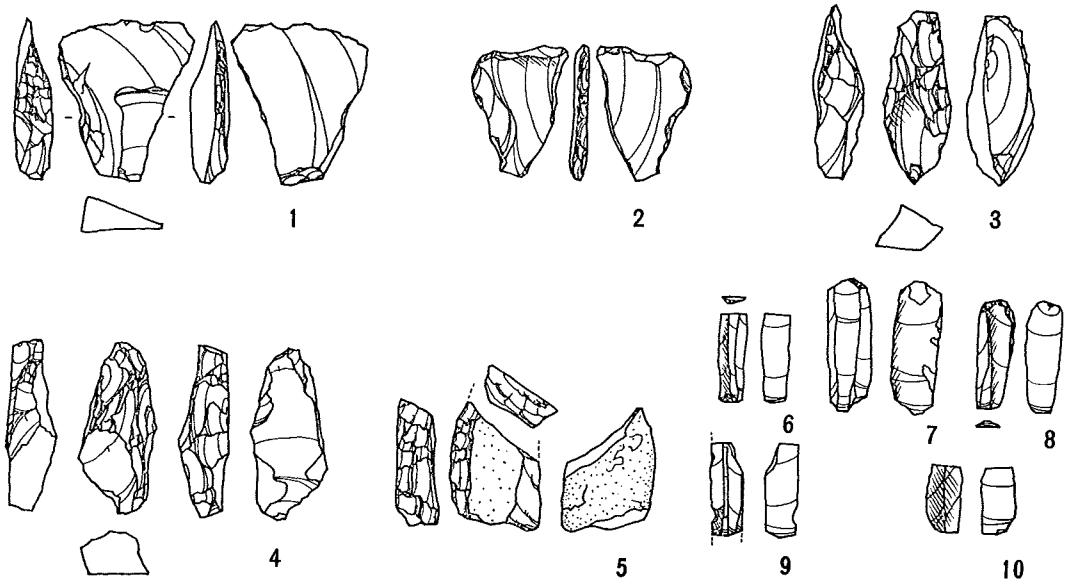


Fig. 59 二次調査出土石器実測図（2/3）

に方形状のもの，117・118のように刃部が孤状になるものなどがある。先に揚げた15なども，あるいはこのタイプにあてはまるものかも知れない。これらの形態の相違は歴然としており，各々機能的に変化を持つのではないだろうか。119～126はサイドブレイド，スクレイパー，石錐など縄文中～後期に見られる石器である。127～151は縦長剥片を図化したものであるが，一次調査同様，剥片の中における絶対量は少ない傾向にある。又，石核も縦長剥片石核と思える資料の出土はない。155～158は石製垂飾，及び石製円盤である。155は緑色のヒスイ製で，烏帽子状に作り出されている。156は暗緑色で，四角形状に作り出されており，中央の孔は歪である。157は滑石製で長楕円形を呈し下部の方がややふくらみ気味である。158の石製円盤は片製岩を使用し，周縁は磨かれている。

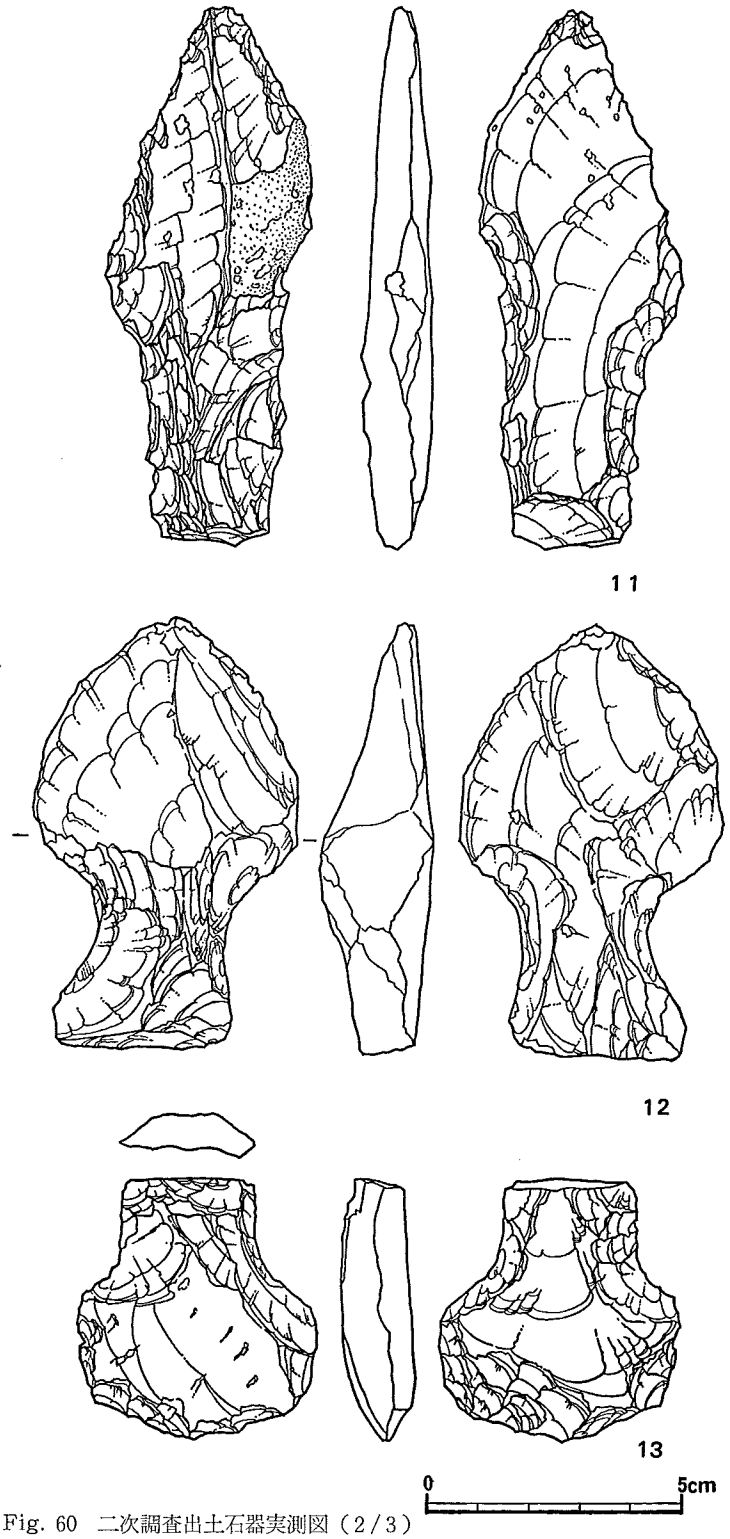


Fig. 60　二次調査出土石器実測図（2/3）

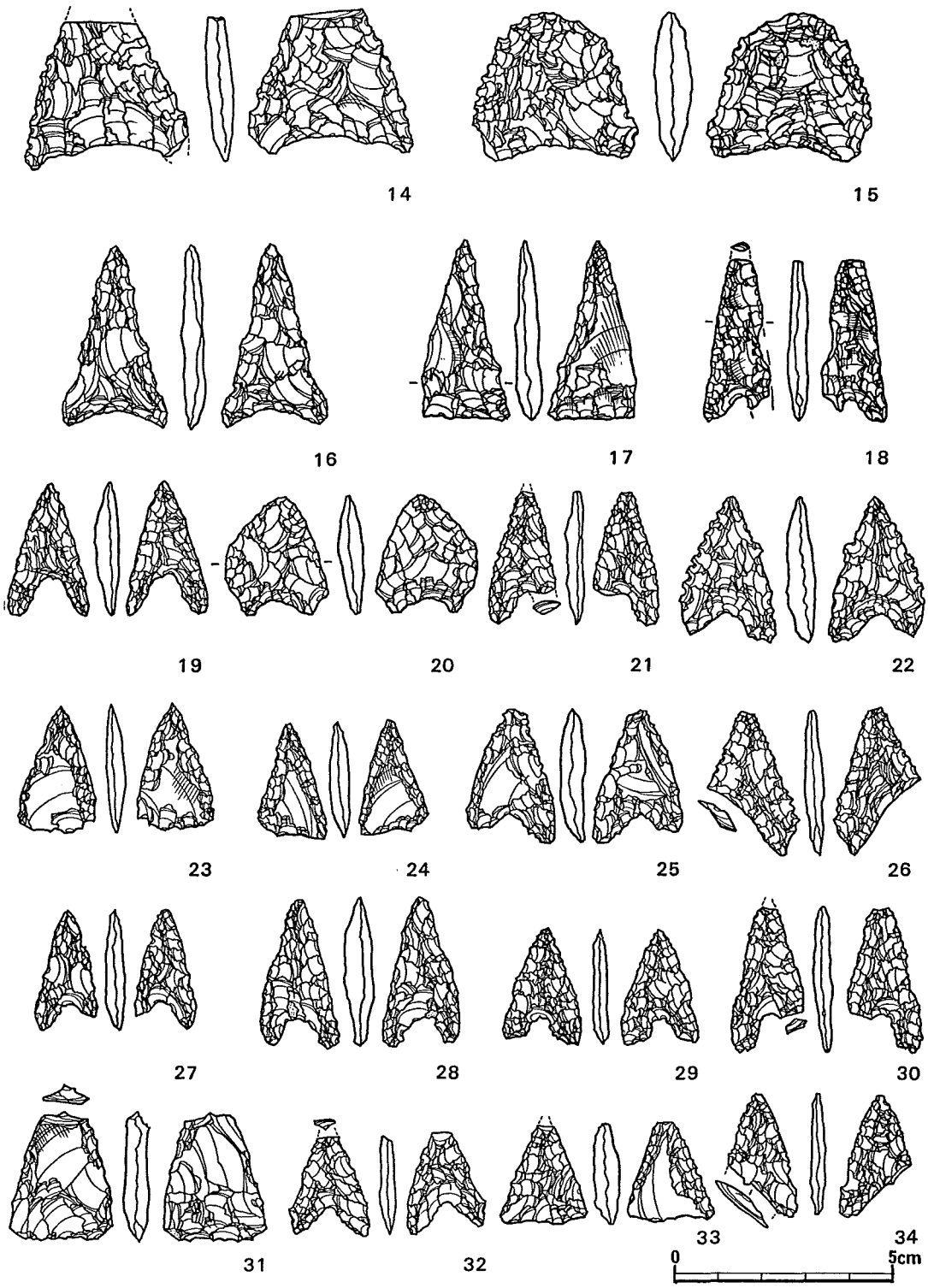


Fig. 61　二次調査出土石器実測図（2/3）

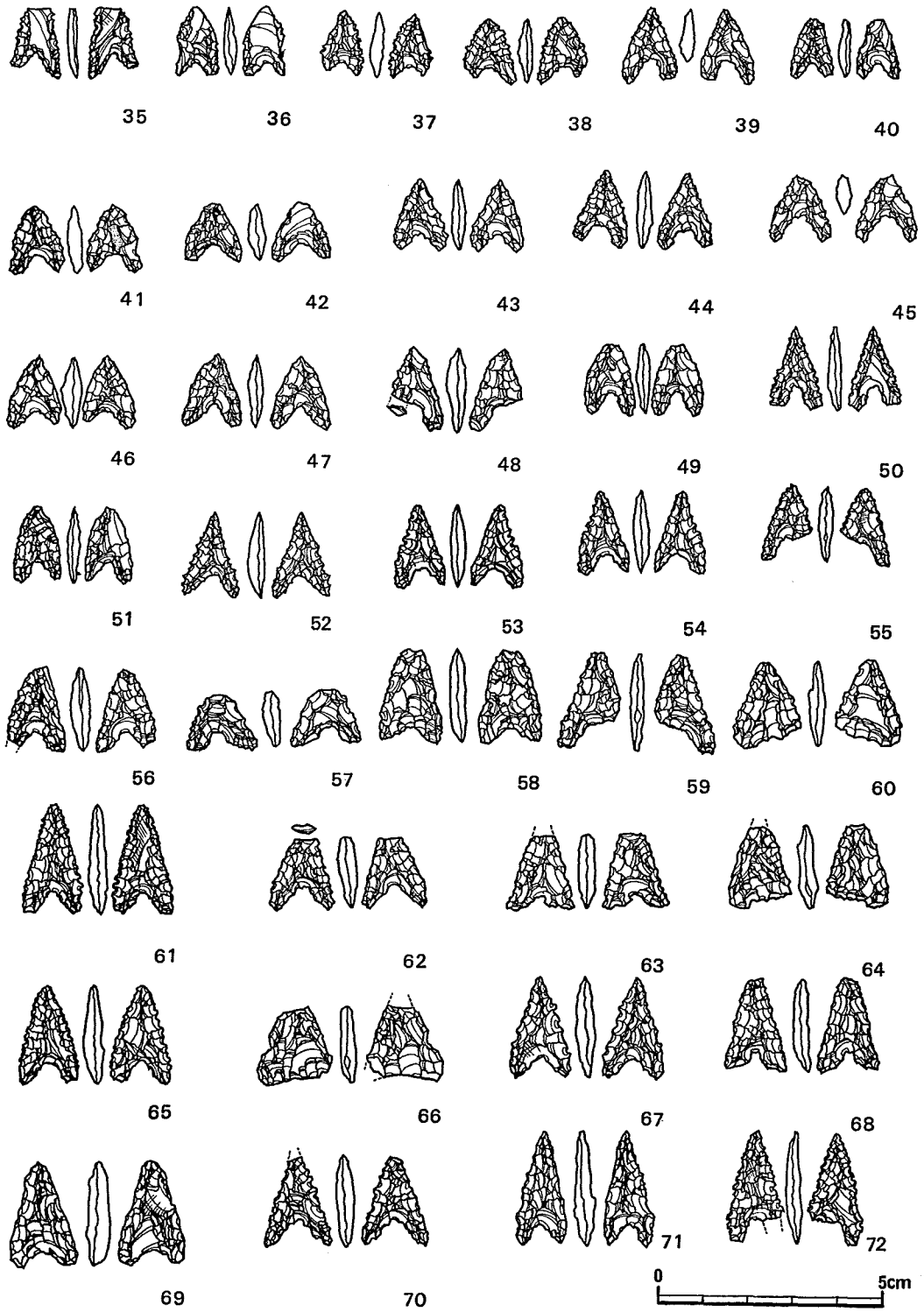


Fig. 62　二次調査出土石器実測図（2/3）

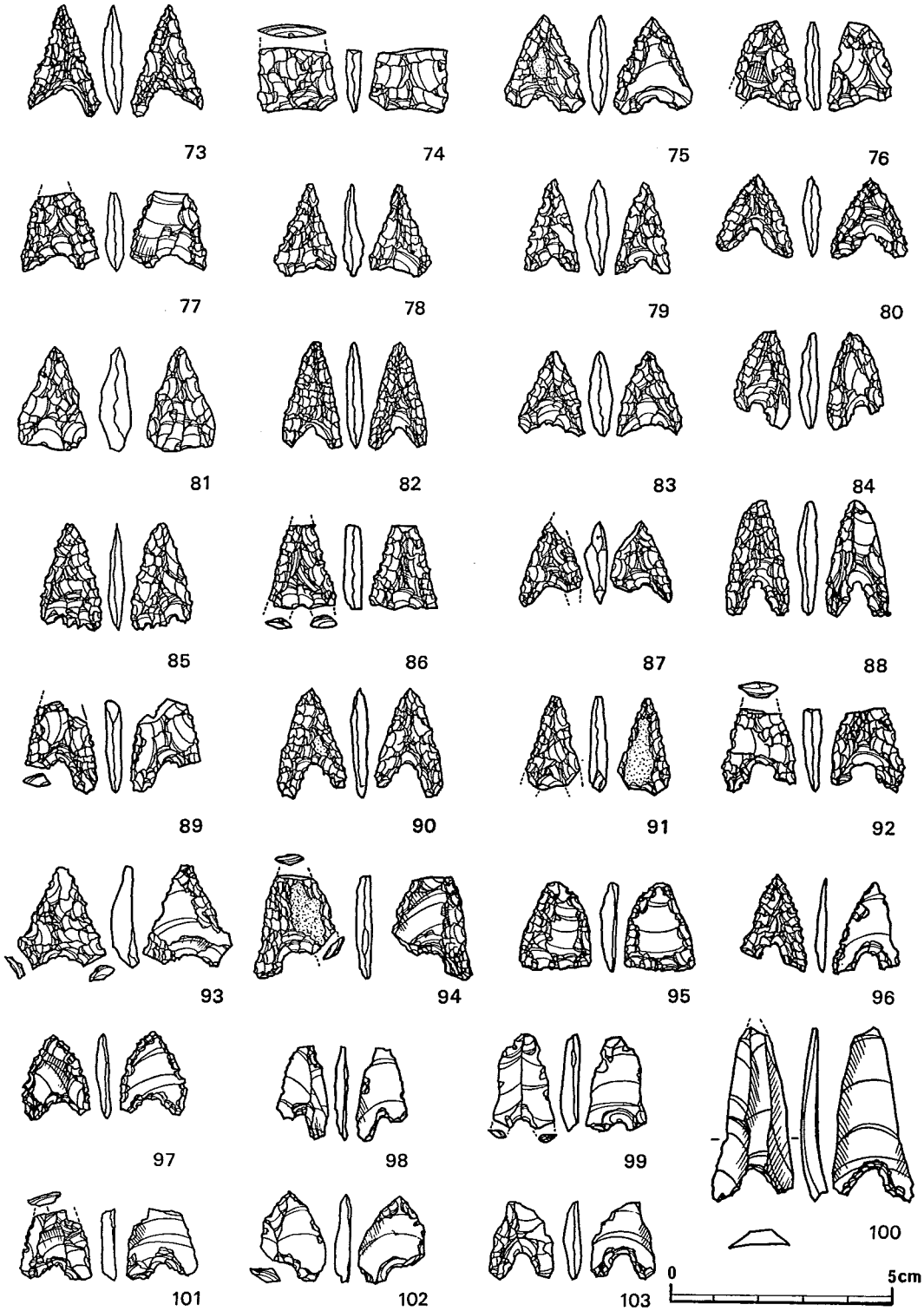


Fig. 63　二次調査出土石器実測図（2/3）

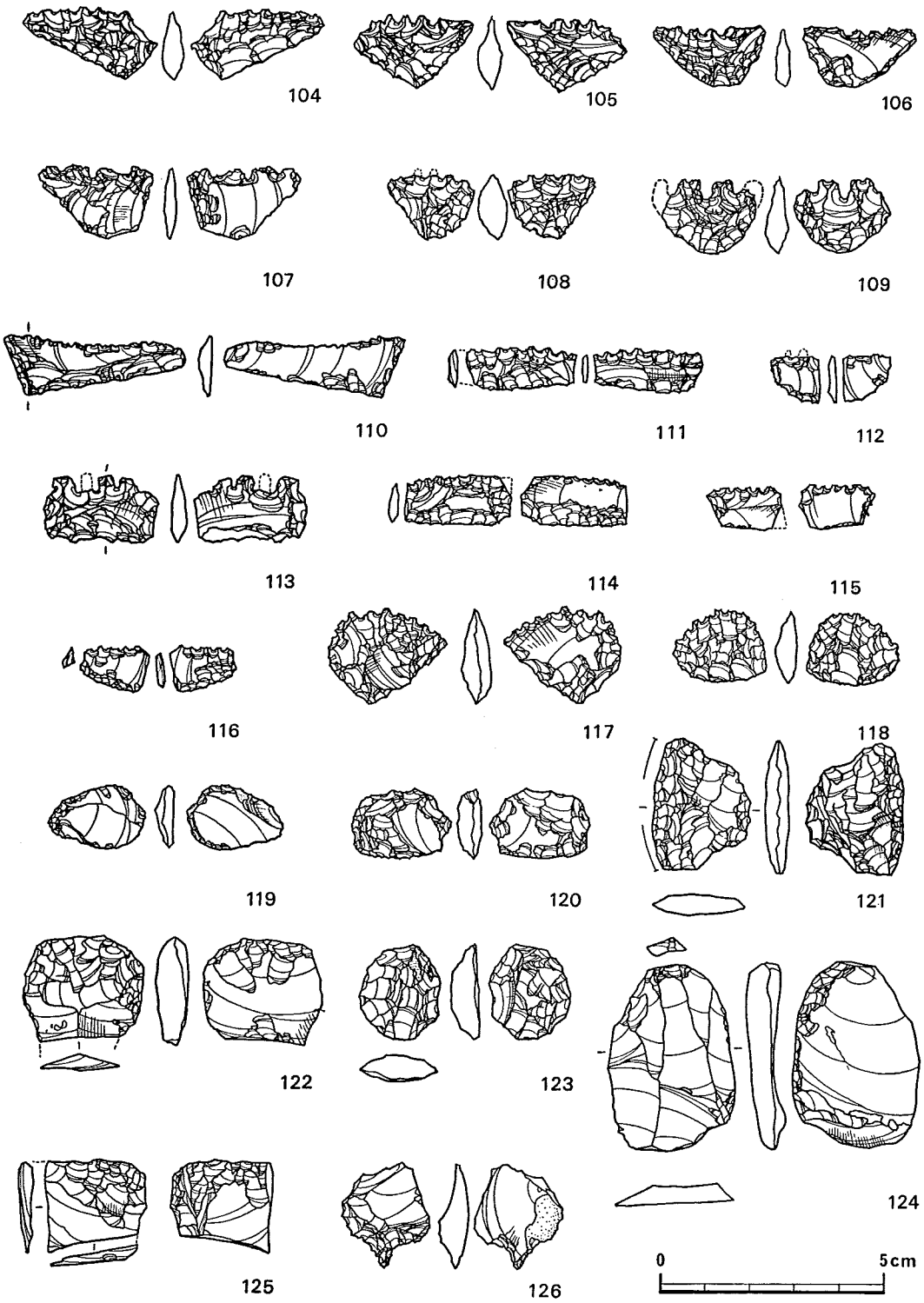


Fig. 64　二次調査出土石器実測図（2/3）

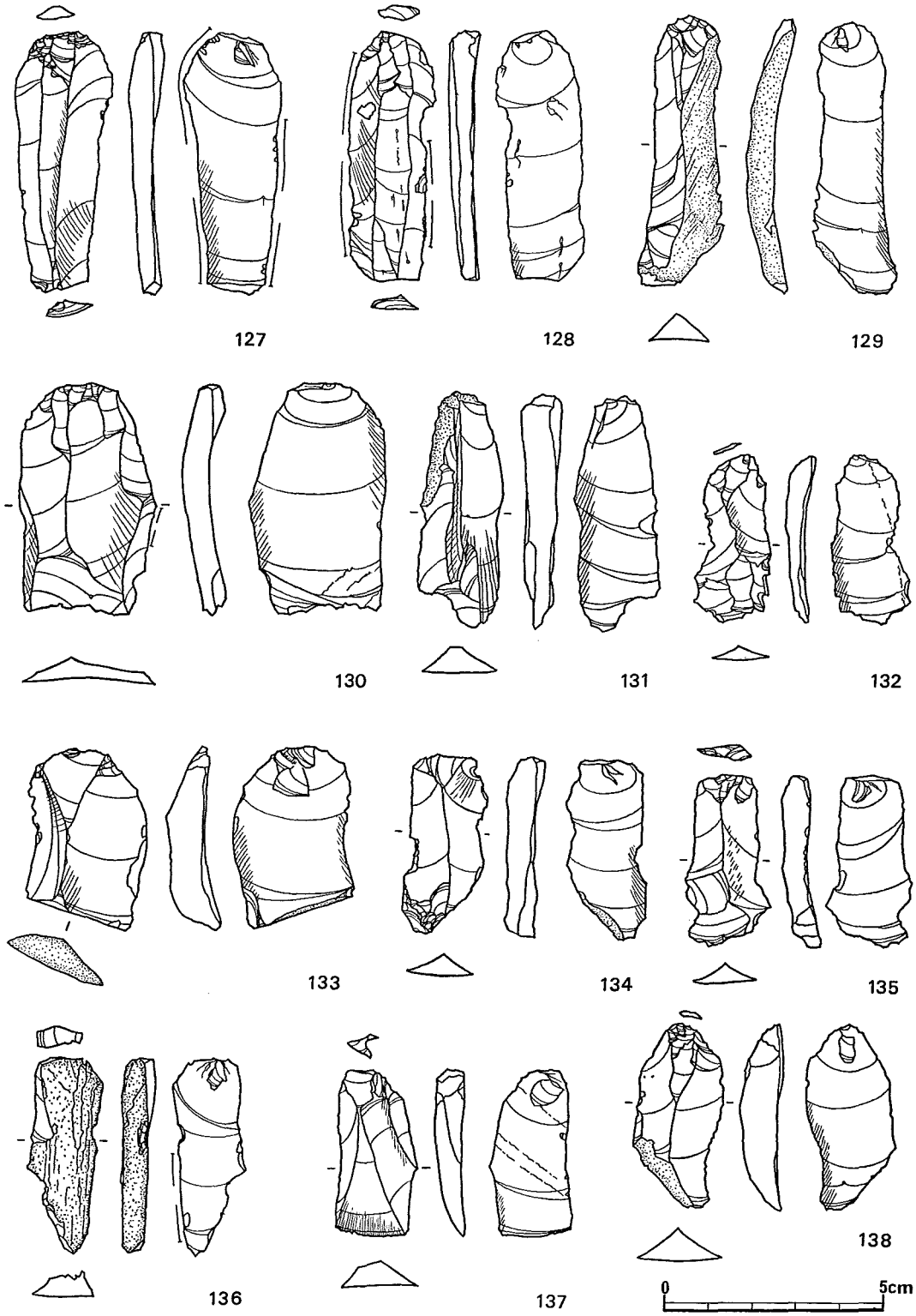


Fig. 65　二次調査出土石器実測図（2/3）

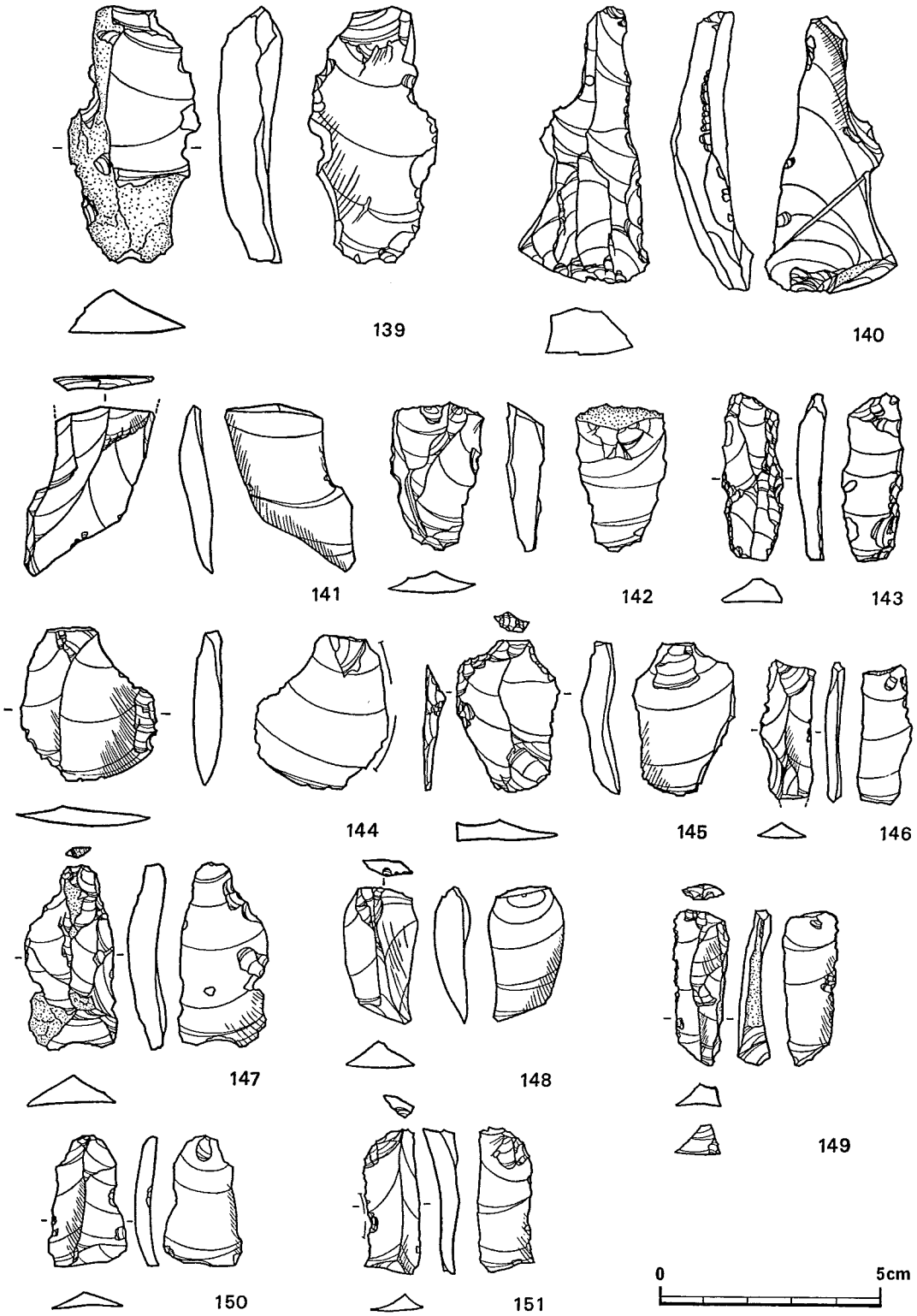


Fig. 66　二次査調出土石器実測図（2/3）

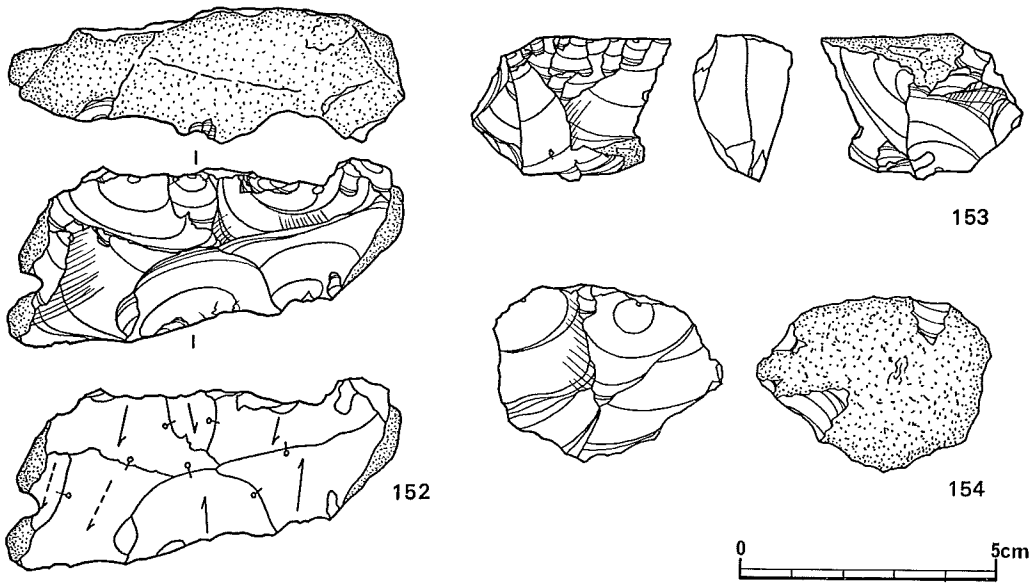


Fig. 67　二次調査出土石器実測図（2/3）

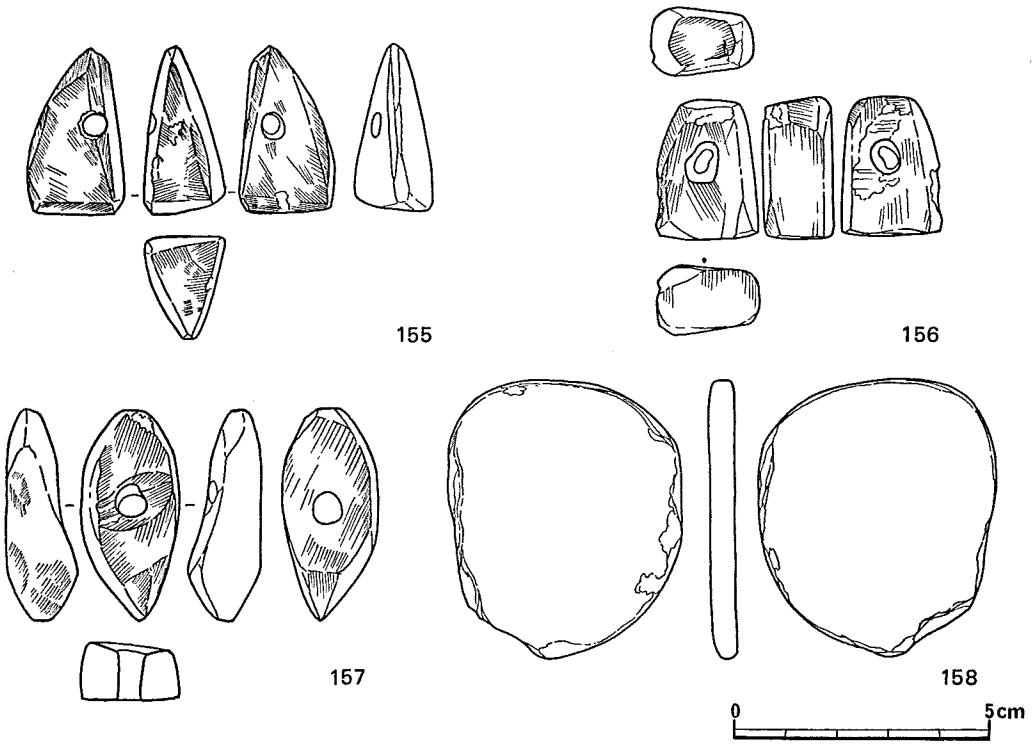


Fig. 68　二次調査出土石器実測図（2/3）

石斧（Fig. 69～71, PL. 47）

殿崎遺跡本調査において出土した30点中19点を図示した。磨製石斧が15点，打製石斧２点，その他４点である。蛇文岩，玄武岩，安山岩，硬質砂岩，粘板岩，疑灰岩質があり石質は豊富である。20cm近くの大形のものから10cm内外の小形のものまである。刃部は両刃のものがほとんどで片刃状のものは１点のみである。

Ⅰ類　大形で長さが20cm近くのもの

　a扁平なもの　159，161

　b厚手のもの　165，169，171

Ⅱ類　中形のもので刃部が左右対象とならないもの

　a太形蛤刃状のもので中形である　167，170

　b刃部の片側が大きく内弯し左右対象とならない　173

Ⅲ類　小形のもので断面は扁平となるもの

　a刃部が直線的なもの　172，173，174

　b刃部が円形のもの　175，176

Ⅳ類　自然礫（自然面を残す）を利用しているもの　160，162，164，166，177

Ⅴ類　片刃状の刃部をもつもの　168

以上５つに大別したが，石質・形態と本遺跡の石斧はバラエティーに富んでいる。特にⅤ類の168は，弥生時代の代表的な石斧とされる柱状片刃石斧に酷似している。しかし本遺跡では，縄文時代中期～晩期の遺物が集中しており，この１点だけを弥生時代の遺物として取り上げにくい。そこで，縄文時代の遺跡である長崎県壱岐郡の名切遺跡[註1]出土の方柱状片刃石斧や同県南高来郡の朝日山遺跡[註2]出土の扁平片刃石斧とも，酷似するし，朝日山遺跡出土の石斧も両頭である点などから，柱状片刃石斧は，弥生時代以前の石斧である可能性が十分あると思われるが断定はしがたい。今後の研究に期待したい。

参考文献

註１　長崎県教育委員会「名切遺跡」長崎県文化財報告書　第71集　1985

註２　長崎県小浜町教育委員会「朝日山遺跡」小浜町文化財報告書　第１集　1981

掻器・削器（Fig. 72―１～５, PL. 48）

１．　２共に横に細長く，扁平で楕円形状を呈した掻器で，片側を欠損している。器種の縁辺に入念に２次加工を施している。

３～５は縦長剝片を利用した削器で，素材の一側縁部に２次加工を施し刃部を作り出している。**１～５**共に安岩製。

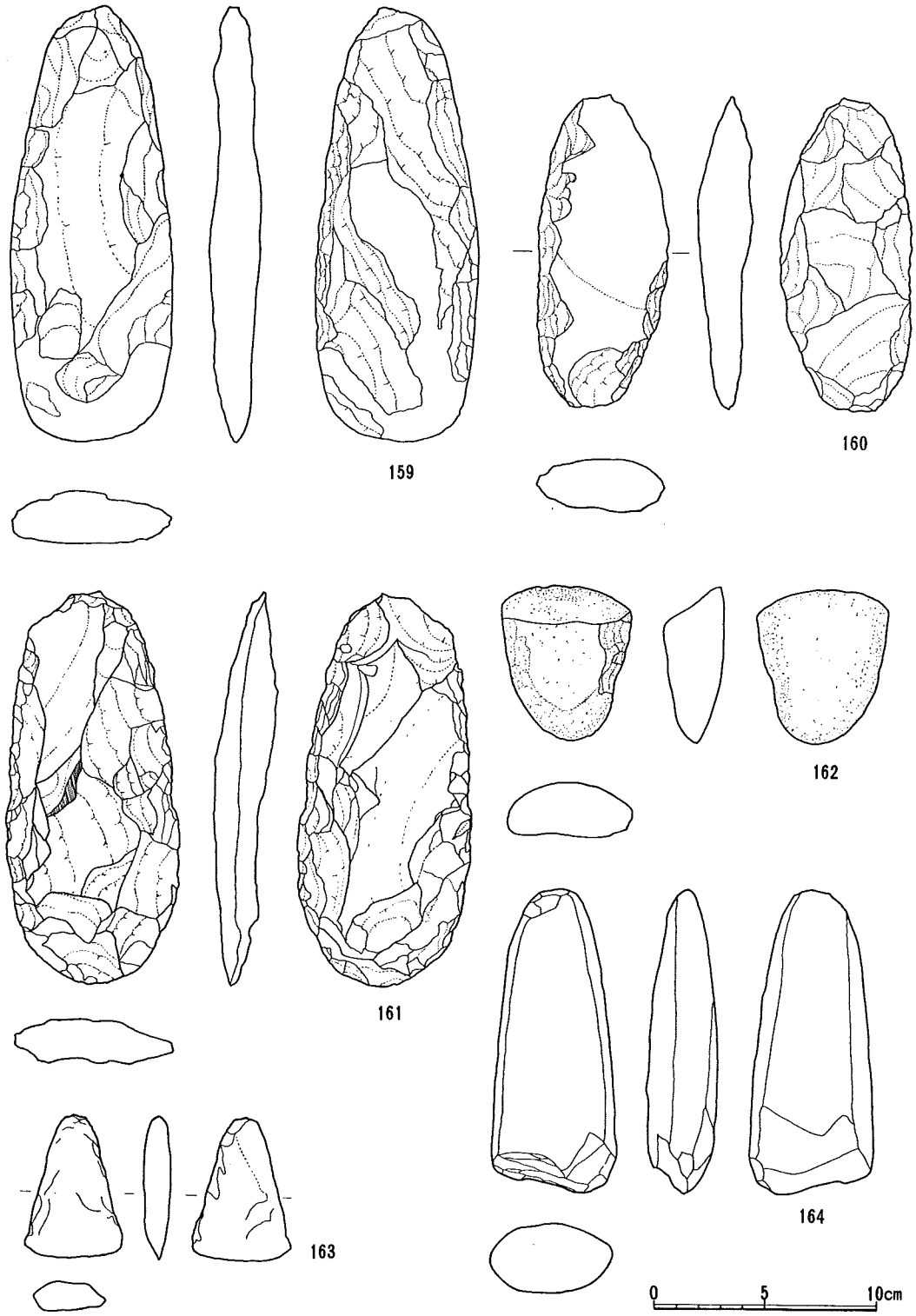


Fig. 69　二次調査出土実測図（1/3）

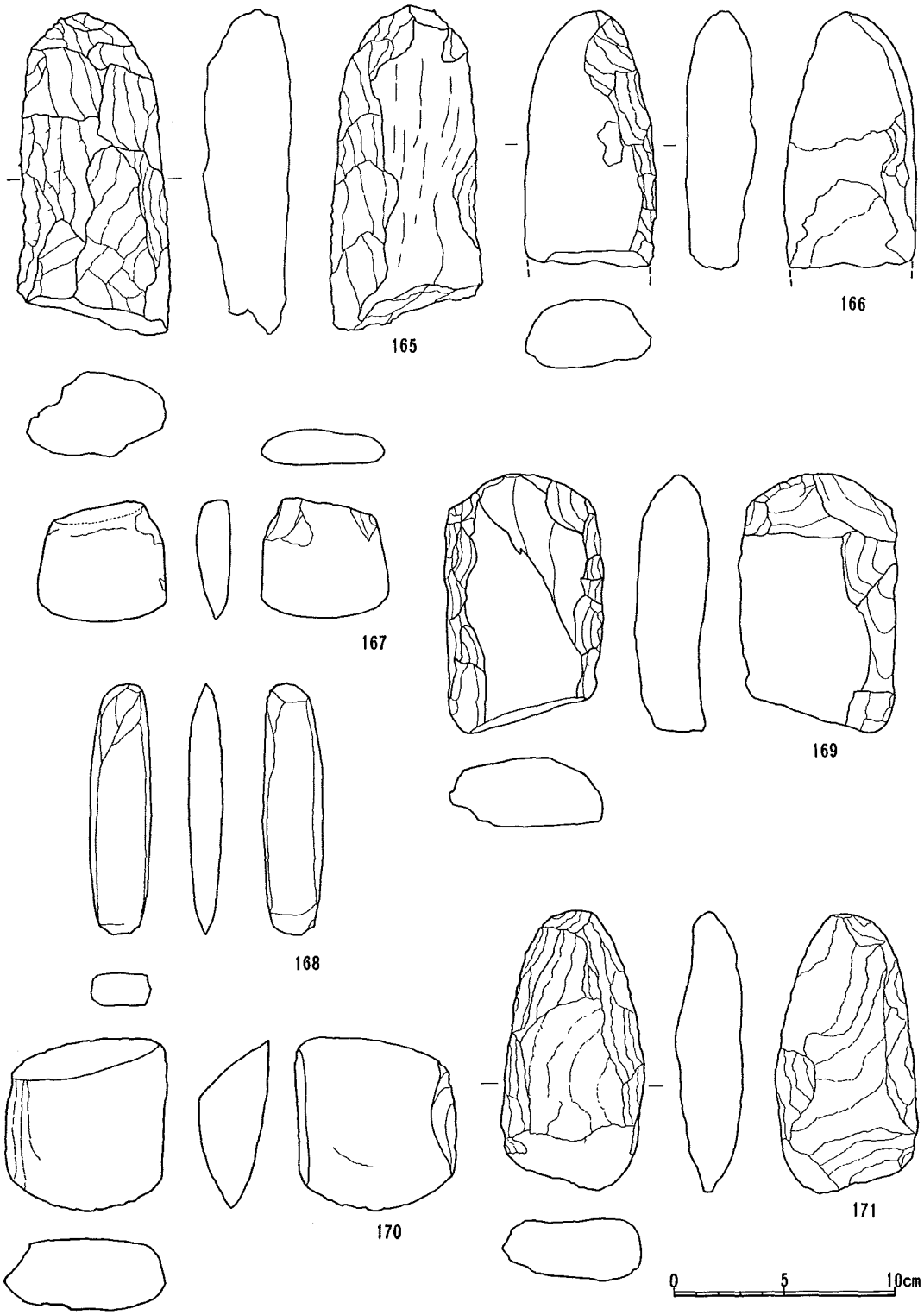


Fig. 70　二次調査出土実測図（1/3）

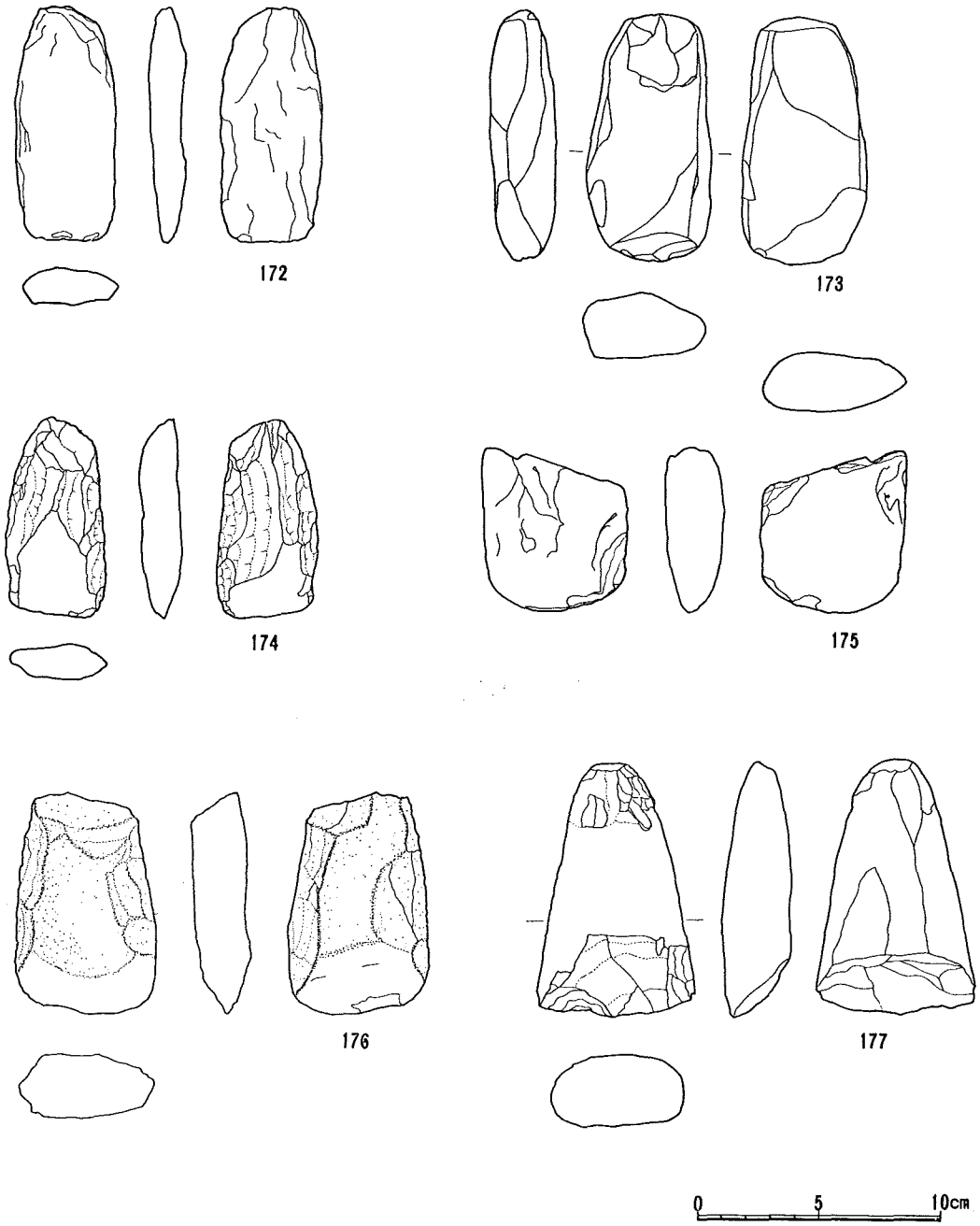


Fig. 71　二次調査出土実測図（1/3）

Tab. 13

番号	出土区 層位	法量 cm g 長さ 巾 厚 重量	石質	特徴	備考
159	H-2 136	19.4 7.2 2.3 425	凝灰岩	偏平な礫利用。刃部、胴部の一部に研摩痕。他の摩製石斧に比して著しく扁平で断面においてやや円弯する。	凝製石斧
160	E-2 362	14.0 5.8 2.3 243	凝灰岩	自然面を片面に残し、他面より全周にわたって剝離整形。刃部に研摩痕。使用により刃部に欠損。	摩製石斧
161	H-3 13	17.6 7.2 1.8 460	玄武岩	胴部一部に研摩痕が認められるが全周にわたって剝離整形刃部附近では、厚さがうすくなりやや内弯する。	局部 摩製石斧
162	C-2 194	6.9 5.6 2.7 121	玄武岩	刃部のみ残存。両刃の刃部を丁寧に仕上げている。	摩製石斧
163	C-2 154	6.5 3.3 1.2 43	凝灰岩	バチ形を呈し、比較的小形の礫を利用。両刃で刃部を研摩し、縞が認められる。	摩製石斧
164	A-2 表採	13.7 5.4 3.1	安山岩	自然礫を利用し、刃部に使用による欠損。	
165	D-2 783	14.7 6.3 3.8 465	蛇紋岩	摩製石斧の未製品。	
166	A-2 45	11.3 5.7 3.2 295	硬質砂岩	片面に自然面を残し、他面より全周に剝離整形。	打製石斧
167	C-2 146	5.3 5.6 1.8	玄武岩	摩製石斧の刃部。両凸刃で刃縁は丸くなっている。	摩製石斧
168	G-2 188	11.3 2.8 1.6 78	粘板岩	断面は長方形を呈し、刃部に縞が認められる。両頭である。全面よく研かれており、刃部の一部欠損	摩製石斧
169	N-4 表採	11.7 6.9 3.1 403	玄武岩	自然面を残し、全周にわたって剝離整形。基部を欠損	打製石斧
170	O-3 9	7.6 7.1 2.9 260	粘板岩	蛤刃、基部を欠損。	摩製石斧
171	B-3 19	13.7 6.3 2.9 192	蛇紋岩	刃部に研摩痕と使用による剝離が認められる。また胴部の一部にも研摩痕が認められる。	摩製石斧
172	D-2 203	7.6 3.4 1.2 87	玄武岩	小形の礫を利用。整形は片面に一次剝離面を残し、他面より剝離調整を行っている。	打製石斧
173	E-2 表採	10.1 5.0 3.1 200	蛇紋岩	基部の一部を欠損。刃部は両刃で斜めに縞が認められる。比較的荒い整形。	摩製石斧
174	F-2 322	8.1 4.1 1.6 72	安山岩	刃部に研摩痕。他の部分は全周に剝離整形。小形の礫利用。	摩製石斧
175	T-1 32	6.7 5.7 2.4 122	蛇文岩	刃部のみ残内、蛤刃で両刃である。	摩製石斧
176	P-2 1	8.7 5.5 2.1 192	凝灰岩	刃部は研摩、他は全周にわたり剝離調整。	摩製石斧
177	N-3 2	10.2 5.5 2.8 240	玄武岩	刃部を研摩、研摩は胴部の一部まで施されているが他は、自然面である基部欠損	摩製石斧

箆状石器（Fig. 72—183～186, PL. 48）

刃部の形態に特徴をもつ石器が5点出土している。2次加工は器表裏面より鋭利な刃部と側縁部を作り出すように施され，胴部は刃部に比べて細くなり，刃部の両端が張り出して逆台形状で，断面は菱形を呈す。183～186共に安山岩製。

この器種は機能面で漁貝類を獲得するための切截・起す・剝ぎ取る等の道具の一種であろう。

尖頭状石器（Fig. 72—187, PL. 49）

小形の幅広な石器で，器表裏面より粗い2次加工を施し，先端および基部が尖るように作り出され，断面が楕円形状を呈す。他に1点出土。安山岩製。

錐状石器（Fig. 72—188, PL. 49）

小形の剝片を利用し，先端部が尖るように2次加工が施されている。安山岩製。

礫器（Fig. 73—190～194, Fig. 74—195～198, PL. 49）

形態的にⅠ～Ⅲ型に分類される。

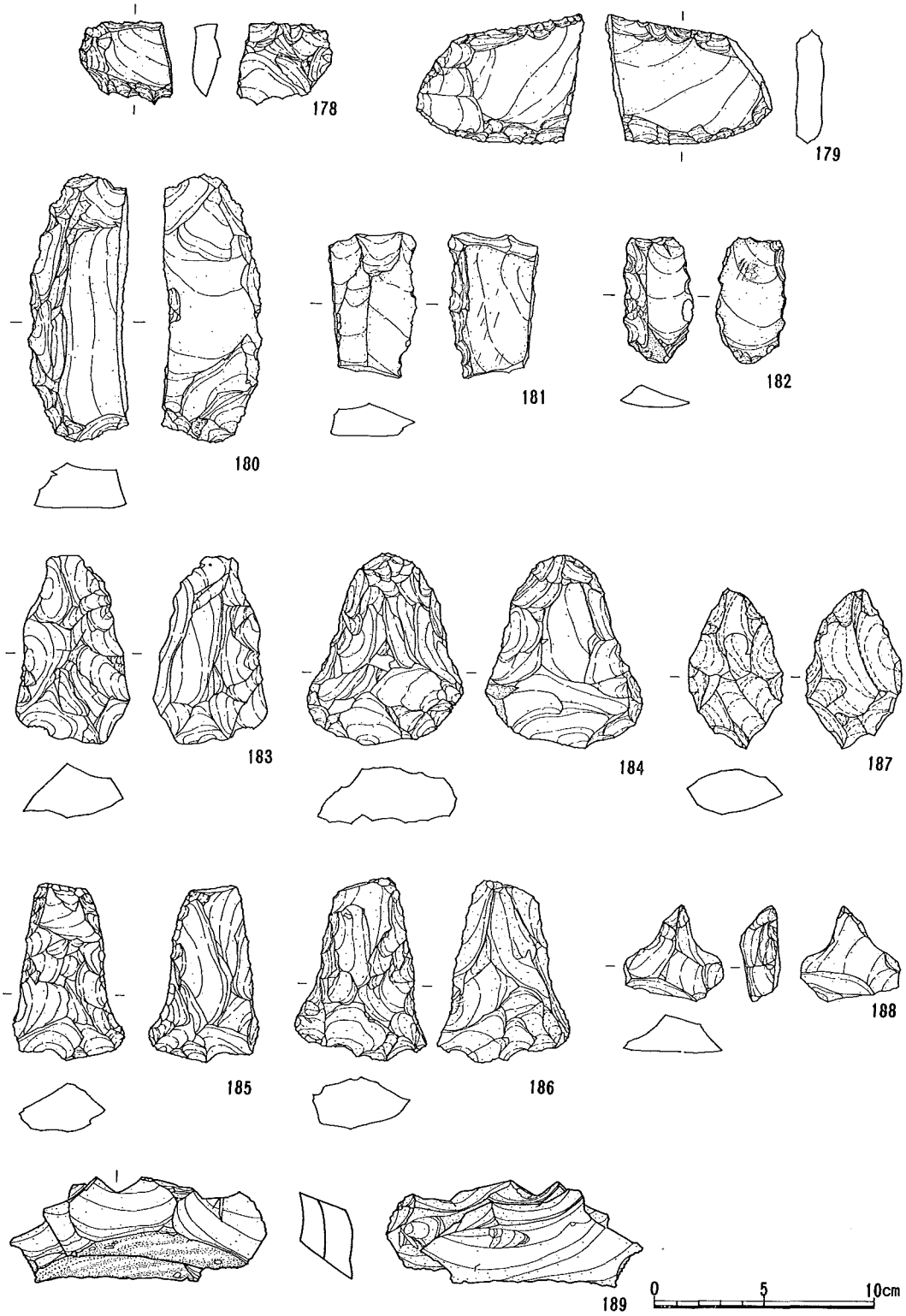


Fig. 72　二次調査出土石器実測図

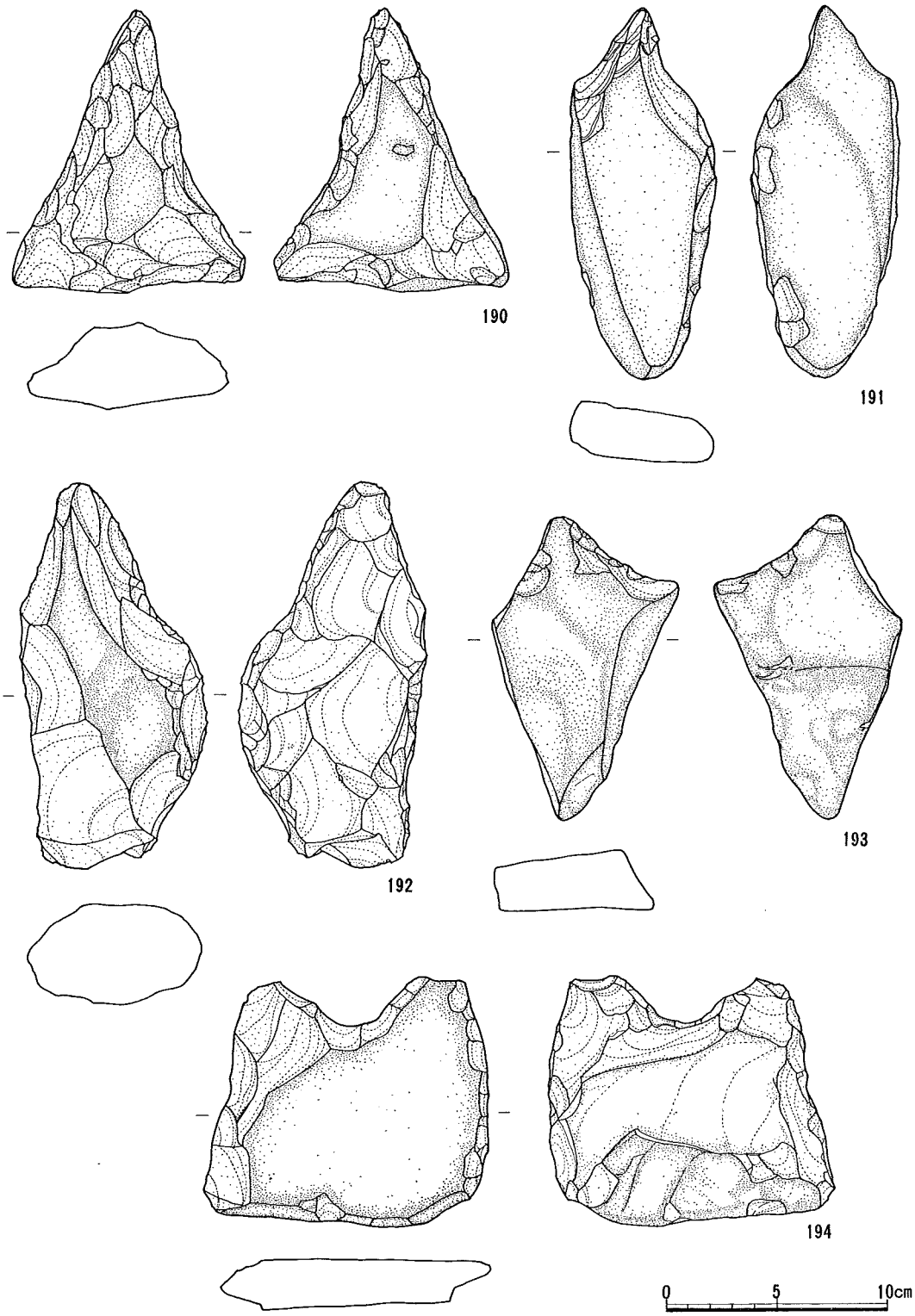


Fig. 73　二次調査出土石器実測図

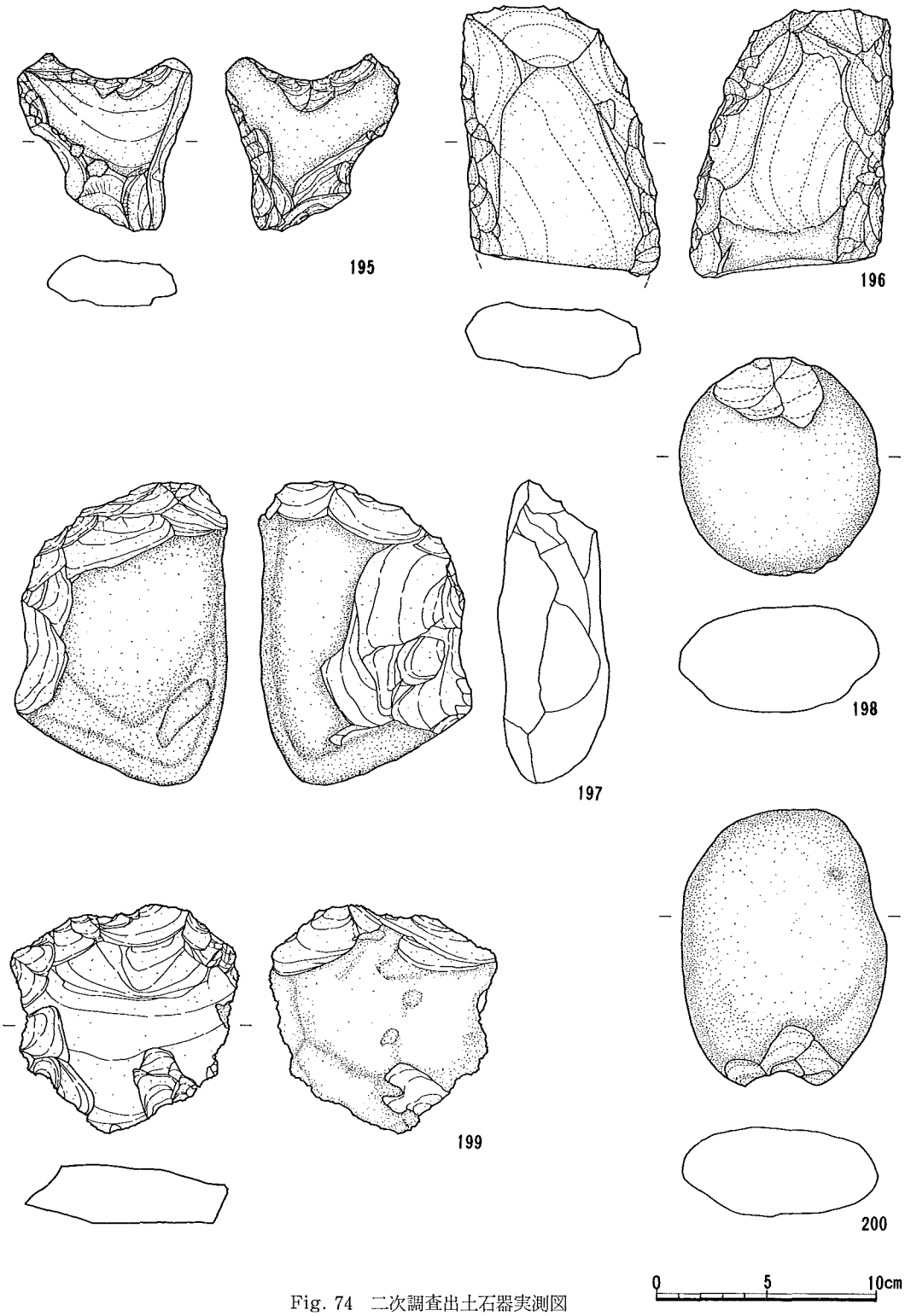


Fig. 74　二次調査出土石器実測図

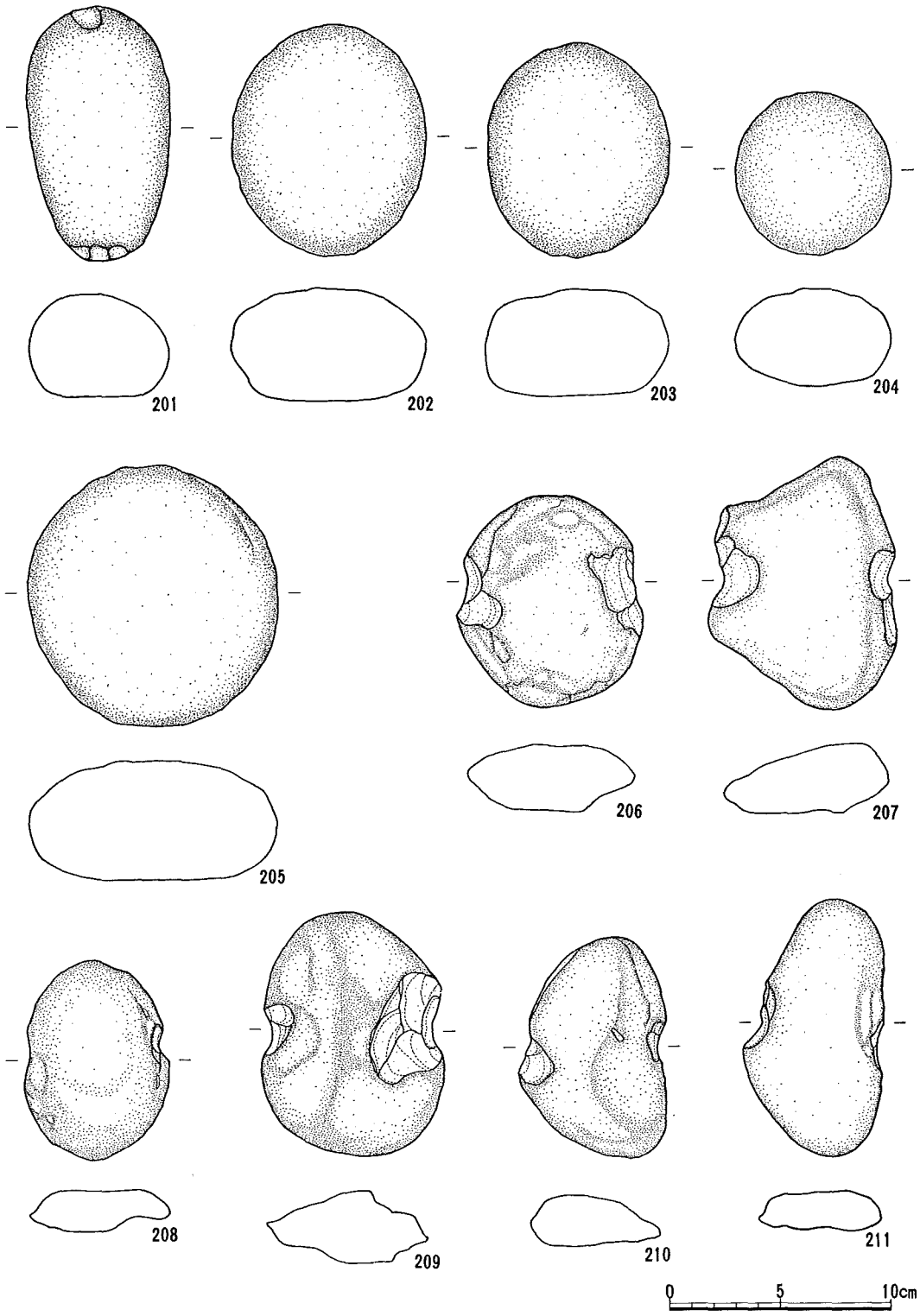


Fig. 75　二次調査出土石器実測図

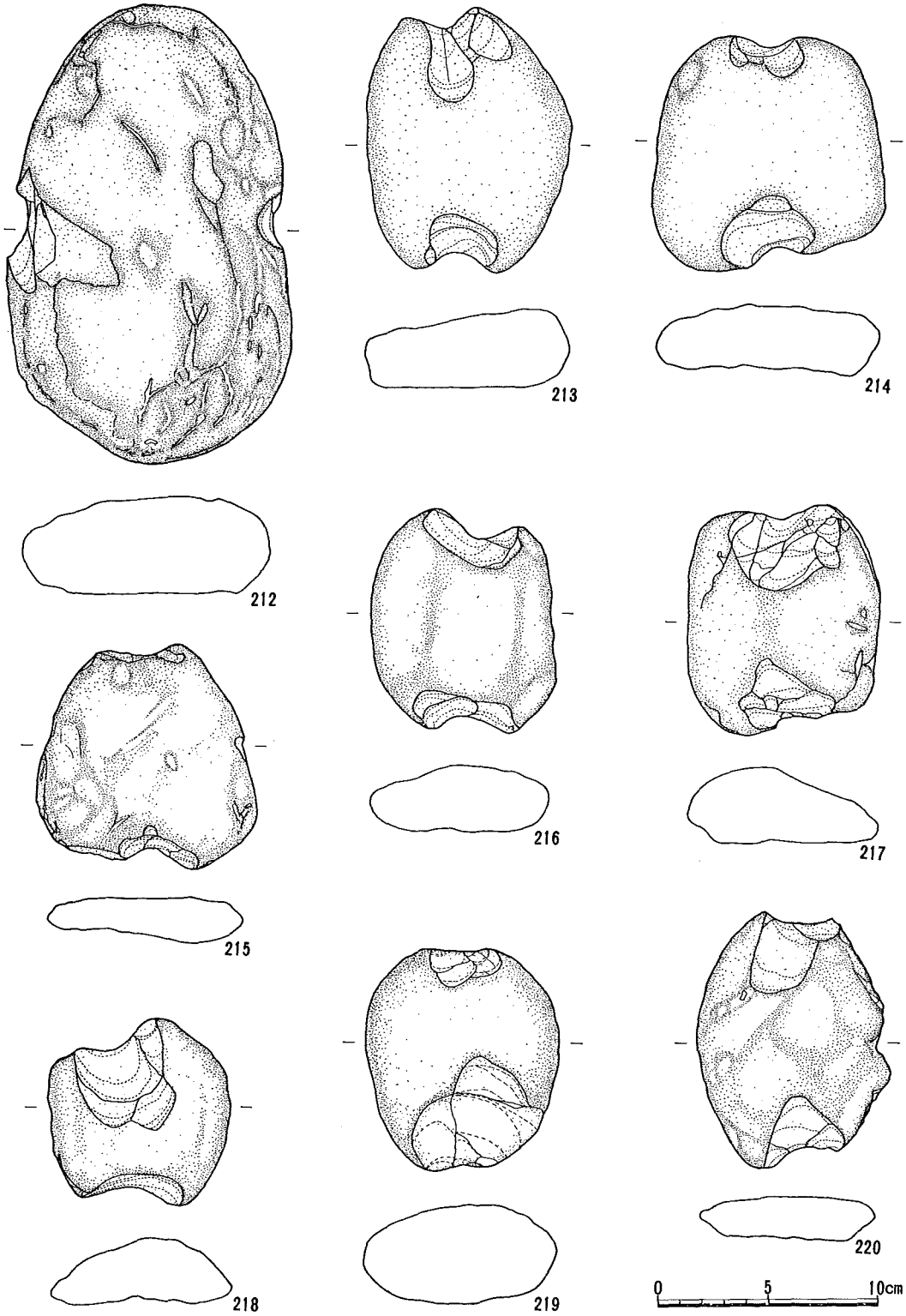


Fig. 76　二次調査出土石器実測図

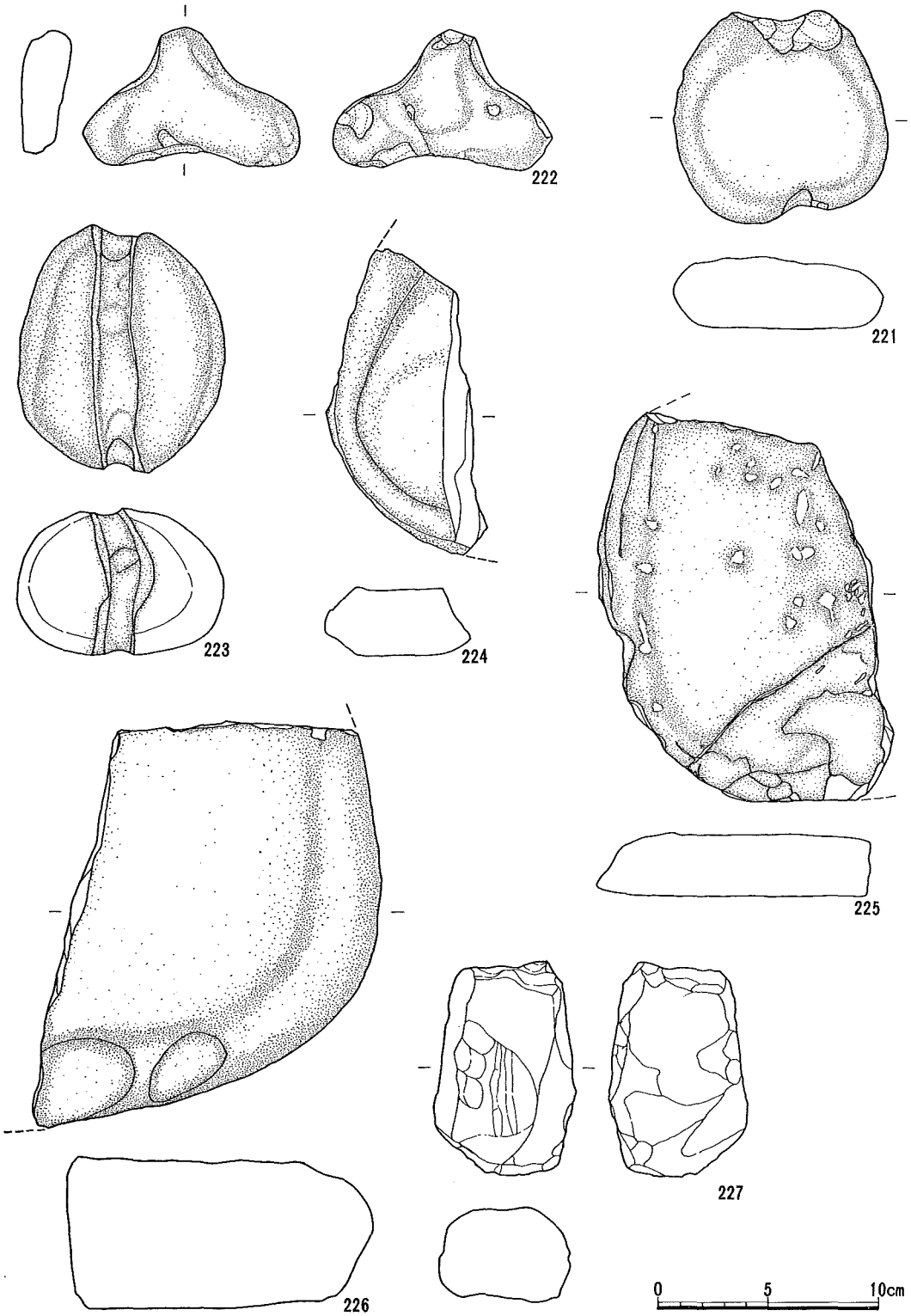


Fig. 77　二次調査出土石器実測図

Tab. 14

挿図番号	出土地区	出土層位	器種	石材	形態分類	計測値(m.g) 全長	最大巾	厚さ	重量	備考
72−178		II	掻器	安山岩		4.30	3.70	1.25	0.02	
179		〃	〃	〃		7.65	5.90	1.25	0.07	
180		〃	削器	〃		12.25	4.30	2.10	0.14	
181		〃	〃	〃		6.65	3.95	1.50	0.05	
182		〃	〃	〃		5.65	3.20	0.95	0.02	
183		〃	篦状石器	〃		8.55	5.15	2.45	0.09	
184		〃	〃	〃		8.39	7.00	3,09	0.16	
185		〃	〃	〃		8.35	6.05	2.40	0.09	
186		〃	〃	〃		8.05	5.05	2.25	0.07	
187		〃	尖頭状石器	〃		7.30	4.30	2.00	0.05	
188		〃	錐状石器	〃		4.05	4.45	1.66	0.03	
189		〃	剥片	〃		11.75	4.6	2.50	0.12	
73−190		〃	礫器	〃	I型	12.75	1050	3.95	0.40	
191		〃	〃	砂岩	〃	16.66	6.51	2.56	0.32	
192		〃	〃	〃	〃	17.40	8.05	4.60	0.68	
193		〃	〃	安山岩	〃	13.65	8.40	2.75	0.30	
194		〃	〃	花崗岩	II型	12.42	11.18	2.83	0.47	
74−195		〃	〃	安山岩	〃	7.61	7.98	2.65	0.14	
196		〃	〃	玄武岩	III型	11.19	8.43	3.81	0.51	
197		〃	〃	〃	〃	13.19	11.19	4.83	0.87	
198		〃	敲石	安山岩	〃	9.81	8.97	4.79	0.33	
199		〃	礫器	〃		9.95	9.10	4.80	0.59	
200		〃	敲石	玄武岩		12.64	9.37	3.96	0.68	
75−201		〃	〃	安山岩		11.15	6.18	4.61	0.50	
202		〃	磨石	玄武岩		10.31	8.75	5.06	0.66	
203		〃	〃	安山岩		9.56	8.20	5.05	0.56	
204		〃	〃	〃		7.22	6.96	4.44	0.33	
205		〃	〃	玄武岩		11.59	11.13	5.31	1.02	
206		〃	石錘	〃	B	9.54	3.06	3.06	0.34	
207		〃	〃	安山岩	〃	11.29	8.18	3.24	0.37	
208		〃	〃	玄武岩	〃	8.88	6.31	2.56	0.15	
209		〃	〃	〃	〃	10.78	8.11	3.45	0.38	
210		〃	〃	〃	〃	9.77	6.31	2.48	0.21	
211		〃	〃	砂岩	〃	11.46	6.15	2.38	0.21	
76−212		〃	〃	玄武岩	〃	20.59	12.80	4.35	1.73	
213		〃	〃	砂岩	A	11.92	9.09	3.66	0.45	
214		〃	〃	安山岩	〃	10.32	10.07	2.96	0.51	
215		〃	〃	玄武岩	〃	10.20	10.01	2.31	0.29	

Tab. 15

挿図番号	出土地区	出土層位	器種	石材	形態分類	計測値(cm. g) 全長	最大巾	厚さ	重量	備考
76−216		II	石錘	砂石	A	9.70	8.17	2.90	0.36	
217		〃	〃	玄武岩	〃	10.15	8.60	3.69	0.45	
218		〃	〃	安山岩	B	8.21	8.19	3.15	0.23	
219		〃	〃	〃	A	9.95	8.71	4.46	0.51	
220		〃	〃	玄武岩	C	11.52	8.35	2.23	0.25	
77−221		〃	〃	安山岩	A	9.49	9.43	3.30	0.46	
222		〃	〃	玄武岩	C	9.82	5.71	2.10	0.11	
223		〃	〃	安山岩	C	11.20	9.45	6.65	0.84	
224		〃	砥石	砂岩		14.28	6.57	3.55	0.38	
225		〃	〃	〃		17.20	12.36	3.02	1.08	
226		〃	台石	安山岩		18.27	13.53	6.80	2.99	
227		〃	不明石器	滑石		9.70	6.35	4.30	0.42	

礫に2次加工を施し，尖頭状の突出部分を作り出すもので，尖頭状礫器のI型。

礫の一端に2次加工を施し，凹み部分を作り出すもので，双角状礫器のII型。

円礫にI・II型程の斉一性をもたずに2次加工を施したものIII型。

以上でI型は190〜193を含め7点，II型は194・195を含め3点，III型は196，197，199を含め16点の総数26点を数える。

器種の形態的な特徴がそれぞれ型式分類されたもので，海の漁具類を捕る・割る行為に使用する道具の一種と考えられ，機能面での差違が器種形状の相異をもたらしたのであろう。

敲石（Fig. 74—198, 200。Fig. 75—201, PL. 50）

敲石は総数26点が出土。この3点共に器種長軸の両端に数次の打撃痕が認められる。

磨石（Fig. 75—202〜205。Fig. 75—202〜205, PL. 50）

磨石は総数25点を数える。図示したのは4点で玄式岩・安山岩の円礫を利用している。

石錘（Fig. 75—206〜211。Fig. 76—212〜220。Fig. 77—221〜223, PL. 50, 51）

石錘は素材礫石に2次加工を施す部位により分類した。

A類は素材礫石の長軸の両端に2次加工を施したもの16点。

B類は素材礫石の短軸の両端に2次加工を施したもの24点。

C類はその他の不規則なものと，223の様に紐で縛って磨耗痕跡が著しいものも含め8点。

以上のように石錘は総数48点を数え，石材は砂岩，玄式岩，安山岩の円礫を利用している。

砥石（Fig. 77—224, 225, PL. 51）

砂岩製の砥石が3点出土しているが，大部分を欠損し，器表面に磨耗痕が顕著にみられる。

台石（Fig. 77—226. PL. 51）

226は大半を欠損しているが，扁平で大きな安山岩礫を利用したものである。擦裂痕は観察出来なかったが，台石中央部分は磨滅した痕跡がみられる。総数4点出土。

不明石器（Fig. 77—227, PL. 51）

滑石製で方柱状を呈し，器表裏面および先端部に加工痕がみられる。滑石は石材としてはやわらかく，敲く・磨くという機能面は考えられず，不明である。

5. 遺　構　(Fig. 78)

不明遺構１基をＤ－２区北側に確認した。長軸約１ｍ，短軸70cm，深度25cmを測るもので，充塡土は茶褐色を呈する二段構造のもの。充塡土は茶褐色を呈し，遺物は含まれていなかった。

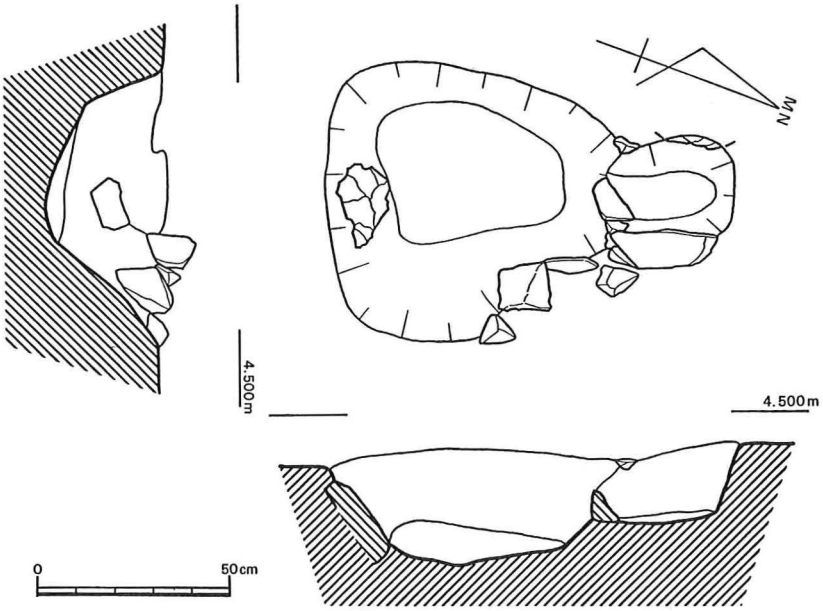
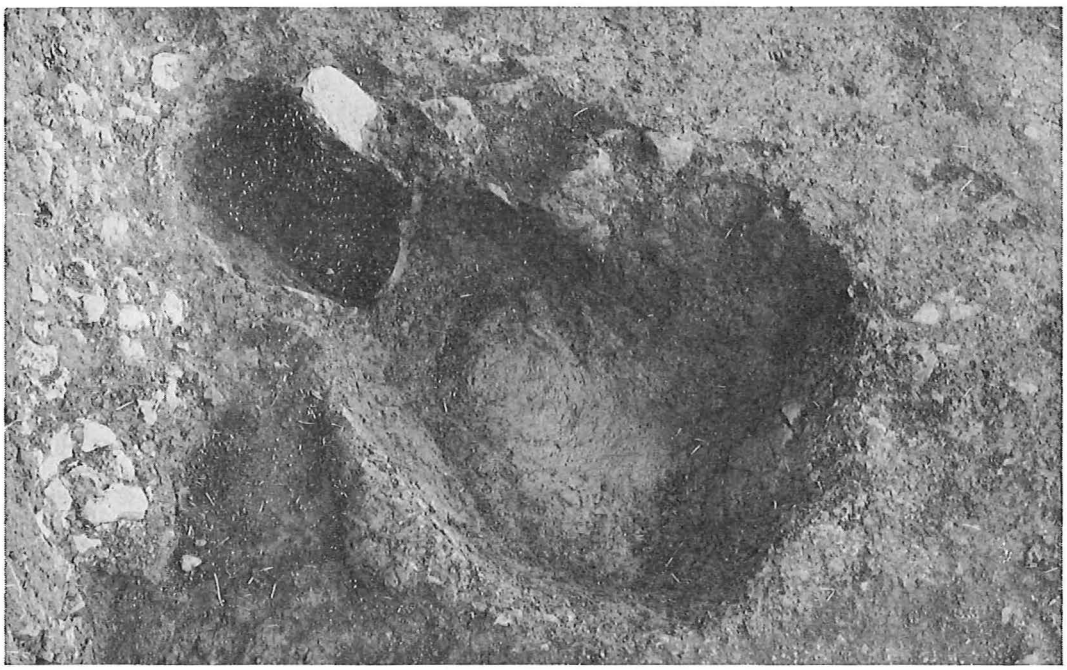


Fig. 78 遺 構 実 測 図



遺　構　写　真

Ⅲ 総　　括

一　殿崎遺跡出土の土器について

土器からみた殿崎遺跡の変遷をまとめると次のようになろう。

殿崎Ⅰ期　縄文中期前・中葉―末葉

Ⅱ期　〃　後期前葉

Ⅲ期　〃　後期中葉

Ⅳ期　〃　晩期後葉

Ⅴ期　弥生中期後葉

殿崎Ⅰ期は並木式と阿高式土器を中心とする時期である。只並木式土器は量的に極めて少なく主体ではない。又，阿高式土器は2次調査区域，A，B，C，D－2，3区を中心とするが阿高式土器の細分[註1]から言えば後半に属する資料が多いようである。

殿崎Ⅱ期は，中津式，南福寺式，出水式を中心とするもので，阿高式系土器としては量的に最も多い。2次調査区域でその中心となる土器である。注意すべきは微量ながらも瀬戸内系土器の混入であろう。南福寺式，出水式土器の中に在って客体的な存在ながら，後続する磨消縄文系土器の萌芽がここに見られる。

以上の土器にはローリングを受けている資料も多く海水に一度洗われた可能性も考えられよう。

殿崎Ⅲ期は御手洗A式，鐘ケ崎式，北久根山式，そして市来式を含む時期である。特に一次調査区域，すなわち TP 1 を中心とする遺跡東側部分はこの時期の資料が圧倒的で，中でも鐘ケ崎式が主体を占めているようである。御手洗A式や市来式土器はあくまで客体として併存している。地点によって移動が認められるが，このⅡ期，Ⅲ期が本遺跡の中心である。

殿崎Ⅳ期，Ⅴ期は共に数片のみの出土であるので詳細は不明である。

以上が土器の変遷からみた遺跡の概略である。中期前・中葉から後期中葉までの資料は比較的連続するが，中期後葉～晩期前葉，そして晩期末～弥生中期前葉までの資料が欠落する。後期後葉以降の遺跡の利用が断続的であった事が判る。

次に，本県に於ける中期前・中葉～後期中葉に至る遺跡の変遷を時期的に概観してみたい。(Fig. 79～82)

Fig. 79 は並木式から阿高式（阿高式後半の土器は地域によって坂の下Ⅰ式，阿高Ⅲ式，岩崎下層式分布圏と細分されているが[註2]，ここでは阿高式土器として包括しておく。）を含む遺跡で，現在県下で56ケ所が知られている。遺跡の規模等，内容に程度の差こそあれ縄文時代の遺跡としては一番多い部類に属する。立地的には海岸部が圧倒的であるが，諫早市川頭遺跡（標高260m），大村市大多武堤（標高330m），小長井町山茶花遺跡（標高385m）等，高所に位置

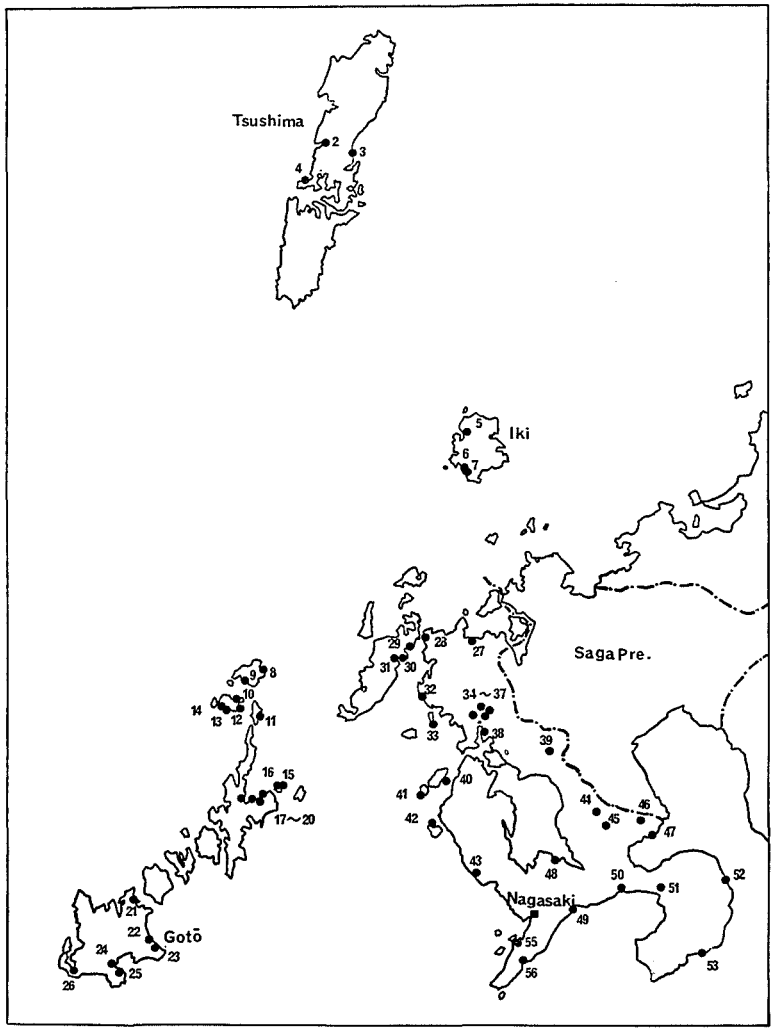


Fig. 79　並木・阿高式土器分布図

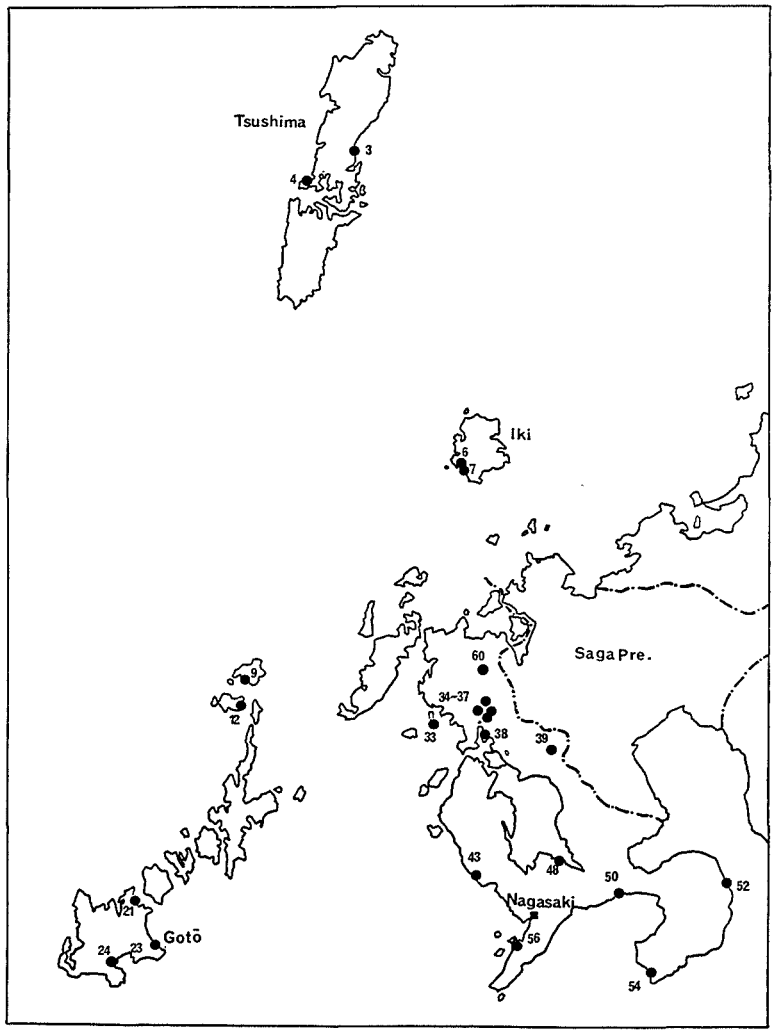


Fig. 80　南福寺・出水式土器分布図

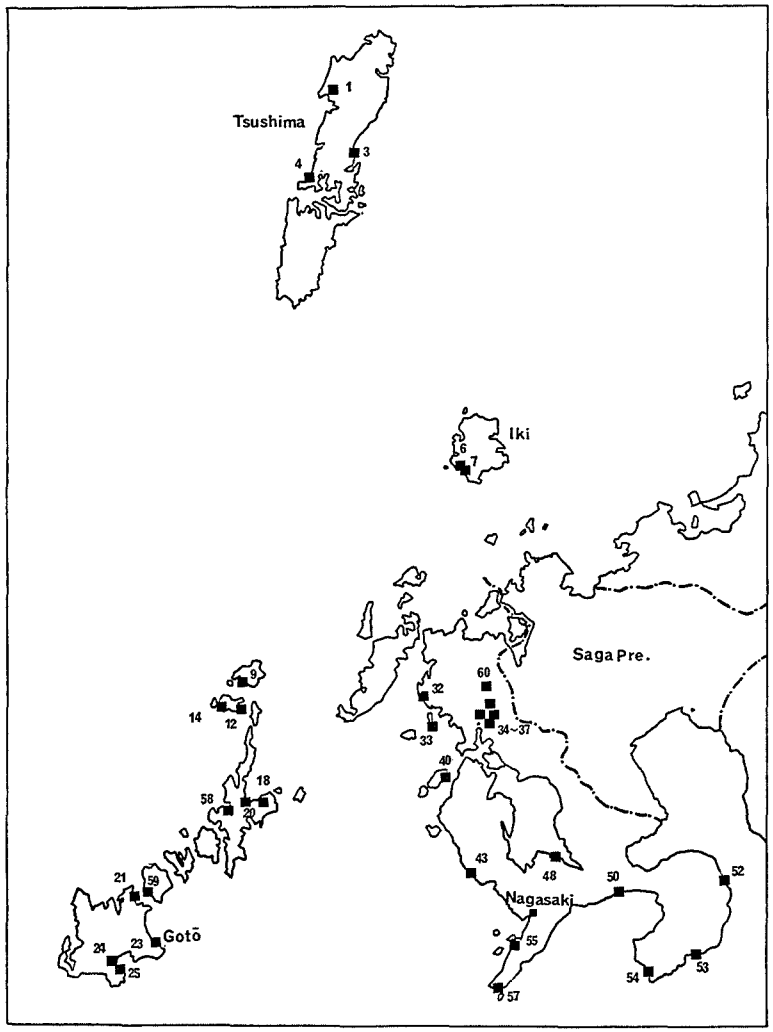


Fig. 81　鉦ケ崎・北久根山式土器分布図

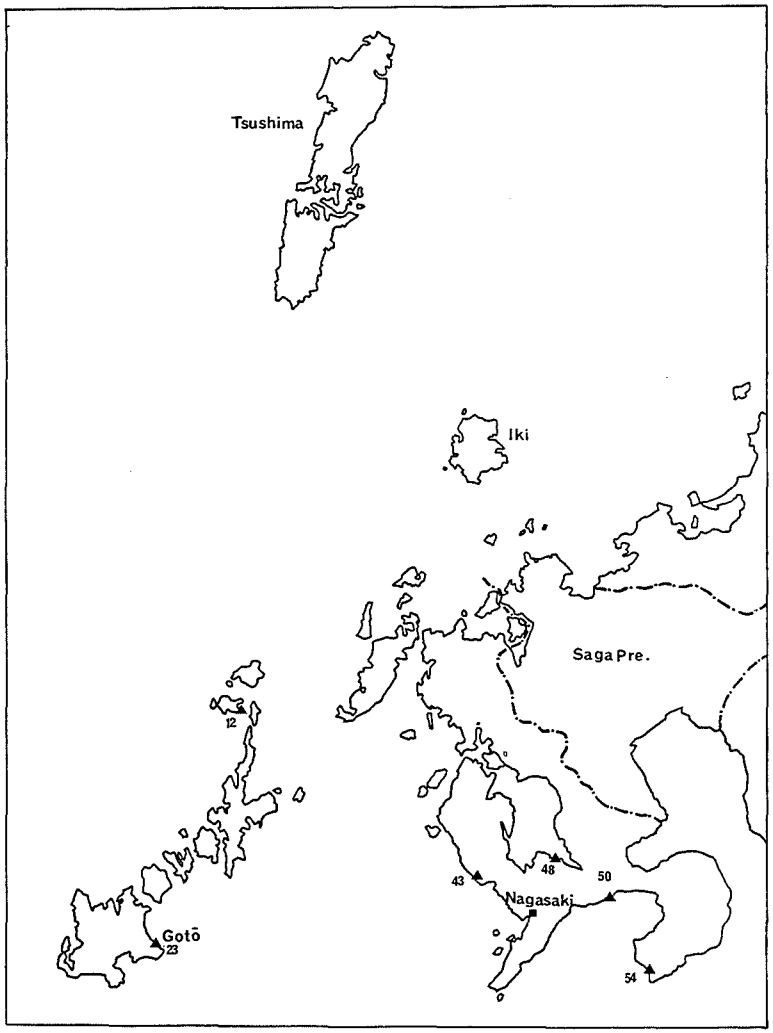


Fig. 82　市来式土器分布図

Tab. 16　縄文中期～後期中葉遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	立地	出土遺物	備考	文献
1	シタル貝塚	上県郡上県町志多留	標高3m　扇状地上	貝殻条痕文・鐘ヶ崎・結合釣針	300m²程度	1
2	吉田貝塚	上県郡峰町吉田	標高10m　微高傾斜地	阿高・夜白・弥生・櫛目文		2
3	佐賀貝塚	上県郡峰町佐賀				3
4	西加藤海底遺跡	上県郡豊玉町嵯峨	微高台地上　海底	阿高・南福寺・有孔円盤		4
5	松崎遺跡	壱岐郡勝本町湯1本	海底	前期～中期		5
6	鎌ヶ崎遺跡	壱岐郡郷ノ浦町片原触	橋高2.5m　海底遺跡	轟・曽畑・阿高・南福寺・出水・錦ヶ崎他		6
7	名切遺跡	〃　〃	標高2.5m　海底遺跡	轟・曽畑・並木・阿高・鐘々崎・船の元・晩期	中期中心・ドングリPit	5
8	長崎鼻遺跡	北松浦郡宇久島長崎鼻	標高10m　海岸段丘上	阿高		7
9	宮ノ首貝塚	〃　〃　宮ノ首	海岸部	前期～中期～後期	瀬尾泰平氏蔵	7
10	相津遺跡	〃　小値賀町前方郷	微高台地斜面	阿高・弥生		8
11	野崎遺跡	〃　〃　野崎島	標高3～14m	並木・阿高・有孔円盤		8
12	殿崎遺跡	〃　〃	標高3～5m	並木・阿高・南福寺・出水・鐘ヶ崎他		本書
13	榎津遺跡	〃　〃　笛吹郷		中期		9
14	矢櫃遺跡	〃　浜津郷矢櫃	標高3m　湾奥部	曽畑・阿高・南福寺・出水・鐘ヶ崎他		10
15	浜泊遺跡	南松浦郡有川町頭ヶ島	海岸部小砂丘上	轟・曽畑・阿高		11
16	白浜遺跡	〃	〃	前期～晩期		11
17	西股遺跡	〃　新魚目町	扇状地	曽畑・阿高・鉢ヶ崎		12
18	有川港遺跡	〃　有川町	標高－4m	阿高		12
19	浜海中遺跡	〃　有川町　浜	〃	〃		12
20	立石遺跡	〃　〃　立山	海岸部	轟・曽畑・阿高・鐘ヶ崎・北久根山他		13
21	鍔川貝塚	〃　岐宿町岐宿郷	標高7m　湾奥部	並木・阿高・南福寺・出水		14
22	水の窪遺跡	福江市下大津町	標高9m　溶岸台地上	阿高・晩期		15
23	白浜貝塚	〃　向町	標高4m　海岸部	並木・阿高・南福寺・鐘ヶ崎・市来他		16
24	宮下貝塚	南松浦郡富江町松尾郷	標高5～10m	並木・曽畑・阿高・鐘ヶ崎・北久根山他		17
25	女亀遺跡	〃　〃　土取郷	標高10m　海岸段丘上	阿高・鐘ヶ崎・他	田中英治氏蔵	13
26	葛瀬遺跡	〃　玉の浦町葛瀬	標高0－10m	並木		13
27	楼楷田遺跡	松浦市白浜兎	標高7m　微高丘陵斜面	曽畑・阿高		18
28	つぐめの鼻遺跡	北松浦郡田平町野田兎	標高5m　海岸部	轟・曽畑・阿高		19
29	千里ヶ浜遺跡	平戸市川内町千里ヶ浜	標高0m海底	曽畑・阿高		13
30	宝亀遺跡	〃　宝亀町宮崎・亀石	標高0～20m　砂浜	阿高		13
31	沖田遺跡	〃　宝亀町沖田	標高0～10m　沖積地	曽畑・阿高		13
32	古田遺跡	北松浦郡小佐口町楠泊免	標高2m　砂浜	阿高・北久根山式		20
33	宮ノ本遺跡	佐世保市高島町	標高3.5－5m　砂丘	轟・曽畑・阿高・南福寺・晩期他		21
34	下本山岩陰	〃　下本山町迎野	標高16m　河岸段丘上	轟・曽畑・阿高・南福寺・鐘ヶ崎他	岩陰	22
35	岩下洞穴	〃　松瀬町	標高1200　河岸段丘上	轟・曽畑・阿高・北久根他	洞穴	23
36	泉福寺洞穴	〃　瀬戸越町	標高89.5m	豆粒文・隆線文・爪形文・押型文・前～晩	洞穴	24
37	大門洞穴	〃　〃	標高69m　河段丘上	曽畑・阿高・鐘ヶ崎・北久根山式他	洞穴	25
38	天神洞穴	〃　東天神町		阿高・鐘ヶ崎	洞穴	23
39	山角遺跡	東彼杵町波佐見町稗木場	標高20m　水田	阿高・南福寺		26
40	寺島遺跡	西彼杵郡大島町	標高5m　砂浜	曽畑・阿高		27
41	本郷遺跡	〃　崎戸町本郷	沖積段丘	阿高		27
42	串島遺跡	〃　大瀬戸町松島	標高4m　砂浜	阿高		28
43	出津遺跡	〃　外海町出津	標高6m　砂丘	阿高・出水・鐘ヶ崎・北久根山・市来他		29
44	大多武堤遺跡	大村市	標高330m	阿高他		13
45	川頭遺跡	諫早市	標高260m　平担地	阿高他	土拡	13
46	山茶花遺跡	北高来郡小長井町山茶花	標高400m　平担地	阿高		30
47	目島遺跡	〃　〃		〃		26
48	熊野神社遺跡	西彼杵郡多良見町舟津郷	標高2m　旧海岸線	轟・曽畑・阿高・南福寺・出水・御牛洗月・市来地	後期中心	31
49	片町遺跡	長崎市茂木町	砂丘	阿高		26
50	有喜貝塚	諫早市松里町	標高14－16m　丘陵先端部	阿高・南福寺・出水・中津・鐘ヶ崎・市来他		32
51	愛津遺跡	南高来郡愛野町愛津		阿高		33
52	三会下町遺跡	島原市三会下町	海岸線	轟・曽畑・阿高・南福寺・鐘ヶ崎・北久根山	海底	34
53	堂崎遺跡	南高来郡有家町堂崎	標高0m	阿高・北久根山	〃	35
54	加津佐貝塚	〃　加津佐町水月永瀬		出水・鐘ヶ崎・市来		36
55	深堀遺跡	長崎市深堀町	標高4m　砂丘	並木・阿高・南福寺・出水		37
56	為石遺跡	西彼杵郡三和町為石	砂丘	阿高他		25
57	脇岬遺跡	〃　野母崎町脇岬	砂丘			13
58	田ノ浦遺跡	南松浦郡上五島町脇ノ田	標高0－10m　海岸	鐘ヶ崎		13
59	田ノ浦遺跡	福江市田ノ浦町	砂浜	鐘ヶ崎		38
60	岩屋口遺跡	北松浦郡世知原町笥瀬免	標高85m　岩陰遺跡	轟・曽畑・南福寺・鐘ヶ崎・北久根・御牛洗A		39

する例も少なくない。

次に，同じ阿高式系土器であるが，後期に入るとされる南福寺式，出水式が出土する遺跡は19遺跡と量的には減少する（Fig. 80)。この時期の遺跡の立地は，佐世保市に於ける洞穴遺跡の数例を除くと，ほぼ海岸部に限定される感がある。この時期は，例えば熊本県の場合では，逆に生活面が海岸部のみならず丘陵地まで拡大し遺跡数が増大する[註3]のと対照的である。只，本県に於ける傾向が，後述する如く即遺跡の衰退に結びつくものではない。

これに続く磨消縄文系土器である鐘ケ崎式，北久根山式を伴う遺跡は，前記南福寺式，出水式土器が出土する遺跡とほぼ重複する傾向をもつ（Fig. 81)。これは，同一遺跡内に於いて一部時期的に重複しながらも阿高式系土器から磨消縄文系土器への推移が比較的自然に行なわれた事を示していよう。諫早市有喜貝塚，長崎市深堀貝塚，外海町出津貝塚，そして殿崎遺跡等中期末～後期初頭の段階ですでに磨消縄文系土器の移入は認められるが，あくまで断片資料にすぎず，その時期の主体はあくまで阿高式系土器である事が証左である。只，壱岐名切遺跡に於いては，後期土器の資料の中に南福寺式・出水式土器の存在が希薄で，量的には少ないながらも当初より瀬戸内系土器の搬入が認められる。位置的に北部九州に近い為であろうか。

なお，この時期の遺跡の規模は，水月永瀬貝塚，有喜貝塚，深堀貝塚，出津貝塚，白浜貝塚，殿崎遺跡，佐賀貝塚等，それまでの阿高式の時期の遺跡に比して，数量的には減少するものの，規模は増大し，出土遺物の量もはるかに凌駕する傾向をもっている。

本県における阿高式系土器と磨消縄文系土器の関係については，「……この後期中葉は，土器組成の変化等は不明な点が多いものの，長崎地方において磨消縄文土器が一定量を占めるようになる時期である。……[註4]」，「……北部九州においては後期初頭にいきなり磨消縄文土器を主体とする土器組成へと変化する。……しかし後期前葉の段階では，外来系土器が作られるのはローレベルのみのようであり……，後期中葉（鐘ケ崎式系土器のⅠ期）になると……，阿高式系土器（御手洗A・C式）と磨消縄文土器（鐘ケ崎式系土器）の両者が完全なセットをなして併存することになる。……そして次の段階（鐘ケ崎式系土器のⅢ期）になると，磨消縄文土器がハイレベルを独占し，阿高式系土器はレベルダウンすることになるのである。」という田中氏の論巧[註5]とよく符号する。

南九州を分布の中心とする市来式土器は，現在6遺跡[註6]に於いて確認されている（Fig. 82)。何れも海岸部の遺跡でそれ自体が主体となる事は無く，鐘ケ崎式，北久根山式土器と共伴する。明確な事例では殿崎遺跡が北限である。

この市来式土器にみる如く，海（対馬海流）を媒介とする各時期に於ける南九州との交流はかなり活発であったらしい。例えば，小値賀町神ノ崎遺跡[註7]では弥生～古墳時代に至る墳墓の中に北薩摩に顕著な地下式板石積石室墓が連綿と築かれている事が知られている。西海岸を活動の場とする海人族の伝統の所産であり，前期曽畑式土器の広がりをも含めて，その祖型をみる思いである。

註1　田中良之「中期・阿高式系土器の研究」古文化談叢　第6集所収　1979
2　同上論文
3　「新熊本の歴史　1，古代（上）」
4　田中良之「磨消縄文土器伝播のプロセス」古文化論集　上巻所収　1982
5　同上論文
6　対馬峰町佐賀貝塚でそれらしき土器が出土しているらしいが現在整理中で明確でないという。正林護氏教示。
7　小値賀町教育委員会「神ノ崎遺跡」小値賀町文化財調査報告書　第4集　1984

表文献

1　駒井和愛他「考古学から観た対馬」対馬の自然と文化　所収　1954
2　坂田邦洋「対馬の遺跡」長崎県文化財調査報告書　第20集　1975
3　正林　護『「南北市羅」の島「対馬」』韓国文化　9月号所収　1985
4　長崎県教育委員会「対馬―浅茅湾とその周辺の考古学調査―」長崎県文化財調査報告書　第17集　1974
5　長崎県教育委員会「名切遺跡」長崎県文化財調査報告書　第71集　1985
6　横山　順，田中良之「壱岐・鎌崎海岸遺跡について」九州考古学　No. 54所収　九州考古学会　1979
7　長崎県教育委員会「五島遺跡調査報告」長崎県文化財報告書　第二集　1964
8　小値賀町教育委員会「町内遺跡分布調査・Ⅰ」小値賀町文化財調査報告書　第5集　1985
9　塚原　博氏教示。
10　小値賀町教育委員会「小値賀町郷土史」1978
11　長崎県教育委員会「浜泊遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ所収　長崎県文化財調査報告書　第45集　1979
12　久原巻二氏教示
13　長崎県遺跡地名カード
14　長崎県教育委員会「鰐川貝塚」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅴ　長崎県文化財調査報告書　第57集　1982
15　福江市教育委員会「水の窪遺跡」福江市埋蔵文化財調査報告書　第1集　1976
16　福江市教育委員会「白浜貝塚」福江市文化財調査報告書　第2集　1980
17　長崎県教育委員会「宮下遺跡調査報告―解説篇―」長崎県文化財調査報告書　第9集　1971
18　長崎県教育委員会「楼楷田遺跡」長崎県文化財調査報告書　第76集　1985
19　1986年報告書刊行予定
20　長崎県小佐々町教育委員会「古田遺跡」小佐々町文化財調査報告書　第1集　1985
21　佐世保市教育委員会「宮の本遺跡」佐世保市埋蔵文化財調査報告書　1980
22　佐世保市教育委員会「下本山岩陰」1972
23　麻生　優「岩下洞穴の発掘記録」佐世保市教育委員会　1968
24　麻生　優編著「泉福寺洞穴の発掘記録」佐世保市教育委員会　1984　他
25　佐世保市教育委員会「大門洞穴緊急発掘調査報告書」1981
26　長崎県教育委員会「山角遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅳ所収　長崎県文化財調査報告書　第55集　1981
27　大島町教育委員会「寺島遺跡予備調査報告書」大島町文化財調査報告書　第1集　1981
28　長崎県教育委員会「串島遺跡」長崎県文化財調査報告書　第51集　1980

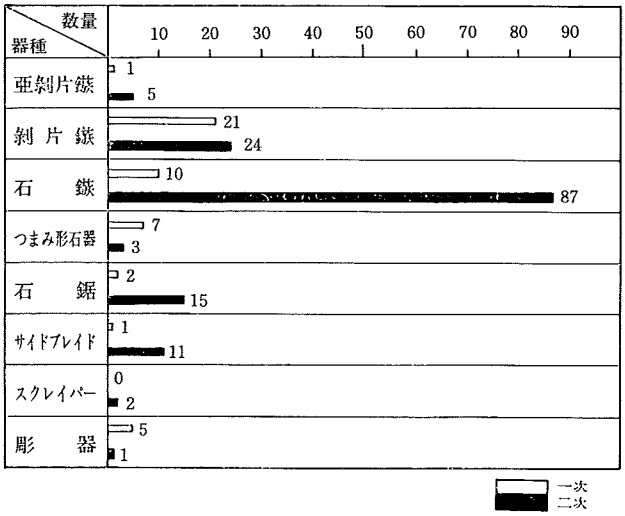
29　外海町教育委員会 「出津遺跡」 外海町文化財調査報告書　第２集　1983
30　正林　護 「小長井町の先史・古代」 小長井町郷土誌所収　小長井町　1976
31　多良見町教育委員会　同志社大学考古学研究室編「伊木力・熊野神社遺跡」 1985
32　諫早市教育委員会 「有喜貝塚」 諫早市文化財調査報告書　第５集　1984
33　下川達彌 「島原半島（長崎県）の先史文化研究について」 長崎県高等学校社会科教育研究集録 1970
34　古田正隆 「島原市の海中干潟遺跡（図録）」 百人委員会埋蔵文化財報告　第2集　1974
35　長崎県教育委員会 「堂崎遺跡」 長崎県文化財調査報告書　第58集　1982
36　前川威洋 「九州後期縄文土器の諸問題」 九州縄文文化の研究所収　1979
37　長崎県教育委員会 「深掘遺跡調査報告」 長崎県文化財調査報告書　第５集　1966
38　長崎県立美術博物館 「田ノ浦遺跡」 久賀島，野母崎の文化所収　1982
39　世知原町教育委員会・古代学協会 「岩谷口遺跡群の発掘調査」 1976

二　殿崎遺跡出土の石器について

殿崎遺跡は，その出土土器から一次調査区が縄文後期（鐘ケ崎式土器）を主体とし，二次調査区が縄文中期後葉～後期初頭であることが判名した。西北九州における縄文中期～後期の石器については，縄文時代全般を通じて一番変化に富んだ時期であり，その器種構成の多様さ，剥片剥離技術の安定性は，この時期の石器の一つの特徴となっている。石器については，剥片鏃，石鋸，つまみ形石器，サイドブレイド，縦長剥片等であるが，各々時期的に同一時期に出現したものか，あるいは，各々いくらかの時間的前後関係を持って出現し，又消滅していったのか，など現在においても多くの問題を残している。一つには，層位の中における土器の変化量に対して，石器がそれらについて行けない，又，土器一型式という単純遺跡が少ないことなども，一つの要因となっている。殿崎遺跡では，一次調査区（TP1）と二次調査との間に時間的に相前後するかたちで土器が出土しているため，石器の上からも，いくらかの変化を持つであろうとの観点の上で，二つの調査区の主に剥片石器類を対比していくことにする。(Tab. 17) まずこの表より顕著なことは，石鏃と剥片鏃の変化量である。（亜剥片鏃とは，本文中でも扱ったが，主要剥離面を多く残しながらも，周縁あるいは表面に二次加工したものに対して仮に名づけたものである）一次調査区での石鏃と剥片鏃との占める割合において，互いに逆転することで，特に二次調査区での通常の石鏃の占める割合は約77％を示し，圧倒的に通常の両面加工の石鏃が多いのに対し，一次調査区においては32％とかなり少量になっていることである。特に二次調査区出土の石鏃は，大形・中形・小形と三つのタイプがあたかも一セットであるかのような有り方を示しており，このことも両面加工の通常の石鏃が，二次調査区の主体になっていることを裏づけるものであろう。次に剥片鏃とその製作上関係が深いとされるつまみ形石器であるが，一次，二次共に剥片鏃の数に大差がないのと同様に，数量的変化に極端な差は認められない。石鋸・サイドブレイドについては，二次調査区に多い傾向にある。他の資料については，その比較できるだけの資料に乏しいと思われる。

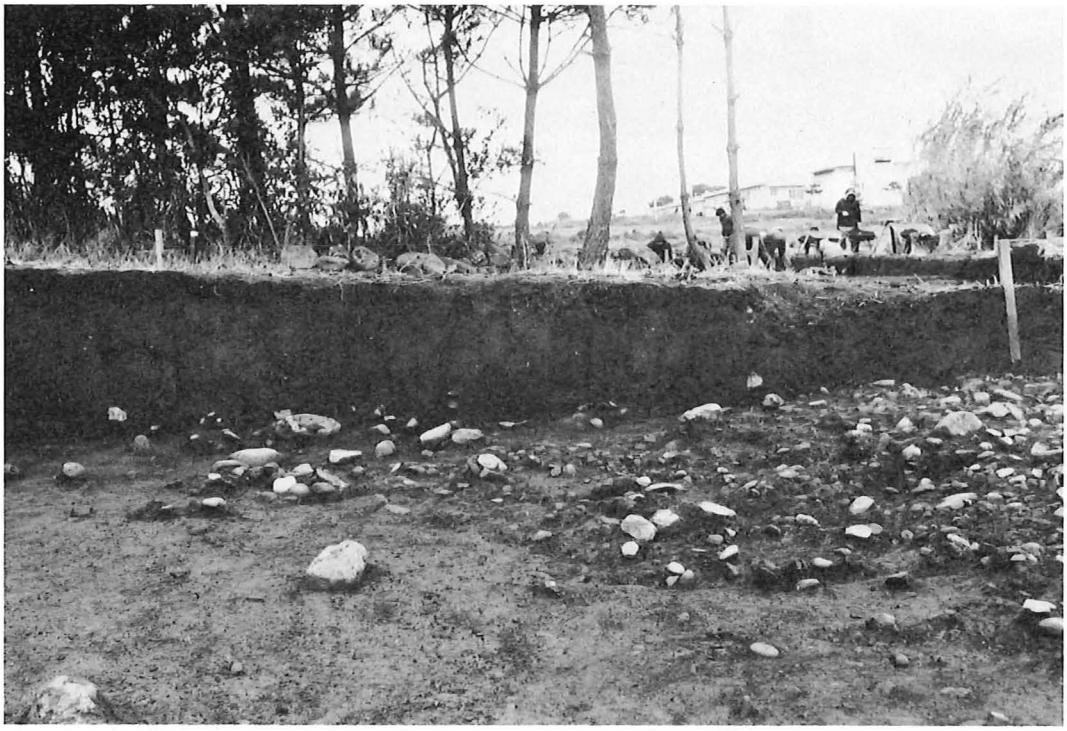
福岡県柏田遺跡は，その時期的なものについては，一次調査区に近似しており，剥片鏃と打製鏃では圧倒的に剥片鏃が多く出土しているなど，縄文後期初頭～中葉にかけて，剥片鏃がそのピークを持つことが予想される。

Tab. 17



一次・二次調査出土石器数量表

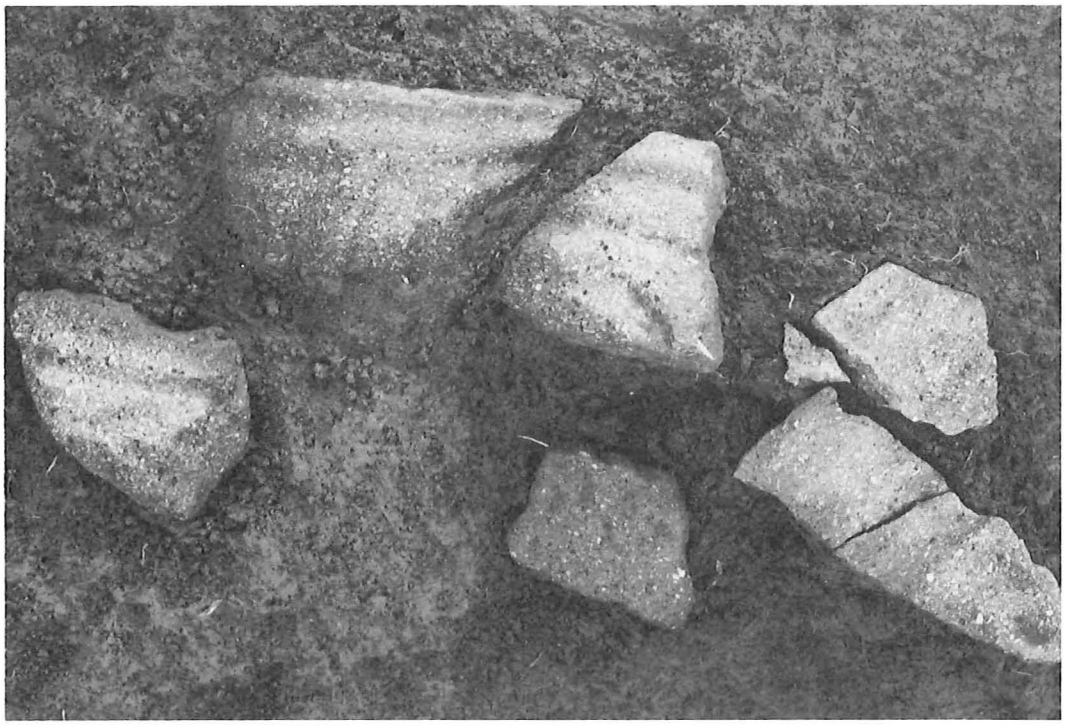
二次調査風景

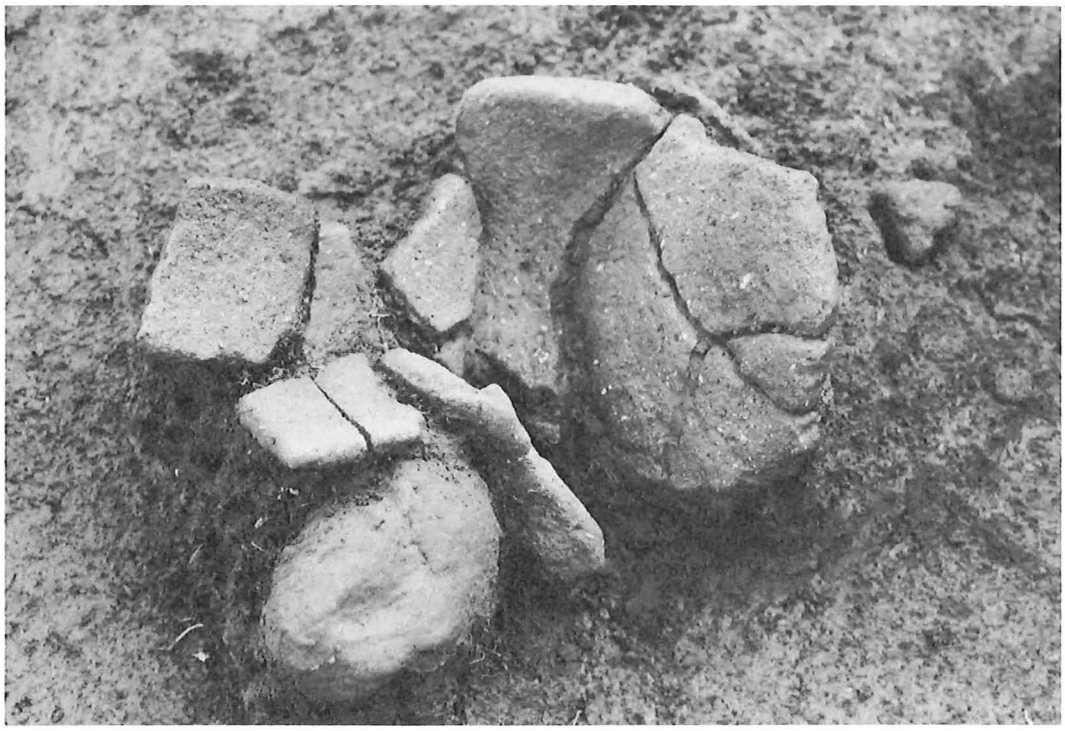


土層写真

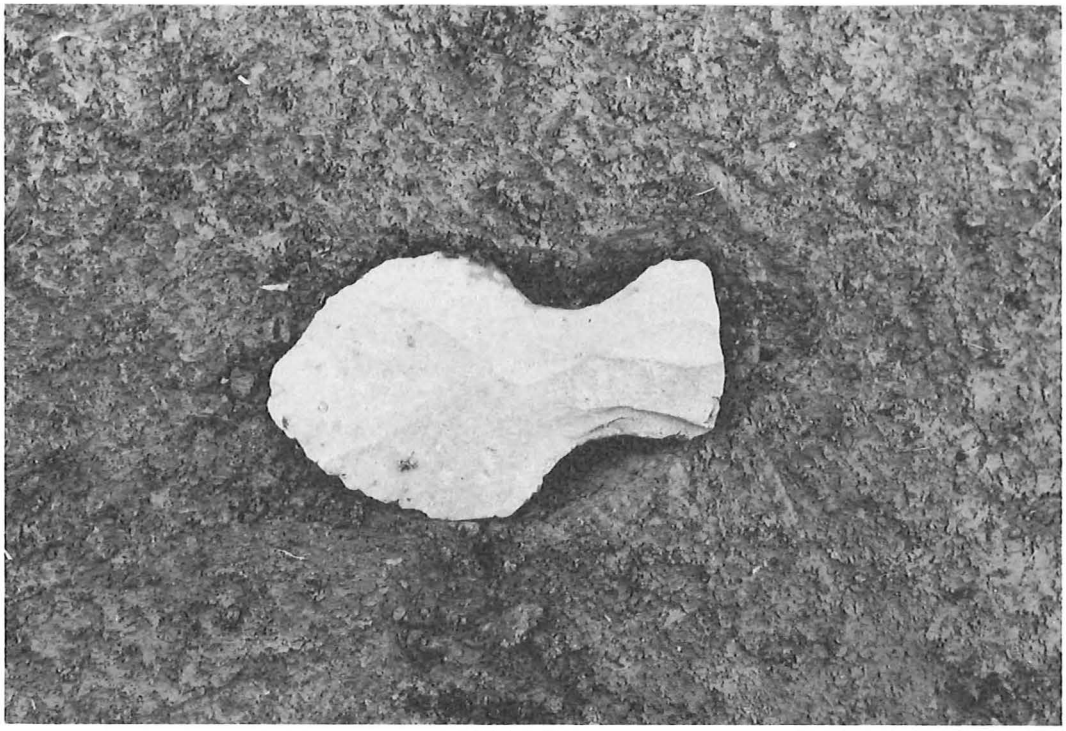
土層写真

二次調査遺物出土状況

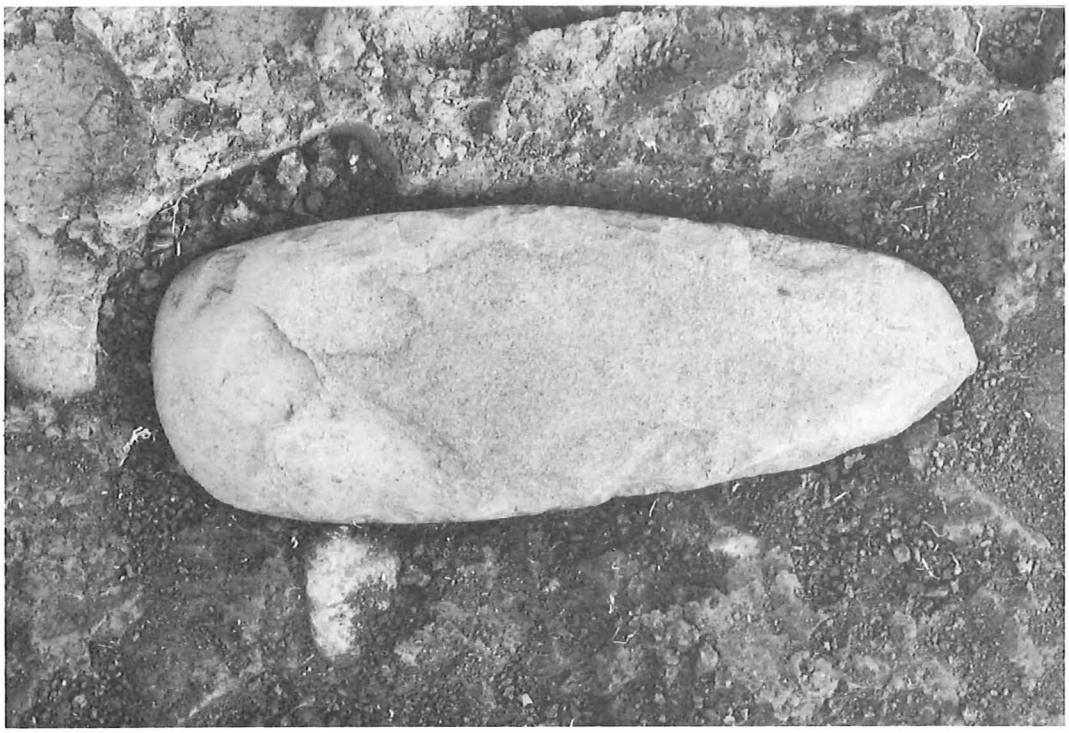


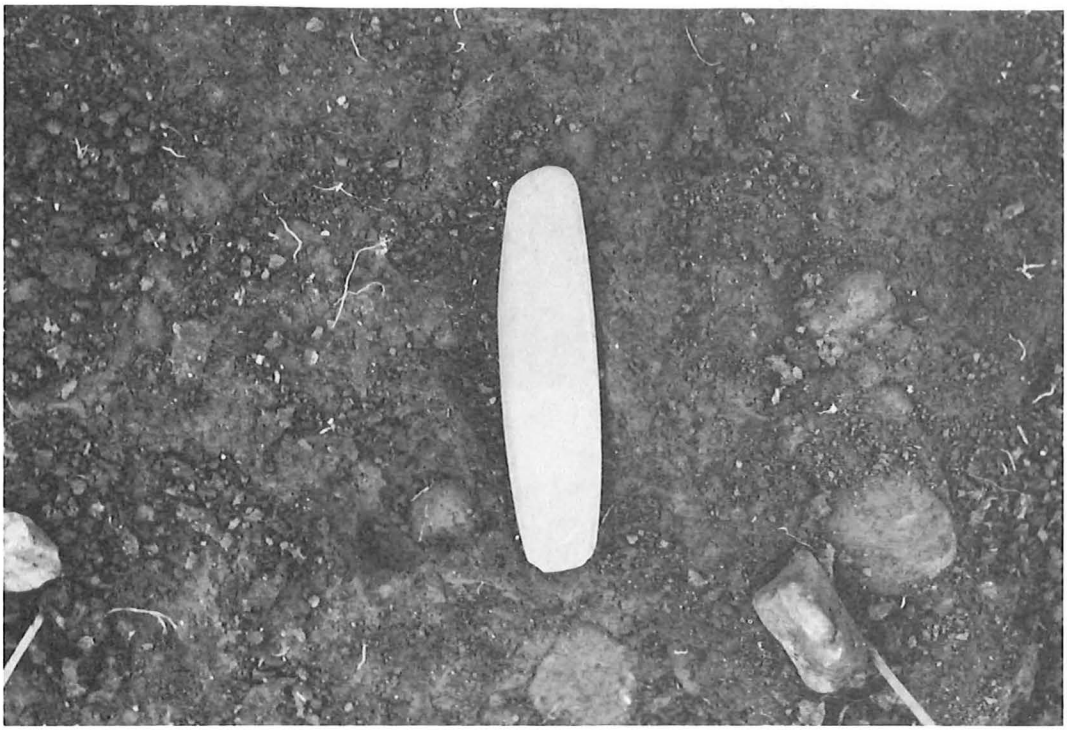


土器出土状況

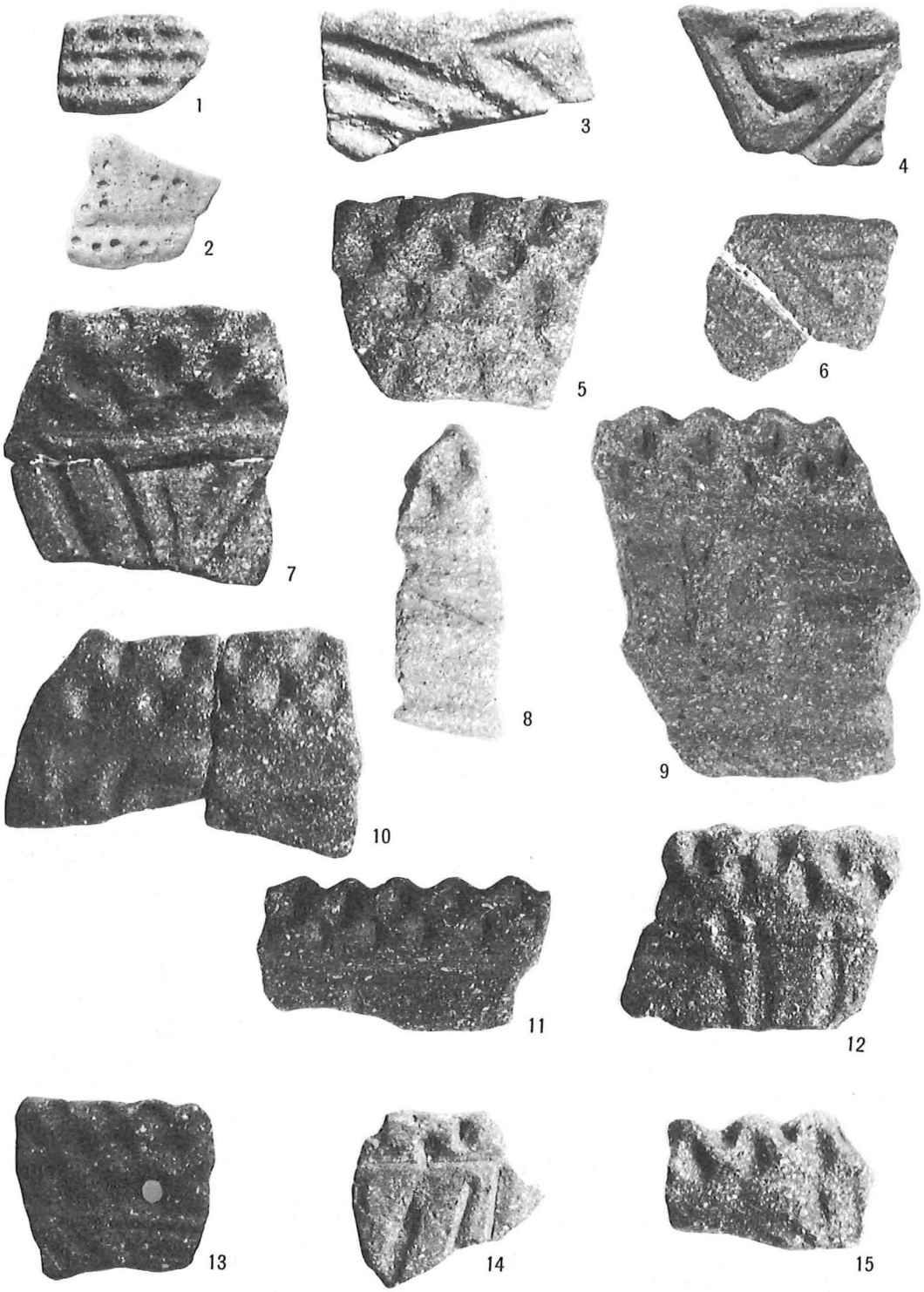


石鋸出土状況

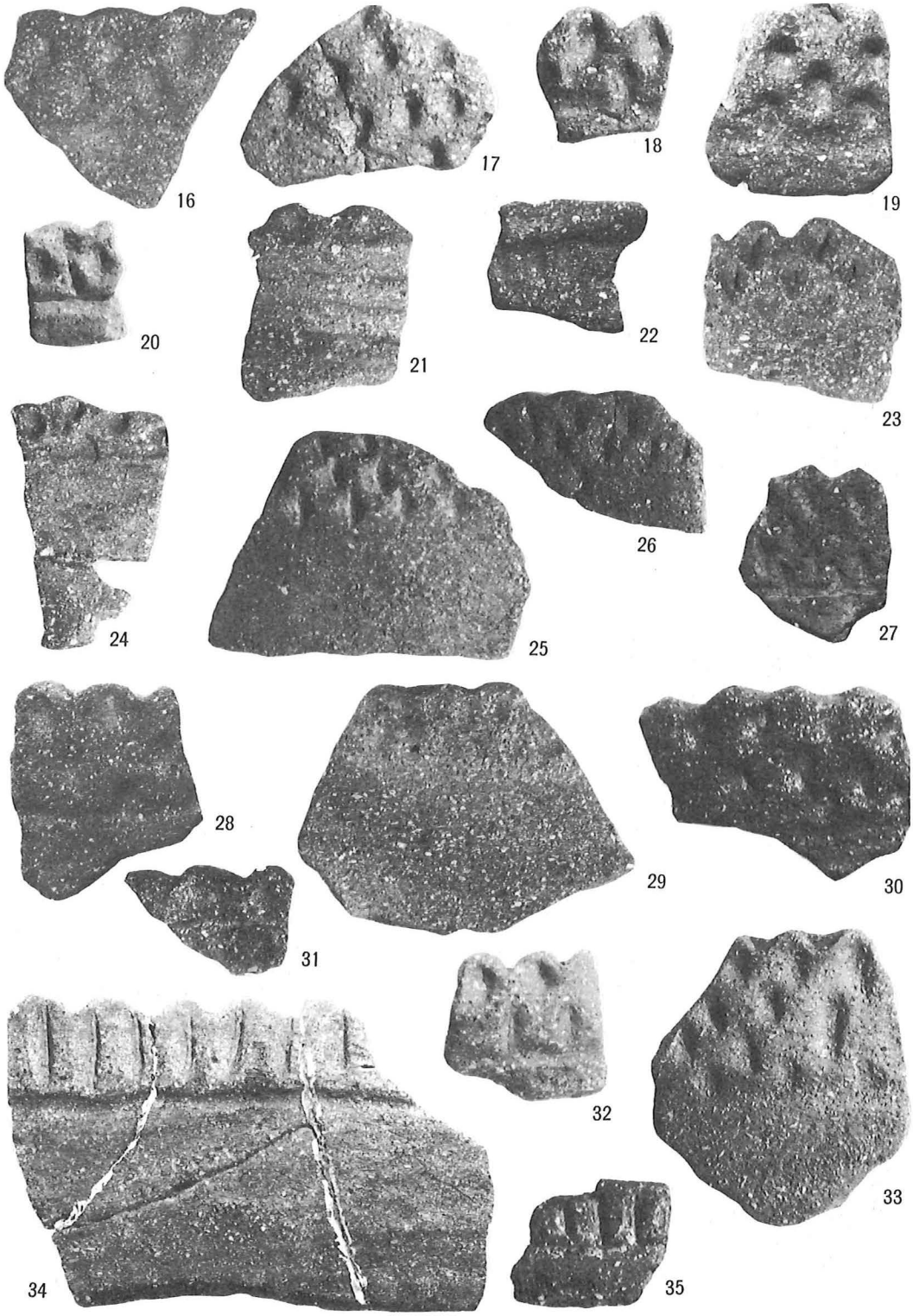




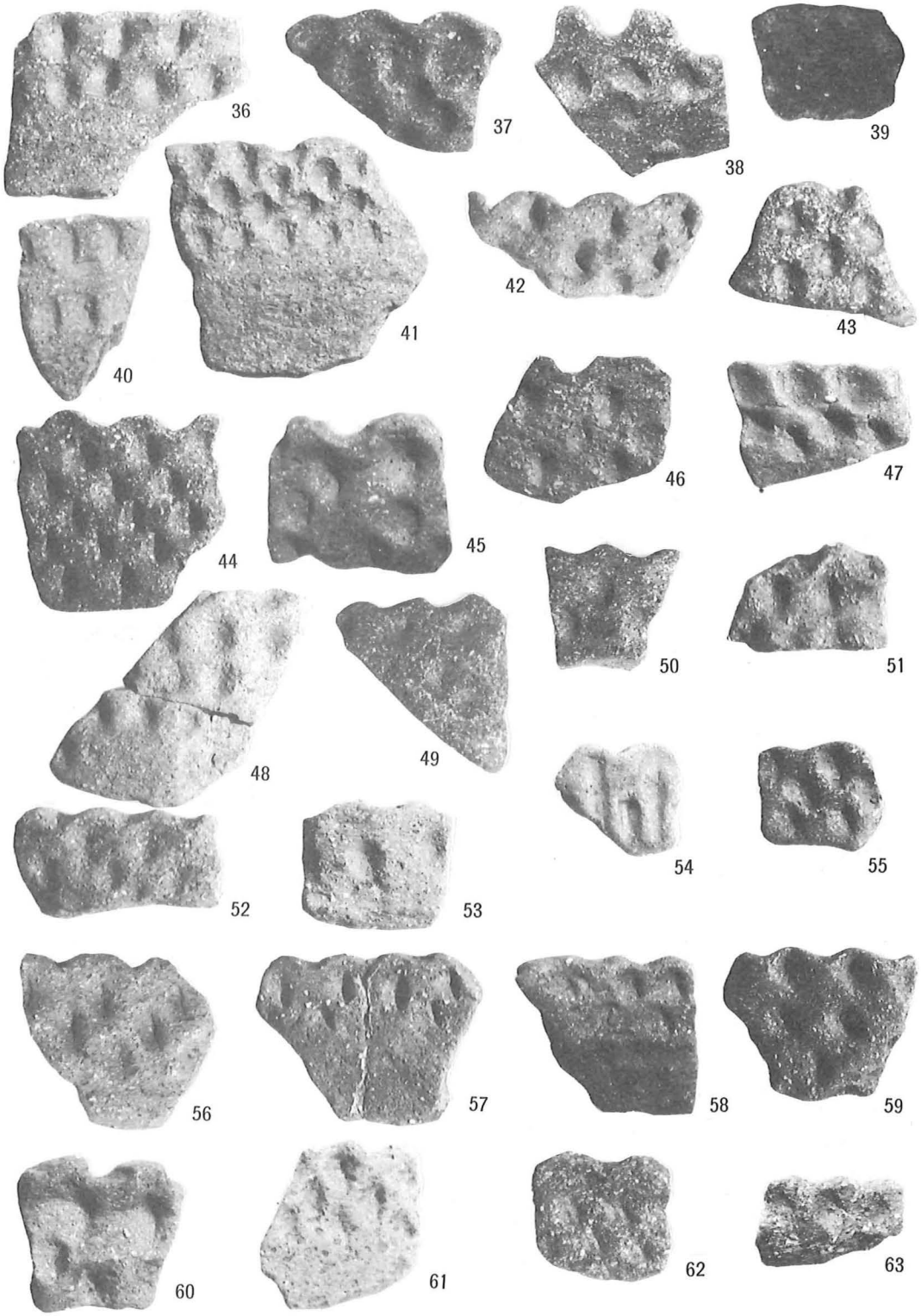
石斧出土状況



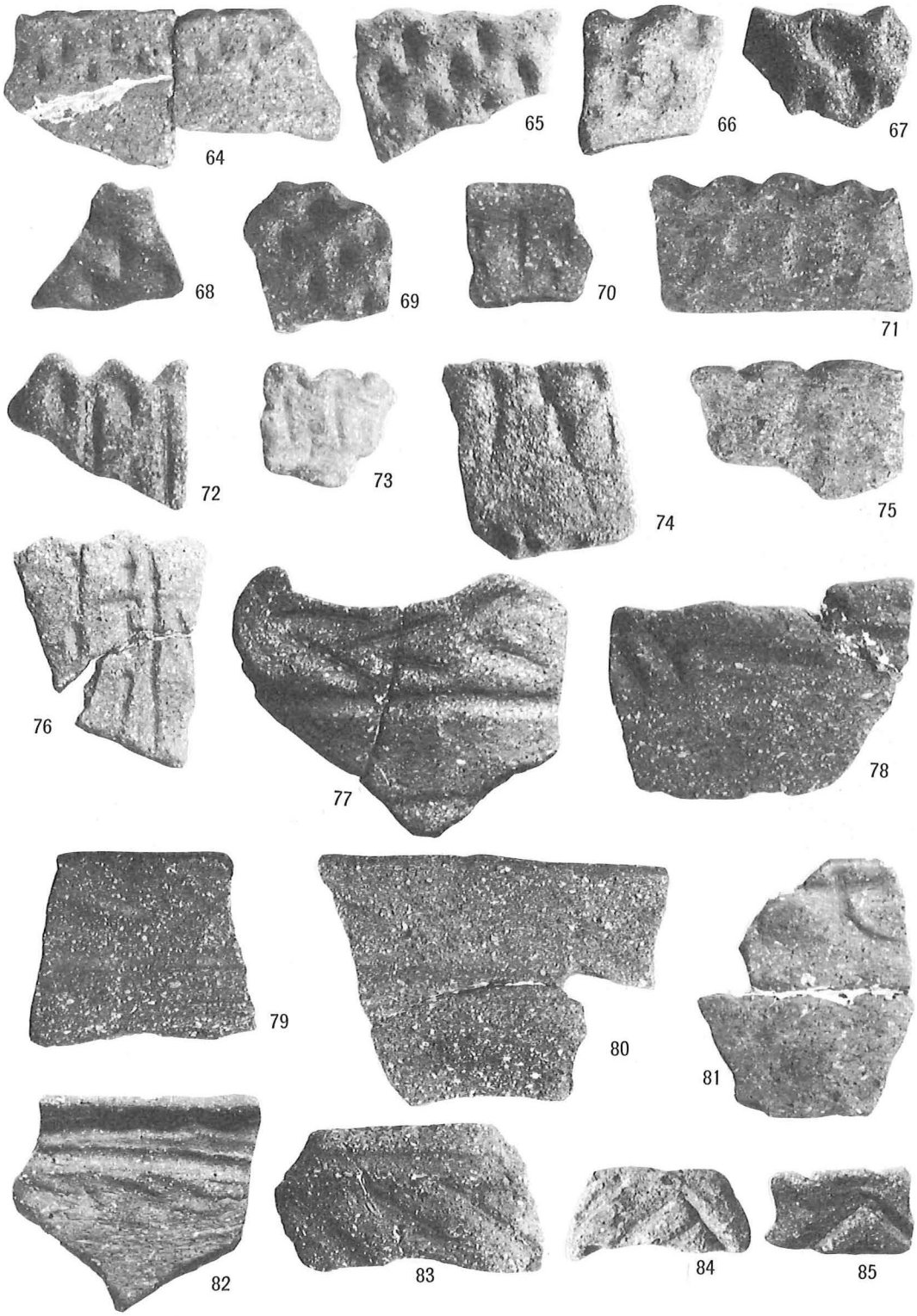
二次調査出土土器 ① (½)



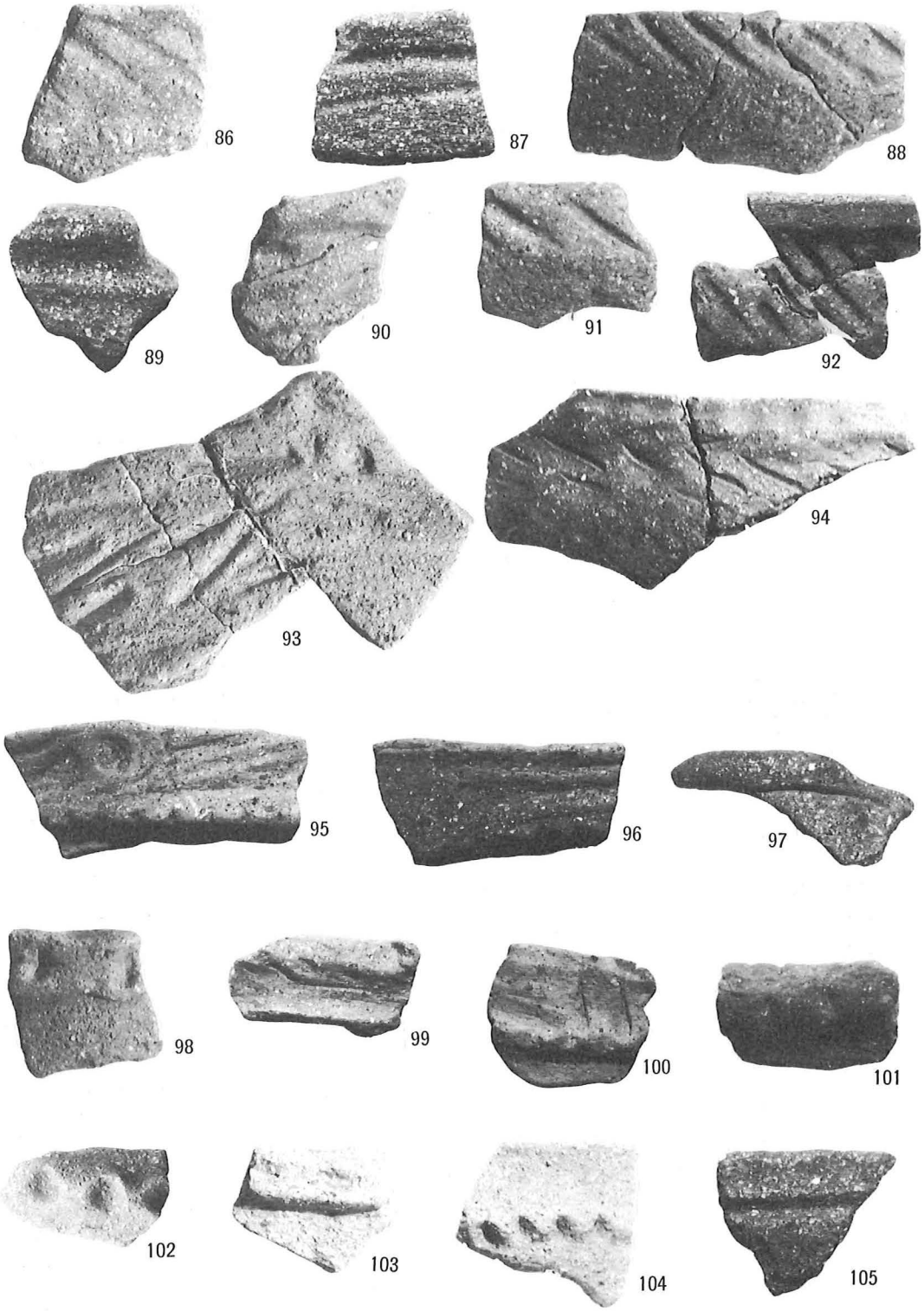
二次調査出土土器 ② (½)


36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63

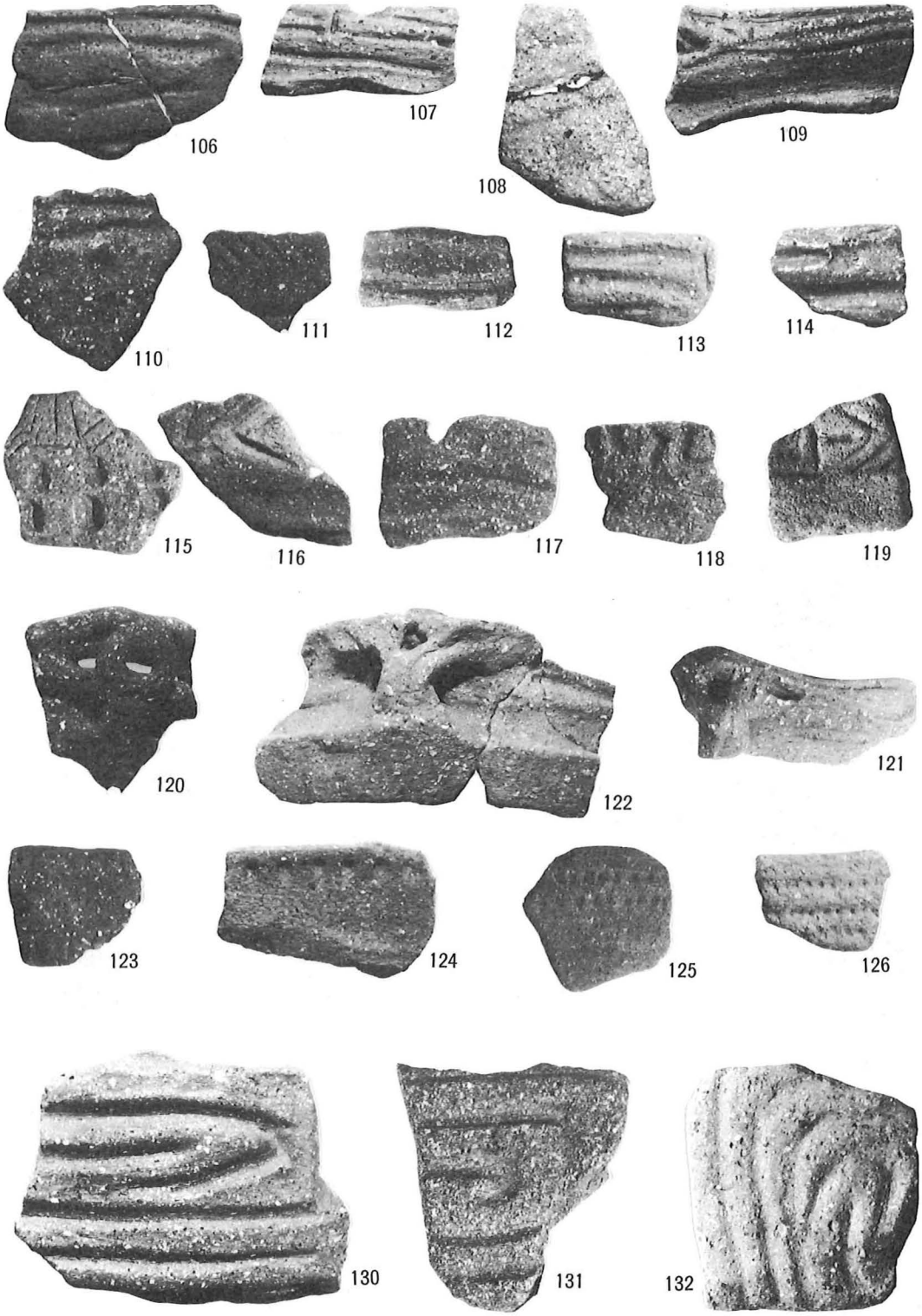
二次調査出土土器 ③ (½)



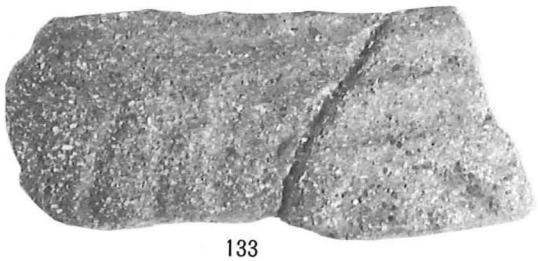
二次調査出土土器 ④ (½)



二次調査出土土器 ⑤ (½)


106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
122
121
123
124
125
126
130
131
132

二次調査出土土器 ⑥ (½)


133

134

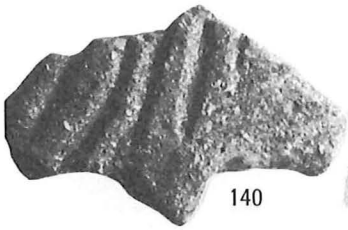
135

136

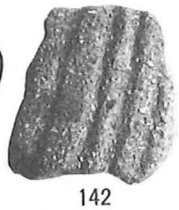
137

138

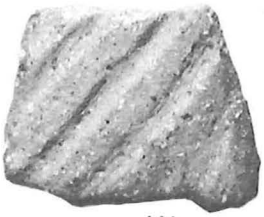
139


140

141


142

143


144

145

146

147

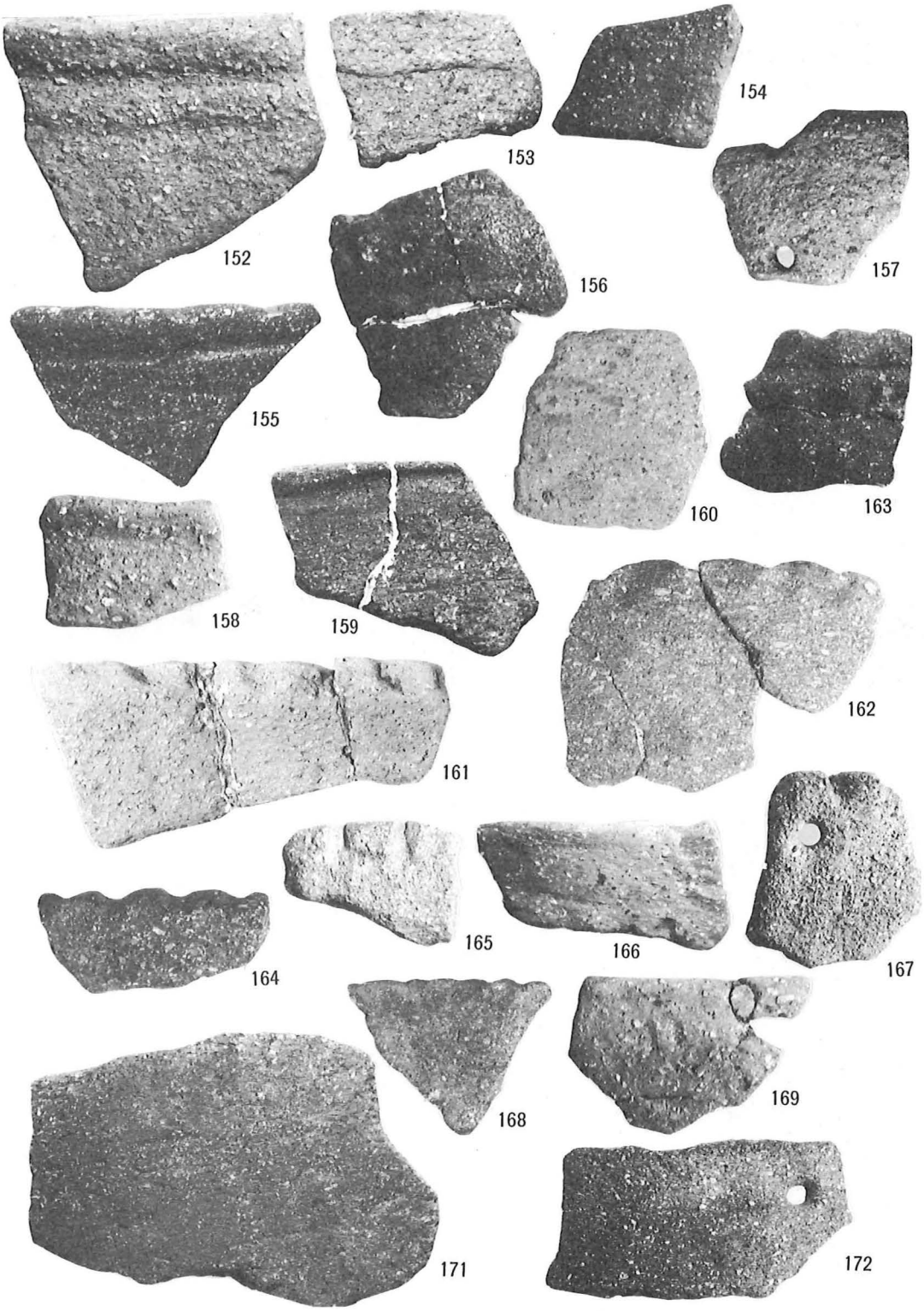
148

149

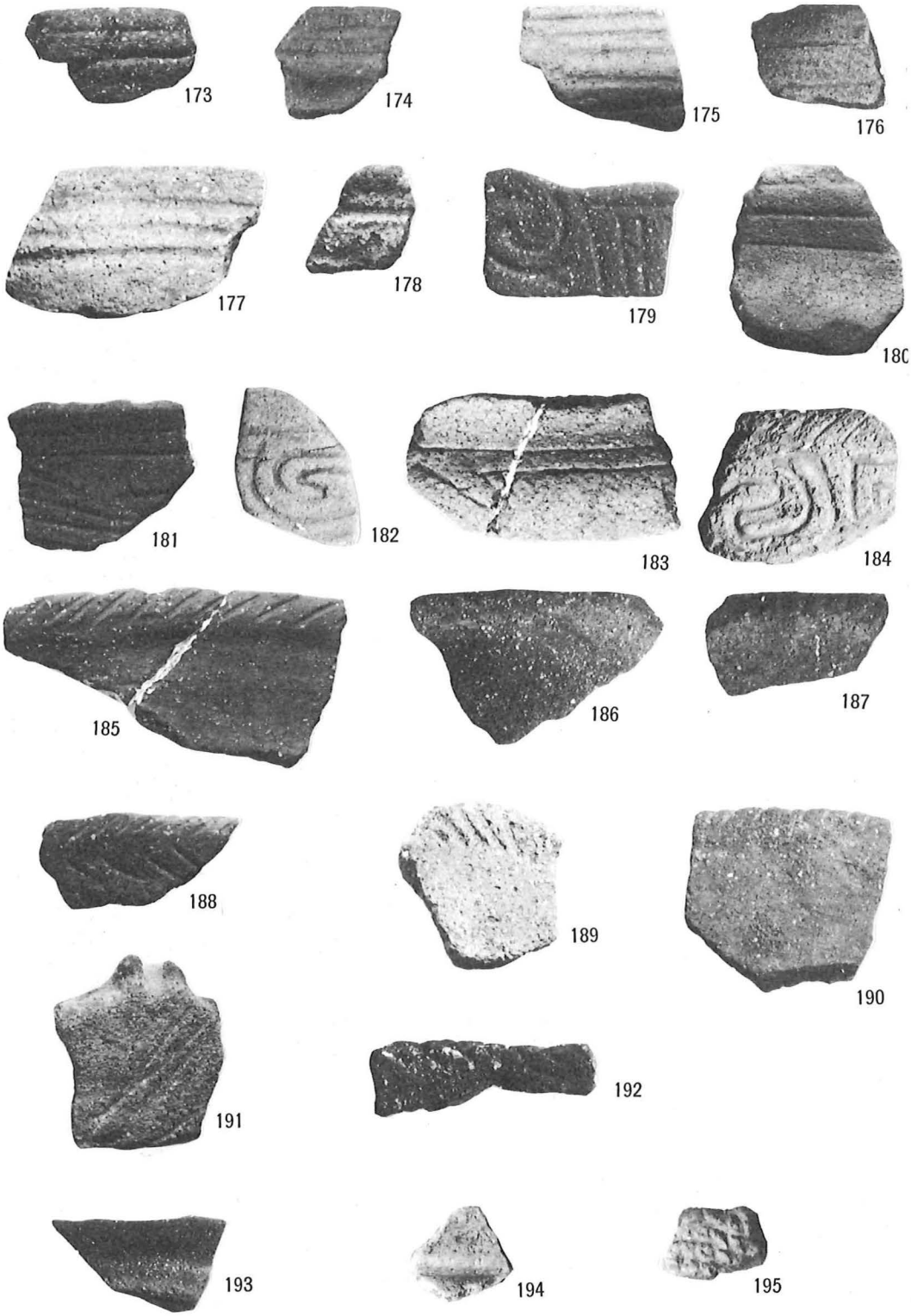
150

151

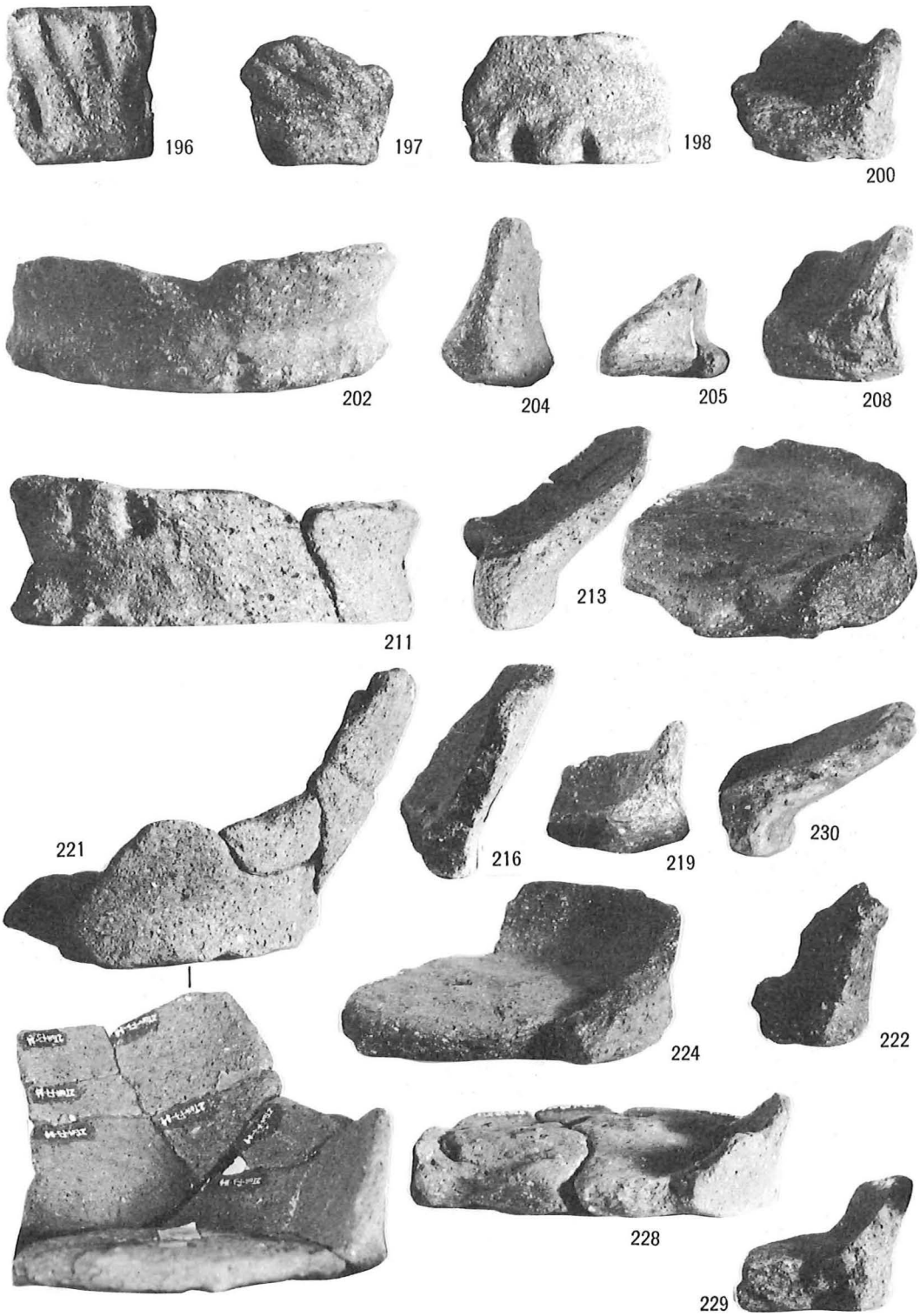
二次調査出土土器 ⑦ (½)


152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
171
172

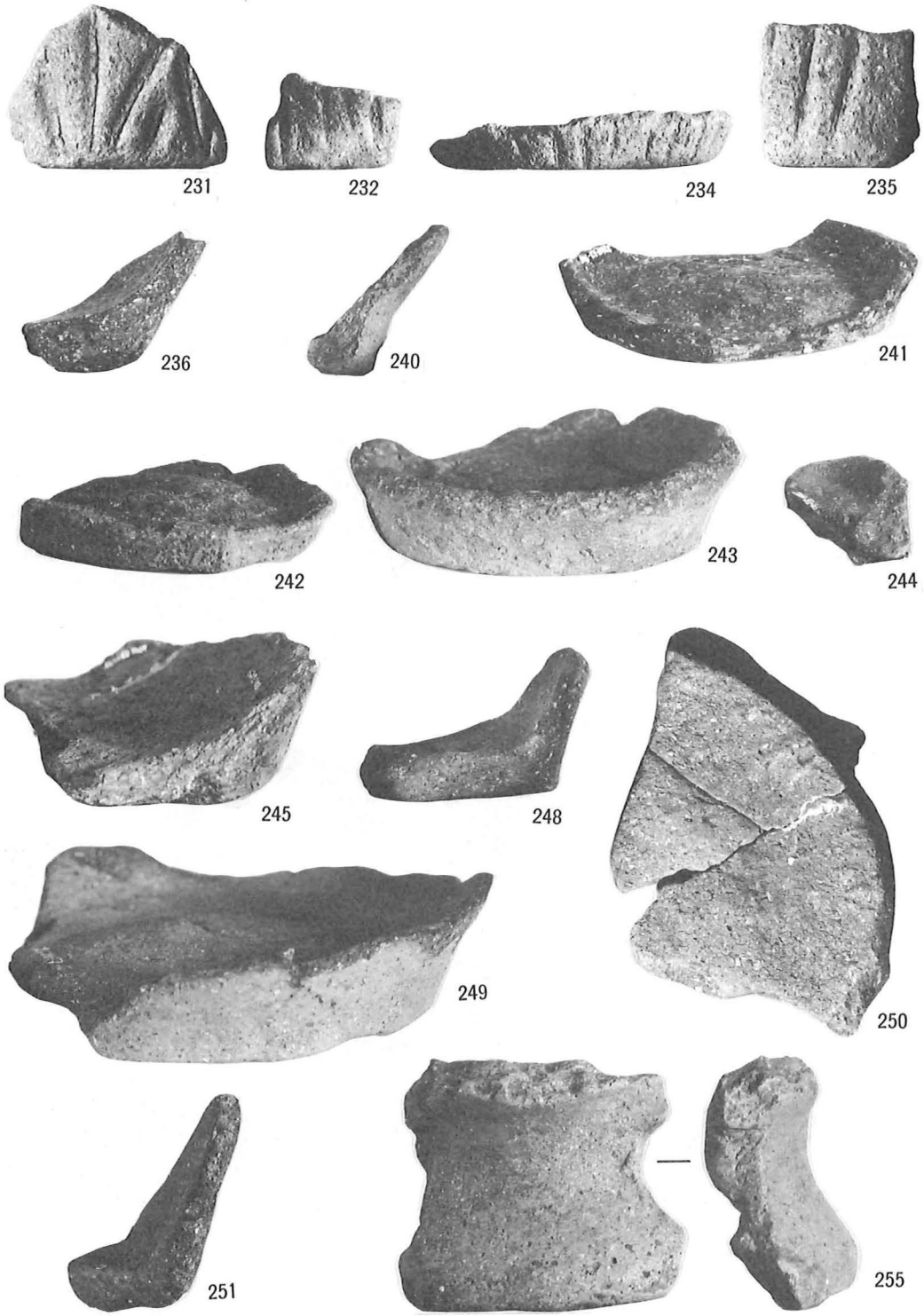
二次調査出土土器 ⑧ (½)


173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195

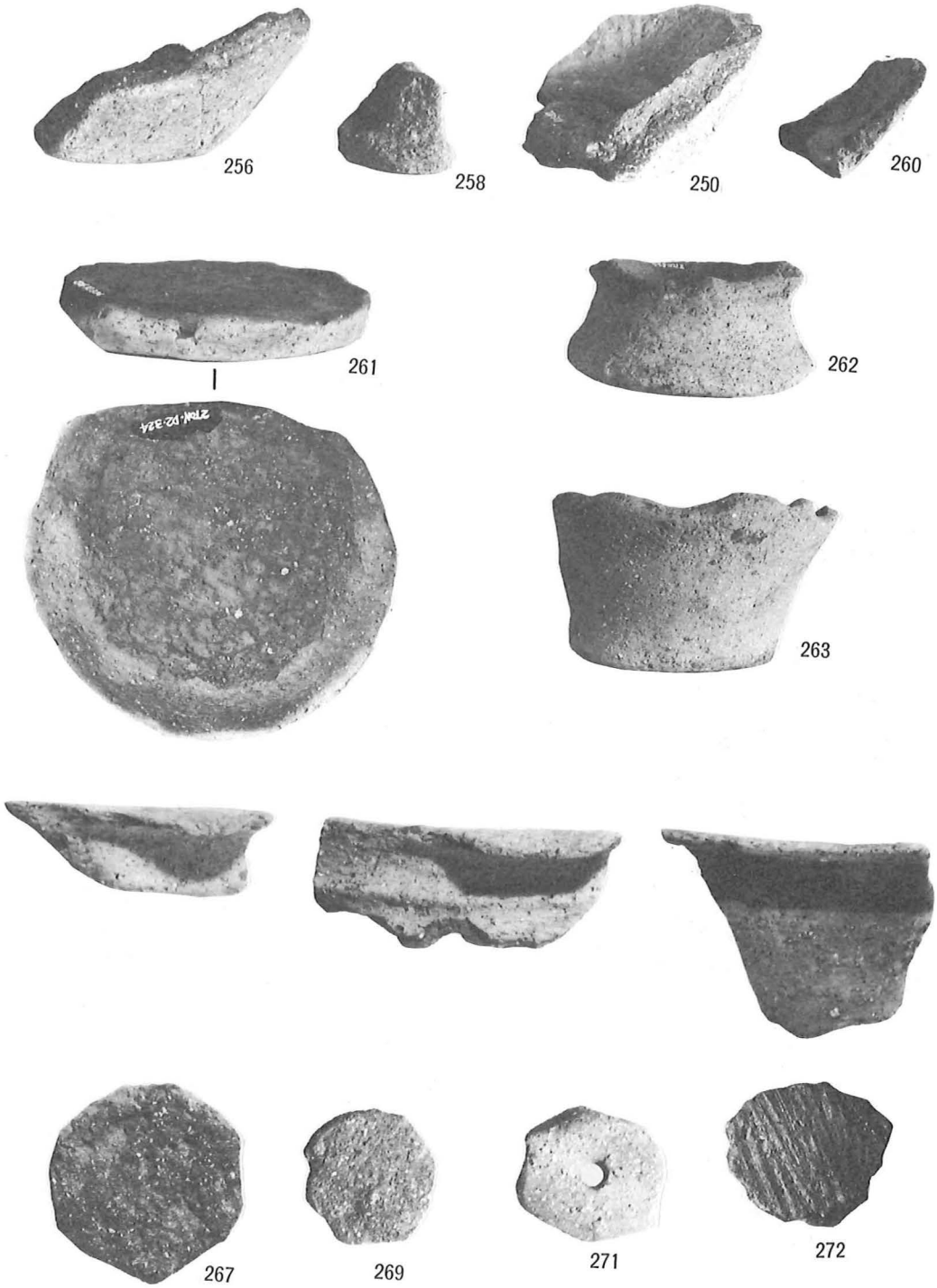
二次調査出土土器 ⑨ (½)


196
197
198
200
202
204
205
208
211
213
221
216
219
230
224
222
228
229

二次調査出土土器 ⑩ (½)



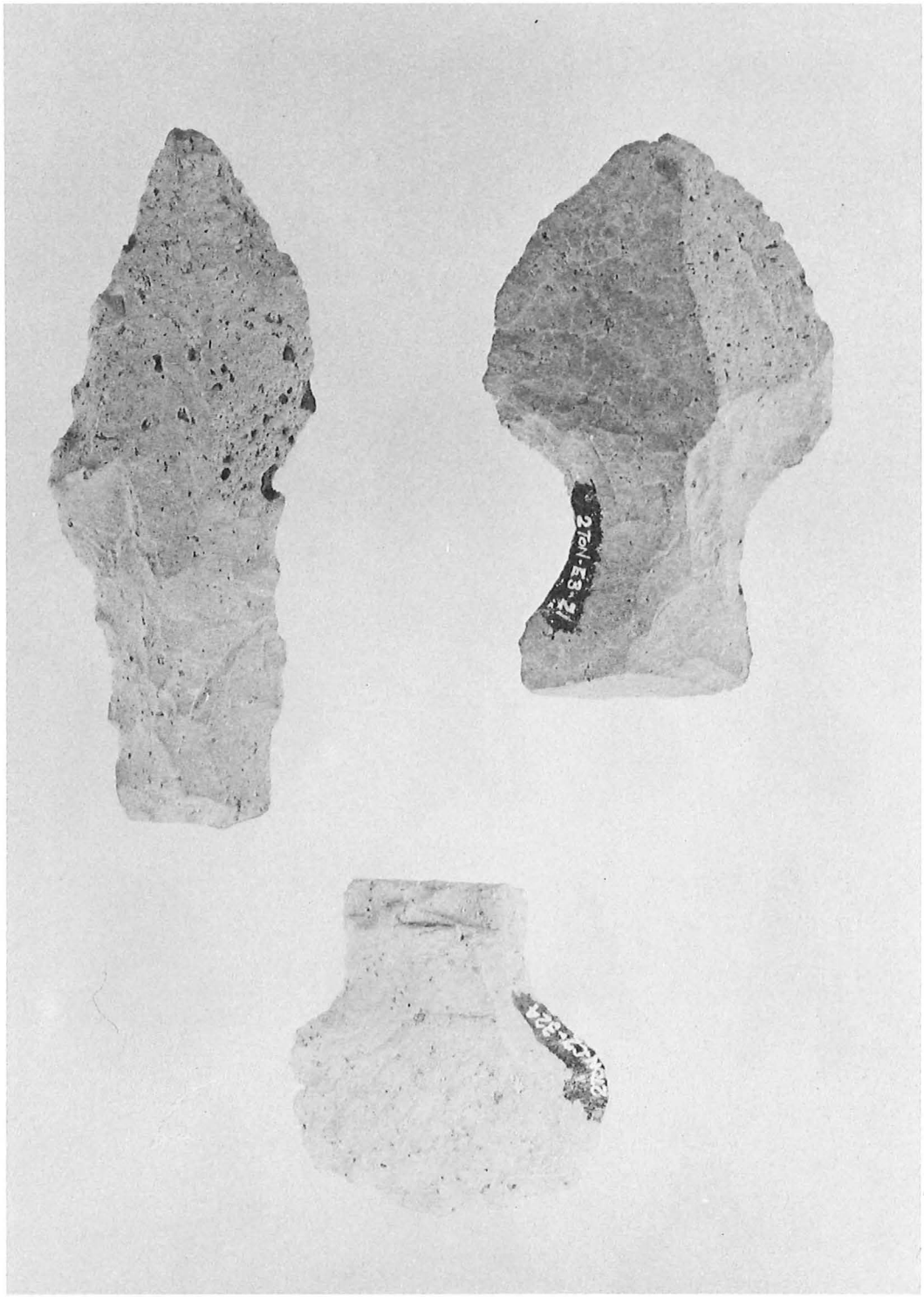
二次調査出土土器 ⑪ (½)



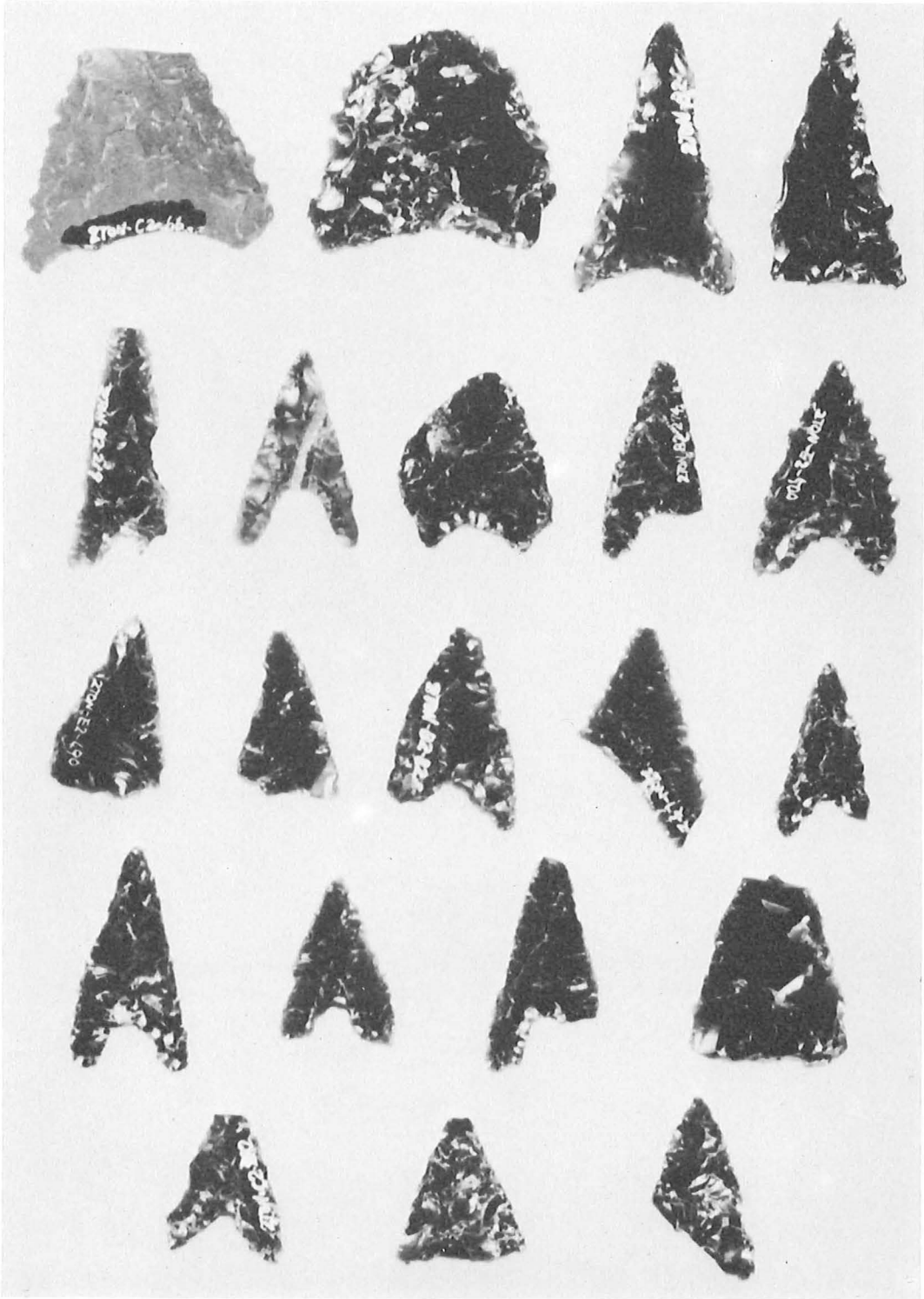
二次調査出土土器 ⑫ (1/2)

二次調査出土石器 (1/1)

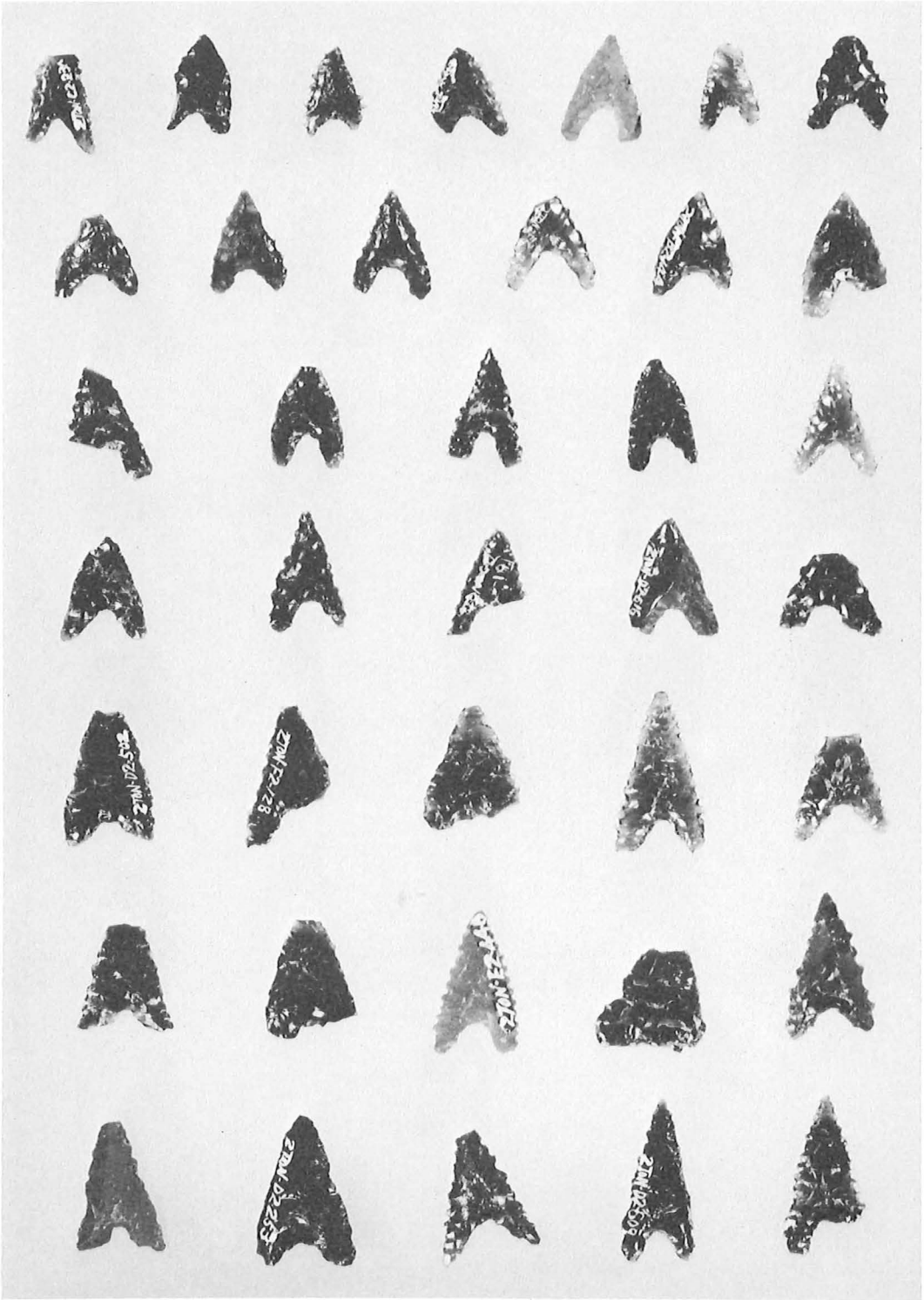
石器出土状況



二次調査出土石器 (1/1)

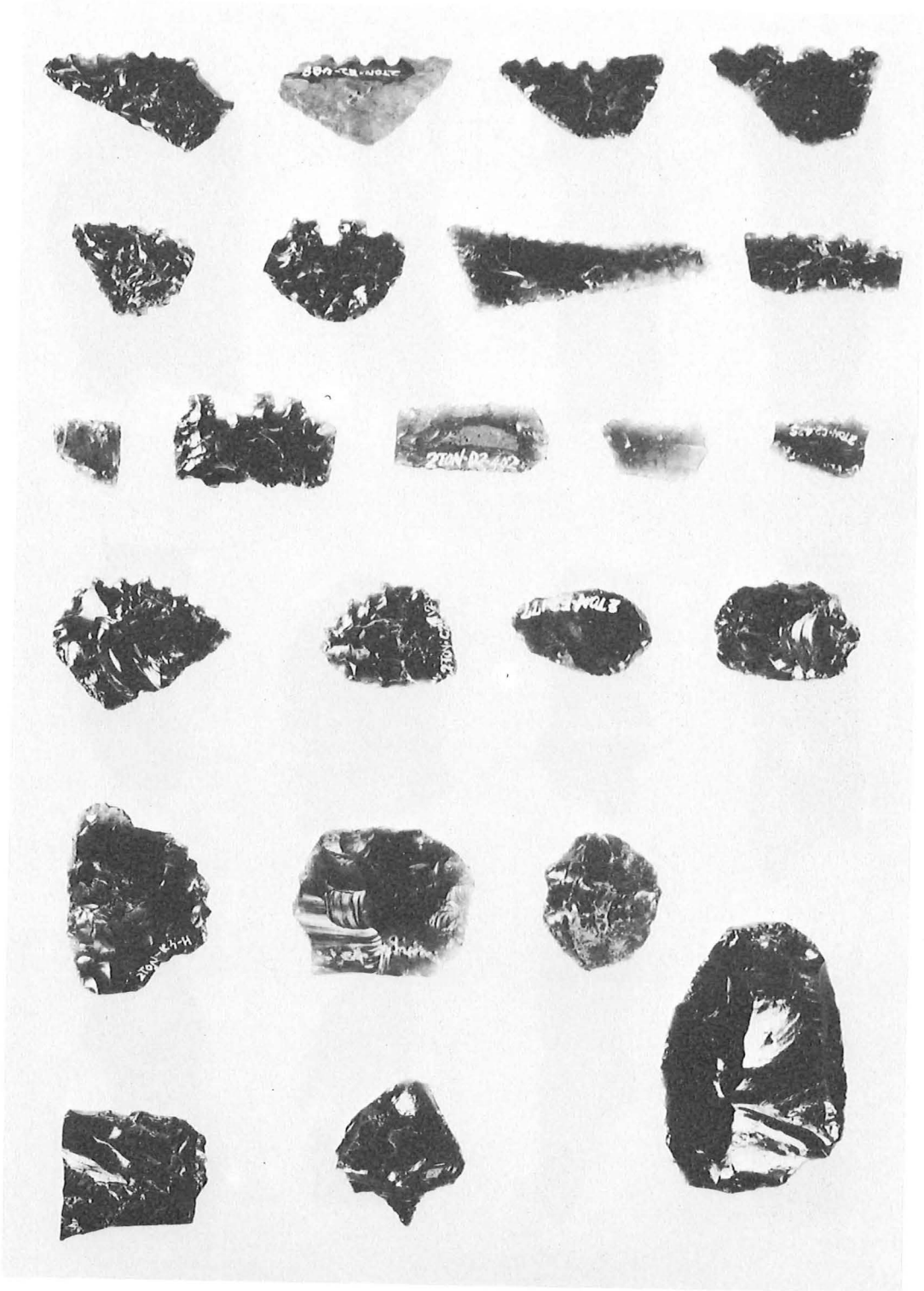


二次調査出土石器 (1/1)


ZMN-D22-53
ZMN-D22-28
ZMN-D22-5
ZMN-E22-28
ZMN-E22-5
ZMN-E22-6
ZMN-E22-8
ZMN-E22-9
ZMN-E22-10
ZMN-E22-11
ZMN-E22-12
ZMN-E22-13
ZMN-E22-14
ZMN-E22-15
ZMN-E22-16
ZMN-E22-17
ZMN-E22-18
ZMN-E22-19
ZMN-E22-20
ZMN-E22-21
ZMN-E22-22
ZMN-E22-23
ZMN-E22-24
ZMN-E22-25
ZMN-E22-26
ZMN-E22-27
ZMN-E22-28
ZMN-E22-29
ZMN-E22-30
ZMN-E22-31
ZMN-E22-32
ZMN-E22-33
ZMN-E22-34
ZMN-E22-35
ZMN-E22-36
ZMN-E22-37
ZMN-E22-38
ZMN-E22-39
ZMN-E22-40
ZMN-E22-41
ZMN-E22-42
ZMN-E22-43
ZMN-E22-44
ZMN-E22-45
ZMN-E22-46
ZMN-E22-47
ZMN-E22-48
ZMN-E22-49
ZMN-E22-50
ZMN-E22-51
ZMN-E22-52
ZMN-E22-53
ZMN-E22-54
ZMN-E22-55
ZMN-E22-56
ZMN-E22-57
ZMN-E22-58
ZMN-E22-59
ZMN-E22-60
ZMN-E22-61
ZMN-E22-62
ZMN-E22-63
ZMN-E22-64
ZMN-E22-65
ZMN-E22-66
ZMN-E22-67
ZMN-E22-68
ZMN-E22-69
ZMN-E22-70
ZMN-E22-71
ZMN-E22-72
ZMN-E22-73
ZMN-E22-74
ZMN-E22-75
ZMN-E22-76
ZMN-E22-77
ZMN-E22-78
ZMN-E22-79
ZMN-E22-80
ZMN-E22-81
ZMN-E22-82
ZMN-E22-83
ZMN-E22-84
ZMN-E22-85
ZMN-E22-86
ZMN-E22-87
ZMN-E22-88
ZMN-E22-89
ZMN-E22-90
ZMN-E22-91
ZMN-E22-92
ZMN-E22-93
ZMN-E22-94
ZMN-E22-95
ZMN-E22-96
ZMN-E22-97
ZMN-E22-98
ZMN-E22-99
ZMN-E22-100
ZMN-E22-101
ZMN-E22-102
ZMN-E22-103
ZMN-E22-104
ZMN-E22-105
ZMN-E22-106
ZMN-E22-107
ZMN-E22-108
ZMN-E22-109
ZMN-E22-110
ZMN-E22-111
ZMN-E22-112
ZMN-E22-113
ZMN-E22-114
ZMN-E22-115
ZMN-E22-116
ZMN-E22-117
ZMN-E22-118
ZMN-E22-119
ZMN-E22-120
ZMN-E22-121
ZMN-E22-122
ZMN-E22-123
ZMN-E22-124
ZMN-E22-125
ZMN-E22-126
ZMN-E22-127
ZMN-E22-128
ZMN-E22-129
ZMN-E22-130
ZMN-E22-131
ZMN-E22-132
ZMN-E22-133
ZMN-E22-134
ZMN-E22-135
ZMN-E22-136
ZMN-E22-137
ZMN-E22-138
ZMN-E22-139
ZMN-E22-140
ZMN-E22-141
ZMN-E22-142
ZMN-E22-143
ZMN-E22-144
ZMN-E22-145
ZMN-E22-146
ZMN-E22-147
ZMN-E22-148
ZMN-E22-149
ZMN-E22-150
ZMN-E22-151
ZMN-E22-152
ZMN-E22-153
ZMN-E22-154
ZMN-E22-155
ZMN-E22-156
ZMN-E22-157
ZMN-E22-158
ZMN-E22-159
ZMN-E22-160
ZMN-E22-161
ZMN-E22-162
ZMN-E22-163
ZMN-E22-164
ZMN-E22-165
ZMN-E22-166
ZMN-E22-167
ZMN-E22-168
ZMN-E22-169
ZMN-E22-170
ZMN-E22-171
ZMN-E22-172
ZMN-E22-173
ZMN-E22-174
ZMN-E22-175
ZMN-E22-176
ZMN-E22-177
ZMN-E22-178
ZMN-E22-179
ZMN-E22-180
ZMN-E22-181
ZMN-E22-182
ZMN-E22-183
ZMN-E22-184
ZMN-E22-185
ZMN-E22-186
ZMN-E22-187
ZMN-E22-188
ZMN-E22-189
ZMN-E22-190
ZMN-E22-191
ZMN-E22-192
ZMN-E22-193
ZMN-E22-194
ZMN-E22-195
ZMN-E22-196
ZMN-E22-197
ZMN-E22-198
ZMN-E22-199
ZMN-E22-200
ZMN-E22-201
ZMN-E22-202
ZMN-E22-203
ZMN-E22-204
ZMN-E22-205
ZMN-E22-206
ZMN-E22-207
ZMN-E22-208
ZMN-E22-209
ZMN-E22-210
ZMN-E22-211
ZMN-E22-212
ZMN-E22-213
ZMN-E22-214
ZMN-E22-215
ZMN-E22-216
ZMN-E22-217
ZMN-E22-218
ZMN-E22-219
ZMN-E22-220
ZMN-E22-221
ZMN-E22-222
ZMN-E22-223
ZMN-E22-224
ZMN-E22-225
ZMN-E22-226
ZMN-E22-227
ZMN-E22-228
ZMN-E22-229
ZMN-E22-230
ZMN-E22-231
ZMN-E22-232
ZMN-E22-233
ZMN-E22-234
ZMN-E22-235
ZMN-E22-236
ZMN-E22-237
ZMN-E22-238
ZMN-E22-239
ZMN-E22-240
ZMN-E22-241
ZMN-E22-242
ZMN-E22-243
ZMN-E22-244
ZMN-E22-245
ZMN-E22-246
ZMN-E22-247
ZMN-E22-248
ZMN-E22-249
ZMN-E22-250
ZMN-E22-251
ZMN-E22-252
ZMN-E22-253
ZMN-E22-254
ZMN-E22-255
ZMN-E22-256
ZMN-E22-257
ZMN-E22-258
ZMN-E22-259
ZMN-E22-260
ZMN-E22-261
ZMN-E22-262
ZMN-E22-263
ZMN-E22-264
ZMN-E22-265
ZMN-E22-266
ZMN-E22-267
ZMN-E22-268
ZMN-E22-269
ZMN-E22-270
ZMN-E22-271
ZMN-E22-272
ZMN-E22-273
ZMN-E22-274
ZMN-E22-275
ZMN-E22-276
ZMN-E22-277
ZMN-E22-278
ZMN-E22-279
ZMN-E22-280
ZMN-E22-281
ZMN-E22-282
ZMN-E22-283
ZMN-E22-284
ZMN-E22-285
ZMN-E22-286
ZMN-E22-287
ZMN-E22-288
ZMN-E22-289
ZMN-E22-290
ZMN-E22-291
ZMN-E22-292
ZMN-E22-293
ZMN-E22-294
ZMN-E22-295
ZMN-E22-296
ZMN-E22-297
ZMN-E22-298
ZMN-E22-299
ZMN-E22-300
ZMN-E22-301
ZMN-E22-302
ZMN-E22-303
ZMN-E22-304
ZMN-E22-305
ZMN-E22-306
ZMN-E22-307
ZMN-E22-308
ZMN-E22-309
ZMN-E22-310
ZMN-E22-311
ZMN-E22-312
ZMN-E22-313
ZMN-E22-314
ZMN-E22-315
ZMN-E22-316
ZMN-E22-317
ZMN-E22-318
ZMN-E22-319
ZMN-E22-320
ZMN-E22-321
ZMN-E22-322
ZMN-E22-323
ZMN-E22-324
ZMN-E22-325
ZMN-E22-326
ZMN-E22-327
ZMN-E22-328
ZMN-E22-329
ZMN-E22-330
ZMN-E22-331
ZMN-E22-332
ZMN-E22-333
ZMN-E22-334
ZMN-E22-335
ZMN-E22-336
ZMN-E22-337
ZMN-E22-338
ZMN-E22-339
ZMN-E22-340
ZMN-E22-341
ZMN-E22-342
ZMN-E22-343
ZMN-E22-344
ZMN-E22-345
ZMN-E22-346
ZMN-E22-347
ZMN-E22-348
ZMN-E22-349
ZMN-E22-350
ZMN-E22-351
ZMN-E22-352
ZMN-E22-353
ZMN-E22-354
ZMN-E22-355
ZMN-E22-356
ZMN-E22-357
ZMN-E22-358
ZMN-E22-359
ZMN-E22-360
ZMN-E22-361
ZMN-E22-362
ZMN-E22-363
ZMN-E22-364
ZMN-E22-365
ZMN-E22-366
ZMN-E22-367
ZMN-E22-368
ZMN-E22-369
ZMN-E22-370
ZMN-E22-371
ZMN-E22-372
ZMN-E22-373
ZMN-E22-374
ZMN-E22-375
ZMN-E22-376
ZMN-E22-377
ZMN-E22-378
ZMN-E22-379
ZMN-E22-380
ZMN-E22-381
ZMN-E22-382
ZMN-E22-383
ZMN-E22-384
ZMN-E22-385
ZMN-E22-386
ZMN-E22-387
ZMN-E22-388
ZMN-E22-389
ZMN-E22-390
ZMN-E22-391
ZMN-E22-392
ZMN-E22-393
ZMN-E22-394
ZMN-E22-395
ZMN-E22-396
ZMN-E22-397
ZMN-E22-398
ZMN-E22-399
ZMN-E22-400
ZMN-E22-401
ZMN-E22-402
ZMN-E22-403
ZMN-E22-404
ZMN-E22-405
ZMN-E22-406
ZMN-E22-407
ZMN-E22-408
ZMN-E22-409
ZMN-E22-410
ZMN-E22-411
ZMN-E22-412
ZMN-E22-413
ZMN-E22-414
ZMN-E22-415
ZMN-E22-416
ZMN-E22-417
ZMN-E22-418
ZMN-E22-419
ZMN-E22-420
ZMN-E22-421
ZMN-E22-422
ZMN-E22-423
ZMN-E22-424
ZMN-E22-425
ZMN-E22-426
ZMN-E22-427
ZMN-E22-428
ZMN-E22-429
ZMN-E22-430
ZMN-E22-431
ZMN-E22-432
ZMN-E22-433
ZMN-E22-434
ZMN-E22-435
ZMN-E22-436
ZMN-E22-437
ZMN-E22-438
ZMN-E22-439
ZMN-E22-440
ZMN-E22-441
ZMN-E22-442
ZMN-E22-443
ZMN-E22-444
ZMN-E22-445
ZMN-E22-446
ZMN-E22-447
ZMN-E22-448
ZMN-E22-449
ZMN-E22-450
ZMN-E22-451
ZMN-E22-452
ZMN-E22-453
ZMN-E22-454
ZMN-E22-455
ZMN-E22-456
ZMN-E22-457
ZMN-E22-458
ZMN-E22-459
ZMN-E22-460
ZMN-E22-461
ZMN-E22-462
ZMN-E22-463
ZMN-E22-464
ZMN-E22-465
ZMN-E22-466
ZMN-E22-467
ZMN-E22-468
ZMN-E22-469
ZMN-E22-470
ZMN-E22-471
ZMN-E22-472
ZMN-E22-473
ZMN-E22-474
ZMN-E22-475
ZMN-E22-476
ZMN-E22-477
ZMN-E22-478
ZMN-E22-479
ZMN-E22-480
ZMN-E22-481
ZMN-E22-482
ZMN-E22-483
ZMN-E22-484
ZMN-E22-485
ZMN-E22-486
ZMN-E22-487
ZMN-E22-488
ZMN-E22-489
ZMN-E22-490
ZMN-E22-491
ZMN-E22-492
ZMN-E22-493
ZMN-E22-494
ZMN-E22-495
ZMN-E22-496
ZMN-E22-497
ZMN-E22-498
ZMN-E22-499
ZMN-E22-500
ZMN-E22-501
ZMN-E22-502
ZMN-E22-503
ZMN-E22-504
ZMN-E22-505
ZMN-E22-506
ZMN-E22-507
ZMN-E22-508
ZMN-E22-509
ZMN-E22-510
ZMN-E22-511
ZMN-E22-512
ZMN-E22-513
ZMN-E22-514
ZMN-E22-515
ZMN-E22-516
ZMN-E22-517
ZMN-E22-518
ZMN-E22-519
ZMN-E22-520
ZMN-E22-521
ZMN-E22-522
ZMN-E22-523
ZMN-E22-524
ZMN-E22-525
ZMN-E22-526
ZMN-E22-527
ZMN-E22-528
ZMN-E22-529
ZMN-E22-530
ZMN-E22-531
ZMN-E22-532
ZMN-E22-533
ZMN-E22-534
ZMN-E22-535
ZMN-E22-536
ZMN-E22-537
ZMN-E22-538
ZMN-E22-539
ZMN-E22-540
ZMN-E22-541
ZMN-E22-542
ZMN-E22-543
ZMN-E22-544
ZMN-E22-545
ZMN-E22-546
ZMN-E22-547
ZMN-E22-548
ZMN-E22-549
ZMN-E22-550
ZMN-E22-551
ZMN-E22-552
ZMN-E22-553
ZMN-E22-554
ZMN-E22-555
ZMN-E22-556
ZMN-E22-557
ZMN-E22-558
ZMN-E22-559
ZMN-E22-560
ZMN-E22-561
ZMN-E22-562
ZMN-E22-563
ZMN-E22-564
ZMN-E22-565
ZMN-E22-566
ZMN-E22-567
ZMN-E22-568
ZMN-E22-569
ZMN-E22-570
ZMN-E22-571
ZMN-E22-572
ZMN-E22-573
ZMN-E22-574
ZMN-E22-575
ZMN-E22-576
ZMN-E22-577
ZMN-E22-578
ZMN-E22-579
ZMN-E22-580
ZMN-E22-581
ZMN-E22-582
ZMN-E22-583
ZMN-E22-584
ZMN-E22-585
ZMN-E22-586
ZMN-E22-587
ZMN-E22-588
ZMN-E22-589
ZMN-E22-590
ZMN-E22-591
ZMN-E22-592
ZMN-E22-593
ZMN-E22-594
ZMN-E22-595
ZMN-E22-596
ZMN-E22-597
ZMN-E22-598
ZMN-E22-599
ZMN-E22-600
ZMN-E22-601
ZMN-E22-602
ZMN-E22-603
ZMN-E22-604
ZMN-E22-605
ZMN-E22-606
ZMN-E22-607
ZMN-E22-608
ZMN-E22-609
ZMN-E22-610
ZMN-E22-611
ZMN-E22-612
ZMN-E22-613
ZMN-E22-614
ZMN-E22-615
ZMN-E22-616
ZMN-E22-617
ZMN-E22-618
ZMN-E22-619
ZMN-E22-620
ZMN-E22-621
ZMN-E22-622
ZMN-E22-623
ZMN-E22-624
ZMN-E22-625
ZMN-E22-626
ZMN-E22-627
ZMN-E22-628
ZMN-E22-629
ZMN-E22-630
ZMN-E22-631
ZMN-E22-632
ZMN-E22-633
ZMN-E22-634
ZMN-E22-635
ZMN-E22-636
ZMN-E22-637
ZMN-E22-638
ZMN-E22-639
ZMN-E22-640
ZMN-E22-641
ZMN-E22-642
ZMN-E22-643
ZMN-E22-644
ZMN-E22-645
ZMN-E22-646
ZMN-E22-647
ZMN-E22-648
ZMN-E22-649
ZMN-E22-650
ZMN-E22-651
ZMN-E22-652
ZMN-E22-653
ZMN-E22-654
ZMN-E22-655
ZMN-E22-656
ZMN-E22-657
ZMN-E22-658
ZMN-E22-659
ZMN-E22-660
ZMN-E22-661
ZMN-E22-662
ZMN-E22-663
ZMN-E22-664
ZMN-E22-665
ZMN-E22-666
ZMN-E22-667
ZMN-E22-668
ZMN-E22-669
ZMN-E22-670
ZMN-E22-671
ZMN-E22-672
ZMN-E22-673
ZMN-E22-674
ZMN-E22-675
ZMN-E22-676
ZMN-E22-677
ZMN-E22-678
ZMN-E22-679
ZMN-E22-680
ZMN-E22-681
ZMN-E22-682
ZMN-E22-683
ZMN-E22-684
ZMN-E22-685
ZMN-E22-686
ZMN-E22-687
ZMN-E22-688
ZMN-E22-689
ZMN-E22-690
ZMN-E22-691
ZMN-E22-692
ZMN-E22-693
ZMN-E22-694
ZMN-E22-695
ZMN-E22-696
ZMN-E22-697
ZMN-E22-698
ZMN-E22-699
ZMN-E22-700
ZMN-E22-701
ZMN-E22-702
ZMN-E22-703
ZMN-E22-704
ZMN-E22-705
ZMN-E22-706
ZMN-E22-707
ZMN-E22-708
ZMN-E22-709
ZMN-E22-710
ZMN-E22-711
ZMN-E22-712
ZMN-E22-713
ZMN-E22-714
ZMN-E22-715
ZMN-E22-716
ZMN-E22-717
ZMN-E22-718
ZMN-E22-719
ZMN-E22-720
ZMN-E22-721
ZMN-E22-722
ZMN-E22-723
ZMN-E22-724
ZMN-E22-725
ZMN-E22-726
ZMN-E22-727
ZMN-E22-728
ZMN-E22-729
ZMN-E22-730
ZMN-E22-731
ZMN-E22-732
ZMN-E22-733
ZMN-E22-734
ZMN-E22-735
ZMN-E22-736
ZMN-E22-737
ZMN-E22-738
ZMN-E22-739
ZMN-E22-740
ZMN-E22-741
ZMN-E22-742
ZMN-E22-743
ZMN-E22-744
ZMN-E22-745
ZMN-E22-746
ZMN-E22-747
ZMN-E22-748
ZMN-E22-749
ZMN-E22-750
ZMN-E22-751
ZMN-E22-752
ZMN-E22-753
ZMN-E22-754
ZMN-E22-755
ZMN-E22-756
ZMN-E22-757
ZMN-E22-758
ZMN-E22-759
ZMN-E22-760
ZMN-E22-761
ZMN-E22-762
ZMN-E22-763
ZMN-E22-764
ZMN-E22-765
ZMN-E22-766
ZMN-E22-767
ZMN-E22-768
ZMN-E22-769
ZMN-E22-770
ZMN-E22-771
ZMN-E22-772
ZMN-E22-773
ZMN-E22-774
ZMN-E22-775
ZMN-E22-776
ZMN-E22-777
ZMN-E22-778
ZMN-E22-779
ZMN-E22-780
ZMN-E22-781
ZMN-E22-782
ZMN-E22-783
ZMN-E22-784
ZMN-E22-785
ZMN-E22-786
ZMN-E22-787
ZMN-E22-788
ZMN-E22-789
ZMN-E22-790
ZMN-E22-791
ZMN-E22-792
ZMN-E22-793
ZMN-E22-794
ZMN-E22-795
ZMN-E22-796
ZMN-E22-797
ZMN-E22-798
ZMN-E22-799
ZMN-E22-800
ZMN-E22-801
ZMN-E22-802
ZMN-E22-803
ZMN-E22-804
ZMN-E22-805
ZMN-E22-806
ZMN-E22-807
ZMN-E22-808
ZMN-E22-809
ZMN-E22-810
ZMN-E22-811
ZMN-E22-812
ZMN-E22-813
ZMN-E22-814
ZMN-E22-815
ZMN-E22-816
ZMN-E22-817
ZMN-E22-818
ZMN-E22-819
ZMN-E22-820
ZMN-E22-821
ZMN-E22-822
ZMN-E22-823
ZMN-E22-824
ZMN-E22-825
ZMN-E22-826
ZMN-E22-827
ZMN-E22-828
ZMN-E22-829
ZMN-E22-830
ZMN-E22-831
ZMN-E22-832
ZMN-E22-833
ZMN-E22-834
ZMN-E22-835
ZMN-E22-836
ZMN-E22-837
ZMN-E22-838
ZMN-E22-839
ZMN-E22-840
ZMN-E22-841
ZMN-E22-842
ZMN-E22-843
ZMN-E22-844
ZMN-E22-845
ZMN-E22-846
ZMN-E22-847
ZMN-E22-848
ZMN-E22-849
ZMN-E22-850
ZMN-E22-851
ZMN-E22-852
ZMN-E22-853
ZMN-E22-854
ZMN-E22-855
ZMN-E22-856
ZMN-E22-857
ZMN-E22-858
ZMN-E22-859
ZMN-E22-860
ZMN-E22-861
ZMN-E22-862
ZMN-E22-863
ZMN-E22-864
ZMN-E22-865
ZMN-E22-866
ZMN-E22-867
ZMN-E22-868
ZMN-E22-869
ZMN-E22-870
ZMN-E22-871
ZMN-E22-872
ZMN-E22-873
ZMN-E22-874
ZMN-E22-875
ZMN-E22-876
ZMN-E22-877
ZMN-E22-878
ZMN-E22-879
ZMN-E22-880
ZMN-E22-881
ZMN-E22-882
ZMN-E22-883
ZMN-E22-884
ZMN-E22-885
ZMN-E22-886
ZMN-E22-887
ZMN-E22-888
ZMN-E22-889
ZMN-E22-890
ZMN-E22-891
ZMN-E22-892
ZMN-E22-893
ZMN-E22-894
ZMN-E22-895
ZMN-E22-896
ZMN-E22-897
ZMN-E22-898
ZMN-E22-899
ZMN-E22-900
ZMN-E22-901
ZMN-E22-902
ZMN-E22-903
ZMN-E22-904
ZMN-E22-905
ZMN-E22-906
ZMN-E22-907
ZMN-E22-908
ZMN-E22-909
ZMN-E22-910
ZMN-E22-911
ZMN-E22-912
ZMN-E22-913
ZMN-E22-914
ZMN-E22-915
ZMN-E22-916
ZMN-E22-917
ZMN-E22-918
ZMN-E22-919
ZMN-E22-920
ZMN-E22-921
ZMN-E22-922
ZMN-E22-923
ZMN-E22-924
ZMN-E22-925
ZMN-E22-926
ZMN-E22-927
ZMN-E22-928
ZMN-E22-929
ZMN-E22-930
ZMN-E22-931
ZMN-E22-932
ZMN-E22-933
ZMN-E22-934
ZMN-E22-935
ZMN-E22-936
ZMN-E22-937
ZMN-E22-938
ZMN-E22-939
ZMN-E22-940
ZMN-E22-941
ZMN-E22-942
ZMN-E22-943
ZMN-E22-944
ZMN-E22-945
ZMN-E22-946
ZMN-E22-947
ZMN-E22-948
ZMN-E22-949
ZMN-E22-950
ZMN-E22-951
ZMN-E22-952
ZMN-E22-953
ZMN-E22-954
ZMN-E22-955
ZMN-E22-956
ZMN-E22-957
ZMN-E22-958
ZMN-E22-959
ZMN-E22-960
ZMN-E22-961
ZMN-E22-962
ZMN-E22-963
ZMN-E22-964
ZMN-E22-965
ZMN-E22-966
ZMN-E22-967
ZMN-E22-968
ZMN-E22-969
ZMN-E22-970
ZMN-E22-971
ZMN-E22-972
ZMN-E22-973
ZMN-E22-974
ZMN-E22-975
ZMN-E22-976
ZMN-E22-977
ZMN-E22-978
ZMN-E22-979
ZMN-E22-980
ZMN-E22-981
ZMN-E22-982
ZMN-E22-983
ZMN-E22-984
ZMN-E22-985
ZMN-E22-986
ZMN-E22-987
ZMN-E22-988
ZMN-E22-989
ZMN-E22-990
ZMN-E22-991
ZMN-E22-992
ZMN-E22-993
ZMN-E22-994
ZMN-E22-995
ZMN-E22-996
ZMN-E22-997
ZMN-E22-998
ZMN-E22-999
ZMN-E22-1000

二次調査出土石器 (1/1)

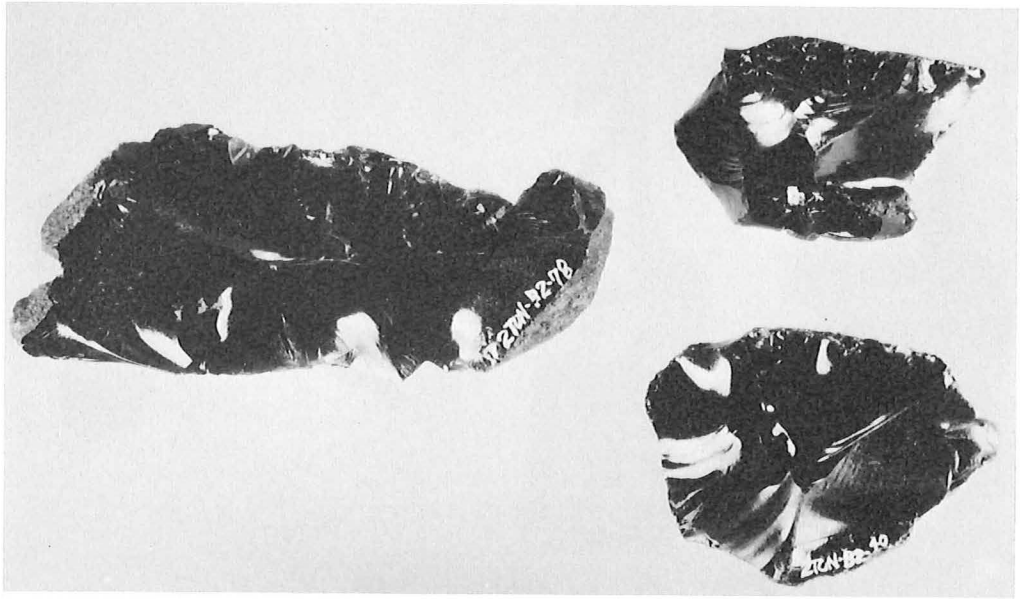
二次調査出土石器 (1/1)



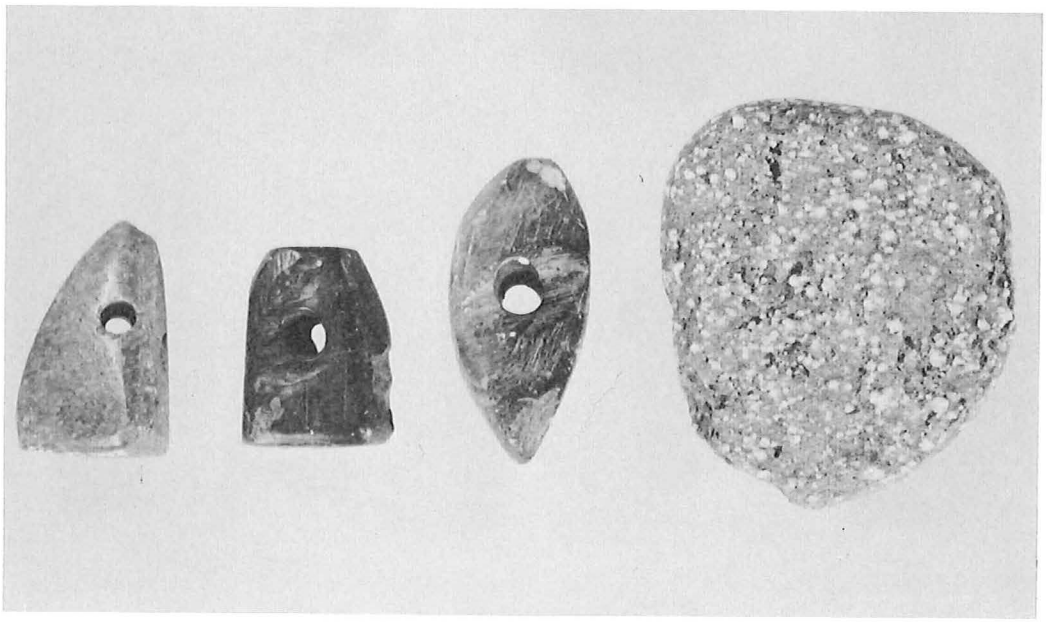
二次調査出土石器 (1/1)

二次調査出土石器 (1/1)

二次調査出土石器 (1/1)



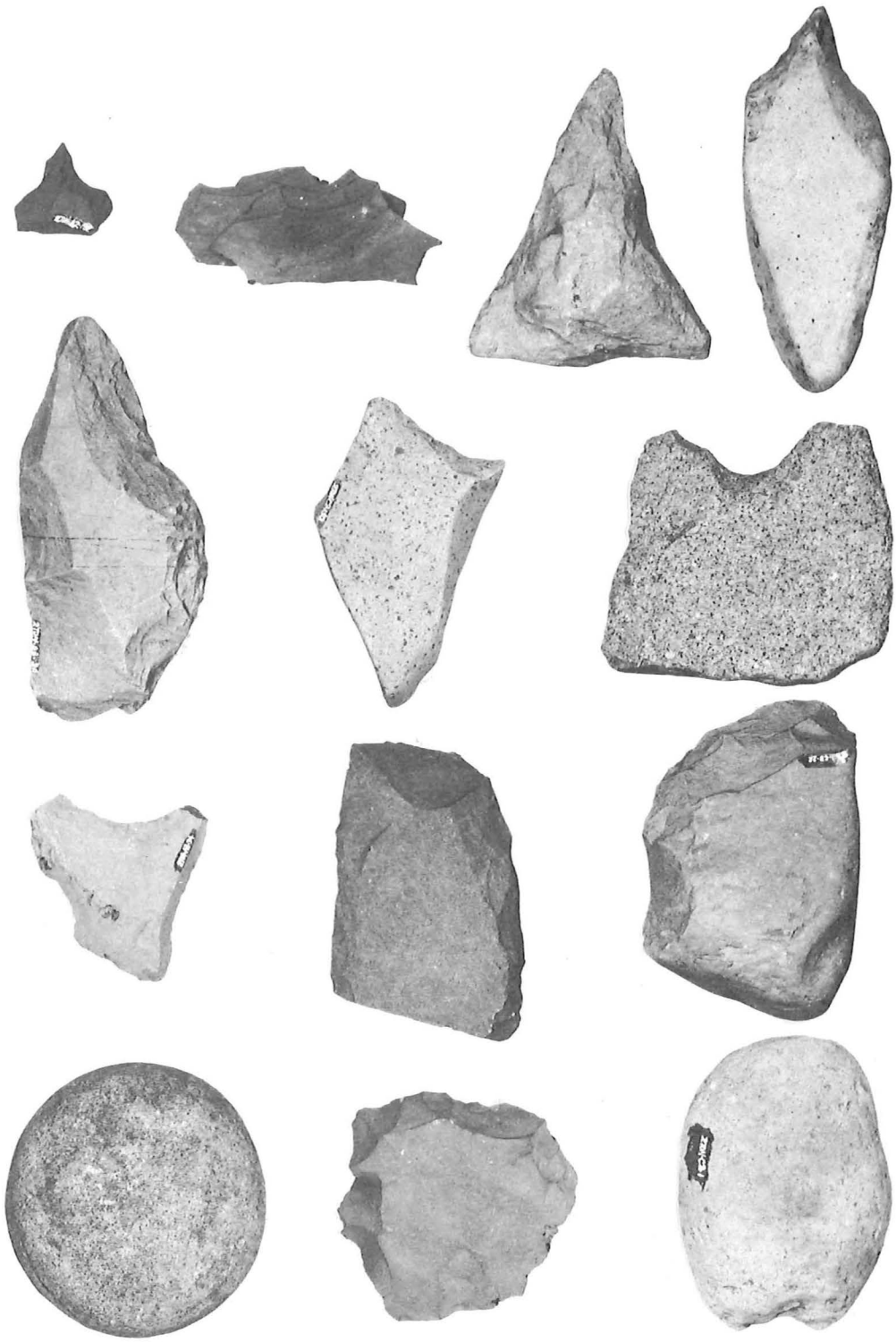
二次調査出土石器 (1/1)



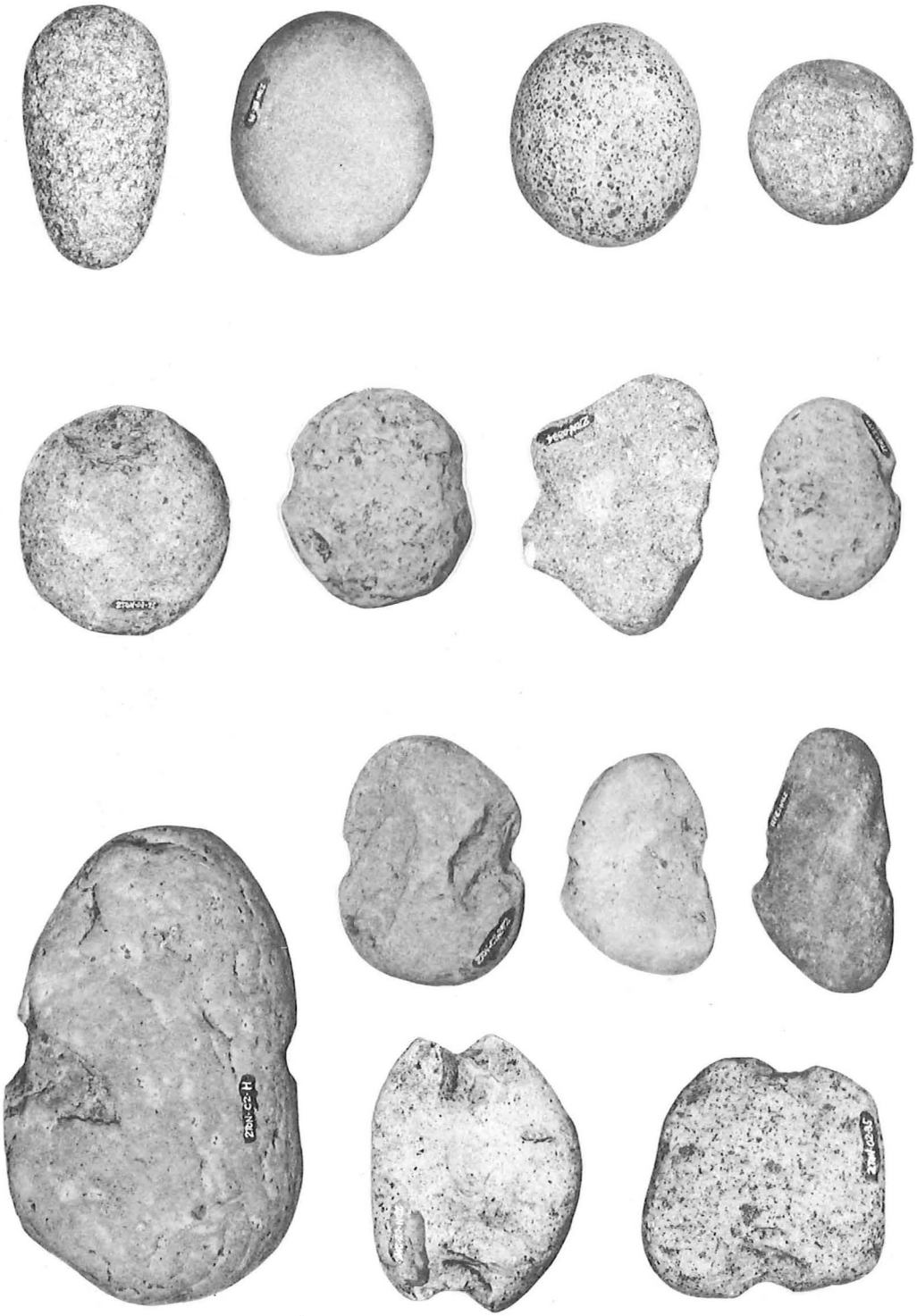
二次調査出土石製品 (1/1)

二次調査出土石器 (1/3)

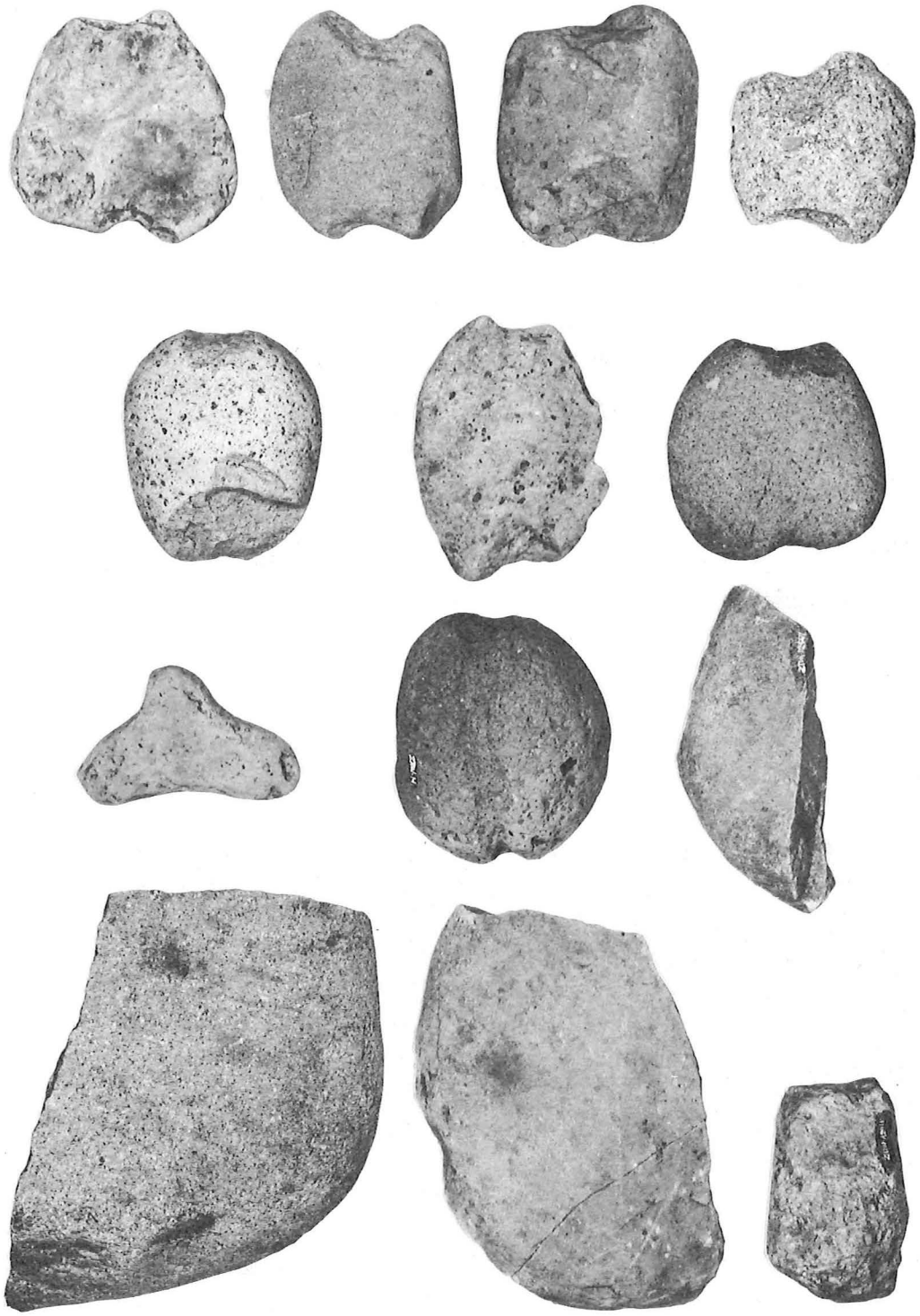
二次調査出土石器 (1/3)



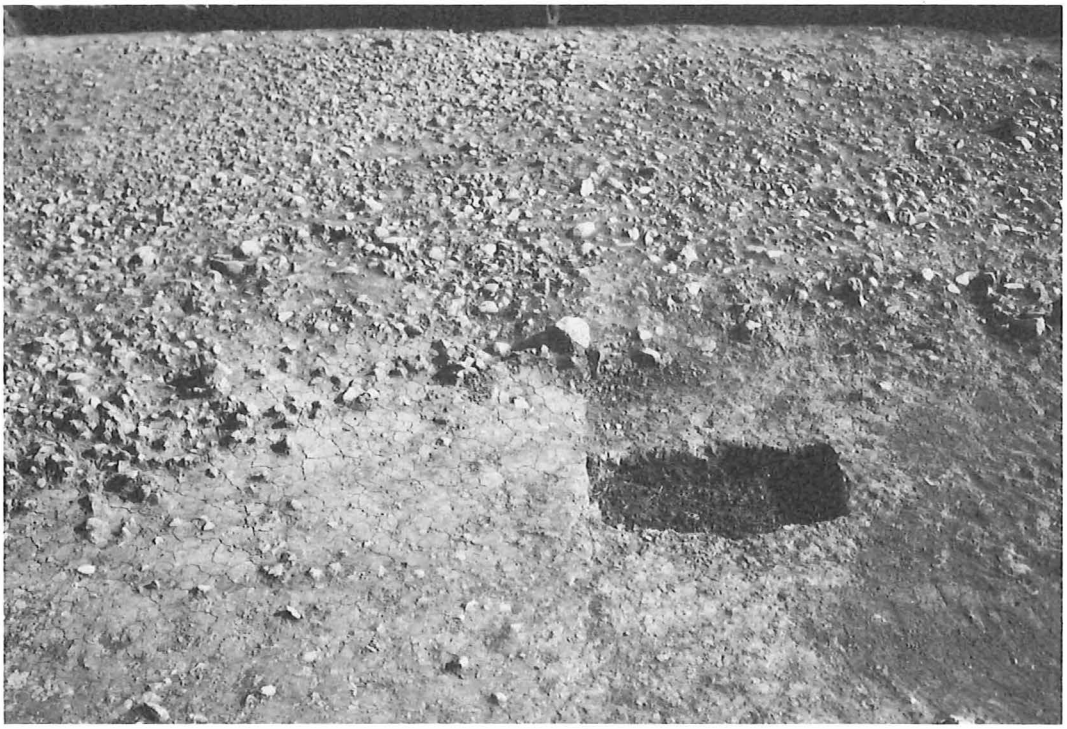
二次調査出土石器 (1/3)



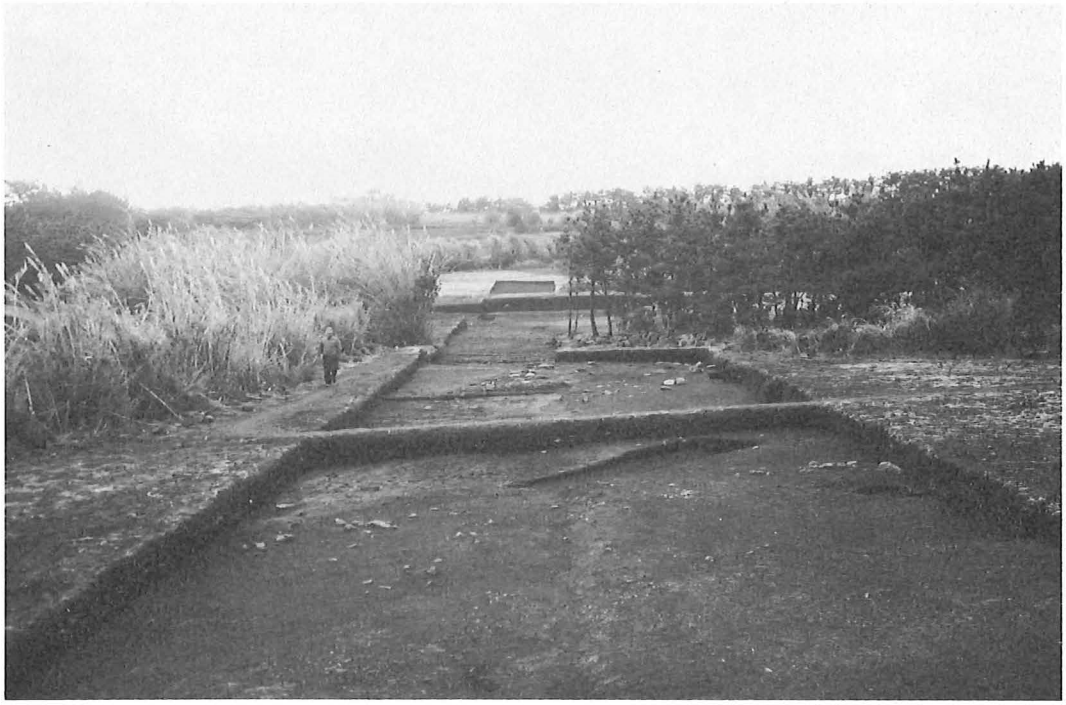
二次調査出土石器 (1/3)



二次調査出土石器 (1/3)



円礫出土状況(上)　角礫出土状況(下)



調査完了全景（上・東側より　下・西側より）

調査に参加した人達（上・一次）（下・二次）

完成後の空港

長崎県文化財調査報告書第83集

殿崎遺跡

1986

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2—13

印刷　株式会社　隆文社
佐世保市瀬戸越3丁目4番7号